廣日本文典別記

全

810.1
コ

廣日本文典別記

例言

この別記は、題號のごとく、別に、廣日本文典として刊行せるがある、その附錄別記なり。されど、この別記は、廣日本文典ありての上の用のものなれど、この別記を覽む者は、廣日本文典を覽ての上なるべきも、いふに及ばず。

此の別記よりしては、廣日本文典をば、本書と稱す、通篇行文中に「本書」とあるは、すべて、其意なりと知るべく、「この書」の意と誤解することなかれ。さて、「この書」の意なる所には、すべて、「この別記」と記して、別ちおけり。

此の別記は、本書に說ける節々に就きて、別に、註釋、敷衍、參考、考證、辨解、持論、駁論、等あるを記したるものなり。これら、初は、本書の每節の註脚中に附載したりしに、餘說、議論、などの、竄入してあらむは、本書の行文に、斷續を生じて、通篇大旨の一貫に妨げあらむと、刊行に臨みて、俄に思ひつきて、凡そ、事の、枝葉に涉れり、と思ひなさるゝ限りは、一々引きのぞきて、此の別記に一括したるなり、されど、每節、碎屑なるものとはなれり。さて、此の別記の每節の行頭(ギヤウトウ)に、

（本、三五）など記したるは、本書の每節の上欄上にある數字との符契なり。

草々に引きぬきたるわざにもあり、且、時、盛夏にして、微恙に罹れる際にもありしかど、除くべきものゝ、尙、存し、除くまじきものゝ、移れるも、まれ〳〵にはあるべきか。又、兩書每節の符字を記しつけたる後に、また、加除したる所もあれど、符契の、離合して、いかゞはしき觀を生じたる所もあり。（されど、その飜譯せし所はあらじ）

又、兩書に引用せし例文、例句、の出典も、大抵は、原書に照合したれど、溽暑に懊惱して、一二の遺漏誤脫も、或はあらむ、讀む者、諒せよ。

○余が文典中の語格は、凡そ、平安遷都の初より、後三條の朝の頃までの書中の用例に據りて立てゝ、私に、これを中古言と稱す。

後三條の朝の頃と限りたるは、言、文、未だ、兩途にわかれざりき、とればしき世を準としてなり。れよそは、竹取、古今、などより、狹衣などまでなり。

奈良朝以前の古格は、姑く異例とはしたり、然らざれど、二格、幷立するやうの事起りて、（名こそよき、名こそよけれ、見らむ、見るらむ、ノ類）普通語格の基、立たず。又、中古言なりとて、用例の、尋常普通なる方に從ひて、一時の用語とればしきもの、（べらなり、給ふける、ノ類）又は、僻典と認めらるゝは、避けたり、言文一致の世の筆の跡なりとて、悉皆、金玉なるにもあるまじく、歌屑などいふもあるべく、瑕、瑜、混ずべきにあらず、且、傳寫の誤などいふことも、あるべけれどなり。

紀、記、萬葉、に存する古格は、別に、自ら、其學あるべく、普通文の用例には、避くべきなり。書紀に斯る例あり、萬葉に然用ゐたるありとて、極めて古き、極めて希覯なる典例をも擧げ來らば、異例のみ出で來て、今人には、耳遠くして通せず、語格も一定すべからず。且、其古格、又は、中古言なりとも僻典なるなどを採りて、初學の、作文に用ゐたらむには、師たる者、まづは削正すべからむ、初より敎へぬをよしとす。とにもかくにも、普通語格は、尋常なるに據りて立てゝ、初學をして、一應、語格文法を知らしむべく、それに據りて、文を作らしめて、決して、雅文の法に違ふことなし。さて、上達して、專攻し、獨力にて博く古今にわたらむは、また、格別の事なり。

○和歌は、限ある字句の中に、限なき意を述ふべき事もありて、言外に餘意を聞かする作例も出で、隨ひて、言ひさして餘韻に付し、語句を略したる多し。(甚しきは、所謂「心あまりて、詞足らず」の難を受くるあるに至る) 又歌ふに調を取る方よりして、法外に馳騁すること、なきにしもあらず。又、歌詞とて散文には用ゐぬ語格なども多あるなり。されど、和歌と散文とには、法格の相異なる所少からず、猶、漢文と詩とに、調格の相異なる所あるが如し。普通文法は、宗と、散文に就きていふものなれど、深く和歌の事をば言はず、度外に置きたるあり、和歌には、別に、自ら、其學あるべきなり。

用例に、戀歌なるは、一切採らざらむとはこつれど、いかにせむ、歌集、物語、大半は、戀にして、用例をあなぐりて、これぞ佳典なる、と見れど、戀歌なり、惜しとは思へど、捨てゝ、また、これぞ、と見れど、また戀歌なり、斯く、頻々、戀歌にのみ撞着すること出で來て、毎に顰蹙せずはあらず。されど、必用なる用例にて、他に、急に見出でぬには、引けるもあり、已むことを得ぬに出でたるわざなり。

○余が文典の稿案、多く、先哲が苦心の餘澤に據りしこと、論ずるまでもなし。

然れども、余が新案に出でたるも、固より多し。師傳にて學びし人は、師說をもぞくに、憚りもあるべく、從來の學派を汲み、其學說を遵奉せる人には、余が新案は、謀叛の旗擧げしたらむやうに、思ひなさむ事も多からむ。されど、余は、獨學にて、師事せし所とてはなけれど、ろの嫌ひ、さらになきなり、余が忠節を致さむとする所は、唯、斯道の發達にあり。

余が淺學なるより、我が新案ならむと思ふ事の、案の外に、先輩の、夙く說きれけるを、知らずしてあるもあらむ、斯る事は、われのみならず、先輩の、先輩に於けるにも、まゝありなむ。又、先輩の、後進の、我の、人の、いづれか先き、いづれか後なる、わきがたきも多かるべし。明に、剽竊の痕跡を免れざらむは、さるものにて、說の暗合といふ事も、たのづからあるべきことわりなりかし。

○文法科は、言語を正しく用ゐ、文句を正しく綴り得るを敎ふるを旨とし、且は、讀書、釋義、修辭等の力を養ふまでのものなり。然るに、世の文典中には、文法科外なる音韻學、言語學、修辭學、博言學、又は、辭書に屬すべき事にまで涉れる多し。

文體文格などいひ、趣味巧緻などいふ事、文法科には與からず、乾燥なりとて、語格だに正しくば、趣意は解すべく、絢爛なりとて、破格あらむには、解せられず、語格より言へば、作體は度外なるべし。

右等の學科も、文法科と、相聯關するものにはあれど、別に、其專門科のある上は、其深理等に至りては、各、相讓るべきなり。余が文典中に、助動詞、互爾波、感動詞、接尾語等、語を盡して、列擧して說きたるも、實は、辭書の範圍に入れる嫌ひありて、文典の體裁を失はむの思ひあるなり。然れども、斯くせざれば、意義を別ちかぬべくも思ひたれば、然せしなり、已むことを得ずしてなり。

又、音節篇(Prosody.)の一篇は、却て文法科に屬すべきものなれど、余が文典には、姑く缺きたり。さるは、發音符の「アクセント」(Accent.)の如き、我が國にては、今、定めがたき事情あれば、なり。封建割據の勢よりして「アクセント」隨地に相異なり、一地方なるをもて定めむには、たやすきわざなれど、日本文典は、名のごとく、日本全國にかゝるものなり「東京アクセント」にて立てむか、全國所在の學校にて、敎へ得べきか、行はるべきか「京都アクセント」にて立てむか、同一の事情ならむ、邊土の「アクセント」採るべくもあらず。和字正濫抄などに、發音の上に、平、上、去、などと說きたるは、皆、畿內邊の「アクセント」なり。柿と牡蠣との「アクセント」、東西兩京、正反對なり、此類、擧ぐるに暇あらず。關東にては、奴婢の名の「熊、虎、梅、竹」などを呼ぶには、動植の實物を呼ぶとは「アクセント」を異にすれど、「熊、虎」などを、實物のかたの「アクセント」にて呼ぶゞ、雇人とても腹だつべし、關西には通せぬなるべし。「アクセント」の事、深く考ふべきなり。

山田美妙齋と稱する人あり、辭書を作りて、余が言海に「アクセント」を加へざりしを罵れり。文典を作り辭書を作らむほどの者が「アクセント」に心つかである理あらむや、加へざりしは、前陳の事情ありて、定めかねたれば、なり、一地方の「アクセント」は、何の效をもなすまじく思ひたれば、なり。扨、美妙齋氏の「アクセント」を見れば「東京アクセント」なり、余は、江戸にて生れて、十六歲まで、江戸にて成長せり、爾來、去就あり、前後を通じて、東京に住せし事、三四十年に及べり「東京アクセント」ならば、一夜にも定むべかりしなり。

○次に、文法教授法の私案を言はむ。無心にして言へど、假名の字形、清濁の讀方などは、すべて、初等教育にて學ぶものなり、又、言語とても、「山、川、草、木」といひ、「花は咲く、風の吹く」といひ、「書を讀むべし、字を記さむ」といひ、「山高し、海深し」などいふ、國人にして國語を讀むに、自然の知ありて、別に解しかぬることもなく、これを文法科にて、取立てゝ、事々しく說く必要はなきやうなり、從來の語學書に、難局のみ說きて、知れわたりたる事に言ひ及ぼざりしも、其故あるなり。然りといへども文法といふ一科學の範圍としては、あらゆる文字言語を漏さず、一應は、說かざることを得ねど、記すなれど、さて、教授の上に至りては、教師に、自ら活用の手段あるべきにて、知れわたりたる件々は、必ずしも責めず、誤まるべき局處のみ責むべきなり、然らざれど、無益に時間を費すのみなるべし。左に、文典中の、必ず教示熟知せしめずては、ゐあらぬ局處を擧げむ、此外なるは、ひとわたり講義してありて、可なり。

一總論にては、文章語と口語とに差ある事。

一文字篇の假名にては、母韻、半母韻の「い、う、ゐ」ゐ、ゑ、れ、を」の別。「い、ゐ」ゐ、ゑ、れ、を」の別。

濁音の「じ、ぢ」ず、づ」の別。拗音の「じゃ、ぢゃ、じゅ、ぢゅ、等の別。轉呼音の「は、わ」い、ひ」う、ふ」ゐ、へ」れ、ほ」の轉。「あう」れう、」から、」こう、」等の轉。音便の「くらひて、くらうて」かひて、かうて」の轉などなり。(以上、畢竟は、第七六節にいふ假名遣なり)

一漢字にては、文字に、音と訓とある事。

一單語篇の名詞、代名詞、數詞は、通過してよし。

一動詞にては、自動、他動、の用法を違ふまじき事。語根と語尾との別。正格、變格、九類の語尾活用の變化する狀、これは、力を極めて教へて、十二分に熟知せしめ、第一表の紙末なる語尾活用のみの諳誦を、自由自在ならしめて止むべし。殊に、變格の四類を責むべし。(佐變の「吟ず」感ず、周旋す、」の類、殊に注意すべし)上二段、下二段活用の口語調を、文章語に混ずまじき事。動詞にて、活用を熟知せしめ置けば、後の形容詞、助動詞、の語尾活用に至りて、大に力を省くべし。

動詞の法にては、第一、第二の終止法、又は、連體法、を用ゐ誤るまじき事。

中止法の第一五〇節のあたり。其他は、通過して可なるべし。

一形容詞にては、「嬉しゝ」、「怪しゝ」の誤。

一助動詞にては、所相の「罪せらる」を「罪さる」、「解さる」など誤るまじき事。（勢相モ同シ）使役相の「解せさす」、「周旋せさす」の「解さす」、「周旋さす」の誤。勢相、使役相と、敬相との別。指定の「恐るべし」、「起くべし」、「手を觸るべからず」、「などの「恐れべし」、「起きべし」、「手を觸れべからず」の誤。打消の「す」と「じ」との差。四段活用の一種の半過去（第二三七節）を下二段活用に誤用すまじき事。過去の「き」、「し」、「しか」の「暮しゝ」、「任せし」の別。「き」と「し」との第一、第二終止法の用法の誤。推量の「任せまし」と、打消の「任すまじ」と、の清濁、用法の別。詠歎の「なり」と、指定の「なり」と、の用法の差。第二六七節の類別。

一副詞にては、禁止の「な」を、動詞の第二活用に添ふまじき事。

一接續詞にはなし。

一互爾波の第一類にては、動詞にかゝる「が」、「の」と、名詞を繋ぐ「の」、「が」、との別。

「と」の、必ず、終止法を承くべき事。一種の「と」（與）の、幾處にても加ふべき事。「に」と「へ」との別。第二類にては、「だに」、「さへ」との別。「や」、「か」との全部は、力を用ゐよ。第三類にては、「と」、「とも」、「ど」、「ども」、との別、「ぞ」の二樣の用法、これも殊に注意せよ。

一感動詞にては、「や」と、疑ひの「や」との別。希望の「ね」、「な」、「なむ」と、半過去の「ぬ」の命令の「ね」、詠歎の「な」、「ぬ」の未來の「なむ」、又は、互爾波の「なむ」との別。第四三六節の類別。

一熟語、疊語、接頭語、發語、にはなし。

一接尾語にては、他語を副詞とするもの、中にて、「ものから」の用法。第四八〇節の「み」の用法、等なり

一文章篇は、文法科に於て、最も緊要なり、全部を通じて、熟知せしむべし。

右は、私案としていふのみ、他は、皆、無用なりといふには、固よりあらず。又、右の私案は、中等文典、廣文典、に通じていふにはあれど、中等と高等とには、說くに、自ら深淺精粗あるべきこと、いふまでもなし。畢竟するに、取捨裁斷の運

用は、人々の方寸の中にあるべきなり。

○中等文典の中に、今の日常の普通文には、稍、耳遠しと思はるゝ格をも說きれけるを、難ずる人もあらむか。然れども、文法の學習は、みづから文作らむ用のみにあらず、既成の文章を讀みわけむ力をも、つけれかむが爲なる事、固よりにて、稍古き文(中等教育を歷たる程の人に應じたるにいふ)をも、讀み取り得べきまでは、教育して置くべきなり、必ずこれを自作の文に應用せよ、といふにはあらず。但し、尋常中學にて、萬葉集など講じてある學校もありと聞く、それらは、程度を量らずといふべし。

○中等文典の文字篇中に、羅馬字の發聲母韻經緯表を加へたるは、洋學せぬ教員には、いかゞとも思ひたれど、羅馬字を借らねど、分明に說きあかし得ず、且、中等以上の學校にては、英語英文法をも課する事にもあれど、學生には、自ら理會にはやかるべくも思ひ、又、洋學せぬ人なりとて、音の原理を教ふるもかりの人は、羅馬字の音をかりは、知りてもあるべきことゝも思ひたれど、加へたり。又、洋學せし教員ならば、廣文典のかたの動詞、助動詞、の活用表中などに、洋文法の用語をあてれきたるを採りて、附說すべし、生徒には、洋文法と、兩々對照し、互に相發明する所ありて、大に悟入にはやき利あらむ。

序論

我が國語學の事、中世、言文兩途となりしより、教育する事とはなりしかど、初は、唯、歌學家一派の、高尚なる專門に存せしが如し。百數十年前より、斯道の學者、やう〳〵世に出で來て、頗る其道を究めて、世に稱道し、其著作の發行せられしも、少からず。されど、世人、尚、これを專門の學とのみ認めて、普通の教育にとては、上することなかりき。蓋し、文章語と、口語と異なりとはいへ、國人の、國文に於ける、別に、事々しき教育を受げずとも、ねばろげにも、自ら意を通じ、その誤謬の如きも、人々、互に襲用して怪まず、粗、用を辨ずるに足りてありしかど、これに重きを置かざりしなるべし。又、語學家の見も、これと同じく、唯、解し難く、誤り易き局部のみ說きて、他の、迷ふべくもなきには、論及せずしてありしなり。されど、著作せしを見るに、文法一科學の書としては、遺漏せること、甚だ多くして、文典の體裁を具備せるはなし。

西洋にて、文法といふ一科學は、或國人の、他國の語を學むとする必用より

して、起りしもの、と聞ゆ。初め、羅馬人が、希臘と交通し、其文化を慕ひ、其國語を知らむとせしより、希臘文法を作りしを初とし、羅馬の盛なるに及びて、他國人、又、羅馬と交通し、其語を學むむとせしより、羅甸文法は作られ、各國、又、これに倣ひて、各、自國の文法を立てしなり。(彼の紀元千六百年代) 各國、互に交通すれど、各國、互に、其國語を知らずはあるべからず、又、文法の誤は、交際の過を生ず、是に於て、此學も、次第に精密なる考究を歷て、あらゆる語格、說きて漏さず、普通敎育必修の學とはなりしなり。

然るに、我が國の如きは、從來、外國の交通少なかりしかど、深く此道を講ずべきことも、自ら起らず、必用として敎育せねど、人々、必用に思ひつかず、不必用と思へど、重んじもせず、隨て、斯道の發達せざりしは、自然の勢なりといふべし。近年、歐米と交通し、洋學盛に行はるゝに及びて、人々、彼の各國の文法といふものを學び知りて、爰に始めて、此學の必用なるを認め、普通に講せずはあるべからざるを覺るに至れり。

○上世、言文一致なりし世に當りて、語法の學などいふもの、あるべくもあらず、詠歌作文に巧拙あるも、人々の天才の意匠と、推敲の精粗とに出でしのみ。東脩を執りて師に就き、歌文を學ぶやうになりしは、藤原基俊、源俊頼、兩匠の頃よりの事なるべし。(源平時代より、凡そ、百年前) 此頃の書よりして、文章語と口語との混ずるを見る、文章語、漸く固定の姿を成して、尙、口語の調をも變へたるは、言文一致の遺風なりしならむか。而して、文章語の固定するやうになりしは、即ち、師弟の授受に起りしことにて、基俊朝臣の悅目抄、降りては、定家卿の假名遣など、當時授受せし狀を見るに足る。是等、語學の初とも見るべきなり。

悅目抄も、定家假名遣も、古格に比ぶれど、假名用法、已に亂れてあり。されど、「い」「ゐ」「へ」「ゑ」「れ」「を」の如き、或は、當時、變遷の發音のまゝを記せるにて、なほ、言文一致なりしにはあらざりしか、一考すべきなり。又、定家假名遣といふ書は、後の假托に出でし僞書にもあるべけれど、後世、冷泉家、二條家にて授受せし假名用法は、率ね、此書中の如くなれど、これをもて、定家卿の頃の師傳の狀を推しはかるには足るなり。

鎌倉の中頃、仙覺權律師、万葉集の假名遣をいひし事あり、南北朝の頃、明魏上人、(花山院師賢卿の孫)五十音反切に就きて說きし事あり、其他にも、類似の書、若干あれど、皆、語學史の材料とすべき價値なし。然れども、語法の事は、鎌倉、室町、を通じて、堂上專門家の和歌連歌等に傳へてはありしなり。

江戸開府以來、國書涉獵の博きは、北村季吟氏を推す、然れども、語學の學匠とは認めがたし。同時に、浪華の契沖大阿闍梨、梵音學に長じ、其力をもて、漢字音を考へ、万葉集に就きて、其所用の眞名の音を看破して、遂に、古假名遣の法を發見し、和字正濫抄を著して、これを論じ、動詞の活用にも及べり、(元祿中)これを、假名用法復古の首唱とす。其後、伊勢の谷川士清氏、日本紀通證、和訓栞を著して、(延享中)音韻活用の事を論じ、後、又、京都の富士谷成章氏起りて、書を著して、(明和中)名(名詞)かざし、(副詞)其外、他語ノ上ニ用ヰル語)よそひ、(動詞、形容詞)あゆひ、(豆爾波)の四別を唱へて、動詞の正變活用、頗る委し、足らはぬ所はあれど、日本文典の嚆矢ともいひつべし。尋で、伊勢の本居宣長氏、紐鏡、詞玉緒、を著して、係結の法、大に定まり、男、春庭氏、詞八衢、詞通路、を出して、活用、自、他、一定し、(文化、文政)後に若狹の義門上人、玉緒繰分、山口栞、活語指南、活語雜話、等を著して、(天保中)本居氏父子の說を補ひ、是に於て、動詞、形容詞、助動詞、豆爾波、の諸則は、大成せりといふべし。其他、先進諸氏の所說を補正せし諸家の著書は、擧ぐるに暇あらず。以上、國語學の略史なり。

○從來の語學書を通覽するに、先輩の苦心、欽するに餘りあるもの、固より多し。然れども、後進の忠言を獻せむと欲することは、はた、なきにしもあらず。語學書の通弊として、編次、類別、の整理、ゑをけなく、又、所說の、論理に合はぬこと少からず。

まづ、音論、言論、文論、いづれも錯綜して、わいだめなく、體言、用言、の別はよけれど、助辭などいふもの、塵塚の如し。代名詞、數詞、の如きは、姑く、體言中にありとして、措けど、副詞の如き、區別せずては、ゐあらぬ語も、「かざし抄」に、他語と混じて、聊、說きしことあるのみ、後の書には、さらにいひしものなし。動詞の現在、過去、未來、の如き、詳論せしは見ゐず。自動(然る詞)も、他動(然する詞)も、各自に、能相、(然する詞)所相、(然せらるゝ詞)使役相、(然せさする詞)を生ずるに、本支

を、平等に說きなし、主語、客語、說明語、修飾語、の語脈などに至りては、更に思ひいたらぬことゝて、主語に屬する亘爾波も、客語に接する亘爾波も、主客の別なく論ずるなど、斯る識別力にて、如何にしてか、語格を說くゝと怪まるゝもかりの事もあり。

但し天保中、尾張の鶴峯戊申氏の著はしゝ語學新書は、語學書中にて、特色のものにて、維新前に、一部の文典として、說ける所具微せしは、唯、此一書なり。然れども、只管、和蘭文典に模倣せし所ありて、煩蕪なるを免れず、是れ、其說の行はれざりし所以なるか。

語學者、動もすれば、古人は、誰も誰も、語格を誤らず、いとも〳〵、奇しく妙なり、などいふは、心得られず、口語をそのまゝに書に筆すれば、文をなしゝ世には誤るべき謂はれなし、さらに頌贊すべきにあらず、若し誤らば、會話に用を辨せぬ人なりしならむ、言文一致なりし世と、言文兩途なる世との變遷などには、さらに心付かずして、いふやうなり。又「我が國はことゝの國、唐土は文字の國」などいふ事も、常なり、かくては、日本人は、蝦夷の如く、ことゝのみにて、文字なし、支那人は、皆、筆談のみにて、用を辨ず、といはむが如し、支那人とても、倉頡以前、皆、啞なりしにもあらず、今とても、無筆なる者は、ことゝのみにて、思想を通ずるにあらずや。

言語に、雅俗といふことは、貴賤の用語に就き、都鄙の正訛に就きての別にして、古今時代の別にはあらざるべし。さるに、無下の俗語にても、古書にだに用例あれば、擧げて說き、後世の造語なるは、いかなる用語にても、俗として切擯斥す。さて、中古の造語にいたりては、上古に對して、さらに問ふ所なし。畢竟ずるに、國語家の、唯一に立つるすぢは、古を尙び、後を斥く、といふにあるが如く、其研究する所も、唯、古語にありて、擬古文を作るを期して止むもの如し。此の如くにしては、斯道の發達普及せざりしも、ことわりにて、普通文育に重んぜられざりしも、理なり。古格なりとて、今世に死格なるは、古書を讀まむ時に、誤解せぬまでに、心得てはあるべきなれど、これを普通文に活用せむとては、迂なるを免れず。況や、勉めて、趣味もなき僻典など學びて、博を示すが如きは、同好には、ともあれ、人情に近からずとやいはむ、文を死地に陷

るとやいはむ。日常の活語を用ゐて、日常の活文を作る、是に於てか、文、始めて用をなす、斯道は、唯、辭達而已を期待せむのみ。

○事、枝葉に渉れど、戀歌の事を論せむ。およそ、世に、戀歌ぞかり厭はしく憎むべきはあらざるべし。さるに、世の國學家には、歌集の戀歌を、講義錄などに說きて、覗として耻ぢぬも多かり、其意を問へど、歌は、情に發す、戀は、人情の至極のものなれど、斯道には已むことを得ず、などぞ答ふ、たはことといふべし。夫婦の大倫は、さるものにて、よこさまなる戀は、慾なり、喜怒哀樂の常情だに、發して節に中らざるは、これを抑制す、まして、慾をや、これを抑制し得る良能あるを、人とす、造化より、この良能を賦せられながら、適用せざるは、人にあらず、情のゆく所を恣にして、抑制する能力なきは、小兒と禽獸となり、情慾のゆく所を恣にすとも、歌はよまねどならずとにや、さらば、歌といふものは、廢絕せしめてよけむ。又、或は、歌道に、假設の空題として詠ずるのみ、と言はゞ、歌は、至情に發するを旨とす、との論旨と衝突するを、いかにかする、戀の名歌を詠せしめむとせば、必ず實行せしめずては能はじ、歌のみは、至情より詠せよ

實行には、謹敕なれ、とは無理ならずや。己が妻孥に、今のまのすたりに、彼の中昔の淫奔穢褻の風を實行せられなば、いかに。

万葉集、二十一代集、何集、何物語、戀歌ならぬはなし、いかに當時の風習なりとはいへ、かくまでに、恥知らずしてありしこと、今の常情もて、量られず。我が朝家の中世の瑣尾、誰かこれを慨せざらむ、其原因、あまたあるべけれど、れのれがつら〳〵思ふ所は、戀歌などや、其一大原因なるべき。盜賊は、天下を横行し、武士は、大權を偷みつゝあるに、公家は、何事をかする、汲々として戀歌を撰集し、孜々として戀歌の優劣を鬪はす、歌合に、負けたりとて、憤死せし者さへあり、何歌かといへば、戀歌なり、れのれが、人の常情をもて量られずといふは、これらのことなり。堂々たる朝家の人士なるに、戀歌、是れ命にして、朝に戀歌の佳什を詠じ得ば、夕に死すとも可なり、と思ひ居たりしさまなり、言語道斷の事ならずや。朝家、いかでか衰微せざるべき、戀歌實に、亡國の恨なり、古來、諸集中の戀歌、悉皆、抹殺削除すべきなり。

○國語家は、ともすれば、我が國は言靈のさきはふ國なり、餘國の言語は皆缺

舌なり、などいふ、己が國の美をことあげせむの心、惡しとにはあらねど、他國の言語を究めもせず、比べもせずして、井蛙固陋の見もて、ひたふるに自尊のみするは、心なし。

人の言語は天籟なり、唯、人種異なれど、其章を成す所、異なるのみ、更に軒輊すべくはあらず、我に異なれどとて、擯斥せむか、彼も、同じさまに打ちかへして、我をれとしめむ。世界に立てる國々にて、苟も言語ありて、人々、互に、自由に自在に、思想を通ずるを得むか、その國語の成立に、差違こそあれ、いづれか、言靈のさきはは、ぬ國とはいふべき、唯、比較博言學もて、其異同を論せむのみ。然りといへども、文化の國と、未開の國と、其語法に精粗あらむは、一國内にても、貴賤都鄙の語に、雅俗あるが如く、免れ得ぬ所なり。今、若し、世に、萬國言語の共進會などいふこともあらむには、梵語、羅甸語、佛蘭西語、まづは優等賞を得むか、獨逸語も、金牌には漏れざらむ。歐洲大陸の語には、名詞、代名詞、冠詞、動詞、形容詞、語毎に、男女性、人稱、等あるは、繁に失す、然れども、誤解を生せしめぬ利もあり。日本語、英語も、金牌に伍することを得むか。日本語は、單複數を別つに、一定の規なきなど、缺くる所はあれど、冠詞なく、男女性、人稱、なき所など、甚だ簡にして、殊に、豆爾波と、助動詞の語尾變化とに於て、大に他に優る所あり、字母も、所謂、成熟音字(Syllabic.)にて、四五十に過ぎず、(電信送達などに妙なること、外人も賞する所なり、)綴字も、英佛などより、遙に煩ならず、唯、漢字を混用すると、言文兩途なるとは、大瑕瑾なり。英語は、餘國の語にくらべて、第一流の位置を占むること能はざれど、語法、簡單なれど、他國人の、學ぶに易き特性あり、これぞ、英語の、廣く海外にまで行はるゝ所以にはある。

英語には、男女性の如きは、唯、代名詞にあるのみ、又、冠詞といふも、實は、形容詞なるを、他に擬して立てたるにて、英語に、冠詞はなきなり。

魯西亞語も、次流にはあらぬ由なれど、今、尚、學者の語法を制定しつゝある發達の時代にあり、と聞けば、金銀牌の間にやあらむ。支那語は、單音語にして、語尾の變化といふもの、さらになし、實に、世界に獨特なり、審査官の、考へを惱ますものなるべし。其他の國語は、余が深く知らざる所なれど、言はず。但亞米利加土人の語の如き、すべて名詞のみにて、動詞も、形容詞も、何もなしと

いひ、なにがしの國の宣教師が、新約全書中の一動詞の意を譯述するに、十六名詞を連ねて、始めて譯し得たりと聞く、かゝる國語は、縱ひ、思想を通ずることを得といふとも、これらをや、言靈のさきはゝぬ國とはいふべき、褒狀にもあづからぬなるべし。

○漢學にのみ長け、或は、洋學をのみ修めたる人の套語に、日本文は、語法、粗にして、精微緻密なる理論文など、記し得ず、腰、弱くして、雄渾豪岩なる辨論文など、作りゐず、といふ、たはけたる言といふべし。この論を破らむには、まづ、談話の語につきていはむ。われはよそ、日本語は、講談に、精密なる學術の奥蘊を、言ひ取り、言ひまはされぬか、演說に、雄辨滔々、人をして、聳動傾聽せしむること、能はざるか、よもざる事はあらじ。この談話の語の、あるあらむ、これを書に筆せられず、といふ事やあるべき。己が未熟にて、善く文を作り得ぬにこそあれ。

そも、我が國にては、古來、男子の文章とては、漢文と限られて、國文は、昔より、學校の教科に立てられし事なく、正しく教育に上りし事なし。されど、世に、學者の鍛錬に成れる文とては、古今來なしといふべく、稀に、世にもてはやす國文とては、多くは、女子のはかなきすさびなどに成れるものなり。文の弱きにはあらず、作れる人、寫せる材料の弱きなり。扨、又、其緻密なる所にいたりては、數百千年前の人情世態を、今のまのあたりに見るが如きもの、古假名文に、自らあるなり。漢文訓點讀下し文のみ學び得て、詰屈なる文の外は、作り得ず、その詰屈文をもて、日本文と心得居る人とは、談ずること能はず。

歐陽修が醉翁亭記の事を、朱熹が記せるに、初說滁州四面有山、凡數十字、末後改定、曰環滁皆山也五字而已、如尋常不經思慮、信手所作、などあり。又、白居易は、詩文成れる毎に、無學の婆に讀み聞かせみて、その解し得るを期せりとかいふ。かゝる大家輩の、かはぎまでに推敲焦思して作り成せるには、精緻なるも、雄渾なるも、出で來む事、ことわりならずや、泰西の名家の名作といふものも、かくぞあるべき。國文に、古來、かゝる名家の、かくまでに苦心して作り成せるもの、ありや、なしや、れのれは、なしといはむとす。されど、國文といふものは、古來、いまだ、文章家の鍛錬琢磨を歷たる事なく、いまだ、發達の道につ

かずしてありしものゝごともいふべきなり。國文の道に盲なりながら、徒に排難するたはことはさるものにて、鍛錬をも歴ず、發達を導きつる事もなき文に、缺點を論ずるは、いはれぬことなり。既に、講談に、演說に、自在なる言語のあるからは、切瑳琢磨もすべく、鍛錬推敲もすべく、語法、語格の足らはぬあらむ、人爲もて創制もすべく、かくして、學者の工夫を積まむ、何ぞ、漢文をも凌駕し、洋文をも壓倒するにいたらぬ事のあらむ、文の罪にはあらず、人の罪なり。

○漢文とても、洋文とても、草昧よりして、後の如くなりしにはあらず、皆、數千百年間、世々の名家の手を歴て、法格の創制もありて、今のさまにはなれりしなり。支那にても、西洋にても、文字を改制せし例は著し。言語文章の法格の足らはぬを、學者の、人爲もて完備せしめし事も、往々、その例あり。

數年前、獨逸老帝「ウヰルヘルム」第一世陛下の崩せられし時、我が政府より、世に布かれつる告文に「ギーヨーム」第一世、云々、とありき、獨逸にて「ウヰルヘルム」といひ、英國にて「ウヰルレム」といひ、佛國にて「ギーヨーム」といふ、同じ、そのをり、己れ、この事を識者に問へるに、歐洲各國の公文には、佛文を用ゐるなり、これも、獨逸政府よりの公報を、そのまゝに譯せられたるにぞあらむ、と答へぬ。公文には、歐洲各國にて、佛文を用ゐるといふ事、れのれも知れり、さるにても、皇帝の御諱なる固有名詞まで、他國の語、殊に敵視せる國の語をもちゐるとは、あまりに心ゆかぬことゝ思ひて、再び識者にむかひて、ろも、歐洲各國にて、佛文をもちゐるは、佛國は、歐洲文明の中心なり、との故にてもあるか、はた、その國、歐洲にて、最も强盛なり、との故にてもあるか、と問へるに、いやとよ、今の佛國の文法は、百數十年前に、學者の改作に成りしものにて、その法格の端嚴なること、各國語の第一にて、文意の、兩樣に誤解せられむやうの事、絶にてなけれど、各國、これを、公文、條約書などにもちゐるなり、と答へぬ。不完全なる言語文法も、人爲もて補正せられて、終に、歐洲各强國をして、靡然として遵奉せしむるに至る、即ち、佛語の威力は、能く、全歐を制服せしなり。學者の力、語法の學、豈に、輕々に視るべけむや。

和蘭國の如きも、初は、佛語、獨逸語、を混用して、もとゐとすべき國語なかりしに、これも、百數十年前に、其國の學者、相集りて論ずるやう、已に獨立國とある

上は、一定の國語無くてやは、創造すべきにこそ、とて、やがて、羅甸文法に據りて、新に文法を制して、これを國語と立てつ。初は、行はれがたき事情もありしかど、普通教育に強行して、老少新陳の交替せるに及びて、終に、今の如くにはなりきとぞ。されど、和蘭の文法も、甚だ完備せるものなり。因に云、當時名詞の格をだに、まづ、羅甸の如く、六種に立てゝ施行したりしに、實際に使用するに至りて、差支ふる事ども多かりしかど、更に審議せしに、蘭語には、六格を具へぬ事と決して、減じて、四格としたりとなり。以上の事は、和蘭の某の辭書の序に見えたりとて、往年、故箕作秋坪先生より聞ける所なり、洋文法にのみ據りて、和文法を論ずる者、留意すべき事なり。

又、魯國の如きは、今、尚、法格の一定せぬ語ありて、文法家、より〳〵考へて、定め得たる時は、政府よりして、賞與を給することありと傳へ聞けり。

我が文法の上にも、人爲もて補足せまはしき事、固より多かり。此の別記の第一〇四節なる中止法と名づけたる動詞の變化など、文法家の、最も考ふべきものにて、又、第一六一節の現在、過去、未來、の類別の如き、古例に合へりや、合はずや、は措きて、余がおぼつかなくも、大かたに制定したる、あながちなるわざにもあらじ、かし。

○余が淺學なる、國語に於けるは、いふまでもなし、外國の文法、亦、固より、通曉する所あらず。印度、希臘、羅甸、さては、歐洲各國語、遍く渉獵する所あらむには、なほども思へど、力及ばず。碩學に質すことあらむとすれど、いかにせむ、洋學家は、さらに國文法を解せざれど、質す所、要領を得ず、國語家は、洋文法に於て、充耳の如く、其答ふる所、肯綮に中らず、唯、懊惱するのみ。洋學家に、國語を學ばせむよりは、國語家に洋文法を學ばせむ。あはれ、伊勢の學費、若狹の學僧を、地下より起して、一部の洋文典、讀ませたらましかばと、毎に歎息せずはあらず。

○漢文作れる者に、和臭の用語、文字の顛倒、など告ぐれど、其人、赧然として謝し、洋文記せる者に、法格の違ひ、綴字の誤、など教ふれど、赤面して改むるは常なり。さるに、國文書ける者にいたりては、一片の書翰證書などに、豆爾波、假名遣ひ、の破格あるを諭せど「譯サヘワカレバ、ドウデモイヽヂヤナイカ、」など

冷語するも、亦常なり。但諺にいはゆる隣の糂粭味噌とやらむにて、狎れては、内を輕んじ、好奇の心にては、外を重んず、事體をもわきまへず、名教にもかゝはる、といふべし。譯だにわからぬ、何をかいはむ、わからねどこそ、いふなれ、己れのみ、わかる〳〵と思ひの外に、人にはわからぬが多きなり。今も、法廷にて、契約書上の、語格解釋につきての爭論も、往々あるなり、外人の内地雜居も、兩三年の後にせまれり、「ドウデモイヽヂヤナイカ」の契約文など、寒心すべきことならずや。

「立合ヲヲヲ要ス、」と記せど、條件となりて、必期す、「立合ヲヲヲ得、」は、權理に屬して、我が自由なり、「立合ヲベシ、」は、條件とも、命令ともならず。是等の事、法律の術語にはあれど、普通にも記すものなり、漫然たる書狀文なども、證據物件となることあり。

○國文語格を冷視するは、洋學者に多きが如し、學位などある人にさへ、少からず。さて、その書きたるには、一通の書狀にすら、文を成さず、用を辨せぬが、往々あり。平生、筆執るに懶く、必用あるにせまられて、譯文など作るにいたりては、學生が、教室にて、洋文讀本を、直譯に讀むが如きさまなる、多かり。常は、語格などとて、冷罵はするものゝ、さすがに、人に示さむには、耻かしく、こゝにいたりては、かの冷罵せし國學者、漢學者にすがりて、潤筆出して、添削を請ふ、いかに不自由なるにか。世に、翻譯の良書の乏しきも、多くは、洋學者の、文つくり得ぬに因る。腹には、學もあり、說もあり、口には、善く辨するを得ながら、さて、文には作られずとは、筆の先の壓とやいはむ。何れの國にか、學士などいふ名ある者の、己が國の普通文、書き得ずといふ事のあるべき。

○國文の語格のくだけたる、支離滅裂せる、今代のはなどなるはあらじ。其原因をたづぬるに、多年の言語の變遷にも因るべく、學校の教育なかりしにも因るべしといへども、其大原因は、全く漢文の訓點にありて、その禍源となりしも、近百年以來輩出せし訓點にあり。

四書五經にても、道春點などいふものは、訛れりし所なきにしもあらねど、なほ、古の菅家江家の點の遺流を受けて、捨假名、振假名に、自他能、所、過去、現在、未來、などの語格、依然として存せり。然るに、かの寛政の三助先生の頃よりし

て、古訓點の振假名を捨てゝ、專ら音讀すること起りぬ。さるは、同訓なりとて、異字異義なるが多きを、唯訓にて口拍子に覺えてのみありては、異字ある方に、注意薄くなりて、漢書を讀むに、異義あるを混同して解し、漢文を作るに、文字の顚倒、又は、和臭の用語など起る、そを防がむとし、矯めむとするよりのわざなりしと聞く。さて此の三先生の頃よりして、漢學漢文の、大に進みて面目を改めしことも著し。漢文專攻の上に就きては、さてもあるべし、(音讀するのみにて、漢書を解し、漢文を作らるべきにもあらねど)されど、これよりして、古訓點といふものは、破れそめぬ。

一旦破壞のいとくちを開きしより、後の儒家の何點何點といふものにいたりては、古訓點の振假名も、捨假名も、甚しく抹殺して、己がじゝ、あらぬものに改めて、(國學とては、さらにせざれど)さらに法をも格をもなさぬものを作り出でたり、ろの甚しきものを、一齋點なりとす。これぞ、語格破壞の禍源罪魁にはある。されど、當時、なほ、古訓點にて敎授する者もありて、後進、文彥が如きも、少年の素讀には、古點に據りしこと、多かりしなり。さるに、佐藤一齋先生、一代の鴻儒とて、重く幕府の昌平校に用ゐられ、多く諸侯に聘せられて書を講じ、門人、三千人に至り、齡、八十八をかさねたり。(安政六年歿)師作りて、弟子述べ、爾來、全國の訓點、一齋點に風靡して、火の原を燎きて、撲滅すべからざるが如く、災害、終に海內にわたりぬ。然して、此事、今より、僅に六七十年前にあり。

漢學者とても、往時は、私に國文を攻めて、漢文作れど、漢文の美を成し、國文作れど、亦、優に其境に入れり、白石、鳩巢、二先生の文など、想像すべきなり。寬政以來、漢學專攻の者、先輩の如きたしなみなきのみならず、漢文作るには、國文は害なり、などいふ妄念を抱きて、却て擯斥することとなりて、必用ありて假名交り文を記す時は、(國文は、固より、作り得ねど、己が唯一と學び得たる漢文讀下しの文のみ記すこととなり、其訓點は、かの破格なるより外に知らねど、文は、遂に支離となりて、さて、此末流に成育せる漢學書生輩の、圖らずも、天下の大權を執るに至りて、禍根、愈、固く、遂に、大日本公行の文體とはなりて、かくて、文章は、全く塗炭の中に陷れるど、實に終天の遺憾なる。されど、今代の文

の、支離せるは、全く、近世の漢學者と新訓點との罪なり、と定むべきなり。○人種、異なれど、言語の構成も、固より異なるべき理なれど、何れの國の文なりとも、原文を學むには、原文にすがりて讀みつけむは、己むことを得ぬわざにはあれど、その讀みつけに、義を成さぬもの丶出で來むは、論なきなり。洋文直譯讀に、義を成さぬあるは、誰も知りてあれど、そを國文に移す時は、別に、義譯するを常とせり。漢文の訓點は、猶、洋文の直譯讀の如し、その訓點に、義を成さぬこと多きも、知れわたりたることなり。さるを、義譯の道を取らず、直に讀下しに記して、恬として怪まぬは、洋學者に耻づべきなり。

漢文訓點の義を成さぬ例、ひとつ、ふたつを言はむ。「此類、實不一而足」の訓點の如き、更に義を成さねど、原文にすがらむには、外に訓ずべきやうなし。されど、原文に就きて訓讀する間は、なほ「不」の字、「一而足」の上に居て、三字をつらねて打消すべきこと見ゆ、「マダ、外ニモ多クアル」の意、知らるれど、「一ニシテ足ラズ」と讀下しに記す時は、國語の語格にては、「マダ、外ニモ欲シイ」の意とならでは、解せられず。刻苦して漢文を學習せし上の人ならで、原義を解しもすべし、されど、さる人には、漢文ながらにてあれ、假名交りに書下すに及ぶず、書下すは、漢文解せぬ人にも讀ませむが爲なるべし、然る時は、解せられず。

是等は、「實に、ひとつ、ふたつのみならず」など、義譯すべきなり。

「不雹氷炭之差」などはよけれど、「氷炭不雹」などを、「氷炭、雹のみならず、甚しきは、「氷炭、雹ならず」など記す時は、「氷炭バカリデナイ」、「氷炭ハ、尋常デナイ」、「無數育の者には、「氷モ、炭モ、無代價デハナイ」の意ならむなど思はむ、滑稽がましくはあれど、これより外には、解せられず。「雹、猶止」とありて、「不雹」は、熟語にして、字にて「何止」或は「不但己也」の意を成し、支那語にては、倒置しても、略語ありても、通ずれど、これを譯せむには、「雹ニ、氷ト炭トノ差ヒノミナラズ」とせむ正しく、己むことを得ずと、「氷炭、不雹ナリ」と讀みてあるべきなり。

さて、右等の訓點書下し文は、不都合にはあれど、強ひて誤解の方(原文の意に對して)に解せむ、なほ、國語の語格を成すべし。然るに、新訓點の甚しきものにいたりては、正解にも、誤解にも、語格にも中らぬあり。古點には、「有顏回者」とあるを、新點には、「有顏回者」と改めたり、「顏回ニアル者アリ」とひふことなな

りて、いかにとも解せられず、此類、甚だ多し。

「視而不見聽而不聞」の古訓點は、他動を翻して自動に移し、意義分明あれど、新點の「視而不見聽而不聞」は、他動、終りて、他動に移り、いかなる義にか、さとられず。「子路有聞未之能行唯恐有聞」「子路有聞未之能行唯恐有聞」難乎免於今之世矣」難乎免於今之世矣」など、皆、然り、これを書下しにして、何の意義をか成さむ、今の支離の文、多くは、是れなり。

上陳の如きをもて、一國の通用文として、筆者も、善く思想を盡せりと思ひ、讀者も了解せりと思ひてあること、さても、不可思議なる世の中なる哉。

○英國の國語の如き、太古の「ケルテック」語脈なる「ブリトン」語、「スコッチ」語、などは姑く言はず、羅馬に征服せられて、羅甸語に一變し、「アングロサクソン」人に侵入せられて、更に其語に變じ、「デーン」人種入り、「ノルマン」人種入りて、各々、其國語を輸入して、舊國語と混用し、侵入の人種は、その多數なると、勢力あると、によりて、輸入せし語も、其語尾變化單複數、等の法までも、各、其母國のまゝして横行し、て、齊しく動詞にて、其變化に、規則といひ、不規則といふなど、實に雜駁を極む。世々の學者の力にて、辛うじて、今の如く、消化混一せしめたれど、其國語の成立に至りては、獨立國の體面に、耻かはしきものなり。

我が國の如きも、千有餘年來、朝鮮語、漢語、梵語、洋語、等の混入したる、固より多し。然れども、外國語、いかに入るとも、新入事物の名目として、名詞にのみ用ゐて、更に、其他には竄入せしめず、動詞の活用、豆爾波、其他にいたりては、嚴として、本國の語格語脈を固守して、決して犯觸だにせしめず。千餘年、然り、今より後、千萬年に至るとも、依然として、此の如くなるべし。國體も、國語も、共に他の侵犯を受けしことなく、共に金甌無缺なること、神明の加護あるが如し。然るに、此の無缺の金甌に傷つけしものころ起りたれ、そは、外國よりせしにはあらで、犯人は、蕭墻の中より出でたり、剩へ、文學界より出でたり、即ち、漢學者の新訓點の、語格語脈まで破れる、これなり。後進として、先哲を非議すること、愼ましくはあれど、斯道のために憂憤するあまり、もだしてあること能はず。

○今の普通の文體は、漢文訓點讀下し文なり。而して、文の、世に行はれて最

も効力を有し、最も勢力を有するは、教科書と、新聞紙の社説となり。斯文の支離を矯正せむ道は、漢文教科書の訓點を改むるにあり、新聞記者に、語格の注意を促すにあり。新聞をして、今の急に當らしめ、教科書をして、漸を後進に期せゞ、更新の功を遂げむこと、難しといふべからず。支離文の病根に就きて、余が診斷は、彼の如く、處劑は、此の如し。

○一國の國語は、外に對しては、一民族たることを證し、内にしては、同胞一體なる公義感覺を固結せしむるものにて、即ち、國語の一統は、獨立たる基礎にして、獨立たる標識なり。されゞ、國語の消長は、國の盛衰に關し、國語の純、駁、正、訛は、名教に關し、元氣に關し、國光に關す、豈に勉めて皇張せざるべけむや。

○余は、「かなのくわい」發起者のひとりにして、持論は、言文一致にあり、是等の事、こゝにいはむと欲すれども、中古言文典には、とて、姑く措く、いつか、別に、世の國語家に質すことあらむ。

明治丙申臘月　　仙臺　平文彦

石森氏藏書章

廣日本文典別記

第一節

（本書、第一節）コヽニイヘル言語ハ、「ことゝ」トモ、「げんぎ、よ」トモ訓ムベク、其意モ泛ク、單語（Word）トモ、說話（Speech）トモ、國語（Language）トモ解シテ、可ナリ。後ニイフ國語モ、「くにことば」トモ、「こくご」トモ訓ムベシ。

○凡、音者、生人心者也、情動於中、故形於聲、聲成文、謂之音。（禮記、樂記）聲成文、謂之音、音發爲言、言之成文、爲詞。聲音ハ、言語ノ材料ナリ、言語ハ、思想ノ符號ナリ、談話ハ、人々、思想ヲ相通ズル具ナリ、言語ノ、象ニアラハルヽモノヲ、文字トス。

第二節

（本、第二節）平家物語、敵、平等院に、と見てんげれど、薙刀にて、切つて落す、三十四差いたる箭、籠に、一つゞ殘つたる、馬の足の及むう程は、手綱、かいくつて泳がせよ、涙をはら〳〵と流いて、入相ゞかんの事なれゞ、馬をさつと打入れたれゞ、皆、口語ノ訓ナリ。

第三節　○洋語ニ所謂Grammar, モ、常ニ文法ト譯セラルレド、各國、多クハ、言文一致ニテ、Grammar, ノ語義ハ、「言語(口語)ヲ正シク述ベ、又、正シク書クコト」ナレバ、文法ト言ハムハ妥當ナラズ、寧、語法トイフベシ。サレド、我ガ國ニテハ、法則ヲ、中古ノ言語ニ取レド、(話頭ニハ用ヰズ)文章ニノミ用ヰレバ、言語ヲ次トシ、文章ヲ主トシテ、文法ト稱シテ可ナリ。

第四節　○開明ノ趨勢ハ、長ク言文兩途ノ弊習ヲ持續スベクハアラジ、到底、言文一致ニ復古セズハアルベカラズ。今ノ口語ニモ、固ヨリ法則アリ、敎ヘザレバ誤ラム、口語ノ語法モ制定スベキナリ。然レド、各地、皆、其法則ヲ異ニスレバ、何地ノモノヲカ基(Standard)トスベキ、許多、偏鄙ノ土語ヲ斟酌スベクモアラズ、サラバ、東京語ヲ採ラムカ、西京語ヲ採ラムカ、兩語ヲ斟酌セムカ、唯、學士ガ論定スル日ヲ待タムノミ。

第五節　(本、第七節)儀禮、聘禮ニ「不及百名書于方」註ニ「名書文也、今謂之字」疏ニ「名者、即今之文字也。」

第六節　(本、第九節)平假名、以呂波歌、共ニ、空海ノ作ナリトイヘド、假名トイフモノ、空海以前ニモ、アリシヤウナレバ、信シ難シ、尙、後ノ第八節ニイフベシ。

○今樣トハ、即チ、七五、七五ト、八句ニ詠ム體ノ名ナリ、以呂波歌ノ意ハ、佛家ノ涅槃經ノ四句ノ偈ナル「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」ノ趣意ヲ眞言ニ演ベタルモノニテ、即チ、「色は匂へど、散りぬるを、(諸行無常)我が世誰ぞ、常ならむ、(是生滅法)有爲の奥山、今日越えて、(生滅滅已)淺き夢見じ、醉ひもせず。」(寂滅爲樂)ノ意ナリト云フ。「有爲の奥山」トハ、上四句ヲサシテイフ、有爲ノ法ノ至極ハ險難ナレバ、奥山ニ譬フ、「今日越えて」トハ、有爲ノ法ハ、皆、磨滅ニ歸スルコトヲ知リテ、還源ノ思ヒヲ發シテ、無爲ヲ願フ時ヲイフ、イザ、今日越エテ、ト誘フ意アリ、「淺き夢見じ」(未來ナリ)トハ、世間、淺近ノ生死ノ夢ヲ、永ク見ルマシトナリ、無明ノ酒ニ醉ヒテ、生死ノ貧里ニサマヨヒテ眠ルハ、一向ニ迷ヒナリ、コレ「醉ひもせず」(現在ナリ)ノ意ナリ、云々ト、或書ニ見エ。

第七節　(本、第一〇、第一一節)此ニイフ段ヲ列ト名ヅクル者アリ、然レド、動詞ノ語尾ノ活用ニ、四段、上二段、下二段、ナドイフハ、即チ、此ニイフ段ナレバ、段トイフベキナリ。(列ハ、縱行ノ稱トモスベシ)「不」ハ、古ク用ヰラレタリシニ、中絶シテ、近頃

再ビ世ニ用ヰラル「ヰ」ハ、本居氏ノ作ナリ。

第八節　（本、第一四節）片假名、五十音圖、其ニ、世ニ、吉備大臣ガ作ナリト言ヒ傳フ。然レ
ド、五十音ノ排列ノ狀、天竺ノ悉曇章（シツダンシヤウ）トイフモノニ據リテ、邦人ニ固有スル音
ノミヲ擧ゲテ、作リシモノヽ如シ、悉曇章ハ、大臣ノ時代ニハ、未ダ我ガ國ニ傳
ハラズ、弘法大師、入唐シテ、始メテ梵音ヲ學ビテヨリ、傳ハリタリト言フ、然ル
トキハ、五十音圖トイフモノハ、密徒ノ作リシモノナルベシ、又、片假名ノ創製
ノ時代モ、平假名ヨリハ後ニテ、初ハ、平假名ノ如ク普通用ノモノニハアラザ
リシガ如シ。（「をこと點」ノ用ナド、其初ナラムカ、「をこと點」ハ、漢字ノ肩ナドニ
差ス、サレバ「かたかな」ハ、肩假名ノ義ナラム、トイフ說モアルナリ。）
平假名、片假名、共ニ、古クハ、別體ノモノ、許多アルヲ見レバ、其初ハ、一人ノ創造
ニハアラズ、唯、誰トナク、草書、楷書ヲ、書寫ノ際ニ省略シテ用ヰタルガ、年所ヲ
歷ルニ隨ヒテ、其中ノ最モ平易簡便ナルモノニ、一定シタルモノナルベシ。
尙、平假名、片假名ノ作者、字體ノ起原、別體ノ假名及ビ、以呂波歌、五十音圖、等ノ
委シキヿハ、「假名本末」其他ノ諸書アリ、就キテ見ルベシ。

第九節　（本、第一八節）長呼ノ符ナルーハ、元祿中發刊ノ「華夷通商考」ナドヨリ見ユレバ、
外國語ヲ寫スヨリノ創作ナルベシ。（彼得ハ、洋人ノ名ナリ。）白石新井先生ノ
「東音譜」ニハ、此ノ長呼ノ符ヲ「アルヨル」「ピタ」ナド作リテアリ、洋字ノ長呼符ノ、
ō、ū、ナドニ似テ、亦、面白シ。

一〇節　（本、第二〇節）聲帶（セイタイ）、又、聲絃（セイゲン）トイフ、氣道（喉頭ヨリ、氣管ニ通ズル所）ノ內方、側壁ニ
橫タハル彈力性ノ膜ナリ、常ニハ弛緩シテ、孔ヲ存シテ、空氣ヲ通ズレドモ、聲
ヲ發スル際ニハ、緊張シ、相接近シテ、其隙ヨリ、息氣（イキ）ヲ强ク出シ、聲帶、顫（フル）ヒ動キ
テ聲ヲ成ス、猶、琴ヲ鼓スレバ、其絃、震動シテ、音ヲ發スルガ如シ。

一一節　（本、第二四、第二五節）rハ、彈舌ノ發聲ニテ、國音ノ「ら」「り」「る」「れ」「ろ」ニ合ハズ、fモ、
歐洲大陸ノ發聲ニテハ「ふ」ノ純唇ナルニ合ヘド、英ノ唇齒ナルニハ合ハズ、其
他ニモ、適合セザルアリ、サレド、此ニハ、姑ク其近キモノヲ借ル。

一二節　○以上、聲音ノ解、粗ナルニ失スルガ如シ、然レトモ、文典ノ範圍內ニテハ、此ノ
如クニシテ、足レリ、深ク析ツニ及バズ。
○從來ノ音韻家ニテハ、喉、（阿行、也行、和行）舌、（多行、奈行、良行）牙、（加行）齒、（佐行）輕唇、

(波行)重唇(末行)ト類別セリ、然レドモ、其性質分類ヲ誤レルガ如シ、阿行ノ音ハ、氣息、聲帶ニ顫動ヲ起セバ、單純ニ發ス、喉ノ機關ニ關係ナシ、又、和行ハ、唇音ナリ、加行モ、牙ニ關係セズ。

一三節　(本、第二八節)一語ノ首ニ、良行ノ音アル國語ハ、「るつぼ」(坩堝)アルノミ、コレハ、「いるつぼ」(鑪壺)ノ略ナリト云フ。「らんりようの、舞のてぶりの、るゐなきに、れいならねども、ろく賜ひけり。」ナドハ、皆、漢字音ノ語ナリ。

一四節　(本、第二九節)母韻トハ、發聲ノ韻トナリテ、音ヲ成サシムル本ナルガ故ノ稱ナリ。サルニ、阿行ノ音ハ、噫(ア)、得(ウ)、御(オ)ノ如ク、固ヨリ、單獨ニモ發シ、一意義ヲモ成シテ、發聲ノ韻トナルト、否ラザルトニ關セザルヿアリ、サレバ、其音ノ本分ニ、別ニ、單純音ノ名ヲ付セリ。

一五節　二語ノ、合シテ一語ノ意ヲ成スヲ、熟語トイフ、發聲ト母韻ト、合シテ一音ヲ成スヲ、成熟音ト名ヅケタルモ、其意ナリ。(成音トモイフベケレド、清音ト紛ヒ易シ。)

○支那ノ韻書ニ、三十六母(亦、發聲トモイフ)アリ、即チ、本書ニイフ發聲ナリ、又、本書ニイフ母韻ヲ、單ニ韻トイヒ、母ト韻ト合シタルヲ音トス、是レ、略、本書ノ成熟音ニ當ル。

一六節　○梵字ニテハ、本書ノ單純音ヲ、悉曇(シツダン)(成就ノ義)トイフ、十二字アリ、(長短、各五韻、幷、空、涅槃)發聲ヲ、體文(タイモン)トイフ、三十五アリ、(牙、齒、舌、喉、唇、ノ五音聲、各、五、別ニ遍口聲、十)字母ノ數、合シテ四十七ナリ、又、摩多(マタ)トイフモノ、十二アリ、是レ、悉曇ノ半體ノ點畫ニテ、體文ニ加フルトキノ用トス、即チ、本書ノ母韻ニ當ル、三十五體文ニ、十二摩多ヲ相加ヘテ、初章、四百餘ヲ成ス、是レ、成熟音ナリ。

一七節　○英ノ Consonant. ヲ、子音(シイン)、又ハ、父音(フイン)ナド譯スルアルハ、非ナリ、Consonant. ハ、母韻ト合セザレバ、音(オン)ト成ラズ、サレバ、「音」ノ字ヲ當ツベカラズ。(發聲ノ「聲」ノ字スラ妥ナラズ、サレド、佳字ニモ思ヒツカネバ、姑ク、韻書ノ語ヲ借リテ、音ト別テルマデナリ。)又、父音、母音、子音ナド、緣アリゲナル字ヲ取テ、命名スル者アリ、コレハ、漢字音ノ反切(ハンセツ)ニ、父字(ハシ)、母字(ボシ)ナドイフ俗稱アルニ因レルニヤ、(韻書ニハ、却テ、發聲ノ事ヲ「母」トイフナリ。)或ハ、母韻ノ「母」ノ字ヲ、女親ノ義ト心得テノ思ヒツキナルニヤ、サレド、母韻ノ「母」ノ字ハ、必シモ女親ノ義ニアラズ、音ヲ成ス本(モト)ノ

意ニテ、莊子ニ氣母トアルハ、元氣ノ本ノ意ニテ、又酒ヲ釀シ成ス材料ヲ、酒母(酴)トモイフガ如シ。父、母、合體シタリトテ、子トハナラズ、依然トシテ、親ナラズヤ。

一八節

(本、第三三、第三四節)也行、和行ノ音ハ、母韻ノ「い、う、」ヲ發聲ノ如クシテ、二母韻(拗音ノ如ク)重發シ、謂ハユル二重韻(Diphthong)ヲ成シテ、即チ、半母韻ヲナスガ如シ、仕合(Siawase)ノ、しやはせ(Siyawase)トナリ、入合(Iriai)ノ、いりやひ(Iriyai)トナリ、工合(Guai)ノ、ぐわい(Guwai)トナリ、彌生(Iyaoi)ノ、やよひ(Yayoi)トナリ、黃瓜(Kiuri)ノ、きゆうり(Kyuri)トナルニテ、知ルベシ。半母韻ハ、Semi vowel,ナリ

一九節

○也行ノ「え」ハ、今モ、口ニ言ヒ分クルコトヲ得ベク、「はえる」「生」「みえる」(見)ナド、yeト發音ス、(洋人ノ、「蝦夷」「江戸」、又ハ、「左へ」「右へ」ナドノ音ヲ、常ニ、yeト綴リテ記スハ、然、聞ユルニ因ルカ、)

○然レドモ、「い、う、ゑ」の三音、太古ニアリテハ、或ハ、其發音ノ別アリシカハ、知ルベカラネド、載籍アリテヨリ、此ノ三音、已ニ、各、字形ヲ別タズ、伊、(阿行)以(也行)衣、(阿行)延、(也行)有、(阿行)于、(和行)等、支那原音ニテハ、正シク別レタレバ、漢字渡來ノ

ノ當時、邦人ノ發音ニモ、其別アリタラムニハ、一々、用ヰ分クベカリシニ、古事記、日本紀、萬葉集、等ノ眞名ニ、混用シタル例、比々アリ。降テ、以呂波歌ニ加ヘズ、五十音圖ニハ唯、阿行ノ字ヲ以テ、空間ヲ補塡セリ。斯ク、古今相通シ來リテ、事ヲ闕カザレバ、其相異ナルベキ理ハアリトシテ、字ハ、別ツコトヲ要セズ。然ルヲ、今、將、別ニ其字ヲ作爲スルモノアルハ、事ヲ好ミテ煩ヲ求ムルモノナリ。

二〇節

(本、第三五節)烏、詠、榮、垣、等ノ原音ハ、「ゐ」、「ゐひ」、「ゐん」、ナルヲ、中古ノ假名文ニ、多ク、「えばうし」(烏帽子)「えひが」(詠歌)「えいぐわ」(榮華)「えんが」(垣下)ナド記シタルヲ見レバ、(垣下ナドイフ語ノ解ヲ見ムト欲セバ、余ガ著ハセル餠書言海ヲ見ルベシ。篇中ノ難語、スベテ然リ)是等ノ音モ、夙クヨリ、發聲(w)ヲ失ヒタルヲ知ル。サレド、「わ」ハ、今ニ至ルマデ發聲ヲ存シ、且「うを」(魚)花を見る」ナドノ「を」ハ、今モ、尙、發聲(w)ヲ存シテ發音スルガ如シ。

二一節

(本、第四二節)英語ニ、s、f、ノ、他音ノ下ニテ、z、v、ニ變ズルコトアルハ、連濁トモイフベキカ。

二二節　(本、四六節)東音譜ニ、拗音ヲ記スニ、「ヤ、ユ、ヨ、キ」「チ」「シ」ノ如ク創意シ、蘭學家ノ翻譯ニ「キャ」「シュ」「チョ」ナド、工夫シタルモ見ユ。

二三節　(本、四七節)古キ假名書文ニ「ぐ、ゐんじ」(源氏)「へんぐ、ゐ」(變化)「ほく、ゐきやう」(法華經)「くわんぶつ」(灌佛)「しやうでん」(莊嚴)ナドモ見ユレド、又「儒者」「文珠」「承和菊」「朱雀」ヲ「ずさ」「もんず」「そがぎく」「すざく」ナド記シタルモ見ユ、乙ナルハ、拗音ヲ國音ニ和ラゲテ、直言ニ呼ビタルモノナリ、ナドモイヘド、乙ヲ和ゲデ、甲ヲ和ラゲザリシハ、如何ナル理ニカ。或ハ、乙ナルハ、古ヘ、拗音ヲ記スベキ假名用法、完備セズ、相通シテ記シタルヲ、後マデモ襲用シタルニハアラジカ。又「ぐ、ゐんじ」「へんぐ、ゐ」「ほく、ゐきやう」ナド、今ハ直音ニ呼ビテ、假名モ「げんじ」「へんげ」「ほけきやう」ナド記スヲ常トス。抑モ、前ニモイヘル如ク「じ、ゆし、や」(儒者)し、ようく、わぎく」(承和菊)ヲ「ずさ」「そがぎく」又ハ「がふく、わん」(合歡)ヲ「がふかのき」「ゆきぎゐ」(雪消)ヲ「ゆきげ」「ゆくみえあり」ヲ「ゆくめり」ナド、古人ハ、約メテイヒキ、サレバ、今、東京人ノ「やかん」(藥罐)「かんのん」(觀音)「かじ」(火事)「けんか」(喧嘩)又ハ「けゐる」(消)「めえる」(見)ナド言フモ、古今、同ジコトノヤウナリ。

二四節　(本、五一節)音ノ清濁、直、拗、ノ區別ハ、假名ニ、標點ナキト、アルト、一字ニテ寫スト、二字ニテ寫ストニ從フ、是レ從來ノ習慣ナリ。然レドモ、音ノ本性ヲ、學理ニツキテ論ズルトキハ、合ハヌコトモアリ、(殊ニ、拗音ナドイフ類別、甚ダイカヾハシ)此ノ四種ノ音ノ、各自ニ獨特ノ音ナルベキハ、漢字、羅馬字等ニ、各別ニ、其形アルニテ知ラル。サレド、文典上ニ、唯、假名ノ讀法、用法ヲ說カムニハ、清濁、直、拗、ノ別ニテモ足ラム、因テ、今ハ、姑ク、習慣ニ從ヘリ。

二五節　(本、五二節)嘗テ片田舍ノ招牌(カンバン)ニ「んどん」(饂飩)トシタルヲ見タリ、一噱。「ん」ノ聲ヲ、俗ニ「撥ヌ」トイフ、サレド、ソハ「ん」ン」ノ末畫ノ形ニ就キテイフナルベシ、聲ノ狀ハ「撥ヌ」ト云ハムヨリハ「壓ス」(ヤ)ガ如シ」ト云フベシ。

二六節　(本、五八、五九節)案ズルニ、梵音渡來ノ時、呵吽(アウン)ノ音ナド、古人モ傳習シ發音シタルナルベシ今モ、小兒ノ語、形狀、音響、ナドヲイフ語ニハ、鼻聲、促聲、甚ダ多キヲ思ヘバ、古ヘトテモ、此ノ聲アリシナルベシ。サレド古ヘ、此ノ聲ヲ寫スベキ字ノ無カリシカバ「に、二、元、毛、」等ヲ借リテ、通用シ居タルナラムカ、宇治拾遺、「實子にあらざる人實子のよしたる事」ノ條ニ「卑下(ヒゲ)なるこゐにて、むといらへ

て立ちぬ」(不服ノ返辭ナリ)ナドアルモ、今人ノ諸聲ニ發スルガ如ク「うん」ナリシヲ、字ナケレバ「む」ヲ假リシニテ、眞ニ「む」トハ言ハザリシナラム、「かみかせ」(神風)たかな、(筍)ノ「かむかせ」「たかむな」ナドモ、聲ハ「ん」ナリシナルベシ。サレド「仁」「无」「毛」等ハ、一ノ成熟音ニテ、單獨ニ發シ「ん」ハ、他音ニ倍セザレバ發セズ、其性、其用、全ク異ナレバ、同一ナリト思フハ、固ヨリ非ニシテ、又、別ニ字形ノ出テ來シ上ハ、必ズ用ヰ分クベキナリ。

二七節　○又、促聲モ、古ヘ、發シタレド、字ハ無カリシナラム、和名抄ノ郡鄕名ニ「刈田」「高太、治田」「資多、ナドアルモ、促聲ヲ寫スベキ字無ケレバ、己ムコトヲ得ズ、漢字音ヲ假リテ寫シシナルベシ。又、今ノ促聲ノ字モ、成熟音ノ「つ」ヲ借リタルナレド、已ニ促聲ノ字ト成レル上ハ、混ズベカラズ、成熟音ノ「つ」ハ、單獨ニ發シ、促聲ハ、必ズ、他音ノ間ニ發ス、其相異ナルコトハ、「ん」ニ於ケルガ如シ。

二八節　○鼻聲、促聲を「鼻音」「撥音」「又ハ「促音」ナド「音」ノ字ヲ宛テ、命名スルハ、當ラズ、因テ、今ハ、鼻聲、促聲、ト名ヅケタルナリ。

二九節　○國語家ハ、濁音、半濁音、拗音、鼻聲、促聲、等ヲ論ジテ、古ヘ、其字無ケレバ、音モナク、スベテ、我ガ國ノ正音ニアラズ、後世ノ訛語、若シクハ、外國渡來語ニアリテ卑シキ音ナリト云。然レドモ、余ハ肯ハズ、古書ニ記シタルヲ見ズトイフハ、可ナリ、發音ニナカリキトイフハ、イカヾ、己ニ、前ニモ述ベタルガ如ク、小兒語、音響、形狀等ノ語ノ、敎ヘニ依ラズ、自然ニ發スルヲ見レバ、古代トテモ、人々發音セシナルベシ、而シテ、古書ニ記シタルヲ見ザルハ、未ダ、字形ノ發明ナカリシナラム、「言靈のさきわるべ」ニ、鼻聲、促聲、半濁音、ヲ論ジテ、曰ク「正しき古書ども」には、絶えて用ゐたる事なし、といへども、世にある事は、古へよりありしなり、これを、後世に至りて、西蕃(カラクニ)より移りたる音なりとのみ、誰も〳〵思へるは、古書に見ねざるよりの非(ヒガコト)にて、實は委しからざるなり、云々、いまだ、物言はざる程の小兒の音に、心を留めて、よく〳〵聞くべし、云々、いかに、後世なれどとて、小兒の產聲(ウブゴエ)まで、西蕃(カラクニ)の音にうつるべきことわりあらむやは。」後世、コレヲ標別シ書記スル法ノ出デ來シハ、是レ、人智ノ歩ヲ進メタルナリ、凡ソ、是等ノ聲音、今、人々、日常ニ發シテ用ヲ辨シナガラ、動モスレバ、コレヲ擯斥セムトスルハ、古陋ノ見タルヲ免レズ。

三〇節　三一節

(本、六〇節)轉呼音トイフ名稱ハ、本書ノ新案ナリ、當レリヤ。

○古キ假名文ニ「かきやる」(揺遺)ヲ「かいやる」トシ「べく」(可)ヲ「べう」トシ「まして」(況)ヲ「まいて」ナドシタルガ、多シ、是等ハ、夙クヨリ發聲ヲ失ヒテ韻ノミ存セルニテ、假名ヲモ書キカヘテアリ。(言文一致ナレバ)然ルニ、波行ノ音ハ、同時ノ書ニ、假名ノ原形ヲ存スルガ多ケレバ、當時、尙、發聲ノ存シタルヲ知ル、古今集、十五ニ「今來むと、言ひて別れし、あしたより、れもひくらしの、ねをのみぞなく。」トアルハ、「れもひ」(思)ト「ひくらし」(茅蜩)トヲ言ヒカケ、又同書、十五ニ「雲もなく、なぎたる朝の、我なれや、いとはれてのみ、世をぞ歴ぬらむ。」トアルハ、「いとはれ」(最晴)ト「いとはれ」(被厭)トヲ言ヒカケタルナリ、此類、甚ダ多シ。此ノ「れもひ」(思)「いとはれ」(被厭)ノ「ひ」「は」ハ、尙、發聲ヲ存シタルナルベシ、然ラサレバ、茅蜩ハ「いぐらし」トナリ、晴ハ「われ」トナル。(後世ノ和歌ニハ、轉呼音ニモ、清濁ニモ關セズ、言掛クレド、古今集ノ頃ハ、然ラザリシナラム)サレド、桓武、平城ノ頃ノ人ナリト聞ユル玄賓僧都ノ歌ニ「山田守る、そうづの身こそ、あはれなれ、あきはてぬれど、問ふ人もなし。」(續古今、十七)トアルハ、「そうづ」(僧都)ヲ「山田のそ

三二節

ほづ」(案山子)ニ掛ケテイヘルナリトイヘバ、此頃、已ニ「ほ」ハ、發聲ヲ失ヒテ「を」トナリ、又「う」トナリタルヲ知ル、(或ハ「う」ノ「を」トヒビキタルニカ)又、和名抄、職官部、玄蕃寮ノ訓ニ「ほふし」(法師)ヲ「保宇之」トシタルモ見エ、同時ノ書ニ「御送りにもまゐるべけれど、明うなりぬべけれど、外にありけると、人の見むもあひなしとて」(和泉式部日記)頭ノ中將を見たまふにも、あいなく胸さわぎて」(夕顔)「あひなきまで、御前ゆるされたるは」(枕草紙、九)ナド「あひなし」ヲ「あいなし」トシタルナドモ見ユレバ、漸ク變シタル現象アリテ、當時、發聲ノ存否、假名ノ用法、甚ダ區區ナリシガ如シ。又、源平盛衰記(三十五)ニ「信濃なる、木曾の御料に、汁かけて、ただ一口に、九郎義經。」トアルハ、「くらふ」(食)ヲ「くらう」(九郎)ニ言ヒカケタリ、此ノ時代ニ至リテハ、發聲、全ク失セタルナルベシ。

○波行ノ發聲ハ、古ヘ、唇音(f、或ハ、p)ナリシナラムトハ、本書ノ第二七節ニモイヘリ。然ルニ、中世(七八百年前)ニ、一旦ハ、和行ノ唇音(w)ニモ轉シタラムカ、ト思ハルヽコトアリ、「は」ノ「わ」ニ轉シタルハ、更ニモ言ハズ、他ノ「ひ」「へ」「ほ」モ、當時ノ假名文ニ、多ク、左ノ如ク通シテ用ヰタルヲ見ル。

おほひ(大炊)　もちひ(餅)　ふひ(椎)　やまひ(病)　ゐね(用)　ふね(四位)　やまゐね(山居)　うゑ(植)　ゆくへ(行方)　かほる(薫)　にほふ(匂)　いとほし(可憐)　とたち(十市)

其後、「は」ノ一音ノミ「わ」ノ轉ヲ存シテ「ひ」「へ」「ほ」ハ、スベテ、發聲ヲ默シタレド、書寫ノ上ニハ、尙、原形ヲ保存セラレテ、今ニ至レルハ、唯、習慣ニ因襲セルナルベシ。

三三節

(本、六五節)本阿彌ハ、苗氏ナリ、杏ハ、字ノ唐音ナリ、厥陰ハ、漢方醫ノ語、手足ノ經絡ノ名ナリ。「ほ、つち」(發意)「け、つちん」(厥陰)「せ、つとん」(舌音)等は佛書、醫書ナドノ讀癖ニテ、今ハ、普通ナラヌモアリ。

三四節

○前ノ第一八節ニモイヘル「ゑあはせ」(仕合)「ゑあひ」(仕合)「ゐあひ」(居合)「みあひ」(見合)「ひりあひ」(入合)「ぐあひ」(工合)「であひ」(出合)「たくあん」(澤庵)「さうあひ」(草鞋)「みねし」(水押、舟首)ナドモ、母韻ト母韻ト合シテ、半母韻ニ轉呼スルニテ、此ニ一項ヲ加フベキモノカ、訛音ナルカ。

三五節

(本、七一節)因ニ云「かりて」(借)ヲ、京畿ニテハ「かゝつて」トイヒ、東國ニテハ「かりて」トイフ、京畿ナルハ、四段活用ナルヲ、促聲ニイフナリ、東國ナルハ、四段活用ヲ、

三六節

上二段活用ノ如ク訛シテ「かりる」トシテヨリイフナリ。

(本、七三節)上ノ發聲ト、下ノ母韻半母韻ト合ヒテ「さしあぐ」(差上)「さゝぐ」(捧)「もちあぐ」(持上)「もたぐ」(擡)「てあらひ」(手洗)「たらひ」(盥)「やつてあれ」(奴婢)「やつがれ」(僕)「とひふ」「ちふ」(ト云)「わがいも」「わぎも」(我妹)「あはうみ」「あふみ」(淡海)「くにうち」「くぬち」(國中)「はたれり」(機織)「はとり」(服部)「あまれり」「あもり」(天降)ナドトナルヲ、約音ナドイフナリ、而シテ、此ノ約音、阿行ノ「え」ニハナシトイフ、サレド、「すくなえ」(少見)ノ「すくね」(宿禰)ナドモアルナリ。又、也行ノ「え」ニモ、「ゆきぎえ」ノ「ゆきげ」(雪消)ナドアリ、和行ノ音ニモ「すはえわり」ノ「すはやり」(楚割)「くゑまり」ノ「けまり」(蹴鞠)ナドアリ。(然レドモ、斯ク合スルヿ、固ヨリ、常ニ然ルニハアラズ)

三七節

○因ニ云、和歌ハ、句毎ニ、五音七音ナルヲ常トスルニ、六音八音ニ詠ムヿモアリ、コレヲ字餘リトイフ、字餘リニ詠ミ入ルヽモ、母韻、半母韻ニ限ルガ如シ。

「ほの〳〵と、ありあけの月の、月影に、もみぢ吹きれろす、山れろしの風。」(新古今、六)ナドハ、四句ニ入レリ、「わたつうみの、波間かきわきて、潜くあまの、ひきもつきあへず、物をこそれもへ。」(讃岐)「わすれぬらむ、らめしとれもひ、れもふとて

も、待つべきにあらず、いはむともいはじ。(定家)ナドハ、句毎ニ詠ミ入レタリ。(亡友、柳原芳野「眞間のうらに、枯れてをれすがふ、亂れあしをれしわけて波のうへに宿る月。」「さもあらばあれ」トイフ七音ヲサヘ、五音ノ句ニ用ヰタル歌、往往アリ、「ひたふるに、死なむ何かは、さもあらむあれ、生きてかひなき、物思ふ身は。」(拾遺、十五)ノ如シ。(さまらをれ」ト讀ム)「いかゞすべき、世にあらむやは、世をも捨てゝ、あなうの世やと、さらに思はむ。」(新古今、十八)よがれそむる、寐待の月の、つらさより、二十日の影も、またや隔てむ。」(風雅、十二)岡のべや、なびかぬ松は、聲をなして、下草しをる、山れろしの風。」(同、十六)訪ふ人も、今はあらしぞ、たゝくらむ、人知れぬやまの、草の戸ざしを。」(拾玉、六)わすられなむ、ものとはかねて、思ひにき、心の占ぞ、まさしかりける。」(六帖、五、上)わらびをりし、栗栖の小野を、きてみれば、雨降りにけり、ほゝろ〳〵に。」(夫木、廿二)　萬葉集ノ四ニ「うつゝには、更にもねひはず、(更毛不得言)夢にだに、妹が袂を、纏きぬとし見む。」山家集ニ「とりわきて、心もしみて、さねぞわたる、衣川みに、きたるけふしも。」ナドモアリ「御垣守る、衛士のたく火の、よるはもねて、昼は消ねつゝ、物をこそ、思へ。」(詞花、七)ト

シタル本モアリ。

三八節

(本、七五節)凡ソ、音便トイフモノ、本書ニ說キタル外ニ、尙、甚ダ多シ、而シテ、世ノ文典中ニハ、其種々ナルヲ、數ヲ盡シテ擧ゲタルガ多シ、然レドモ、余ハ、一說ヲ持シテ從ハズ。蓋シ文法ノ範圍內ニ於テ、說キ敎フベキ事トテハ、一規律ヲ以テ、他ノアラユル場合(少クトモ過半ノ場合)ニ通シテ、應用シ得ルモノナルベシ、稀ナル音便、又ハ、二三ノ語ニ特有スル音便ナドヲ集メテ、雜陳シタレバトテ、語每ニ覺ユベキマデニテ、推シテ他ニ應用スベクモアラズ。其通音、通韻、又ハ、延、約、略、加、轉、等ノ例ヲ擧ゲタルヲ見ルニ、多クハ、少數ノ語ニ特有スル者ナリ。例ヘバ「ゆめ」(夢)ハ「ひめ」ト通フ、トイヘド「ゆめ」(努力)ハ「ひめ」トナラズ、「きみ」(衆)ハ「きび」ニ轉ズ、トイヘド「きみ」(君)ヲ「きび」トスベクモアラズ、「詩歌四時」ハ、「しいか」「しいし」ト延ブトイヘド「詩人四季」ハ「しいじん」「しいき」ト延ビズ、「さしあぐ」ハ「さゝぐ」(捧)「はたれり」ハ「はとり」(服部)ト約マルトイヘド、「さしあつ」(差當)ハ「さゝつ」ト、ナラズ、「はたれり」(蟲斯)ハ、ヤハリ「はたおり」ナリ、「すみすり」ハ「すゞり」(硯)「ほんひ」(本意)ハ「ほひ」ト省カルトイヘド、「すみゑ」(墨繪)「ほんくわひ」(本懷)ハ「すゑ」

はくわい」トナラズ、「まな」(眞名)「かな」(鮑)ハ「まんな」「かんな」トナレド「まな」(魚)「かな」(哉)ハ然ラズ、「なほし」(直表)とりで」(取出)わらぐつ」(藁沓)ハ「ならし」とうで」わらうづ」トナレド「なほびと」(直人)とりいれ」(取入)あまぐつ」(雨沓)ハ「ならびと」とういれ」あまうづ」ト言フベクモアラズ。其他、皆、此ノ類ナルガ多ク、スベテ、其少數ノ語ニ獨特ナル例ニテ、一般ヲ律スベキモノナラズ。殊ニ、希覯古僻ナル一二ノ音便例ナド、摘ミ出シ來リテ臆列スルナド、徒ニ、學ブ者ノ腦力ヲ苦マシムルノミ。

畢竟ズルニ、右ノ如キ語ハ、音ヲ變ズレバ、假名ヲモ易ヘテ記スモノナレバ、各、一個ノ語ト見ルベク、辭書ニ、各自獨立ニ出ヅベク、其通延約略加轉等ノ事ハ、辭書ノ各語ノ語原(Derivation)ニ讓ルベシ。若シ、概略ニモ、其理由ヲ示サムトナラバ、別ニ、綴字書ニ、擧グベキナリ。

三九節　(本、七六節)世ノ文典中ニ、假名遣ノ誤リ易キ語ヲ、アルカギリ列擧シタルモノアレド、文典ノ體裁ヲ失ヘリ、是等モ、スベテ、辭書、或ハ、綴字書ニ讓ルベキナリ。

四〇節　○凡ソ、本書ノ篇首ヨリ此ニ至ルマデノ、假名、及ビ、音ノ解說ハ、單ニ、理論上ヨリ言フトキハ、其類屬次第ノ、錯亂シタルガ如キ所モアリ。然レトモ、余ノ此ノ篇ノ編輯ハ、スベテ、文法科ニ就キテ、學ブ者ノ便利ヲ旨トシテ、唯、會得シ易カラムト思フ方ニノミ就キテ、立案シテ、深ク理論ニ拘セズ、以下、全篇ノ體裁ニモ、此ノ趣意ナル所多シ、讀ム者、スベテ此ノ意ヲ諒スベシ。

四一節　○世ノ文典ヲ見ルニ、假名ノ字原、發音、音便、其他、全篇、スベテ、微細ナル原理ニマデ說キ及ボシタルモノ、往々アリ。然レドモ、文法科ノ目的ハ、誤謬ナク言語ヲ用ヰテ文章ヲ作ルヲ敎フルマデノモノナレバ、此ノ學科ニ於テ、深キ原理ニマデ立入ルハ、無用ノ事ニテ、徒ニ煩ヲ增スモノナルベシ。字形發音ヲ初トシテ、スベテ、言語成立ノ精微高尙ナル論ニ至リテハ、別ニ、自テ、言語學、修辭學、博言學、等ノ專門科アルアリ、範圍外ニ涉ルベキニアラズ。

四二節　(本、七七節)漢字ノ數、唐ノ廣韻ニハ、二萬六千百九十四字アリ、宋ノ集韻ニハ、五萬三千五百二十五字、明ノ字彙(補遺ヲ合シテ)ニハ、四萬五千五百五十字、清ノ字典(同上)ニハ、四萬七千二百十六字アリ、其他ニ、小說等ニ用ヰル俗字モアリ、新字モ、日ニ、尙、增殖ス。(元素ハ、五行ニ當ルトテ、炭素ニ術ノ字ヲ作リ、鮑ハ石

決明ノ和字ナルニ、乾シタルヲ上海ヘ輸入セシヨリ蛇ト稱スルナド、字ノ增殖、底止スル所ナシ、）

四二節　今、都下ニテ、活字印刷ノ營業者ノ言ヲ聞クニ、漢字ノ活字ハ、先ヅ、三千種ヲ備フレバ、開業シテ、普通印刷物ノ注文ヲ受クベク、高尙ナル漢文物ヲ印刷シ得ベキニモ、五六千種ヲ越エザラムトイヘリ。

四三節　（本、七九節）漢字ニハ、六書、六義、ナドイフコトアリテ、字形、字義、ノ由リテ起レル所ヲ言フ、然レトモ、事、其專門ニ屬スレバ、此ニ略ス。

四四節　（本、八一節）書ノ八體トイフハ、「楷、行、草、隸、大篆、小篆、章草、飛白」ナリ、此ニハ略ス。

四五節　（本、八三節）稀ニ、一字ニテハ義ヲ成サズ、熟字ニノミ用ヰルモアリ、「揶揄」「擧手相弄也」ノ揶ノ如シ。

四一節　○字音ノ、原音ト變シタルコトハ、後ノ第五〇節ニイフベシ。

四六節　（本、八四節）此ニ、訓トイフハ、本文ニ言ヘルガ如ク、漢字ニ、國語ヲ當テヽ讀ムヲイフ、支那ニテ、訓詁、訓義、ナドイフ訓ニアラズ、支那ニテ言ハヽ、譯ノ字ニ當ラム。

四七節　（本、九二節）漢語ヲ、日本化シテ動詞、形容詞トシタルモノ、稀ニアリ、裝束ヲ「さうぞきて」、「散樂」ヲ「さるがふ」、「執念」ヲ「しふねし」、ナド用ヰタルハ、巧ナリトイフベシ、謠曲ノ安宅ニ、「兎角の是非は、もんだはずして」、狂言詞ニ、「左樣な事は、もんだひたうもぐざらぬ」、ナドイフハ、「問答」ヲ活用シタルナリ、武家感狀記ニ、本多美濃守某ノ家人ナル稻垣掃部トイフモノ、其主君ヲ恨ミテ出奔セシ時ニ、書キオケル歌ニ、「破れ笠、首にかけつゝ、こじくとも、天(雨)が下にて、簑(美濃)は賴まじ。」ナドアルハ、「乞食」ヲ活用シタリ。其他、俗語ニハ、「退治」ヲ「たいぢて」、「敵對」ヲ「てきたふ」、「濕氣」ヲ「しつけて」、「料理」ヲ「れうる」、ナド活用ス、又「りきむ」(力)「もくろむ」(目論)「しやくふ」(杓)「しやくる」(尺)ナドモアリ。又、形容詞ニ、「らう〳〵し」(勞々)「てち〳〵し」(骨々)「愛らし」、「壽陶し」、「美々し」、「毒々し」、「凜々し」、「非道く」、「四角い」、「面倒い」、ナド、皆、日本化シタルナリ。

四八節　（本、九五節）假名ニテハ、一字ヲ二音ニテ記スガ故ニ、斯クハ說キタレド、支那ノ原音ハ、唯、上ノ音ノ韻ヲ引クノミナリ。殊ニ「つ」、「く」、「ち」、「き」、「ふ」終ハルモノ（入聲）ハ、全ク、二音ニ聞ユレド、支那ノ原音ハ、其末、Consonant ニ終ハルモノナリ、然レ

四九節

ヒ、其發音、邦人ノ口ニ上ラズ、因テ、末ニ、又、母韻ヲ添ヘテ、二音ニ呼ブナリ。(但シ、今ノ支那北方ノ音ニテハ、末ヲ失ヒテ、一字一音ノモノト異ナラズ。)

○漢字音ハ、其發聲ノ調ノ高低等ニ從ヒテ、平聲(ヒヤウジヤウ)、上聲(ジヤウシヤウ)、去聲(キヨヤウニツシヤウ)、入聲ノ四聲ニ大別セラル。(ふ、つ、く、ち、き、ノ韻アルハ、皆、入聲ニテ、他ハ、皆、平、上、去、ニ入ル。)

又、四聲ノ中ニテ、其韻ノ似タルモノニ從ヒテ、平聲ヲ三十韻ニ、上聲ヲ二十九韻ニ、去聲ヲ三十韻ニ、入聲ヲ十七韻ニ別チ、總計、百六韻トス、左ノ表ノ如シ。

平聲、(平道莫低昂)	上聲、(高呼猛烈强)	去聲、(分明哀遠道)	入聲、(短促急收藏)
一 東	一 董	一 送	一 屋
二 冬(鍾)	二 腫	二 宋(用)	二 沃(燭)
三 江	三 講	三 絳	三 覺
四 支(脂、之)	四 紙(旨、止)	四 寘(至、志)	
五 微	五 尾	五 未	
六 魚	六 語	六 御	
七 虞(模)	七 虞(姥)	七 遇(暮)	
八 齊	八 齊	八 霽(祭)	
九 佳(皆)	九 蟹(駭)	九 泰(卦、夬) 十 隊(代、廢)	
十 灰(咍)	十 賄(海)		
十一 眞(諄、臻)	十一 軫(準)	十二 震(稕)	四 質(術、櫛)

十二 文(欣)	十二 吻(隱)	十二 問(焮)	五 物(迄)
十三 元(魂、痕)	十三 阮(混、很)	十四 願(慁、恨)	六 月(沒)
十四 寒(桓)	十四 旱(緩)	十五 翰(換)	七 曷(末)
十五 刪(山)	十五 潸(産)	十六 諫(襇)	八 黠(鎋)
一 先(仙)	十六 銑(獮)	十七 霰(線)	九 屑(薛)
二 蕭(宵)	十七 篠(小)	十八 嘯(笑)	
三 肴	十八 巧	十九 效	
四 豪	十九 皓	二十 號	
五 歌(戈)	二十 哿(果)	廿一 箇(過)	
六 麻	廿一 馬	廿二 禡	
七 陽(唐)	廿二 養(蕩)	廿三 漾(宕)	
八 庚(耕、清)	廿三 梗(耿、靜)	廿四 敬(諍、勁)	
九 青	廿四 迥	廿五 徑	
十 蒸(登)	(極、等)	(證、嶝)	
十一 尤(侯、幽)	廿五 有(厚、黝)	廿六 宥(候、幼)	
十二 侵	廿六 寢	廿七 沁	
十三 覃(談)	廿七 感(敢)	廿八 勘(闞)	
十四 鹽(添、嚴)	廿八 琰(忝、儼)	廿九 豔(椹、釅)	
十五 咸(銜、凡)	廿九 豏(檻、范)	三十 陷(鑑、梵)	
上平 古廿八韻 今十五韻			十 藥(鐸)
下平 古廿九韻 今十五韻			十一 陌(麥、昔)
			十二 錫
			十三 職(德)
			十四 緝
			十五 合(盍)
			十六 葉(帖、業)
			十七 洽(狎、乏)
	古五十五韻 今二十九韻	古六十韻 今三十韻	古三十四韻 今十七韻

計 古二百六韻 今百六韻

唐ノ天寶中ニ、陳州司法孫愐、唐韻ヲ作リ、二百六韻ト立テシヲ、宋ノ淳祐中ニ江北平水劉淵、壬子禮部韻略ヲ著ハシテ、通用ノ韻ヲ併セ、重複ノモノヲ省キテ、百七韻トセリ、コレヲ平水韻トイフ、今ノ通用韻、コレナリ、(但シ、元ノ陰時中、韻府群玉ヲ著シテ、上聲ノ「極」ヲ刪併シタレバ、今ハ、百零六韻ナリ)今、古韻部ヲ、今韻部ノ下ニ列シテ、分併ノ由ル所ヲ示ス、坊間通行ノ會玉篇ナドヲ引用スル者、其字ノ下ニ、古韻部ヲ載セタレバ、スベテ、此ノ表ニ因テ、古今ノ韻別ヲ知ルベシ。

「東、冬、江、支、等ハ、其韻部ノ首字ナリ、コレト同シ聲韻ノ字、許多アリテ、此ノ内ニ屬ス。

「眞、文、元、寒、刪、先」ノ六韻(上聲モ、去聲モ)ハ、其韻、皆「な、に、ぬ、ね、の」ノ舌内音ニ終ハル、「侵、覃、鹽、咸」ノ四韻(上聲、去聲、共ニ)ハ、皆「ま、み、む、め、も」ノ唇内音ニ終ハル、(言海ノ凡例ヲ見ヨ)然レドモ、今ハ、通シテ、皆「ん」トス。

「東、冬、江、蕭、肴、豪、陽、庚、蒸、尤」ノ十韻(上聲モ、去聲モ、共ニ)ハ、其韻、皆「う」ノ喉内音ニ終ハル、凡ソ、漢字音ノ假名遣ヒノ誤リ易キハ、此ノ十韻ト、入聲ノ「緝、合、葉、

洽」ノ四韻トナリ、言海ノ凡例ヲ見テ知ルベシ。

聲韻ノ高低類別等ノ事ハ、支那人ノ發音ノ上ニテ、一語ニ異義ヲ生シ、同音モ音節ニテ分レ、(買、賣、受、授、ノ音ナド)又、詩ノ吟誦等ニ用ヰルコトナレバ、邦人ニハ、辨別スルコト難シ、又日常、漢字ヲ用ヰル上ニ、辨別ノ必要モナシ。但シ、詩賦等ノ韻語ヲ學ブ者ハ、專門トシテ、韻書ニ就キテ知ルベシ、又、支那ノ今代ノ音ヲ學ビテ通辨セムニハ、別ニ、自ラ、其學ノアルアリ。

(本、九七節)支那ノ北部ナル黃河南北ノ地ハ、彼ノ國人ノ、中原ト稱スル所ニテ、支那ノ本部トモイフベシ、殊ニ、前漢、(長安ニ都ス)後漢、(洛陽ニ都ス)四百餘年間ハ、文物、最モ隆盛ヲ極メタレバ、今ニ至ルマデ、全國ノ事物ニ冠シテ、漢字、漢音、漢語、漢文、漢書、漢學、等ノ稱ハアルナリ。(今モ、滿人、漢人ノ稱アリ)其後三國ヲ歷テ、晉ノ末世ニ至リ、五胡ノ亂、十六國春秋ノ世トナレルニ及ビテ、北部ノ中原ハ、北狄侵入シテ、雜居ノ地トナリ、中原ノ本土人ハ、却テ、楊子江ノ南ニ移レリ、江左六朝(三國ノ吳、東晉、宋、齊、梁、陳)奠都ノ地、(金陵、南京)是レナリ。サレバ、江左ハ、春秋ノ勾吳荆蠻ノ地ナレド、是ニ至テ、却テ、漢代以來、中原土人ノ語

音ノ存スル地トナリテ、北部ノ中原ハ、却テ、北狄ノ語音雜猥混亂ノ地トナリキ。

漢字ノ我カ國ニ入リシ時代、詳ナラズ、天日槍ノ將來カ、神功征韓ノ頃ヨリカ、然レ𪜈、先ヅハ、應神ノ朝ニ、百濟ノ阿直岐、王仁、ヨリ傳ヘタリトスベキカ、何レニストモ、初ハ、朝鮮傳來ナルベケレバ、字音モ、之ニ伴ヒシコト、知ラル。(應神ノ末ニ、吳人來朝ノ事、史ニ見ユレド、音ヲ傳フルマデニハ、至ラザリシナラム、且、此吳人ノ事モ、史ノ錯簡ニテ、遙ニ後ノ事ナリトノ說モアリ。) 朝野群載、三ニ、對馬貢銀記ヲ引キテ、云、佛法、始渡吾土、此島、有一比丘尼、以吳音傳之、因茲、日域經論、皆用此音、故謂之對馬音。政事要略ニ、大織冠鎌足執政時、百濟禪尼法明、來于對馬島、吳音誦維摩經、因吳音曰對馬讀、乃吳音之源起也。悉曇三密鈔ニ、金禮信、來留對馬島、傳吳音、舉國學之、因名曰對馬音、次、表信公、來筑前博多、傳漢音、是曰唐音。朝鮮ハ夙クヨリ、支那ト通ジ、燕人衛滿ノ、朝鮮王ニ封ゼラレ、平壤ニ都セシハ、前漢ノ初ナリトイヘバ、其傳ヘタル所ハ、五胡以前ノ支那原音ナルヿ、論ナシ、(韓ニ入リテ、多少ハ變ジタルベケレド、引ケル所ノ三書ニ、吳音トアルハ、追記ノ語ナルベケレ𪜈、亦當時所傳ノ音ハ、後ニイフ吳音(即チ、支那原音)ト甚シキ差ハナカリシヿヲ知ラル。

我　朝ト支那トノ交通ノ初ハ、東晉以後ナルガ如シ、サレバ、江左、即チ、吳ノ地ノ音、第一ニ我レニ傳ハリヌ、是レ、吳音ノ名アル所以ナリ。隋ノ支那ヲ一統スルニ及ビテ、北部ノ長安ニ都シ、此ノ時、皇朝、始メテ公ニ交通セラレ、唐ニ及ビテ、亦、長安ニ都シ、爾來、遣唐使、留學生、皆、長安ニ赴ク、是ニ於テ、支那北部(長安)ノ音、第二ニ我ニ傳リヌ、(推古帝ヨリ、宇多帝ニ至ル、凡ソ三百年間)コレヲ漢音トス。抑モ、漢トイフハ、川ノ名ナルニ、其流域地方ノ泛稱トナリ、隆盛ナル漢代ノ國號モ、此ニ起リ、隨テ、中原ヲ漢土ト稱スルニ至リ、遂ニ、北部ノ音ヲ漢音ト稱スルニ至リシナリ。

サレド、南部ノ吳音ハ、漢代ヨリ傳ヘタル中原土人ノ原音ナレバ、清、濁、輕、重モ、(漢吳音圖、四聲七音經緯表ナド見レバ、)自ラ、規則的ニ具備シテ見ユ、韻會ニ、韻書始于江左、本是吳音ト見エ、韻鏡(唐代ノ作カト云)ノ音韻、吳音ト符合セリ、之ニ反シテ、北部ノ漢音ハ、既ニ、北狄ノ語音、混淆ノ後ナレバニヤ、規則備ハラズ

見ユルナリ。而シテ、通聘留學ノ士ハ、率ネ長安ニテ學ビタレバ、漢音ノ傳來終ニ勢力ヲ得ルニ至リタレド、求法入唐ノ僧侶ハ、公ノ修交ヲ止メラレシ後マデモ、尙、江左ニ學ビテ、吳音ヲ傳フル者、絕エザリキ。東寺經藏所傳ノ太政官符ニ、「應讀、佛敎經、吳音、儒道、兩與、漢音、醫書、隨文、便二音交雜」、日本後記、延曆廿三年正月ノ條ニ、「敕、云々、雖讀諸論、若不讀經者、亦不得度、其廣涉經論、習義殊高者、勿限漢音、自今以後、永爲恒例」、大學式ニ、「凡試年分度者、遣音博士一人、就僧綱所、試漢音」ナド見ユ、今ニ至ルマデ、佛書醫書ノミニ、多ク吳音ヲ用ヰルハ、コレガタメナリ。

字音ハ、初メ、支那傳習ノモノニハアリシカド、其發音、邦人ノ口頭ニ上セ難キモノ、固ヨリ多ク、サレバトテ、全國ノ人ニ、一々、正則ニ支那發音ヲ習ハシムベクモアラズ、故ニ、傳來ノ初、何人カ、字音ヲ、多少、邦音ニ適スルヤウニ變更シタルナリ、今ノ漢音、吳音、是レナリ。サレバ、今ニ傳フル此二音ハ、共ニ、六朝、隋、唐、時代ノ原音ノマヽニハアラネド、亦、當時、一定ノ則ヲ立テヽ、聊、變更シタルモノニテ、原音ニ逼近シタルモノナルベシ、後代ノ支那音ト大差アルヲ見テ、當時、無下ニ轉訛セシ如ク論ズル者アルハ、アラジ。

支那ハ、年代ヲ歷ル毎ニ、其字音ニ變遷ヲ起ス、而シテ、我ハ、當初ノ音ノマヽニテ、今ニ至ルマデ、變遷ナク、コレヲ傳フ、(やう、さやう、てう、けう、等ノ、轉呼音トナリシハアレド、假名遣ヒハ存セラル、)故ニ、支那トノ交通甚シク衰ヘタル後ニ、稀ニ傳來シタル字音ハ、他ノ二音トハ、甚シク差違セリ、是レヲ唐音トス、唐人(支那人)ノ音トイフマデノ、泛稱ナリ、而シテ、其實ハ、歸化宋僧ノ所傳ノモノ、(下火、行燈、看經、胡亂、杜撰、臘乾、普請、ノ類)多キヤウナレバ、宋音トモイフベキガ多シ。(コレニモ、南北ノ差アルベシ。)爾來、元、明、ヲ歷テ今ノ清ニ至リ、彼國ハ、更ニ變遷ヲ歷タルコト甚シク、六朝隋唐ヨリ傳ヘシマヽナル我ガ國ノ今ノ漢音吳音ト、今ノ清國ノ音ト(南方、北方、共ニ)ハ、非常ナル差違トナリテ、同一脈ヨリ出デタル音トハ、思ハレヌマデニナレリ。

今時、支那ニテ、史上ニ存スル古代ノ地名ナドノ、其所在ノ、分明ナラヌガ多キニ、近來、彼ノ國人、我ガ國ニ來リ、漸ク我ガ漢吳音ヲ學ビ知リテ、(初ハ、輕蔑シテ顧ミザリシカド、)此ノ古音ニ據リテ、古地名ヲ求メテ、求メ得タルモノ、甚タ多

五一節

シト聞ク、之ニ因レバ、當初我ガ邦人ノ、字音ヲ變更シタリシモ、甚シキニハアラザリシヲ知ルベシ。

（本、一〇〇、一〇一）コヽニイヘル「單語」ハ、英語ノWordニ當ル「言」ノ一字ニテ「こと」トノミ訓マバ、正ニ當ラムカ、然レドモ、今ハ、姑ク單語トセリ。

○新古今ノ「見てもまた」ノ歌ハ、「又」トイフ接續詞ヲ、例ニ採ラムガ爲ニ引ケルナリ。「復」ハ、「ふたゝび」ノ意ナリ。「見まく」ハ、「見む」ノ延ビタルニテ、「見むことの」ト解スベシ。本書ノ第二五二節ヲ見ヨ。「欲しかり」ハ、「欲しく」ト「あり」トノ約レルナリ。「過ぎや、しぬらむ」ハ、「や」ヲ「か」ニ代ヘテ下ニ置キ、「過ぎしぬらむか」ト解スベシ。「過ぎ」ハ、動詞ノ名詞トナレルニテ、「過ぎする」ハ、「過ぎヲする」義ナレド、「過ぐる」ノ意トナル。（時雨する、紅葉する）ナドニ同ジク、自動ト見ル、花ノ盛ナル頃ニ、故郷ノ花ヲ思ヒヤリテ詠メル歌ナリ。

五二節

（本、一〇二）國語ニ就キテ、單語ノ種類ヲ別チタルハ、富士谷成章氏ノ「あゆひ抄」「かざし抄」ニ始マレリ、其別ハ、名（名詞）挿頭（副詞其他、文句ノ首ニ用ヰル語）裝（動詞、形容詞）脚結（豆爾乎波、助動詞、感動詞等）ノ四種ナリ。然レドモ此學ヲ傳

フル者、今ハ絶エタルガ如シ。

後ニ、體ノ詞、用ノ詞、又ハ、體言、用言ノ稱、本居大人、及ビ妙玄寺義門師ニ起リ、後ニ、體言、用言、助辭、ノ三大別ノ稱、成レリ。體言トハ、語尾ノ活用セヌ語ノ意ニテ、名詞之ニ屬シ、用言トハ、語尾ノ活用スル語ノ意ニテ、動詞之ニ屬シ、形狀言（形容詞）モ、之ニ入ル、助辭トハ體言、用言、ノ外ナル一切ノ單語ヲ、雜糅包括シタルモノニテ、即チ、副詞、接續詞、豆爾乎波、感動詞、ノ如キ活用ナキ語モ、助動詞ノ如キ活用アル語モ、コレニ屬ス。扨、體トイヒ、用トイフハ、元來、支那ニテ、事物ノ「性、理、靜、動、」等ニイフ名目ナルヲ、姑ク、名詞、動詞、（形容詞）ノ、活用有無ノ類別ニ假用セルナリ。（支那ニテハ、實字、虛字、ナドイフ。）然ルニ、世ノ文典中ニ、副詞、接續詞、感動詞、ノ如キヲモ、其語尾、活用セネバトテ、妄ニ、體言ノ中ニ加ヘテ、體辭ナド名ヅクルアルハ、體用ノ字義ヲモ解セズ、當初、命名シタル人ノ趣意ヲモ誤解セルワザナラム、是等ノ語ヲバ支那ニテハ、助辭、助字、ナドトコソイヘ、實字ト同一ニ見ルベクモアラズ。

衆語ヲ、先ヅ、體言、用言、助辭、ト大別スルコト、惡シトニハアラネド、此ノ概別ニ

テ、能事了ルベキニアラズ、必ズ復タ、其ノ下ニ、小別(八品詞)ヲ立テヽ、更ニ詳說セズハアルベカラズ。然ルトキハ、先ヅ、體用助、ニ大別シテ說クコト、何等ノ必要モナキヤウニテ、徒ニ、一ノ煩ヲ設クルニ過ギザルベク、初ヨリ、直ニ、八品詞ヲ、各獨立ニ說クコト、却テ、甚ダ簡明ナルヲ覺ユ。此ノ故ニ、此ノ篇ハ、體、用、助辭、ノ舊別ニ據ラズ、初ヨリ、八品詞ニ部門ヲ立テヽ說ケリ。

五五節　○單語ニ、名詞、動詞、八品詞ナド、詞ノ字ヲ當ツルハ妥當ナラズ、體言、用言、ナドイフ言ノ字、正當ナルガ如シ、然レドモ、今ハ、姑ク、改メズ。

五六節　(本、一〇三)世ノ文典ニハ、洋語ニ倣ヒテ、父、母、弟、妹、夫、妻、牡牛、牝牛、雄鷄、雌鷄、等ヲ以テ、男性語、女性語、ト立テタルモノアリ、妥、極レリト云フ可シ。是等ハ、各々、男女ノ異義ヲ生得シタル語ニテ、(辭書ニ據リテ、其意義ヲ解シテ足ル)斯ル異義ニ、類別ヲ立テバ、千萬ノ語ニ、各千萬ノ異義アルヲ何トカスル。洋語ニテハ、名詞モ、代名詞モ、冠詞モ、其他モ、性ヲ具シテ、男性ノ名詞ニ伴フニハ、其代名詞モ、冠詞モ、其他モ、男性ナルヲ用キテ、相照應スルヲ期スルガ故ニ、(我ニモ、女ニ限ル代名詞ノ妾ナドアレド、他語ニ關係ヲ及ボサズ、)文法上ニ、必用トシテ講ズルナリ、我ニ於テ、何カアラム。

五七節　(本、一〇四)名詞ノ定義ヲ、單ニ、語尾ノ變化セヌ語、トノミ說ケルアルハ、物足ラズ、變化セザル語ハ、他ニモアリ、又、無形ノ事ノ名稱、ト言フトキハ、見ル、聞ク、痛し、庠し、モ、無形ノ事ト認ルヲ得ベシ、因テ名詞ニ接スベキ亘爾乎波ヲ擧ゲテ、定義ヲ確ニセリ。

五八節　○體言トイフハ、名詞ノミニアラズ、ナドイフ說モアレド、妥ナリ、(前ノ第五三節ニ論シタルヲ見ヨ、)連體言、假體言、ナドモイヒテ、名詞ノ專稱ナリ、故ニ、今、名詞、一名、體言トシタリ。(名言ナド命ズル人モアレド、金言ナドノ意ト紛ラハシ、)

五九節　○有形名詞、無形名詞、又ハ、實體言、假體言、(虛體言)ナド、語性ニ就キテ、特ニ、名目ヲ立テヽ、論ズベキモノヽ如クニモ思ヘド、文法上ニ、此ノ類別ノ必用ハナキヤウナリ、單語ノ解剖(Parsing)ナドニ至リテモ、解說スルヲ要セズ。

六〇節　(本、一〇七)馬名、池月ハ、實ハ、生嗟(人ヲ嚙ム意)ニテ、假名遣ヒモ違ヘド、今ハ、姑ク俗ニ從フ。立上、牧馬ハ、古ヘノ名器ノ琵琶ノ名ニテ、髭切、膝丸ハ、源家重代ノ名劍ノ名ナリ。

（本、一〇八）名詞ノ中ニハ、他語ト熟語トナルトキ、語尾ヲ變ズルモノ、稀ニアリ。（下ノ語ヲ形容スル意トナル、）

酒（サケ）ササカダル　ササカクサシ
風（カゼ）カザカミ　カザダツ
胸（ムネ）ムナサキ　ムナグルシ
舟（フネ）フナコ　フナバタ　フナノ軸
茜（アカネ）アカナベ（茜氏）
爪（ツメ）ツマサキ　ツマグル
枯（カレ）カラヤマ
黄（キ）コガ子
目（メ）マブタ　マノアタリ

竹（タケ）タカムラ　タカバウキ
早稲（ワセ）ワサダ
棟（ムネ）ムナギ　ムナフダ
米（ヨネ）ヨナムシ
上（ウハ）ウハベ　ウハハギ　ウハノソラ
雨（アメ）アマガサ　アマヨ
稀（マレ）マラビト
木（キ）コノハ　コカゲ
手（テ）タマクラ　タナスエ　タナグル

菅（スゲ）スガハラ　スガノ子
稲（イネ）イナボ　イナムラ
金（カネ）カナモノ　カナトコ
種（タネ）タナ井　タナツモノ
苗（ナヘ）ナハシロ
天（アメ）アマガモ　アマクガハ　アマクダル　アマツカセ
聲（コエ）コワ子　コワダカニ
火（ヒ）ホカゲ　ホノホ
白（シロ）シロガ　シラグル

右ノ外、尚アリ、然レドモ「酒（サケ）、竹（タケ）、菅（スゲ）、棟（ムネ）」ノ如キ「さかだる」（酒樽）たかむら（竹叢）すがはら（菅原）むなぎ（棟木）トハナレド、「さかのみ」（酒呑）たかうま（竹馬）すががさ（菅笠）むなあげ（棟上）トハナラズ、茸（キノコ）モ「このこ」トハナラズ、又、池苦（イケコ）等ハ、酒、竹ト同ジク「け」

ノ音ニ終レド、池苦ノ「ひか」、「てか」トナルヿナシ。サレバ、固ヨリ、アラユル名詞、皆、此ノ法則ニ變ズルニハアラズ、スベテ、慣用ノ法ニ局シテ、一般ニ律スルヿ能ハザレバ、此ノ變化ヲ、文法科ニ於テ、學ブ者ニ記臆セシメタリトテ、何ノ效モナカルベシ、故ニ、別ニ說カズ。是等ハ、皆、一熟語ト成リテ、別ニ辭書ニ入ルベキモノナレバ、一々、辭書ニ就キテ知ルベキモノナリ。

○世ノ文典ニ、熟語ノ名詞ヲ特ニ揭ゲタルアリ、熟語ハ、名詞ニノミ限ラズ、動詞ニモ、形容詞ニモ、副詞ニモ、其他ニモアリ、本書ノ第四三七節、以下ニ、熟語トシテ集メテ擧ゲタルヲ見ヨ。又、西洋ノ文典ニハ「軍隊、森、組合」ナドイフ語ニ、集合名詞ナドイフ名目ヲ立ツ、コレハ、多數ノモノナレド、複數トハ見ズ、合シテ單數ト見テ、之ニ應ズル冠詞、動詞、ナドモ、單數ノモノヲ用ヰル規則アレバ、イフナリ、我ガ文典ニモ、彼ニ倣ヒテ、此名目ヲ立ツルアルハ、徒爲ナリ。

又、前ニモ言ヘル如ク、日本ノ名詞ニハ、男、女、中、ノ性ナク、單、複、ノ數ヲ表ハスニモ、一定ノ則ナク、格ハ、別ニ豆爾乎波アレバ、是等ノ事、スベテ、名詞ノ條ニテハ說カズ。

六三節　（本、一一〇）萬葉、十五ノ「白妙の」（枕詞）ノ歌ノ「下衣」ハ、襲衣ナリ。（夫婦ノ間ノ歌ト見ルベシ、）同「我宿の」ノ歌ノ「まつ」ハ、「松」ニ「待」ヲカケタリ、下ノ句ハ、「はや歸りませ戀ひ死なぬ刀に。」「刀」ハ「時」ニテ「間」ノ意）古今、三ノ歌ハ、「時鳥、なが鳴く里の、あまたあれど、なほ疎まれぬ、思ふものから。」ナリ「時鳥ヨ、ソチノ鳴ク里ハ、諸方ニアマタアルニ因テ、賞翫ニハ思ヒナガラ、（オモフモノカラ）ヤハリ、疎々シク思ハレル、」ノ意ナリ。同、十七ノ歌ノ「千早振」ハ、宇治ノ枕詞ナリ「宇治橋ノ橋守ヨ、我ハ、ソチヲ殊ニ慇懃ニ思フ、我ト同ジク、年歴タル老人ナリ、ト思ヘバナリ、」ノ意ナリ。對稱ノ「なむぢ」ノ「むち」ハ、「陸」ノ意ニテ、元ハ親ミテイヒシ語ナレド、後ニハ、其意ナクナレリ。古事記ノ歌ハ、婚ヲ約シテ、遂ゲズシテ老イタル女ヲ憐ミタル歌ニテ、「神ノ宮人ガ、神社ニ土垣ヲ築キテ餘シタル土ノ如ク、無用ニナリテ、寄ルベナシ。」ノ意ナリ。「をち」ハ、「あち」ニ同ジ、常ニ「遠近」ナド記セド、遠ノ字ニ拘ハルベカラズ。

六四節　（本、一一二）「これ、それ、」等ノ語ヲ代名詞トシ、事物、地位、方向、等ニ別チ、又、近、中、遠、不定、等ノ稱ヲ付シ、スベテ、斯ク類別次第シタルハ、此書ノ創意ナリ、當レリヤ。

六五節　（本、一一三）萬葉集ノ歌ハ、山上憶良ガ宴ヨリ退出スル時ノ歌ナリ。佛足石ノ歌ハ、涅槃經ニ、「是身無常、如電光、」又、正法念經ニ、「死王呑衆生、」ナドアルニ因ル、死王ハ、死ヲイフナリ。佛足石ハ、大和ノ藥師寺ニアリ。

六六節　○西洋ノ代名詞ハ、前ニモイヘルガ如ク、男女中性、單複數、格、等ヲ表ハサムガ爲ニ、其語形ヲ變シ、隨テ、之ニ應ズル動詞等モ、共ニ、同一ニ變ズルヿモアルガ故ニ、獨立ニ說ケドモ、我ガ代名詞ニハ、夫等ノ事絕エテ無ク、且、「が、」「の、」「に、」「を、」等ヲ、屢ム用法等モ、全ク常ノ名詞ト異ナラズ、サレバ、唯、名詞中ニテ、一種、名詞ノ代理トナル語ト見テ可ナリ。

六七節　○我ガ指示代名詞ハ、洋語ニテハ、中性ノ代名詞、又ハ、副詞トナル、其中ノ「こ、」「そ、」「あ、」「か、」等ヲ、「この、」「その、」「あの、」「かの、」ナドト組立テ、一語ト見ルトキハ、彼ノ Demonstrative adjective（指示形容詞）トナル。或ル文典ニ、此ノ組立テタルモノヲ、直ニ指示代名詞トシタルハ妄ナリ、「の」ト組立テタルトキハ、下ニ更ニ「が、」「の、」「に、」「を、」等ヲ屢ム用ヒ能ハザレバ、名詞ニハアラズ。

六八節　○不定稱ノ代名詞ヲ、疑問代名詞ト立ツルモノモアレド、非ナリ、是等ノ語、疑

ヒ問フ時ニノミ用キルモノナラズ、「誰も思はず、何れも同じ」ナドハ、「衆人、思はず、皆、同じ」ナリ、疑問ニアラズ。又、或ル文典ニハ、疑フ意アル副詞ナドヲ、疑問代名詞ニ加ヘタルアリ、妄甚シトイフベシ。

○西洋ニテイフ關係代名詞トイフモノ、我ニハナシ。

六九節

(本、一一四)「ひとつ、ふたつ」等ノ「つ」ハ、「箇」ノ意ニテ、「はたち」ノ「ち」モ、同語ノ轉ナラム。「とを」(十)ノミ「つ」モ「ち」モ履マズシテ、「を」トイフモ、異ナリ。又、「とを」(十)ヲ「ひとそ」(一十)トモ、「ひとそぢ」(一十箇)トモ言ハズ、「はたち」(二十)ヲ「ふたそ」(二十)トモ、「ふたそぢ」(二十箇)トモ言ハヌモ、異ナリ。

○「ひと、ふた」ナドヲ「ひ、ふ、み、よ、い、む、な、や、こ、と」ナドモイフ。又、「みつぐみ」(三組)「いつゝを」(五緒)ナドト、熟語ニスルコモアリ。

七〇節

○「五」ヲモ「い」トイヒ、「五十」ヲモ「い」トイフハ、紛ラハシ。(五十鈴川ハ、伊勢ニアリ。「いか」ももか」ハ、小兒生レテ、五十日、百日、ノ祝ヒニイフ語ナリ、苗氏ニ、五十嵐、五十川、五十君、ナド、アルハ、五十日嵐、五十日川、五十日君、ノ略ナラム。)「十」ヲ「そ」トイフハ、如何ナル義ニカ。(苗氏ニ十河)「つづや、はたち」トイフハ、「十や二十」

ノコトト云フ。「十箇」ノ轉カ、或ハ、「十九」ノコトナリトモ云(地名ニ「十九浦」アリ、)「百」ヲ「ほ」トイフハ、「もも」ノ音ノ轉ナリト云。「千」ト「箇」ト、紛ラハシ、「よろづ(萬)」ノ「づ」モ、「箇」ノ意カ。「ちゞに物こそ悲しけれ」ナドハ、「千箇」ナラムカ。其他、八十萬百八十神、五百代小田、五百萬、八百重、千五百秋、ナドモ用キル。

七一節

○數詞ハ、固ヨリ數ヲイフ語ニテ、名詞トハ、語性、意義、異ナレド、其用法、位置、文中ニアリテ、正ニ名詞ニ同ジゲレバ、名詞ノ中ニ加ヘタリ。又、思フニ、數詞ノ原形ハ、「ひと、ふた、み、よ」ナドニテ、接頭語ノ如キモノナルベク、之ニ「つ」(箇)或ハ、「ち」(箇)トイフ接尾語ノ添ヒテ、名詞ノ如クナリタルナラム、然レトモ、其原形ハ、一般ニ用キガタキコトモアリ、因テ、姑ク、本文ノ如ク說ケリ、他ノ「もも」(百)「ち」(千)等モ然リ。

七二節

○西洋ニテハ、數詞ヲ獨立ニ立ツル國モアリ、英文典ノ如キハ、形容詞ノ中ニ入ル。而シテ、彼ニハ、順序數詞トイフモノアリテ、其語形ヲ變シナドシテ、「第一ノ、三番ノ、三號ノ、四ツ目ノ」ナドノ意ヲ成ス。或ル國語文典ニハ、彼ニ模倣シテ、順序數詞ヲ立テタルモアレド、順序ノ意ハ、添ヘタル「第、番、號、目」等ニ

アリテ、數詞ニハ與カラズ。

七三節　(本、一一五)動詞ノ動ノ字ヲ、或ハ、人偏ヲ添ヘテ、働ト記スモノモアレド、俗字ナルノミナラズ、動作ノ動ノ字ヲ用キテ、事足レバ人偏ハ不用ナリ。

七四節　○「あり、無し、」「似る、齊し、」「異なり、同じ、」「富む、貧し、」「老ゆ、若し、」「痛む、痛し、」ノ如キ、事物ノ現象形狀等ヲイフ意ニ至リテハ、各、同類ノ語ナルガ如クナレド、然ラズ、單語ノ類別ハ意ニノミ據ラズ、形ニモ據ルヿ、是類別ノ標準ナリ。「あり、」「似る、」「富む、」「老ゆ、」ノ如キハ、其語尾ノ活用、他ノ動詞ト同ジキノミナラズ、助動詞ヲ受ケテ、能相、所相、使役相、過去、未來、等ヲ形作ルヿ、他ノ動詞ト異ナラザルニ、形容詞ハ然ルヿ能ハザレバ、同一ノモノトハシガタキナリ。

七五節　(本、一一八、一一九)自動トハ、自ラ動作スル意ナレド、他動トハ、動作ノ他ヲ處分スルナレバ、動他トイフベキモノヽ如シ、然レドモ、今ハ、慣用ノ稱ニ據ル。

七六節　○標準トイヒ、目的トイフ、同ジヤウニテ、又、有對ドイヒ、單對、複對、トイヘバ、標準、目的、同ジ事トナリテ、不都合ナレド、好字面ニモ思ヒ當ラネバ、此ノ如シ。英文法ノ Object ヤ Direct トイフモノ、目的(を)ニテ、Indirect トイフモノ、標準(に)ナリ、I teach him grammar. ナド是レナリ。

自動、他動ニ、有對、無對、單對、複對、ヲ類別シタルハ、此書ノ創見ナリト思フ、前人説アリヤ。

七七節　(本、一二〇)「わびぬれど、身をうき草の、根を絶えて、」(古今、十八)由良の門を、わたる舟人、楫を絶え、」(新古今、十一)ナドモ、自動ヲ他ニ用キタルモノカ、或ハ、「を」ハ感動詞ナルカ。(或ハ「かぢを」ハ、櫂緒ナルベキカ。)

○世ノ文典ニハ、「見ゆ、見る、」「乾る、乾す、」「落つ、落す、」「殘る、殘す、」「立つ、立つる、」「當る、當つ、」ナド對ヒ合ハセテ、自他ヲ排列シテ、其活用ノ異同ナド教フルモノアリ、是等、遇ニ對語アルモノヲ擧ゲテ示シタリトテ、文法ノ記臆上ニ、益、少シ、何トナレバ、自動ノミニテ、他動ノ對語ナキモノ、他動ノミニテ、自動ノ對語ナキモノ、其他ニ極メテ多カレバナリ。「咲く、」「歩む、」「泣く、」等ニ、他動ノ對語ナク、「飲む、」「食ふ、」「書く、」「記す、」等ニ、自動ノ對語ナシ、許多ノ動詞ノ、自他ノ意ハ、對語、又ハ、活用ノ差ナドニテ、一律ニ覺ユベキニアラズ、辭書ニ據リテ、自他モ、活用モ、其語毎ニ知ラムヨリ外ニ、法ナキナリ。

富山學校藏書

七八節　○英語ニテ、自動詞トイフハ、本文ニ言ヘル「無對自動」ノミニテ、其他ノ「を」「に」「と」等ノ目的標準ヲ要スルモノハ、皆他動ナルガ如シ、「より」「まで」等ハ、前置詞、羅甸語ナドハ、之ト異ナリ、尙、後ノ第二五二節ヲ見ヨ。

七九節　(本、一二一)洋字ニテ記セバ、う(u)ゑ(e)ハ、全體ノ變化ナレ𪜈、く(ku)こ(ko)き(ki)す(su)せ(se)し(si)等ハ、發聲ヲ語根トシ、母韻ヲ語尾トスベシ。然レ𪜈、假名ハ、發聲、母韻ヲ合シテ、一字形ヲナセバ、其全體ノ變化ナリ。

八〇節　(本一二三)動詞ノ活用ハ、天然ニ、其動詞ニ具スルモノニテ、活用ノ狀コソ、互ニ異ナレ、各自ニ、正シク法ヲ具シテ、用ヲ缺クコトナケレバ、同趣ニ活用スル語少シトテ、之ヲ變格ト名ヅクベキ理ナケレ𪜈、俗諺ニ、所謂、多勢ニ無勢ニテ、變ト見ラレ、畸形ト見ラルヽモ、セムカタナキカ、然レ𪜈、正ノ反ハ、不正トナリテ、穩當ナラズ、常格、變格、ナドイフベキガ如シ、然レ𪜈、今ハ、姑ク慣用ノ稱ニ從フ。英文法ニ、規則動詞、不規則動詞、トイフモノモ、正ニ、我ガ正格、變格、ニ當リ、其不規則ノ稱アルモ、亦、少數ニシテ、且、活用區々ナルニ因ル。

八一節　(本、一二五)活用中ノ「る」「れ」「よ」ヲ除キテ云々、ト說ケルハ、上二段トイフ命名ノ趣意ヲ釋カムガ爲ナリ、下、之ニ倣フ。然レ𪜈、此「る」「れ」「よ」、其實ハ、活用中ノモノナリ、其論ハ、後ノ第一一二節ニ說クベシ。

八二節　○古事記、上ニ、「根許士爾許士而」、「書紀ニ、「掘」景行天皇卷ニ、「拔」、万葉集、八ニ、「去年春、伊許自而植之」、ナドアル許士ヲ、契冲師ノ歌ニハ、「うれしくぞ、かねても梅を、うゑれきし、なきに根こざむ、今年見ましゃ。」ト詠ミテ、四段活用トシ、「詞八衢」ニハ、中二段活用ト思ハルレド、「こずる」「こずれ」ノ例ナケレバトテ、除ケリ、或ハ、根起ノ約ナリトイフ說モアリ、疑問ノ活用ナレバ加ヘズ。(俗ニ「こじる」トイフ動詞ハ、良行四段活用ナリ。)

八三節　(本、一二七)上一段活用ハ、唯、一音ナルヲ、活用トイハムハ、理ニ合ハヌヤウナレド、各段ノ活用、形同ジキモノトイヘドモ、用法ニ因リテ、意義、各異ナレバ、尙、活用トイフベシ、(同形異義ノモノ、他ノ活用ニモアリ)下一段ナルモ、同ジ。

八四節　○上一段ニ活用スル語ハ、「射る」「鑄る」「沃る」「着る」「似る」「煮る」「乾る」「嚏る」「放る」「見る」「試る」「試みる」「顧みる」「鑑みる」「惟みる」「後見る」「以る」「用ゐる」「率ゐる」「居る」「(賤る)」等、僅ニ十數語アルノミ。但シ、「試みる」「後見る」ハ、「こゝろむ」「うしろむ」ト、上

二段ニ活用セシメタル例モアリ。

八五節　○「射る」「鑄る」「沃る」ノ「い」ハ、阿行ノ音ナルカ、也行ナルカ、知ルベカラズ、(種々ノ説アレド、イヅレモ、イカヾ)今、姑ク、阿行ノ順ニ入ル。

八六節　○古事記ノ「泣きいさちる」(後ノ第八九節ヲ見ヨ)宇治拾遺、十四ノ「唐綾一ッをゞ、唐には、美濃五匹がはゞにゞ用ひるなる」ナドヲ、上一段ナラム、ナドイフ説モアレド、一段活用ノ語ハ、一音ニ限リ、二三音ナルハ、皆、熟語ナル例ナレバ、取ラズ。

八七節　(本、一二九)「蹴る」トイフ動詞ノ活用ヲ言ハム。神代紀ニ「蹴散」ヲ「倶穢簸邏々箇須」ト註シ、古事記、上ニ「蹶散」、又ハ「蹶離」トアリ、垂仁紀ニ「當麻蹶速」モアレバ「くう」、「くうる」、「くうれ」、ナドノ用例ハ見當ラネド、和行、下二段活用ト見ルベシ。又、皇極紀ニ「打毬之侶」トアリ、「蹴鞠」ナリ、「打毬」ニアラズ、「くゆる」ハ「くうる」ノ誤カ)又、新撰字鏡ニ「蹻、万利古由」トアリ、同書ニ、又「距、鶏、行貌、用力也、古江奈良不」トアリ、和名抄ニ「蹴鞠、世間云、末利古由」トアリ、同書ニ、又「距、鷄雉脛有岐也、阿古江」トアリ、字鏡ニモ「距足角也、阿古江」トアリ、「足蹶ノ義」「こゆ」トモ、「こゑ」トモアレバ、是等ハ、也行下二段活用ナリ。サレバ、此ノ動詞ハ、和行下二段、也行下二段、兩樣ノ活用アリト定ムベシ。然シテ、「うゐる」、(饑)「きゆる」、(消)ナドヲ、「うゑる」、「きゑる」ト訛ル例ニテ、(後ノ第八九節ニイフ「伊佐知流」、「太々禮留」ノ如ク)「くうる」、「こゆる」ヲ、「くゑる」ト、モ、「こゑる」トモシテ、更ニ約メテ「ける」トシタルニテ、終ニ、別ニ、下一段ノ活用ヲ成セルナリ、推古紀ニ「伊比爾慧而許夜勢屢」(飯ニ饑テ臥セル)ナリ)トアリテ、「うゑて」(饑而)ヲ「ゑて」ト約メテイフモ、後世「いづる」(出)ヲ「いでる」ト訛リ、又「でる」、「でて」ト約メテイフモ、共ニ「くゑ」、「こゑ」ヲ「け」ト約メテイフト同ジ趣ナリ。(「きゑぬが上に」(不消上)ヲ「けぬが上に」トシ、「ゆきぎゑ」(雪消)ヲ「ゆきげ」トスルナドモ)

扨、「ける」ト約マリテ一語ト成レルモ、古キフニテ、落久保物語ノ二ニ「只今の太政大臣の尻はけるとも、此の殿の牛飼に、手な觸れてむや、」同書、四ニ「かの典藥の助は、蹴られたりし病にて死にけり、」なゞて、あまり蹴させけり、」榮華物語、根合ニ「人々まゐりて、鞠けなゞ遊をせ給ひし所なり、」宇治拾遺物語、二(業村、强力の學士に逢ふ事の條)ニ「必ず、けたまへ、」云々、れのれが蹴てひには、云々、此の尻

八八節

けよ、云々、尻蹴むとする相撲、云々、走りかゝりてけたふさむ云々、蹴はづして、云々、尻けつる相撲、云々、古今著聞集、十七ニ「大納言成通卿の鞠は、云々、大雨の時には、太極殿にゆきてこれをける、千日のはてゝの日、云々、鞠をけむと思ふ心つきて、すなはち、西より東へ蹴てわたり、」梶原景季ノ歌ニ「鞠子川蹴れどぞ波は、あがりける、」ナド見エテ、下一段活用ノ用例ヲ全備シタリ、斯ク、古クヨリ用キ來テ、其慣用ノ久シキコト、終ニ、耳ニ口語ノ調トモ聞エヌマデニナリタレバ、文章語トシ、一ノ活用ト立テゝ可ナラム。或ハ、良行四段活用トシテ用キルベシ、トノ説モアレド、「けらむ、けり、」ナドノ出典アリヤ。

○或ル文典ニ「ける」(蹴)絲ヲ「へる」(綜)麹ノ「ねる」(殖)ヲ殊ニ取リ出デゝ、下一段活用ハ、此ノ三語ニ限ルトシタルアリ「へる、ねる、」ヲ加ヘタルハ、文章語ニ、口語ヲ混シタルヤウナリ、若シ、口語ヲ擧ゲバ、此ノ二語ニハ限ラジ。又、コレヲ文章語ナリト言ハムカ、ソハ肯ハレズ、古今集、十ニ「白露を、玉に貫くとや、蜘蛛の、花にも葉にも、絲をみなへし。」拾遺集、八ニ「君がくる、宿にたゝせぬ、瀧の絲は、へて(久シク居テ)見まほしき、ものにぞありける。」夫木集、十ニ「我が祈る、願の絲の、年を

八九節

へて、逢はでしもやは、秋のたなゝた。」同書、廿六ニ「昔より、名に流れたる、岩瀧の、水の白絲、幾代へぬらむ。」金葉集、八ニ「近江にか、ありといふなる、かれひ山、君は越ねけり、人とねぐさし。」是等ノ歌ヲ引キテ、下一段活用ナリトイヘド、拾遺集、夫木集、ナルハ、三首、皆「歴」ト「綜」トヲ言掛ケ、金葉集ナルハ「寐」ト「殖」トヲ掛ケタレバ、却テ、下二段活用ナル確證トスベシ、(歴、寐、共ニ、下二段ナリ、「殖る」ハ、麹ノ黴ブルヲイヒテ、餉ノ黴ブルヲ「寐る」ニ掛ケテイヘルナリト云)殊ニ「綜る」ノ方ハ、活語雜話、初篇ニ、元眞集ノ一本ヲ引キテ「青柳の、絲によりてぞ年をふる、うき世そむける、跡もたちける。」ノ「ふる」ハ「年を歴る」ト「絲を綜る」トヲ掛ケテ詠メル由イヘレバ、論ナシ。殖ノ方ニ「ねる」ト用キタル例、見當ラネド、「ねる」ト用キタル例ハ、尚更ナシ、引歌中ノ用法ヲ推シテ、下二段トシテ、更ニ妨ゲズ「あたふ」(能)トイフ動詞ハ「あたはず」ト用キタル外ニ、例ナケレド、用法ニ因テ、四段活用ト定ムベキガ如シ。

(本、一三〇)上二段活用ノ「ひくる、れつる」ナドヲ「ひきる、れちる、」ナド訛リ、下二段活用ノ「うくる、まかする」ナドヲ「うける、まかせる」ナド訛ル「上世ニモアリ

シヤウナリ、仁德紀ニ「泣悲」、古事記ニ「啼伊佐知伎」ナドアルニ、古事記ノ他處ニ「哭伊佐知流」トモアルハ、上二段活用ノ訛ナリ、(阿良毘流モアリ)又、新撰字鏡ニ「鰧、太々禮留」トアルモ、下二段活用ノ訛ナリ。

(本、一三二)案ズルニ「れはす」ハ、古言ニ「大坐坐」トイヒシ語ヲ、後ニ省キテ「れまします」トイヒ、又、ソレヲ省キテ「れます」トイヒシヨリ、「れはす」ト轉ジタルナリ、(サレバ「おはす」トイフ語、古クハ無シ、)サテ、其語原ナル「ます」ハ、四段活用ナレバ「れはす」モ、元來、四段活用ナルベク、其用例モ、往々アリ。(次ニ擧グベシ、)サルニ、又、下二段活用ナルガ如キ用例ハ、枚擧スルニ暇アラズ、語原ナル「ます」ノ、下二段ニ活用シタル明證ハ無ケレド、後世、打消ニ「ませぬ」ト用キ、未來ニ「ませう」(ませむ、ノ音便)ト用キ、「む」ニ接シテ「ますれむ」ナド用キルモ、何カ由アリゲナリ、扨、ソレヨリシテ別ニ、更ニ、下二段活用ニテ、「れはす」トイフ動詞ヲモ生ジタルナルベシ。(或人ハ、「れはさ、する」ノ約マリテ、下二段活用トナレルナラム、トモイヘド、使役スル意ナク、「れはせ給ふ」ト敬語ニモ用キラレネバ、イカヾ、)サレバ、此語ハ、元來、四段活用ト、下二段活用ト、二樣ノ語アリテ、意ハ、同ジキモノナリシナルベシ、「もる、もるゝ、」(魂)わかる、わかるゝ、」(分)うづもる、うづもるゝ、」(埋)ひらく、ひらくる、」(開)ひく、ひくる、」(生)ナド、各、二樣ノ活用アリテ、自動、他動、ノ差モナク、同意義ナルガ如キト、同ジ趣ナルカ。扨、其二樣ノ活用、混淆シテ、遂ニ佐行變格ノ活用ト見做セルナラム。而シテ、若シ、鄙見當レリトセバ、佐行變格ニ活用スル語モ、「す」(爲)ノ一語ニ限ルトセムカ。

「れはす」ノ四段活用ナルベキ例ハ、山口祭、上ニ、諸書ヲ引ケルヲ擧ゲム。大和物語ニ「下野の國、云々、れはさず」、宇津保物語、藏開ニ「彈正宮も、云々、これもれはせ、とのみあめれど、」落久保物語ニ「又、れはせ、と引きせむれど、」蜻蛉日記ニ「小一條の大將、云々、れはせとて、」枕草子ニ「又、屋かたといふものにぞれはす、」大鏡ノ序ニ「そこにれはせるは、云々、」(命令法ナルハ、下二段、又ハ、佐變ニ「よ」ヲ添ヘヌ古格ナリトモ、イハルベケレド、他ニ爭ハレヌモアリ、)

右ノ如クナレバ、源氏物語ノ少女ノ、湖月抄本ニ「大宮の御世の、殘少なげなるを、れはさずなりなむ後も、云々、」トアルヲ、誤ナリトモ斷定シガタシ。其他ニ枕草子ニ「家に入りたらむ人をぞ、云らでもおはせかし。」宇津保、祭の使ニ「さ

むらひにれはす中將の君、源平盛衰記、南都異本、頼朝重衡對面ノ條ニ、私の敵にてもれはさむこそ、南都の衆徒、申請の旨もあり、私に討つべきにあらず。ナドモアリ。以上ノ例、皆、誤寫ナリトモ抹殺スベカラザルガ如シ。又、大鏡ノ序ニ、いざたまへ、昔の物語して、このれはさう人々に、さらむ、古への世は、かくこそはありけれと、聞かせ奉らむ、ナドモ、れはさむ人々ノ音便ニテ、(う)ハ、む)ノ發聲ヲ默セルナリ。)四段活用ナラム、現在ヲ未來ニイフハ、我が身、斯くて候はむ程は、ナド常ニイフ筆法ナリ。源氏、槇柱ニ、打ちひそみて、泣きれはさうず、同、宿木に、清げにれはさうずる御子どもの、ナドモ、れはさむず、ノ音便約ニテ、是レナラム、(謠曲ニ、御宿まねらせうずるにて候ふ、ナドイフモ、せむずる、ナリ。)

九一節

然レドモ、れはす、トイフ動詞ノ活用ハ、佐行ノ變格ナリトイフヿ、國語家ノ間ノ一定ノ論ニテモアリ、前ニ述ベタル考證モ、更ニ、一層、推究スベキ所モアレバ今ハ、姑ク、世論ニ從ヘルヿ、本文ノ如シ。

(本、一三三)なみす、ノ、なみ、ハ、無し、ノ語根ニ、み、ノ添ヒテ、名詞トナレルナリ。れもんず、ハ、れもみす、ノ音便ナリ。ほつす、ハ、良行四段活用ノ、欲る、ノ名詞法ノ、ほり、ヲ、す、ニ連ネテ、促聲ニイフナリ。こうず、ノ、こう、ハ、困ノ音便ナリ。けみす、ノ、けみ、ハ、撿ノ音轉ナリ。ごらう、モ、御覽ノ音便ナリ。又、あまんず、(甘)かろんず、(輕)ナドモアリ、あまみす、かろみす、ノ音便ナリ。

九二節

(本、一三五)國語ニテ、死、トイフ一音ニ、死ヌル意アリ、殺す、トイフ下二段活用ノ動詞モアリ、(漢字音ノ、死、ト、暗合ナリ、)死ぬ、ハ、死往ぬ、ノ約マレル語ナリト云然ルトキハ、此ノ變格ノ活用モ、往ぬ、ノ一語アルノミ。

九三節

(本、一三六)をり、ハ、ゐ(居)ト、あり、トノ約、はべり、(侍)ハ、はひ(這)ト、あり、トノ約、いまそかり、ハ、います、(在)ト、あり、トノ約ナリ、トイフ說アリ、然ルトキハ、此ノ活用モ、あり、ノ一語ナリ。

九四節

(本、一三八)動詞ハ、他ノ語ト、熟語トナレバ、活用ヲ變ズルヿアリ。あり、(有)ハ良行變格ナレド、ござ、(御坐)ト熟語トナルトキハ、ござる、トナリテ、四段活用ニ變ズ。をり、(居)モ、良行變格ナレド、かをる、(薫)ト熟語トナレバ、かをる、トナリテ、四段活用トナル。又、れる、(降)ハ、上二段活用ナレド、あま、(天)ト熟語トナリテ、約

マレバ「あもる」(天降)トナリテ、四段活用トナル。「す」(爲)ハ、佐行變格ナレド、「なく」(無)ト熟語トナレバ「なくす」(失)トナリテ、四段活用トナル。所相ノ「たすけらる」ハ、下二段ナレド、「たすかる」ト約マレバ、四段トナル。「く」(來)ハ、加行變格ナレド、「で」(出)ト熟スレバ「でく」(出來)トナリテ、上二段活用トナル。助動詞ノ「たり」ハ、良行變格ナレド「き」(來)ト熟スレバ「きたる」(來)トナリテ、四段活用トナル。「日のもとの、やまとの國は言靈の、さきはふ國とぞ古言に、ながしきたれる神言に傳へきたれる。」(續後紀)守の館より、呼びに、文もてきたれり。」(土佐日記)六波羅の別當長慶、云々、時元、とぶらひに來りたりけるに、」(著聞集、廿三)ナドノ如シ。(但シ、万葉集ノ「春過ぎて、夏來たるらし、白妙の、衣乾したり、天の香山。」ナドハ、「來」ト「たる」ト、別ナリ。「下ニ「乾したり」アレバナリ。)

九五節

(本、一四一)將然、連體、截斷、連用、已然、希求ハ、義門師ノ創稱ナリ、終止ハ、黑川眞賴大人ノ改稱ナリ、未然、續詞、斷止、續言、已然ハ、堀秀成大人ノ命名ナリ。直說法、命令法ハ、洋文典ノ譯語ニ出ヅ。不定法、中止法、名詞法ハ、此篇ノ新設目ナリ。(不定法ハ、洋文典ノ譯語ニイフモノト異ナリ。)

九六節

○從來、終止言、連體言ナド、言ノ字ヲ當テタルハ、妥當ナラズ。今、洋文典ニ慣用スル譯語ニ據リテ、法トシタリ。サレド、動詞ノ法トイフモノハ、語氣ノ態度ナレバ、法ト稱セムヨリハ、終止態、命令態、ナドヽセバ、可ナラムカ、然レドモ、今ハ、姑ク改メズ。(或ハ式トモ名ヅケムカ、又、或ハ格ト名ヅケタルモアレド、洋語ノ名詞ニイフ格ト紛ヒ易シ。)又、此ニイフ法ノ事ニツキテハ、我ガ動詞ト、西洋ノ動詞トノ間ニ、甚ダ其趣ヲ異ニスルヿアリ、彼ヲ以テ我ヲ律シテ、怪ムヿ勿レ、委シクハ、後ノ第一一一節ニ辨ズベシ。

九七節

(本、一四二)動詞ノ本體ヲ、活用トハ言ハルマジキカ、然レドモ、他ノ活用ヨリ見レバ、亦、活用中ノ一トモ見做サルベシ。

九八節

(本、一四五)「我ガ讀む書」ノ如キハ、英語ニテハ、關係代名詞ヲ用ヰル場合ナルベシ、「讀む書」ノ如キハ、現在分詞ナリ。

九九節

(本、一四七)將然已然ハ、未定、既定、或ハ、未來、過去、ノ意ヲイフ稱ナレドソレモ、「む」「ば」「とも」「ども」等ヲ添ヘテノ上ノ事ナリ、「讀まむ」、「勤めず」、「見らる」ナドニ、將然ノ意モ已然ノ意モナシ、サレバ、此ノ法ニ、將然、已然等ノ名ヲ付セズ、將然、已然、

ノ意ハ、スベテ、相接スル「む、」「ぞ、」「とも、」「ぞも、」等ノ方ニ讓リテ、說ケリ。

一〇〇節　○洋文典ノ譯語ニテ、不定法(Infinitive.)トイフモノ、此ニイク不定法トハ、異ナリ、混シ思フベカラズ。

一〇一節　(本、一四八)此ニ、中止法トイフモノ、從來、(連用言ト稱シテ、)次ナル連用法ト別タズ、サレド、連用法ニテ、「讀み果つ、」「落ち入る、」ナド用ヰル「讀み、」又ハ、「落ち」ト、「書を讀み、字を記す、」「花落ち、鳥啼く、」ナド用ヰル「讀み、」又ハ、「落ち」トハ、其用法、甚ダ異ナリ、甲ハ、二語相合シテ一熟語ヲ成セド、乙ハ、各自ニ個々ノ動作ヲ表ハス、(落ち啼く」トシテハ、義ヲ成サズ、)因テ、別ニ一法ニ立テタリ、是レ、此ノ書ノ創意ナリ。

一〇二節　(本、一五〇)後撰ノ歌ハ、障ハルヿアリテ、正月ノ子ノ日セザリシニ因リテ、花ヲダニ見ム、早ク咲ケカシ、ノ意ノ歌ナリ。蜻蛉日記ノ歌ハ、「尋常ナラバ、憂キヲモ知リ、身ヲモ捨テタル人コソ、山路ニ深ク思ヒ入ラメ、今ハ、然モアラヌニ山路ニ深ク入ルコトヨ、」ト旅ノ物淋シク心細キ情ヲイヘルナリ。西行法師、路スガラ、尼ノ屋ヲ葺クヲ見テ、「賤ガ板屋を、ふきぞわづらふ、」トロズサミタレバ、尼、「月はもれ、雨はとまれと、思ふにぞ、」トツケタリト云フ。

一〇三節　○漢籍讀ノ訓點、近古マデ、正シカリシヿ、四書ノ道春點ナド見テ、略知ラル、近世、佐藤氏ノ一齋點出デヽヨリ、亂暴ニ古點ノ法ヲ破レリ、文法ノ賊トイフベシ、本文ニイヘル「不飲茶飲酒」モ「飲茶不飲酒」モ、差別ナク讀マルヽヤウニナレルモ、是レナリ、スベテ、今ノ漢籍讀ミ下シノ文ノ、破格ノミ多キハ、皆、一齋點ヲ學ベル書生ヨリ起レルナリ、世ヲ毒スル甚シトイフベシ、是等ノ駁擊ハ、日尾荊山ノ訓點復古トイフ書(板本、二冊)ニ委シ、就キテ見ルベシ。

一〇四節　○論語、雍也篇ニ、「不有祝鮀之佞而有宋朝之美」トアル「不」ノ字ヲ、有佞ノミヲ打消ストシ、有美ノミヲ打消ストシ、二ツナガラ打消ストシテ、學者ノ間ニ、各見解ヲ異ニスルモ、參考ニ資スベシ。

○或ル雜誌ニ、「政府ノ命令ニ從ヒ、其墳墓ヲ他ニ移スヿナクシテ、」トイフ文アリキ、此ノ文ニテハ、命令ハ、「差シ置ケ」トアリシニヤ、「移セ」トアリシニヤ、解スベカラズ、「移セ」トアリシナラバ、「命令ニ從ハズ」トカ、「命令ニ背キ」トカスベク、「差シ置ケ」トアリシナラバ、顚倒シテ、「其墳墓ヲ他ニ移スヿ勿レ、トノ命令ニ從ハズシテ、」ナドスベキカ。國文ニハ、斯ル文脈、屢出デテ來テ、常ニ困却スルヿ、獨リ

中止法ノミナラズ、約定書ナドニハ、痛心ニ堪ヘヌナリ、是レ、畢竟ズルニ、文法ノ學、未ダ幼稚ナルナリ、世ノ文法家、潛心ニ推敲考究スベキナリ。

○古今、二ノ歌ハ、「春氣ハ、一面ナルモノナレバ、至レル里、至ラヌ里ハ、アルマジキニ、ドウシテ、花ノ咲ケル所、咲カヌ所ノ、アルコヤラ、」ノ意ナリ。新古今、一ノ歌ハ、「散リテモ、散ラデモ、誰レ訪ヒ尋ヌル人モナキ古里ノ、閑寂ノ涙モ露ケキ花ニ、タマ〳〵訪フモノハ、憂キ春風ゾ、」トナリ。

○萬葉、七ノ歌ハ、「雨ハ降ル、借庵ハ作ル、實ニ忙ハシ、何ノ暇ニ、吾兒ノ海ノ潮干ニ、アハビ玉ヲ拾ヒテ、面白ク樂ムベキゾ、」トナリ。土佐日記ノ歌ハ、「風起テハ、波モ起ツ、風鎭マレバ、波モ鎭マル、風ト波トハ、相思フ中ナラムカ、」トナリ。

一○五節　(本、一五一)動詞ト助動詞ト連續スルニモ、「讀まゑむ、」「讀みたり、」「讀むべし、」ナド皆、一定ノ則アリ、是等モ、畢竟ズレバ連用法ナリ。然レドモ、是等ヲ、一々、法ト立テバ、煩ニ堪ヘザラム、因テ、動詞ト助動詞トノ連續ノ則ハ、別物トシテ、助動詞ノ條ニ、別表ニ作リテ讓レリ。

一○六節　(本、一五三)稀ニハ、第一活用ノ名詞トナルコアリ、「蟾蜍、」(谷漏)樽、」(垂)螢、」(火垂)陽炎、」

閨、」御統、」(ワルフミス)(マルシヅク)軍、」山田ノそほづ、」(濤)角力、」(スマフ)俗ニ、「出立、」(シユツタツ)(井サブラフ)「食客、」人名ニ、「順、」(シタガフ)「融、」(トホル)「競、」(キソフワタル)「渡、」ナド皆、然リ。

一○七節　○此ノ法ニ、從來、假體言、虛體言、等ノ稱アレド、實體モアリ、「氷、」(コホリハサミアフギツ)「狹、」(ミタチヒワタリ)「扇、」「包、」「盟、」「渡等、」是レナリ。

一○八節　○名詞法ハ、羅甸ニイフ Gerund. ナリ、英語ニテハ、不定法、現在分詞、共ニ名詞トナル。

一○九節　(本、一五四)命令法ノ一欄ハ、從來ノ活用圖ニハ、設ケラレズ、サレド、奈行變格ノ如キ、紛レ易キモノモアリ、必ズ、掲ゲズハアルベカラズ。

○上二段、下二段、上一段、加變、佐變、等ノ命令法ニ添フ「よ」モ、元ハ感動詞ノ「よ」ナラムカ、然レトモ「よ」無ケレバ、命令ノ意ヲ成サヌモアレバ、尙、活用中ノモノト見ルベキナリ。又、古クハ、一切「よ」ヲ添ヘザリキトイフニハアラズ、同時ニ「よ」ヲ添ヘシ用例モ、固ヨリ多ク見ユルナリ。

○上二段活用ノ命令ニ、「よ」ヲ添ヘヌハ、建暦御記、下、交易御馬御覽條ニ、「上卿(シヤウケイ)曰、乘體、騎二三廻、後、上卿曰、下(カ)利、次引立南殿」ナドナリ、但シ、極メテ稀ナルヤウナ

リ。上一段活用ナルニモ、稀ニアリ、萬葉集、一ニ「よき人の、よしとよく見て、よしといひし、芳野よく見よ、よき人四來三」ハ、玉小琴ニ「或人の「よくみ」とよめるを用ふべし、見とのみいひても、「見よ」といふ意になる、古言の例なり。」トアリ。「よくみつ」トヨメルモワロシ、活語指南ニ「み」トノミイヒテ、截斷言ナリ、トイヘルモ、イカヾ。

儀式、春日祭ニ「次、喚笛工名、二人、共稱唯、副命、琴笛相和、」註ニ「詞云、美許止爾、布江安波世」トアルモ「あはせよ」ナリ。風俗ニ「與世波與勢」トアルモ「寄せよ」ナリ。續紀、二十ニ「此事伊佐世、止伊射奈布爾」トアルモ「いざせよと誘ふに」ナリ。又、催馬樂ニ「肴求めに、こよろぎの磯」ナドモアレバ、古ヘ、加變ノ命令ニ、よヲ添フルヿモアリシカ。

一一〇節　(本、一五五)世ノ文典中ニ、正格、變格、ノ諸活用ニ、各自所屬スル動詞ヲ、數十百語、アルカギリ列擧シタルモノアリ、驚クベシ。(形狀言ナドモ然リ)是等ノ事ハ、「詞八衢」ヨリ因襲シタルニモアルベキカ、サレド、同書ハ、動詞ノ活用ヲ分類既別セムガ爲ニ、諸書ノ用例ニ據リテ考證シタルモノニテ、即チ、活用ノ類別ヲ

專門ニ說ケル書ニテ、寧、動詞ノ辭書トモイフベキナリ、サルヲ、文典中ニ變距シテ、文典ト辭書トノ區域ヲモ辨ゼズハ、ソモ何ノ心ゾヤ。

一一一節　○洋語ノ動詞ニ、Mood.(姑ク、英語ニテ記ス、下同ジ)トイフモノ、即チ、此篇ニイフ動詞ノ法ナリ。然レドモ、彼我ノ語性ニツキテ、頗ル、其趣ヲ異ニスルヿアリ。又、洋語ノ動詞ニハVoice.(口氣ト譯ス)Tense.(時ト譯ス)トイフモノアリ、サレド、我ガ動詞ニテハ、是等ノ意義ハ、他ノ助動詞ト連續關係シテ始メテ起ル、故ニ、今ハ、助動詞ノ條ニテ說クヿトセリ。左ニ、其異同ヲ辨ゼム。

Mood.トイフ語ヲ、辭書ニ據リテ、其意義ヲ求ムルニ、「動詞ノ語尾變化ニヨリテ生ズル語氣ノ態度ナリ、」トアリテ、一動詞ノ、其語體ヲ變化シテ生ズルモノナリ。

羅甸ノ動詞ニハ、直說法、可成法、(Potential.)接續法、命令法、不定法、名詞法、分詞法、等アリテ、其法ハ、スベテ、一動詞ノ語體ニ具備スルモノニテ、其語體ヲ變ジナドシテ、能ク衆法ヲ表ハシ、他ノ助動詞ナド添ヘテ成ルニハアラズ。而シテ、右ノ諸法ノ中ニテ、直說法、(終止法ナリ)命令法、名詞法、分詞法、(連體法ナリ)等

ハ、我ガ動詞ニイフト、粗同ジク、共ニ、語體ヲ變ジテ成ル。然ルニ、其不定法トイフモノハ、動詞ノ單行スル時ノ法ナレ𪜈、我ガ動詞ニハ無シ。(此ノ篇ニイフ不定法トハ、異ナリ。)又、可成法、接續法、トイフモノモ、我ガ動詞ニハ無シ、但シ、助動詞ノ「る」「らる」(讀まる、「勤めらる」ノ如シ。)ヲ添フレバ、可成法ノ意ニ當ツルヲ得ベク、亘爾波第三類ノ「む」「むとも」(等讀めむ、「勤むれども」ノ如シ。)ヲ添フレバ、接續法ノ意ニ當ツルヲ得ベシ。

西洋諸國ノ文法ハ、率ネ、羅甸ノ文法ニ倣ヒテ作リシモノナリト云フ。英國ノ動詞ニモ、羅甸ノ如ク、直說法、可成法、接續法、命令法、不定法、及ビ、分詞法、名詞法、(此ノ二法ハ、法トハセデ、單ニ、分詞ト立テタルモアリ、等ヲ立ツ。然ルニ、其可成法ハ、動詞ノ體ノ變化ニハアラデ、動詞ノ前ニ、別ニ助動詞ヲ加ヘ、又、接續法モ、多クハ、動詞ノ前ニ、別ニ接續詞ヲ加ヘテ、其意義ヲ成サシメ、(動詞ヲ、主格名詞ノ前ニ置キテ形作ルモアレド、)其可成、接續、ノ意義ハ、動詞ノ語體ニハ存セズシテ、添ヘタル助動詞、接續詞、ノ方ニ存スルモノヽ如シ。サレバ、英ノ動詞ニイフ可成法、接續法ハ、其語體ニハ具ヘヌヲ、他語ヲ加ヘテ、羅甸ノ法ニ擬シテ作爲セルモノナリ、是等ハ、英ノ語學者ガ無用ノ模擬トイフベク、既ニ、其國ノ學者中ニモ、コレヲ法ナラズト論ズルアリ。然ルニ、今日、洋文法ヲ以テ、國文法ヲ論ズルモノ、例ヘバ、「讀まる」「勤めらる」ナドヲ可成法ニ立テ、「讀めむ」「勤むれども」ナドヲ接續法ニ立ツルアルハ、其ノ謬見ヲ遺傳セルモノトイフベシ。或云、英ノ助動詞ハ、動詞ト密着スルモノニテ、其前ニ居ルト後ニ居ルトヲ問ハズ、合シテ一語ト見ルベキナリト。今、姑ク、英ノ動詞ハ、或ハ然ラムトストモ、我ガ助動詞ハ、大ニコレト異ナリテ、語尾ニ、變化アリ、法アルヿ、粗、動詞ニ同ジク、例ヘバ「勤めらる」ハ「らるゝ」「らるれ」「られ」ト變化シテ、更ニ、種々ノ法ヲ成ス、是等ヲハ、如何ニカセム、法ニ法アリトイフヿヤアルベキ。扨、又、我ガ動詞ニハ、連用法、不定法、(此篇ニイフモノ)ナドイフモノアルニ、彼ニハ絶ニテ無キガ如シ。凡ソ、是等ノ事ハ、東西ノ語法ニ、自ラ天然ノ差異アリテ存スルモノナリ。

Voice.ハ、口氣ト譯スベクシテ、辭書ニ據レバ「動詞ノ一種ノ變體ニシテ、文主(Subject.)ト、動詞ノ動作ト、ノ關係ヲ指別セシムル別體ナリ、」トアリ。此ノ口氣ニ、

能相(Active.)ト所相(Passive.)トノ二樣アリテ、羅甸語ニテハ、一動詞ノ語體ニ、此ノ二樣ノ變化ヲ具セリ。然ルニ、我ガ動詞ニテハ、例ヘバ「打つ、傳ふ」ノ能相タルハ、論ナケレド、其所相ヲ形作ラムトスレバ、別ニ、助動詞ノ「る、らる」ヲ添ヘテ「打たる、傳へらる」(亦、變化アリ、法アリ)ナドヽスルナリ。而シテ、其能相ノ意義ハ、所相ニ對シテ始メテ生ズルモノナレバ、能所ノ事ハ、助動詞ノ「る、らる」ノ條ニテ說クヿトセリ。(英ノ動詞ニモ、所相ハ、前ニ助動詞ヲ添ヘテ言フガ多シ。)Tense.ハ、時ト譯シテ、亦、動詞ノ動作ノ、現在ナルト、過去ナルト、未來ナルト、ヲ示スニ就キテ起ル一種ノ轉化ニテ、是モ、羅甸ノ動詞ニテハ、其語體ニ、此ノ轉化ヲ具セリ。我ガ動詞ニテモ「打つ、傳ふ」ノ現在ナルハ、論ヲ待タザレド、過去ヲ寫シ出サムトスレバ、助動詞ヲ加ヘテ「打ちき、傳へき」ナドトシ、未來モ、助動詞ヲ加ヘテ「打たむ、傳へむ」ナドトスルナリ、(此ノ「き」「む」等、亦、皆、變化アリ、法アリ、)因テ、是、亦、助動詞ノ條ニテ說クヿトセリ。(英語ノ如キハ、過去ノ轉化ヲ、動詞ノ體ニ具スルアリ、或ハ、前ニ助動詞ヲ添ヘテ示スモアリ、而シテ、未來ハ、率ネ、前ニ助動詞ヲ加フルガ如シ、)

畢竟ズルニ、單ニ「打つ、傳ふ」トイフ語ヲ指セバ、一ノ動詞ト呼ブベキノミ。扨、單ニ「打つ、傳ふ」トイフ語ナレド、所相ノ「打たる、傳へらる」ニ對スレバ、能相ノ名目ヲ生シ、過去未來ノ「打ちき、傳へむ」等ニ對スレバ、現在ノ名目ヲ生ズルナリ、サレバ、是等ノ事ハ、スベテ、助動詞ノ方ニ讓リテ說クベキナリ。

一一二節

○曩キニ、余ガ言海ヲ印行スルニ當リテ、此ノ文典中ヨリ、辭書ニ用アル所ノミ摘錄シテ、語法指南ト題シテ附錄トシタリシニ、多ク、世ノ文法家ノ容ルル所トナレリ。然ルニ、其書中ニ、動詞ノ四段活用、中二段活用、下二段活用、等ノ舊稱ヲ、第一類、第二類、等ト改稱シ、終止言、連體言、連用言等ヲモ、各、改稱セシ所アルヲ、諸方ヨリ來リ訴ヘテ云フ、理論、或ハ然ラム、然レドモ、舊稱、已ニ久シク慣用セラレタリ、唯、名稱トノミ見バ善ケム、枉ゲテ舊稱ニ依リテ改刊セヨト云フ、因テ、此ノ篇ハ、舊稱ニ改メタル所多シ、然レドモ、余ガ前說モ、何レノ日ニカ、遍ク世ニ用サラルヽモアラム、ナドモ思ヘバ、左ノ舊論文、强ナニ捨テ難シ、因テ、此ニ、鷄肋トシテ附ス。

從來、作用言ノ活用ニ、四段、一段、中二段、下二段、等ノ名稱アリ。其四段活用ト

イフハ、例ヘバ「ゆく」(行)トイフ作用言ノ如キ、其語尾「か、き、く、け、」ト活用シテ、五十音圖ニ照セバ、其圖ノ、上ヨリ四段ノ諸音ニ當ルガ故ニ、命名セルニテ、是レハ、其理アリトセム。然ルニ「き」(着)ノ「きる、きれ」ト活用スルヲ、一段活用ト名ヅケ「うく」(受)ノ語尾ノ「くる、くれ」ト活用スルヲ、中二段ト名ヅケ「うく」(生)ノ語尾ノ「くる、くれ、け」ト活用スルヲ、下二段ト名ヅクルナトハ、妥當ナラザルガ如シ。ソハ「き」又ハ「きく」又ハ「く、け」ノ音コソ、五十音圖ノ一段、又ハ、中ノ二段、又ハ、下ノ二段ナレ、其他ニ「きる、きれ」「くる、くれ」ナドヽアル「る」「れ」ヲバ、唯、活用ヲ助クルモノトシテ、如何ニヅ、措キテ言ハザル。ソモ、此ノ「る」「れ」ハ、附屬物ノ如ク、等閑ニ視ルベキモノナラザルベシ、凡ソ、作用言ノ正格、變格、諸活用ノ中ニテ、此「る」「れ」ノ活用ナキモノハ、僅ニ、四段ト良變トノ二類アルノミ、(良變ニモ、「る」「れ」アレバ「る」「れ」ナキハ、四段ノミナリ、四段、却テ變格ノ思ヒアリ、)其他ハ、皆、此ノ「る」「れ」ヲ以テ、要用ナル連體、已然、等ノ活用ヲ現ハスニアラズヤ、(「ぞ、る」「ころ、れ」ナドト、概略ニ「掛リ、結び」ヲ呼ブモ、作用言ニ、此ノ音ノ活用多キヲ思フベシ、)若シ、此ノ「る」「れ」ヲ補助ノ活用ト言ハヾ、四段活用ノ連體言、已然言ノ語尾ヲモ、補助ナリト言ハズハアルベカラズ、何ニ因リテカ、同一ノ意義ヲ成スモノヲ、一ヲ本分ノモノ、一ヲ補助ノモノトハ定ムル、殊ニ、一段活用ノ如キニ至リテハ、此ノ「る」「れ」無キトキハ、第一ニ、作用言ノ本體タル終止言ヲ形作ルヿヲ得ズ。(「る」ハ「う」ノ韻ニ終ハル、作用言ノ終止言ハ、スベテ「う」ノ韻ナルベキ通則ヲモ思フベシ、)又、希求言ヲモ、活用ト見ルトキハ、「よ」ノ音ヲモ、活用中ニ加ヘズハアルベカラズ、「よ」無ケレバ、希求言ヲ成サヌモノモ少カラザレバナリ。此ノ如ク論シテ、扨、從來命名ノ趣意ヲ奉ジテ、正シク稱呼セムトセバ、加行一段活用ノ「き、きる、きれ、きよ」ヲバ「加行一段、良行下二段、也行一段、活用」ナドト呼ビ、良行下二段活用ノ「れ、る、るる、るれ、れよ」ヲバ「良行下二段、重複、顚倒、及ビ、也行一段活用」ナドヽ呼バズバ、他ノ四段活用等ニ對シテ、其命名ノ釣合ヲ失ハム、サレバトテ、斯ル冗長ナル名稱ハ、採ルベクモアラズ。此ノ故ニ、今ハ、四段、一段、ナドイフ意味アル命名ニハ從ハズシテ、單ニ、第一類、第二類、第三類、第四類、等ト號數ノ名ヲ命ゼリ。又、其順序モ、舊圖ニテハ、四段活用、最モ、五十音圖ノ順ニ當ルガ如ク、且、其所屬ノ作用言モ、數多ケレバ、之ヲ第一トシタルナルベク、「う

シテ、次下ハ、五十音順ニ據リテ次第セルナルベシ、然レドモ、今ハ、四段、一段、等ノ名稱ヲ用ヰヌフニモアレバ、其活用ニ所屬スル作用言ノ多少ヲ以テ、順序ヲ改メ、四段活用ヲ第一類トシ、下二段活用ヲ第二類トシ、中二段活用ヲ第三類トシ、一段活用ヲ第四類トセリ。又、既ニ、正格活用ノ名稱ヲ改メシ上ハ、變格活用モ、舊稱ヲ存シ難ケレバ、亦、第一、二、三、四類トセリ、但シ、其順序ハ、舊キニ從ヘリ。

一二三節

○從來ノ作用言活用五段圖ハ、五十音圖ノ段ヲ標準トメ、先ヅ、四段活用、一段活用、等ノ名ヲ定メ、扨、其活用ノ最モ博キ四段活用ノ音順(か、き、く、け、等)ヲ基本ト立テヽ、他ノ活用ハ、或ハ、五十音ノ音順ヲ顚倒セシメ(うけ、うく、こ、き、く、せ、し、す、ノ如ク)スベテ、四段活用ノ音順ニ從ヘテ、製セシモノナルベシ。サレバ、「ゆか」(行)ヲ基トシテ、他ノ「らき」(生)うけ」(受)等ノ、將然言トイフモノ、第一段ニ居ル。然レドモ、凡ソ、作用言ノ本體トイフモノハ、「ゆく」(行)らく」(生)うく」(受)等ニテ、即チ、終止言トイフモノナレバ、先ヅ、某ノ作用言トテ、取出シテ記サムニハ、終止言ヲ、第一ニ置クベキ理ナラン、然ルニ、舊圖ニテハ、其本體タルベキモノ、第三段ニ居ルヿトナリテ、體裁宜シカラズ、是等モ、畢竟ズルニ、五十音圖ヲ基トシ、四段活用等ノ名目アルガ故ニ、之ニ從ハザルヲ得ザルニ起レルナリ、然レドモ、縱ヒ、四段活用ノミ、「か、き、く、け、」ノ五十音順ヲ遵奉シタリトテ、他ノ「うけ、うく、こ、き、く、せ、し、す、」等ニ至リテハ、到底、顚倒ノ人爲ヲ加ヘザルヲ得ズシテ、遂ニ五十音順ヲ守ルヲ得ズ、苟モ人爲ヲ加フトナラバ、獨リ四段活用ニノミ憚ルベキニアラズ。サレバ、本書ニハ、已ニ、四段活用等ノ舊稱ニハ復シタレド、五十音順ニハ據ラズトシテ、其順序ヲ改メテ、終止言ヲ第一ニ置キ、而シテ、後ノ形狀言、助動詞、等ノ圖ヲモ、皆、之ニ倣ハシメタリ。且、又、三樣ノ「掛リ、結ビ」ヲ說カムニモ、其活用ノ、第三、第四、第五段ニアラムヨリハ、第一、第二、第三段ニアラム方、太ダ體裁好キヤウナレバ、今ハ、連體言、已然言トイフモノヲ、第二段、第三段ニ上ゲテ、終止言ニ次ガシメ、而シテ、第一段、第二段ニアリシ將然言、連用言トイフモノヲ、ソノマヽ、下ニ下ゲタリ。又、希求言ハ、活用ノ體ノ異ナルモノモアルガ上ニ、奈行變格(死ね)ノ如キ、甚ダ迷ヒ易キモノモアレバ、今ハ、下ニ、一段ヲ加ヘテ載セタリ。而シテ、第四、五、六段ノ順序ニハ、理由ナシ、唯、上ヨリ、其

一一四節

語尾ヲ讀下語誦セムニ、口調語路ノ好カラムニ從ヘリ。

○又、從來、五段ノ名稱ヲ、直ニ、將然言、連用言、終止言、連體言、已然言、ト呼ベリ。是等ノ事、惡シトニハアラネド、尙、論ズベキフアリ、先ヅ、其本語ニ、用言トイフ名ヲ付シテ、其活用ニ、又、將然言、連用言、ナド、言ノ字ヲ付スルハ、言中ニ言アルコトナリテ、甚ダ初學ノ迷ヒヲ惹キ易シ、本書ニ用ヰタル法ノ字トテモ、適當ナリトハ言ヒ難ケレド、(態ノ字、當ラムトイフフハ、前ノ第九六節ニ云ヘリ、)尙、迷ヒヲ避クルニ足ラム。又、文ノ「掛り、結び」ノ如キモ、常ニ「ぞ、の、や、」ノ「掛り」ハ、連體言ニテ結ビ、「こそ」ノ「掛り」ハ、已然言ニテ結ブ、ナドイフモ、不都合ナリ、既ニ「連體」トハ、他ノ體言ニ連ル語ナリト釋キテ、又「ぞ、の、や、」ノ「掛り」ヲ結ブ(終止ス)トイヒ、「已然」ハ、過キ了レル意ヲイフト釋キテ、又「こそ」ノ「掛り」ヲバ、現在ノ意ニテ結ブコトモナリテ、齟齬ス。又、第二段ハ、連用言トモナリ、假體言トモナルニ、連用言トノミ定稱スルトキハ、差支ヘアルベシ。又、舊圖ニハ、各段ノ欄內ニ、助動詞、互爾乎波等ヲ、一一、挿入シタレド、用言ノ活用ノミ說カム場合ニハ、甚ダ錯雜ヲ起スヲ覺ユ、サルハ、將然言ノ下ニ「ゆか、ず」ナドアリテハ、唯「ゆく」トイフヲ現在ニ打消ス意ノモノナレバ、將然トイフ命名ニ違ヒ、終止言ノ下ニ「ゆく、べし」ナドアリテハ、助動詞ニモ連ル所アリテ、「終止ス」トイフ意ニ合ハズ、連體言ハ、體言ニ連ルトイヒテ、又「ゆく、なり」ナドアリテハ、助動詞ニモ連ル意トナリテ、初學ヲシテ甚ダ惑ハシム。

右ノ如クナレバ、本書ノ動詞表ノ各段ニハ、一切、意義アル名稱ヲ付セズ、段ノ名稱トシテハ、單ニ、第一活用、第二、三、四、五、六活用ト稱呼セシムルフトセリ。而メ、「ぞ、なむ、や、か」ノ「掛り」ハ、第二活用ニテ結ビ、「こそ」ノ「掛り」ハ、第三活用ニテ結ブトヤウニ稱ヘシメムトス。又、各活用ト助動詞等トノ連續ノ則ニ至リテハ、後ニ、別表ニ揭ゲテ、唯、某ノ助動詞ハ、動詞ノ第幾活用ニ連續ス、トノミ說キテ此ノ場合ニハ、絕エテ動詞ノ活用ノ意義ヲ言ハズ。而シテ、終止法、連體法、ノ如キ意義アル稱呼ハ、段ノ稱呼ノ外(欄外)ニ立テヽ、其段ヲ、直チニ何何法ナリトハ言ハズシテ、終止法ニハ、第一活用ヲ用ヰ、或ハ、中止法ニハ、第五活用ヲ用ヰ、連用法ニモ、第五活用ヲ用ヰル、ナド稱ヘシメムトス。

一一五節

(本、一五六)從來ノ形狀言活用圖ニハ、「善く」ト「惡しく」トヲ、各、二段ニ重出セシメ

テ、將然言ト、連用言ト、ヲ別テリ、然レドモ、「善けれども、善けれど、」ハ「善くあれども、」善くあれど、」ノ約ナリトモイヘバ、「善くとも、」善くど、」モ「善くありとも、」善くあらど、」ノ略ナルベシ、サラバ、將然、連用、一ツニ落チム、故ニ、此ニハ、一段ニ併セタリ。

○國語ノ形容詞ハ、洋文法ノ譯語ニイフ形容詞ト、意義ハ相似タレド、語體、用法、甚ダ異ナリ、尙、後ノ第一三二節、以下、三節ニ委シクイフベシ。

一一六節　○形容詞ニハ、自動、他動、ノ性、固ヨリナシ。又、過去、未來、ノ時ヲモ形作ラズ、「善かりき、」「善くありき、」「惡しからむ、」「惡しくあらむ、」ナドニ就キテ、時ヲ說ク者モアレド、ソハ、「あり、」トイフ動詞ニ就キテノ過去、未來、ニテ、形容詞ニハ關セズ。

一一七節　(本、一六〇)俊基集ニ、「家苞(イヘヅト)に、さのみな折りそ、櫻花、山の思はむ、事もやさし(ハヅカシ)。」永長二年、東塔、東谷歌合ニ、「秋深み、夜風烈しゝ、宜(ヒベ)しころ、四方の里人、衣打つなれ。」源平盛衰記(祇王祇女佛)ニ、「祇王にも劣らず、歌の音(ヲ)のよさよ、いしゝ〳〵(美)と嘆(ナゲ)られたり。」同、南都合戰ニ、「折節風は烈しゝ、炎(ホノホノモト)本は、一つなりけれども、吹迷ふ風に、多くの伽藍に吹きかけたり。」同、逆櫓ニ、「友あらかひ甚詮なし、平家の漏聞かむもをこがましゝ。」同、(長門本)三位入道入寺ニ、「競は、渡邊黨の其一、王城第一の美男なり、右大將(長盛)の裏築地(ウラツイヂ)の中より、朝夕出入する、ほしゝ〳〵と思はれける間、(中略)大將、よき和殿をほしと思ひ、命と共に、と聞きし南鎭丸(馬名)をも和殿に取らせたり。」(末ナルハ、「ほし」トノミアリ)ナドハ、假名遣ヒノ、既ニ亂レタル頃ノ歌文ノ瑕瑾ナレハ、採ルベキニアラズ。謠曲、唐船、「それも、戀しく、又、これも、いとほしゝ。」ナド、固ヨリ論ズルニ足ラズ。羽衣ニ、「一樓の明月に、雨、始めて晴れり、」ナドアル程ナレバ、此ノ「しゝ」ヲ妨ゲナシナドイフ論者ニテモ、「れどろれどろしゝ、」同じゝ、甚(イミ)じゝ、」トハ言ハルマジ。

然レドモ、元來、「志志幾活用」ノ語根ハ、「惡し、怪し、」ニテ、更ニ之ニ「し、き、けれ、く、」ノ語尾アルヿ、志幾活用ト同シカリケムカトモ思ハルヽハ、「勞々、胥々、美々、欝陶、」ヲ語根トシテ、「らら〳〵し、こち〳〵し、びゞし、うつたうし、」ナド用ヰテ、志々幾活用トシ、口語ニ、「うれしい、かなしい、」ナド、終止法ニ用ヰル「い」モ、韻ヲ引キタルモノカ、トモ思ハルレド、「しゝ」ノ音便ナルカトモ疑ハル。扨「しゝ」ト言ハムハ、語路惡シケレバ、「し」トノミ略シ馴レタルモノカ。然レドモ、戴詞ニ、「申しゝ、」

押し〻」ナド常ニ用ヰテ、語路惡シキニモアラズ。サレバ、理論ハ、トモカクモアレ、正シキ古書ニ、用例更ニ無キ上ハ「し〻」ハ、法トスベキニアラズ。

一一八節（本、一六一）「すこし」（少）トイフ語、副詞ニ用ヰラルヽハ、論ナケレド、形容詞ニモアルガ如シ、新撰字鏡ニ「個、小貌、須古志」、支奈留」トアリ、榮華物語ノ　村上帝ノ沓冠ノ御詠「あふさかも、はてはゆき〻の、せきもねず、たづねてとひて、きなむかへさと」ノ毎句ノ上下ニ「あはせたきもの、すこし」（合薫物少）トセサセ給ヒシ「すこし」モ「すこし、れてせよ」ナドノ御心ニテ、副詞ト見マヰラセムハ、論ナケレド、或ハ「すくなし」、「とぼし」（乏）ナドノ御心ニテ、終止法ニ用ヰ給ヒシナラムカ、盛衰記、重衡關東下向ノ條ニ「春も、既に晩れなむとす、遠山の花の色、殘の雪かと疑はれ、越路に歸る雁金、雲居になのる音すこし、さらぬだに、ならふに霞む春の空、落る涙にかきくれて、行くさきも見ぬぎりけり。」又、風雅集、雜中、前大納言爲兼、題知らず「大井川、はるかに見ゆる、橋の上に、行く人すこし、雨の夕暮。」ナドアルハ、終止法ニ用ヰタリト思ハル。（「すゞし」（寒）ニハアラザルベシ）又、「すこしく」ノ活用ハ、古ヘハ用例ヲ見ザレド、近世ノ文ニハ、普通ナリ、サレド「すこしけれ」トハ、用ヰルベクモアラズ。

一一九節　○副詞ノ「けだし」（蓋）ヲ、萬葉集、十八ニ「琴取れば、歎きさきだつ、葢毛、琴の下樋に、妻やこもれる。」ナド用ヰ、常ニ「もし」（若）ヲ「もしくは」ナド用ヰルハ、「やうやう」（漸）ヲ「夜やうやく明けゆくに」（土佐日記）ナド用ヰル類ニテ、其ニ、副詞ナルカ、又、近頃ノ漢籍讀ノ訓點ニ「玄か」（然）ヲ「君子哉若人」（論語、公冶長）ナド用ヰタルニ至リテハ、論ズルニ足ラズ。

一二〇節（本、一六三）第一活用ノ、名詞トナルヿモアリ、「母なしに汝生りけめや」（推古紀）「來る人なしの、宿の庭」（新古今、十六）御身も、いたくのかひなしにては無けれど、さはどの大事にあふべき器にはならず。（著聞集、十五）よし、あしを定む、骨なし、鮓（鮨）芥（辛）賴母子ナドナリ。人名ニハ、殊ニ多シ。（齊正ノ類）

一二一節（本、一六五）此ノ連體法トイフモノ、正ニ洋文典ノ譯語ノ形容詞トイフモノニ當ル、其原語ナルAdjectiveハ、「添フルモノ」（名詞ニ）ノ義ナレバ、連體ノ命名ト、正ニ相合ヘリ、形容詞ト譯スルハ、義譯ナリ、（Attributiveヲ譯シタルニハアラジ）古キ譯語ニ「依賴名字」、又ハ「附屬名言」ナド〻シタルアルハ直譯ナリ。

又、副詞トイフモノヽ洋語 Adverb ハ「動詞ニ添フルモノ」ノ義ナレバ、直譯、副動詞ノ略ナリ。(古譯語ニハ「添字」ナドヽアリ。) サレバ Adjective ハ、副名詞ト譯スベク、此ニイフ連體法モ、副名法トセバ可ナラムカ、然レドモ、今ハ舊稱ニ從フ、名詞、一名、體言ナレバ、其意ハ同ジ。(或人ハ「連名」ト名ヅケタレド、連署ノ如ク思ハレテ、妙ナラズ。)

動詞ノ連體法モ、名詞ニ連ル法ナレバ、此ニイフ連體法ニ同ジ、「現在分詞」ニテ即チ、動詞ノ Adjective トナルモノナリ。

一二二節 (本、一六七)從來、此ノ中止法ヲ、次ノ副詞法ト共ニ、連用言ト稱シテ、相別タズ、然レドモ、次ナル副詞法ハ、全ク副詞ニ變ジテ、他ノ動詞、形容詞、副詞、等ニ副フ語トナレドモ、此ノ中止法ハ、獨立ニ意義ヲ言ヒテ、文ノ末ヲ結バヌマデノモノナリ、混ズベキニアラズ。

一二三節 (本、一六九)此ノ副詞法ハ、從來、連用言ト稱シテ、動詞ノ連用法(連用言)ト、一樣ノモノトセリ。然レドモ、此ノ法ナルハ、「善く、百般の事情に通ず。」全く、積年の弊習を改む。」ナド、其意、他語ヲ隔テヽモ、「通ず、改む、」ニ連リテ、動詞ノ「讀み果つ」「落ち入る」ノ如ク、密着シテ熟語トナルト異ナリ、サレバ今ハ、副詞法ト改稱セリ、全ク變ジテ副詞トナレバナリ。

一二四節 (本、一七〇)「善かり、」「惡しかり、」ノ用法ヲ、形容詞中ノ一種ノ活用ノモノトシテ說キタル文典多シ、其說ケル所、「あり、」ノ活用ヲ複說スルニ過ギズ、贅ナリトイフベシ、「あり」ハ、動詞ナレバ、命令法、過去、未來、等ヲ形作ル、形容詞ニハアラザルナリ。

一二五節 (本、一七一)古今、十四ノ歌ハ、「梓弓、(枕)ひき野の嵩、(ノ如ク)末終に、我が思ふ人に、言の繁けむ。」ニテ、「思フ人ニ名ガ立ツテ、人ノ噂ガ繁クナルデアラウ、」ナリ。萬葉、十一ノ歌ノ「ひさしけまく」ノ「けまく」ハ、「けむ」ノ延ビタルナリ。同、十九ノ歌ハ、命婦ガ、天皇ニ奉レル歌ニテ、「天雲を、はろにふみあたし、鳴神も、今日爾益而、可之古家米也母。」トアリ、大御前ニ侍ル時、雷鳴アリシヲ詠メルモノカ、「はろにふみあたし」ハ、「散々ニ踏ミトヾロカシ」ノ意トイフ、「迅雷、固ヨリ恐シケレド、今日、殊ニ、大御前ニ召サレタル恐サニマサリテ、恐シカラムヤハ、恐シカラズ、」ノ意ナリ。右二首ハ、「けむ」ノ「けまく」トモ、「けめ」トモナル例ニ引ケルナリ。「春

の日の、心愛憐しきに、れくれ居て、君に戀ひつゝ、顯しけめやも。(萬葉、十五)ナド、モアリ。

一二六節　(本、一七二)萬葉、十四ノ歌ハ、「氣ガネヲスルナ、眼前ダケ善クアラバ」ナリ。雄略紀ノ歌ハ、木工猪名部眞根ガ刑セラレムトスルトキ、同伴ノ詠メル歌ナリ、「可惜しき、猪名部のたくみ、かけし墨繩、玄が無けむ、誰かかけむよ、可惜墨繩。」トアリ、「玄」ハ「そ」ニテ眞根ヲサス、墨ヲ打ツヲ「かく」トイフ。

一二七節　(本、一七四)從來ノ語學書ニハ、形狀言ノ「深み、茂み、」「惡げ、嬉しげ、」「善さ、」「惡しさ、」(體言トナルモノ)ナドノ「み、げ、さ、」ヲ、活用トシテ說ケルガ多シ、サレド、是等ハ、一種ノ接尾語ヲ、語根ニ添ヘテ、體言トスルモノニテ、活用ニハアラズ。殊ニ、「げ、さ、」ノ如キハ、形狀言ニハ限ラズ、他ノ種々ノ語ニモ、「人げ、外げ、」「わはれげ、」「事ありげ、」「物思はずげ、」「逢ふさ、離るさ、」「行くさ、來さ、」ナド添フコトモアルナリ、是等ヲモ活用ナリトハ言ハルマジ。尙「み、げ、さ、」ノ事、本書ノ第四六二節、以下四節、及ビ、第四八〇、第五二七節ニ論ズベシ。

一二八節　○又、「月清み、山高み、」「苦をあらみ、」「瀨をはやみ、」ナドイフ「み」モアリ、又「遊さみ、笑ひみ、」「見ねみ、見ねずみ、」ナドノ「み」モアリ、共ニ本書ノ第四八〇、第四八一節ニ說クヲ見ヨ。

一二九節　(本、一七五)拾遺、十三ノ歌ノ「ひとりかもねむ」ハ、「獨リ寢ムカ、マア、寢ラレズ、」ノ意ナリ。古今、十九ノ歌ハ、「富士の嶺の、ならぬれもひ(火)に、燃ねど燃ね、(ヨ)神だにけたぬ、むなし烟を。」ニテ、「成ラヌ苦慮ニ、胸ガ燃エルガ、モエルナラバモエヨ、富士ノ嶺ノ神デサヘ、其山ノ煙ヲ消サナイデ、常ニ燃エテヰルモノヲ、マシテ人間ハセウコトガナイ。」ノ意ナリ。

一三〇節　○本書ニ說ケル外ニ、格外ナルモノアリ、「無し、」「嚴重し、」ハ「志幾活用」ナルニ、「神無月、」「正無事、」モアリ、「友無し千鳥、」「根無し事、」モアリ、皇極紀、「重日、此云伊柯之比、」又、「嚴し鋒、」「嚴物造」ナドモアリ、又「空し、」「可惜し、」ハ「志々幾活用」ナルニ、「空手、」「空車、」あたら事、」モアリ、「空し車、」「空し舟、」「空し烟、」モアリ。(俗ニ、「涼し、」ヲ「涼風」ト用ヰルノ)前ノ第七八節ニモ言ヘル如ク、志々幾活用ノ「空し、」「可惜し、」ナドノ末ノ「し」マデ加ヘテ、語根トスルヿ、論アルヿニテ、前項ノ「空車、」「空し車、」「可惜事、」ナド、即チ、其論ノ起ル所ナリ、然レドモ、概シテ云ヘバ、「し」ヲモ加ヘテ語根ト見ル方、先ヅハ理解

ニ早キナリ。

一三一節　(本、一七六、一七七)源順集ノ「ひとひを」ハ、絲氷魚ナルベキカ。千載集ノ歌ハ、返事セヌ人ニ送リタルナリ、「うるま」ハ、蠻國ノ名ナリ、詳ナラズ。「鼻高」ハ、屐ノ名ナリ、「苛高(イラタカ)」ハ數珠ノ玉ノ扁ク稜(カド)アルモノナリ、「髮長」ハ、神宮ノ、忌詞(イミコトバ)ニテ、僧ヲイフ。

一三二節　○英語ノ Adjective ハ、大抵、名詞ニ冠ラセテ、其形狀性質等ヲイフ。我ガ形容詞モ、名詞ノ形狀性質等ヲイフハ、相同ジケレドモ、語ノ成立ニ至リテハ、甚ダ相異ナリテ、語尾ニ、變化アリ、法アルト、動詞ノ如クニシテ、且、名詞ノ後ニ居テ、文ノ末ヲモ結ベリ。(羅甸、佛、獨、等ノ形容詞ニハ、變化アリ、且、或ハ、名詞ノ後ニ用ヰルモアリ、然レドモ、其ニ、文ノ末ヲ結ブコトハ、無キガ如シ。) サレバ、我ガ形容詞ハ、Attributive verb トイフベク、直ニ「形容動詞」ト命名セバ、Adjective ノ譯語ノ形容詞ト混ゼズシテ可ナラム、トモ考フルナリ。

我ガ形容詞ノ特性ハ、右ノ如シ、然ルニ、世ノ洋文法ヲ以テ、我ガ文法ヲ論ズルモノ、彼ノ語法ノ先入シテ主トナレルガ故ニ、之ヲ肯ハズシテ、徒ニ「高き、深き」ハ、Adjective ナリ、「高く、深く」ハ副詞ナリ、「高し、深し」ノ「し」ハ、一箇ノ助動詞ノ如キモノナリ、ナドイヒテ、各自、別語ナリト誤認シ、一語ノ語尾ノ變化ナルヿヲ曉ラザルモノ多シ。サレド、「高き、深き」ヲ獨立ニ用ヰ、名詞ニ冠シテ、「高き山、深き海」ナドイフ時ニコソ、Adjective トモ言ハルレ、「山ぞ高き、海ぞ深き」或ハ「山こそ高けれ、海こそ深けれ」ナド、文ヲ結ブヲバ如何ニカスル。又「高く、深く」ヲ獨立ニ用ヰテ、「高く昇る」「深く思ふ」ナドイフ時ニコソ、副詞トモイハルレ、若シ、「山高く(中止法)海、深し」ト言フトキハ、何トカスベキ、「高く」トイフ副詞ニテ、「深し」ノ意ヲ修飾(モデハイ)ス、トイフベキカ、「高く深し」トイヒテ、何ノ意ヲカ成スベキ。凡ソ、我ガ形容詞ニハ、斯ル一種ノ特性アルモノナレバ、別ニ、本文ノ如キ規定アルナリ、尙、本文ニ說ケル所ヲ玩味スベシ。

一三三節　○國語ニテ、生得ノ Adjective ヲ求メバ、「新(ニヒ)、初(ハツ)、眞(マ)、御(ミ)」ナドイフ一類ノ語ナラム。サレド、是等ノ語ハ、何レノ名詞ニモ冠セシムベキニアラズ、其慣用ニ局レル所アリ、且、獨立ニハ用ヰズ、必ズ、熟語トナリテ文中ニ出ヅ、故ニ、今ハ、コレヲ接頭語トシタリ。

一三四節　○又洋語ノ Adjective ニイフ階級(Degree)ハ、其語體ヲ變シテ成ルモノナレド、我ガ形容詞ニハ、此ノ事無シ、コレヲ譯セムニハ、「是より善し」、「最も善し」ナドヽモスベケレド、ソノ「より」、「最も」ハ、別語ヲ用ヰルナレバ、形容詞中ノ一則トシテ說クベキモノナラズ。

一三五節　(本、一七八)「なり」、「たり」、「せり」、「でとし」ナドハ、一個ノ動詞ノ如キ意義アレド、獨立シテ、一文ノ冒頭ヨリ用ヰラレズ、常ニ、必ズ、他語ノ下ニノミ付キテ、文中ニ出ヅレバ、尙、助動詞ナリ。

一三六節　○助動詞ハ、大抵、事物ノ狀態ヲイフ語ナレバ、自動、他動、ノ性ナキガ多シ。但シ、「行かす」、「受けさす」、「立たしむ」ナドハ、他ヲ役スル動作ノ性アリ、「行かる」(得ル行)、「受けらる」(得ル受ル之)ナドハ、自ラ爲シ得ル動作ノ性アリ。又「殿造せり」、「衣笠にせり」ナドハ、全ク、他動ニテ「時雨せり」、「紅葉せり」ナドハ、自動ノ意トモナル。

一三七節　○國語ニハ、開口ニ、濁音、良行ノ音、ナキヲ則トスルニ、助動詞ニハ、「す」、「べし」、「でとし」、「らる」、「らし」ナドアリ、是レ、他語ノ下ニ付クベキモノナル證ナリ。

一三八節　○「行き交ふ」、「爲難ぬ」、「言ひ過す」、「讀み止す」、「馴れ初む」ナドノ「交ふ」、「難ぬ」、「過す」、「止す」、「初む」ナドハ、獨立ニ用ヰタルヲ見ザレバ、助動詞ノ如クニモ思ハルレド、其意義、全キ動作ヲ言ヘバ、動詞ナルベシ。

一三九節　(本、一八一)所相ノ標準ヲ定メタルハ、新案ナリ、當レリヤ、此ノ所相ノ標準ハ、尋常、動詞ニ要スル標準トハ、異ナリ、「賊に、家に入らる」ノ如シ、上ナルハ、所相ノ標準ナリ、下ナルハ尋常ノモノナリ、漢文ニ「爲人所殺」ナドアル「爲人」、是レナリ、「爲」ノ字此ノ如ク用ヰラルヽトキハ、去聲(于僞切)ニテ、此ノ場合ノ意義ハ、增韻ニ、「所以也、緣也、被也」ナドアル、當レリ、即チ「爲人所殺」ト讀ムベキナリ。因ニ云、コレヲ、常ニ、「爲人所殺」ト讀メド、コレハ、韻會ニ、「助也」、「增韻ニ、「護也、與也」ナドアル方ノ意義ニテ「爲君致忠」ナドイフ場合ニ讀ムヿ多キニ連レテ讀ムニテ、非ナリ、「殺さるゝ」ニ、助也、護也、ノ意ヲ用ヰテ「爲人所殺」トイヒテハ、「他人ヲ助ケムガ爲ニ、己ガ命ヲ捨テヽ殺サルヽ」ヿトナル、サレバ、之ヲ避ケムトシテ、「爲人所殺」トモ讀メド、漢文ニテ「爲」ノ字ノ「成す」、「成る」ノ意義ナルトキハ、平聲(于嬌切)トナレバ、法ニ合ハヌハ論ナシ。(國語ノ上ニ付キテモ、此ノ旁訓、義ヲ成サズ)

一四〇節　又、漢文ニ「所殺者白帝子所殺者赤帝子」ナドアル「所殺」ハ、所相(殺さる)ニモ、能相(殺すところ)ニモ讀マレ、又、「子ヨリ繼母ニ對シテ「恩如所生」ナドイフトキハ「生ミツケラレタル」ノ意ニテ、所相ナレドモ、繼母ヨリ子ニ對シテ「愛之如所生」ナドイフトキハ「生タル所」ノ意ニテ、能相ナリ、甚ダ紛ハシ、注意スベキナリ。

一四一節　○國語ニテハ、他動詞ハ、論ズルニ及ハズ、自動詞モ、所相ヲ成ス。例ヘバ「眠ヲザラシメム」ト他ヲ制シテ、遂ニ他ニ眠ラレ、「小兒ヲ泣カシメジ」トシテ、遂ニ泣カル」ナド、是レナリ、「夫ニ行カレ、子ニ死ナレ、敵ニ逃ゲラル」ナド、皆、然リ。是等ハ、其動作ヲ直接ニ受クルニハアラデ、間接ニ影響セラルヽナレド、尙、所相ナリ。洋語ノ自動詞ニハ、斯ル所相ナキガ如シ(I am separated by him. I am departed by him. ナド言フベシ、ナドイフ人アレド、無理ナリ)

一四二節　(本、一八二)「忘るる」ヲ、四段ニ活用シタルモノ、日本紀、萬葉集等ニ見ユ、四段活用ナラバ「わすら、る」ニテ善ケレドモ、今ハ、專ラ、下二段活用トナリタレバ、本文ノ如クイヘルナリ。「五月やみ、こゝゐの森の、郭公、人ゑれずのみ、鳴きゐたるかな。」(後拾遺、雜三)我ゼかり物はなげかじ、憂き人に、わすらるゝ身も、わすれましか

ぜ。」(新千載、戀五)さりとも、と、思ふ心に、ひかされて、今まで世にも、ふる吾が身哉。」(後拾遺、戀一)

一四三節　(本、一八七)古今集、雜、下ニ「去かりとて、そむかれ(勢相)なくに、事しあれば、まづなげかれ(勢相一轉ノモノ)ぬ、わなう世の中。」那珂通世氏云、「昔懷しる」然思はる」ノ類ハ、可成ノ意、稍、輕クシテ、唯、其ノ動作ノ、自ラ起リテ、過ムベカラザルガ如キ意味ナリ。」那珂氏ハ、勢相ノ字ヲ、Voices, ノ總名トシタリ、此書ニテハ、Potential voice. ニ當テタリ。

一四四節　(本、一八八)萬葉、十五ノ「寢」ハ「寐ル」ヿナリ、「寐ル」ヿノ寐ラレヌ」ナリ。同、七ノ歌ノ「土針」ハ、草ノ名ナリ和名抄ニ「王孫、一名、黃孫、都知波利」トアリ、汁ヲ染料トシテ、衣ニ摺ルモノカ、「ゆ」ハ「より」ニ同ジ、「我ガ所有ナレバ、心カラ思ハヌ他人ノ衣ニ、色ヲ移サルナ、」ナリ。「ね」ハ「泣クヿ」ナリ、「泣ノミシ泣カル」ナリ。「れもはゆる」ハ「思ハルヽ」ナリ。

○所相ヲ、古クハ「る、ゆ」トノミ用ヰタリトイフニハアラズ、萬葉集ニ「れ、る、」ノ用例モ、往々見ユレバ、二樣アリシナリ。

一四五節（本、一九一、一九二）使役ヲ形作レバ、自動モ、他動ノ如ク變シ、他動ハ、別ニ、使役ノ標準ヲ要ス、ト制定シタルハ、此書ノ新案ナリ、尙、前ノ第一三九節ノ第一項ヲ參見スベシ。

一四六節（本、一九三）萬葉、五ノ歌ハ、二首聯作ノ反歌ニテ、幼兒ノ死ヲ悼ミテ詠メル歌ナリ、初ナルハ、「幼少ナレバ、道ヲ行クヿヲ知ルマジ、冥官ノ使ヨ、贈遺ハスベケレバ、脊ニ負ヒテ、道ヲ通ラセヨ、」ナリ。（此ノ「とほらせ」、或ハ、佐行四段ノ敬語ノ命令法カ、）次ナルハ、「佛ヨ、布施ヲ呈シテ、我ハ乞ヒ願フ（のむ）ナリ、佛ノ教ノ如ク、相違ナク、我兒ヲ、直チニ率ヰテ、佛ノ天上界ヲ知ラシメヨ、」ナリ。（此ノ「しめ」モ、敬語ノ命令カ、）

一四七節（本、一九六）上一段活用ノ動詞モ、スベテ、其第四活用ヨリ、使役ノ「さす」ニ連ルヿ、例ノ如シ。扨、其活用中ノ「着る、似る、見る」ニハ、相對シテ「着す、似す、見す、」アリ、此三語、下二段活用ナル生得ノ他動詞ナルガ如シ、（固ヨリ「着、似、見」ヨリ、直ニ、使役ノ「す」ニ接シタルニハアラズ、「煎す、居す、」ナド無キニアラズ知ルベシ、）活語雜語（初篇）ノ說、從フベキカ如シ。サルニ、或人ハ、此ノ三語ニ限リテ、「着さす、似さす、見さす、」ノ用法、多クハ、敬語ニ用ヰル、使役トシタルハ、稀ナリ、ノ約マリテ成レルモノニテ、生得ノ他動詞ナラズト云。サレド、榮華物語ノ御裝束ニ、「あやしき女ども、黑かひねり着せて、白粉といふもの、塗りつけて、かつらせさせて傘、ささせて、足駄、はかせたり、」トアル文中ノ「着せて」ハ、他ノ使役ノ語ト幷列シタレバ、誠ニ「着させて」ノ約トモ見ルベシ。然レドモ、同書、烏邊野ニ、「殿、今は、醫に見せさせ給ふべきなり、いとれそろしき事なりと、たび〳〵聞こえさせ給へど、醫に見すべかりにては、生きてかひあるべきにあらずと、心强く宣はせて、見せさせ給はす。」源氏物語、若紫ニ、「物ども、取りにつかはして、見せ奉り、」ナドハ、「見させ」ニハアラデ、「示す」トイフ程ノ意ナラム、（同書、東屋ニハ、「たゞ、眞心に、ねばしかへりみさせ給はゞ、」同、浮舟ニ、「かの人の御けはひに似せてなむ、もてまぎらしける、まづあけよと宣ふ聲、いとようまねび似せ給ひて、」若紫ニハ、「人に似させ給はぬを、」ナド、スベテ、生得ノ他動詞ト見ルベキガ如シ。元來、「歌よませさせ給ひ、琴彈かせさせ給ひ、」ナド、使役ヲ重用スルハ、（下ナルハ、敬語ニテ、）四段活用ニ限ルガ如シ。下二段活用等ニテハ、「失せさせ給ひ、」御几帳、

引寄せさせ給ひ、心にえ任せさせ給ふまじく、ナド單用スルノミニテ、失せさせ、任せさせ、ナド重用セヌガ如シ。サレバ、着せ、見せ、等ノ、着せ、見せ、モ、着、させ、見、させ、ノ約ニハアラザルベシ、然ラザレバ、着させ、見させ、ト重ナルコトナルベシ。又、乘る、乘す、寄る、寄す、ナドモ、似る似す、見る、見す、ト同趣ナリト思ハル、乘す、寄す、ヲ生得ノ下二段他動詞ト見レバ、似す、見す、モ同ジト見ルベキナリ、サラバ、見せ、ゑむ、ナド用ヰルモ、甲ヲシテ、乙ヲ使役セシムル意ナラバ、妨ゲナシトイフベキガ如シ。

一四八節　（本、一九七）使役相ト、所相ト、互ニ上下ニ相疊用セラルヽコトハ、本書ノ如ク說キテ足レリ、世ノ文典ニ、殊更ニ、表ナドニ作リテ示スモノアレド、煩ハシ。

○勢相ノ、る、らる、ハ從來ノ語學書ニ、解說シタルモノ、絶エテナシ、今、別ニ、コレヲ取立テタルハ、此書ノ新案ナリ。近版ノ文典、漸クコレヲ說クヤウナリタレ、尙、所相ノ附屬物ノヤウニ思ヘリ。然レドモ、本文ニモ言ヘルガ如ク、所相ニハ、一種特別ナル標準ノ語ヲ要スルニ、勢相ハ、然ラズ、意義モ、用法モ、全ク別ナルモノナリ。

○使役相ノ、ゑむ、モ、從來、一ノ動詞ノ如ク見ラレテ、す、さす、ノ列ニハ見忘レラレタリ、コレヲ助動詞ト定メテ加ヘタルモ、新案ナリ。

一四九節　○凡ソ、此ニ說ケル所相、勢相、使役相ハ、從來ノ語學書ニハ、動詞ノ語尾ノ活用ノ如ク見ラレテ、且、然、る詞、然する詞、然せらるゝ詞、然せさする詞、然せさせらるゝ詞、ナド、自、他、能、所、本、支、主、從、ヲ、平等ニ比肩セシメテ、類別、紛々糾々タリ。（自動詞ニモ、他動詞ニモ、各自ニ、能相、所相、使役相ヲ具シテ、類別、判然タルヲ、自動ノ能相ニ、他動ノ所相ヲ對セシムルナド、ワイザメナシ）今、コレヲ、動詞ヨリ切リ放シ、別ニ助動詞ト立テヽ、第七表ノ如ク、分屬次序シタルモ、新案ナリ、斯ク切リ放シテ、別ニ說ク方、動詞自己ノ語尾活用ト混亂セズシテ、文法授受ノ間ニ、甚ダ簡明ナルヲ覺ニ、世ノ語學家、如何トナス。（動詞、助動詞、各、活用アリテ、法ヲ成シ、時ヲ成ス、之ヲ混淆スルノ不條理ナルヿ、後ノ第一八九節以下ニ辨ズベシ。）

一五〇節　○世ノ文典ニ、所相ノ、らる、使役相ノ、さす、ノ列ニ、せ、らる、せ、さす、ヲ擧ゲタルアリ、此ノ、せ、ハ、佐行變格ノ、す、（爲）トイフ獨立動詞ノ第四活用ナリ、コレヲシモ擧

グベクバ「得らる」「歴らる」「得さす」「歴さす」ヲモ擧ゲズハアルベカラジ、要ヲヌ
ナリ。

一五一節　(本、一九九)「喜ぶる」「考へらる」ナドノ方ハ、所相ニテ、貴人ハ、何事ニモ、自ラ手ヲ下サズ、侍者ニセラルヽヨリ起レリトイフ説モアリ、己レモ、初ハ、其説ニ從ヒシカド、非ナリキ、勢相ノ方ナリ。(所相ニ要スベキ「何に」ノ標準語ヲ要セザル場合モアレバ、)

一五二節　(本、二〇〇)佐行四段ニ活用シテ、天然ニ敬意アル語ヲ、特ニ取リ出デヽ、事々シク、文典ニ説クモノアルハ、何ノ心ナルニカ、敬意アル動詞ナリトテ、特ニ甄別セムニハ、敬意アル名詞ヲモ、甄別セズハアルベカラジ、毎語ノ天然ノ意義ハ、辭書ニ據リテ、個々ニ知ルベキノミ、文法ハ其勞ヲ取リガタシ。「さかす」「たゝす」ナドハ、敬語トナリテモ「聞く」「立ツ」ノ意義コレニ伴フ「られ」「させ」「ざめ」ナドハ、敬語ニ變ズレバ、勢相、使役相、ノ意義ヲ失フ、同一ニ見ルベキニアラズ。

一五三節　(本、二〇二)「なり」ハ、獨立ノ動詞ノ力ヲ成セドモ、文ノ冒頭ヨリ用ヰラレヌバ、尙、助動詞タルベキヲハ、前ニモ論ジ置ケリ。

一五四節　○又「靜なり」「明なり」「詳なり」ナドイフ「なり」アリ、コレモ「靜に」「明に」「詳に」ナドイフ副詞ノ末ナル「に」ニ、動詞ノ「あり」ノ約マリテ「なり」トナレルモノナレド。(本書、第二六九節、參見)此ノ條ノ「なり」ト、少シ異ナリ、副詞ノ方ナルハ、尋常ノ「あり」ト同ジク「靜なら玄む」ナド、使役ノ助動詞ニモ連ヌベク、又「いつよりも、今宵の月は、さやかなれ、秋の夕も、たゞるゝかりに。」(仲文集)ナド、命令法ニモ用ヰラルヽニ、指定ノ「なり」ハ、然ルヲ能ハズ。因ニ云、比況ノ助動詞ノ「ごとし」ニモ「ごとくなり」ト連ネテ用ヰルヲアリ、是レモ「ごとくにあり」ノ約ナリ。

一五五節　(本、二〇八、二〇九)萬葉、二十ノ歌ハ、他鄕ニアリテ、故鄕ノ筑波山ヲ思ヒテ詠メルナリ、末句ハ「戀ひざらむかは」トイフニ同ジク「戀ひ思ひてあり」トイフ反語ナリ。

○「今宵の花に、なほ不如家里。」(萬葉、八)知らでぞ人は、待てど不來家留。」(同、四)夢に見ゐつゝ、寐不所宿家禮。」(同、四)求め安波受家牟。」(同、十七)「す」ヲ「ざり」トシテ解スベシ)ナドアレド、奇僻ナレバ、表ニ擧ゲズ。

○伊勢物語ノ歌ハ「いへゐねに、いはねゐ胸に、さわがれて、心ひとつに、なげく

頃かな。」ニテ、思ヒヲ、言ヒモ得テレズシテ、言ハデアレバ、胸ニ堪ヘガタクタ心ノ中ニノミ歎キ居ル時ナルカナ、」ノ意ナリ。萬葉、一「ますらをと、思へる我も、草枕、旅にしあれど、思ひやる、便を知らに、網の浦の、あまをとめらが、焼く鹽の、思ひぞ焼くる、吾が下心」同、十七「うなひ川、清き瀬ごとに、鵜川たち、かゆきかくゆき、見つれども、そこも飽かにと、ふせの海に、舟浮けすゑて、沖へこぎ」ナド。「知らずに」「飽かずに」ノ意ナリ。

一五六節　(本、二一〇)此ノ「ざり」ノ、第一終止法ノ用例、希ナリ、活語雜話、三ニ、榮華物語、月宴ノ「朱雀院は、御子達(ミコタチ)れはしまさざり、たゞ、王女御(ワウニヨウゴ)と聞ける御はらに、云々」ヲ引キタレド、まさざりけり」トシタル本モアリ。

一五七節　(本、二一二)又「今宵のみ、あひ見て後は、逢はじものかも」(萬葉、十)みだりに人を、寄せじものをや」(後撰、十五)南都本、源平盛衰記ノ文覺發心ノ條ニ「されど、一心に菩提の道に入り、出離得脱を願はむにはしかじものをと、思切て、やがて、髻切り」、太平記ニ「人に見知られじがために、還俗して」ナドモアリ。

○此ノ「じ」ハ、從來「ず、ぬ、ね」ノ附屬トシテ說カレタリ、然レドモ、本文ノ如ク活用ア

レバ、別ニ、獨立セシメタリ。

一五八節　(本、二二〇、以下)古今集遠鏡ノ序ニ「んは、俗言には、すべて、皆ゥとぃふ。來ん、ゆかん、をコウ、イカウ、といふ類なり、けん、なん、などのんも、同じ」「花やちりけんは、花ガチツタデアラウカ」「花やちりなんは、花ガチルデアラウカ」と譯す、さて、此チツタデといふと、チルデといふとのかはりをもて、けんとなんと、のけぢめをさとるべし」云々トアリ。

「押さむ」(押サウ)押してむ」「押しなむ」「押したらむ(押シタラウ)」「押しけむ」(押シタデアラウ)押してけむ」「押しにけむ」「押したりけむ」「押シテシマツタデアラウ」此ノ俚解、當ルベクヤ。

一五九節　(本、二二五)本書ノ外ニ、古文ニハ「年月、歷たりぬれど、わかざりし夕顏を、つゆ忘れ給はず。」(玉葛)上(ウヘ)に引きたりつる墨さへ、消えたる。」(枕草紙、二ノ一)簀の子に、ともしたりつる火は、早う消えにけり。」(蜻蛉、下ノ中)宮より、あす、俄に御迎へにと、宣はせたりつれど」(若紫)花薄、穗に出すべきことにもあらず、なりにたり。」(古今、序)額突ノ前ニ火ヲコシタリヌ、火白クカキタテタリ。」(長門本盛衰記、八牧夜討)内府ガ許ヘ、

マシマシタリツルカ、サニ候、參テ候。」(同、内大臣召兵)なか〳〵に、人とあらずで、酒壺に、なりにてしがも、酒に染みなむ。」(萬葉、三)去年の春、あへりし君に、戀ひにてし、櫻の花は、迎へ來らしも。」(同、八)常人の、戀ふといふよりは、餘りにて我は死ぬべくなりにたらずや。」(同、十八)庭草、むしりにて候ふと申す。」(平家、勘文)穩しう思ひなりにて侍り。」その名は、忘れにて、言ふ人もなくなりにたり。」ナドモアルナリ。サレド斯ル用例ハ、今ノ普通文ニハ奇僻ナルベクヤ。

一六〇節　○本書ノ例ニテ見レバ、「つ」ト「たり」トハ、現在ニテ止ル、「ぬ」ハ、現在ヨリ未來ヘ往ク、「けり」ハ、過去ヨリ現在ヘ來ル、ナド區別ナル說モイカヾ。

一六一節　○本書ニイヘル現在、過去、(三樣)未來、(四樣)ノ分類ハ、全ク、此ノ書ノ新案ニ係ル。現在ト未來トハ、固ヨリ論無カルベク、過去ノ「き」ト、大過去ノ「てき」に、き」たり、き」モ、論ナカルベシ。其他ハ、或ハ、難ズル人モアラム。「暮るゝか(現在)と、見れど明けぬる、」(半過去)生きたるか、(半過去)死ぬるか(現在)いかに、れもはへず、田舍人の歌にては、あまれりや、(半過去)足らずや、」(現在)我が宿の、草もなびけり、(半過去)露も落ちけり。」(過去)ナド、差別ナキカ如ク見ユレド、歌ハ、五七ノ字數ニ局セラレテ、格外ナル用法モアラムカ、「日頃思ひわび侍りつる心はげふなむ落ち居ぬる、と宣ひて、京にて生れたりし女子、こゝにして、失せにしかど、夜、やうやく、明けゆくに、かぢ取等、黑き雲、俄に出できぬ、風、吹きぬべし、御舟かへして、むといひて歸る、このあひだに、雨降りぬ、いとわびし。」植ゑし時、花見むとしも、思はぬに、咲き散る見れど、よはひ老いにけり。」古里を、出でにし後は、月影を、昔も見きと、思ひやらるゝ。」ナド、イカヾ思ハルヽモ、ナキニシモアラズ、數十百ノ用例ヲ集メテ、推考スベキナリ。然リト雖モ、文法上、動詞ノ時限トイフモノハ、緊要ナルモノニテ、古代ハ、トモアレ、科學進歩ノ今日トナリテハ、精密ナル用法、規定、無クハアルベカラズ、今ノ佛蘭西、和蘭、魯西亞、ノ文法ノ如キモ、皆、學者ノ作爲制定シタルモノナリト聞ケレバ、(此ノ別記ノ序論ニ說ケリ、)文法モ、人爲ノ力ヲ借ルベキモノナラム、因テ、今、愚ヲ顧ミズ、私淑シテ、制定セシ所、本文ノ如シ、尙、世ノ學者ノ評定ヲ待ツ。

一六二節　(本、二三三、二三四)古今、二ノ歌ハ、「ドレヤ、櫻ヨ、我モ汝ト同ジヤウニ、散リ失セテ(死)シマハウ、人モ、一盛リアツテ後ニ衰ヘタナラバ、世ノ人ニ、老耄ノ狀ヲ嫌テ

見ラレル(見エ)デアラウカラ」ナリ、同、八ノ歌ハ、來客ノ夕暮ニ歸ラムトスルヲ引留メムトノ心ヲ詠メルナリ、「夕方ノ此ノ庭ノ垣根ハ、山ト見エテ欲シイ、夜ハ越エラレマイト思テ、歸ル人モ、今夜ハ、此ニ宿ヲ取ルヤウニ」ナリ。

一六三節　○又、「道知らで、やみやは爲なぬ逢坂の關のあなたは、うみ(海、靈ミ)といふなり。」(後撰、十一)初二句ハ「何トテ、道ヲ知ラズシテ、止ミテハシマハヌヅシマヘカシ」トイフ反語ナリ、此ノ「な」モ、半過去ノ「ぬ」ノ第四活用ニテ「打消」ノ「ぬ」ノ「や」ノかゝりニテ添ヒタルナリ、然レドモ、奇僻ナレバ、圖ニハ省キツ。又、本書ノ此ノ前條ノ「つ」ヲ「かくながら、散らで世をやは、つくしてぬ、花のときはも、ありと見るべく。」(後撰、三)ナド用ヰタルモ、コレト同ジ趣ナリ。

○「つ」ト「ぬ」トノ、自他所屬ノ別ニツキテ考フルニ、元來「つ」ノ音ハ鋭ニシテ「ぬ」ノ音ハ軟ナレバ、必シモ自他ニハ關セズシテ、唯、語意ノ、其場合ニ因リテ、緩緊アルニ從フモノカ、サレド、自動ハ自ラ緩ニシテ、他動ハ自ラ緊ナレバ、自ニ「ぬ」、他ニ「つ」、相伴フ場合、自然ニ多キナルベシ。又「たり」ハ「つ」ノ活用ノ「て」ト「あり」ト約マレルモノナレド、自ニモ他ニモ連ルナリ。

一六四節　(本、二三六)「せり」ハ、元來、佐行變格ノ「爲」ヨリ、良行變格ノ活用ニ轉ジタルモノニテ、次項ノ「行けり、押せり」ニ同ジキモノナレバ、獨立動詞ナルガ如キモ、理ナリ、然レドモ、文中ニアリテハ、他語ノ下ニ附屬シテ出デ、一文ノ冒頭ヨリ用ヰラルルヿナク、且、半過去ノ意ヲ成ス語ナレバ、獨立スベキ性ノモノナラズ、因テ、助動詞ニ入レタリ。

又次條ノ「行けり、押せり」ノ如キ語尾活用ヲ形作ルハ、四段活用ノ動詞ニ限ル、ト規定セラレテアリ、此ノ條ノ「せり」モ、趣ハ同ジケレド、佐變活用ノモノナレバ、同一ノモノト說キ難シ、サルヲ、或ル文典ニ「爲リ、座セリ、論セリ、」等ヲ一樣ニ列ネテ說ケルアルハイカガ。(オハセリ」トイフ活用アリヤ)

一六五節　(本、二三七)此ノ用法ハ「行きてあり、押してあり、」ノ約マリテ成レルモノニテ其中間ノ「て」ハ、即チ、半過去ノ「つ」ノ活用ナレバ、半過去ノ意ヲ成スナリ。

一六六節　○言海ノ附錄、語法指南ニ、此活用ノ語尾ヲ切リ放シテ、動詞ノ活用表中ニテ、四段活用ノ第三活用ニ付シタルヲ、批難スル人アリ、己レ、固ヨリ、此活用ノ「行きてあり」ノ約ナル程ノ事、心得ザリシニアラズ、四段ノ第三活用ヨリ活用ス

ト認メタルニモアラズ、然レドモ、斯クシタラムガ、學ブ者ノ合點ノ速カラムカ、ト思ヒテシタルナリ、(語原ハ、トモアレ、)且、四段活用ニ、此ノ旁生ノ一活用アルヿヲ、動詞ノ活用表中ニ加ヘテ置カムトスルニ、他ニ、方法モナカリシガ故ナリ。然レドモ、今ハ、批評ヲ容レテ、表ニハ削レリ。サレバ、此ノ活用ノ表ハ、同ジ四段活用ノ旁生ノ一活用、及ビ、其半過去ニテアリナガラ、別ニ、此ニ孤立シテアレバ、學ブ者、四段活用、及ビ、其半過去ヲ考究スルニ當リテ、見忘レザラムヤウニ、注意スベキナリ。

一六七節　○此ノ語ハ、二個ノ動詞ニテ成レルモノナレバ、助動詞ノ條ニテ說クベキモノナラネド、助動詞ノ「て」ヲ、中ニ含ミテ、且、半過去ノ意ヲ成スモノナレバ、類ヲ以テ、此ニ說ケルナリ。(動詞ノ四段活用ノ條下ニテ說カムヿモ、叶ハズ、半過去ノ意アレバナリ、)

一六八節　○此ノ「行けり、抑せり」ナドヲ、獨立ノ一活用トシテ、他ノ動詞ノ諸活用ト、幷立セシメテ說クモノアルハ、イカヾナリ「行けり」ハ「行く」(トアリト)ヨリ旁生シタル半過去ナリ、コレヲ「行く」ノ活用ト比肩セシムルハ、平宣長ト本居春庵トヲ、列傳ニ幷ベ立ツルガ如シト思ハル。

一六九節　○土佐日記ノ「何とも思へらず」ノ句ハ、夜航ノ船中ノ婦女ノ、心細ク思フニ對シテ、イヘルナリ。「鳥の跡」ハ、文字ナリ「とゞまれらむ」ハ「トヾマツテアツタナラバ」ナリ。滄浪ハ、支那ノ川ノ名ナリ。續紀ノ「面帶利」ハ「思ヘリ」ナリ、他モ然リ。壬生二品集、下ニ「いたづらに、朽ちやはてなむ、戀衣、たてれをれとも、いふ人もなし。」ナドモ、同ジキカ。萬葉、十五ノ歌ハ、第六三節ニ說ケリ。

一七〇節　(本、二四〇)「けり」ハ、萬葉集ニ「來有」ノ用字モアレバ「來てあり」ノ約マレルナリトモイフ。或ハ「來歷てあり」ノ約ナリトモイフ、古事記ノ中ニ「あらたまの、年が岐布禮ば、あらたまの、月は岐閉行く。」萬葉、五ニ「萬世に、年は岐布とも、梅の花、たゆることなく、咲きわたるべし。」ナドアルハ、「來、歷、」ナレバ、左モアルベキカ。

一七一節　○「梅の花、咲きたる園の、青柳は、かつらにすべく、なりに家良受夜。」(萬葉、五)斯ク「けら」トモ活用シタルアレド、僻典トスベシ。

一七二節　(本、二四一)詞玉緒、六ニ「泉式部物語に「なりけりき」といへる詞あり、けりき、例なきことなり、いかゞ、」トアリ、コレモ「けり」ハ、說明スルノミ、過去ノ意ハ「き」ニアル

ナルベシ。

一七三節　(本、二四三、二四八)古今、ノ歌ハ、「京人、我ヲ、古物ト見捨ツルヲ厭ヒテ、奈良ヘ來テ見タレド、此モ古都トモ云テ、ヤハリ、古物ト思ハル、憂キ名デヤワイ、」ノ意ナリ。伊勢物語ノ歌ノ振分髪ハ、古ヘノ童男女ノ髪風ナリ、左右ニ分チテ垂レ、肩ニ至ル、歌ノ意ハ「諸共ニ、幼少ヨリノ馴染ナルニ、今ハ、互ニ成長シタリ。」トナリ。古今集ナル「れいらくのこむと知りせを」ヲ、遠鏡ニ「來ウトイフコヲ、トウカヲ知タナラ、」ト譯セリ、「知りせを」ハ「知りしかを」ノ未定ナルヲ知ルベシ。

一七四節　(本、二五一)万葉集ニ「今、金」ノ音ヲ「將來」ニ用ヰ、「念」ヲ「將寐」ニ用ヰ、或ハ「歎敢、知三」ナドヲ「將歎、將令知」ノ意ニ用ヰタリ、「今金念敢三」ノ字音ハ、皆、唇内音ニテ、韻ハ「む」ナリ、(ん)ナラバ、舌内音ノ字ヲ用ヰルベキナリ、)又「奈何責、可佐寒、歸來六」ナドモアリ、愈、證スベシ。(是等ヲ「ん」トハ言ハルマジ、)又「見む」ノ「みまく」トナルハ、「見る」ノ「みらく」トナリ、「いふ」ノ「いはく」トナルト、同ジコトナルベシ。

一七五節　(本、二五三)「けむ」ハ、「けり」ノ活用ノ「けら」ト、未來ヲイフ「む」ト、約マリテ成レルモノカ。「たちちめは、かゝれとてしも、ぬぎたまの、我が黒髪を、撫ですやありけむ。」

(後撰、十七)(後ノ第三〇九節ヲ見ヨ)

一七六節　(本、二五五)「憶良等、者、今者將罷、子將哭、其彼母、毛、吾乎將待曾。」(萬葉、三)トアル「將罷」ハ、自己ノ動作ノ未來ニテ「將哭、將待」ハ、家ニアル妻孥ノ動作ノ推量ナリ」共ニ「將」ノ字ヲ用キテアレド、推量モ、固ヨリ、未來ノ事ニ屬スレバ、然ルナリ。「ことしより、花咲きそむる、橘の、いかで昔の、香にはふらむ。」(新古今、三)

一七七節　(本、二五六)古今、十ノ歌ハ、「浪ノ、風ニ立ツヲ、花ト見做シ、散ルト見做シタルナリ。伊勢物語ノ歌ハ、雨ニ濡レテ歸ル人ニ詠メル歌ナリ、催馬樂ニ「青柳を、片絲によりて、鶯の、縫ふといふ笠は、梅の花笠。」トアリ。

一七八節　(本、二五七)「まし」ノ「ま」ハ、未來ノ「む」ヨリ轉ジタルモノカ。或ハ「む」ト「かし」(感動詞)トノ約マレルモノトモイヘド「まし」ニハ「まし」ノ活用アルニ「かし」ニハ「かしか」ノ活用ナケレバ、イカゞ。

一七九節　本、二六〇「ませを」トイフ語ニツキテハ、詞玉緒ニハ「まくせを」ノ約ナリトイハレ、義門師ハ「行かまはし」ナドノ「ま」ニ、佐變ノ「せ」ノ添ヘルモノトイハレ、ソノ「ま」ハ「まく」ノ略ニテ「まく」ハ「まし」「ましか」ノ連用言ナリトイハレタリ。サレ

ド、コノ「せ」ニ「爲ル」トイフ力アリトモ思ハレズ、又「ゆかますする」「ゆかますれむ」トモ、活用ハセヌナリ。前ニ「無かりしかむ」ト「無かりせむ」トノ既定、未定、ヲ言ヘルガ如ク、コヽナルモ「聞かましかむ」ト「聞かませむ」トヲ、既定、未定、ト定ムベキガ如シ。

一八〇節　(本、二六一)古今、十七ノ歌ハ、布引ノ瀧ヲ詠メルナリ、瀧ノ水ノ飛散スルヲ、玉ニ譬ヘテイヘリ、初二句ハ「キット、別ニ人ガアツテ、緒ニ貫キタル玉ヲ拔キ亂ル〻(亂ス)ノデアラウ」ナリ下二句ハ「袖ニ包ミキレヌ程ニ、繁ク散ル哉」ノ意ナリ。

一八一節　○「宜しかも、蘇我の子等を、大君の、仕はす羅志枳。」(推古紀)空蟬も妻を、爭ふ良思吉」(万葉、一)此ノ如キ活用モ、古クハ、アリシナリ。

一八二節　(本、二六三)土佐日記ノ歌ハ、土佐ノ國司、前任ノ人、後任ノ人ニ、海路ノ難ノ同情ヲイヘルナリ「誰ならなくに」ハ「誰ナラズ、君ナリ」ト、後任ノ人ヲ指セルナリ。万葉、三ノ歌ノ眞野榛原ハ、攝津ノ八田部郡ノ地名ニテ、景色アル處ト聞ユ「白菅ノ生フル眞野ノ榛原ヲ、往ク方ニ來方ニ」(本書ノ第四六四節、及ビ、此ノ別記ノ第二七九節、參見)ノ意ニテ「此ノ榛原ヲ、君コソハ、旅ノ往來ノ度々ニ見給フラメ」トナリ。同、五ノ歌ノ、松浦モ玉島モ、肥前ノ地名ナリ、「若鮎ヲ釣ル女子等ヲ見ルラム人ガ、羨シサヨ。」トナリ「とるし」ハ「うらやまし」ノ古言ナリ。同、三ニ「あらたへの、藤江の浦に、すゝき釣る、海人とか見らむ、旅ゆく我を。」

一八三節　○「らし」「べし」「らむ」ハ、他ノ動詞ニテハ、ツノ第一活用ニ接スベキモノナルニ、上一段活用ニ限リテ「る」無クシテ接スルコト、一ノ古格ナリ、「とも」トイフ豆爾乎波モ、第一活用ニ接スベキ通例ナルニ「えむ〳〵見とも飽かむ君かも、立つとも居とも、君がまに〳〵」(本書ノ第三七七節ヲ見ヨ)ナドノ用例アルモ同ジ趣ナリ。大和物語ニ「見も見ずも、誰と知りてか、戀ひらるる」ナドアルモ「見るも見ずも」ナルベキカ。「見、見ず」共ニ名詞ナルカ)或ル人ハ、コノ「見べき」「似らむ」等ヲ、連用言ニ接スルモノナリト說ケリ、サレド將然モ、連用モ、同ジク「見」「似」ナレバ、何レトモ定メガタキノミナラズ、他ノ活用ノ將然、連用ニ「行カベキ」「行キラム」「受ケベキ」「受ケラム」ナドスベクモアラネバ、此ノ場合ノ「見」「似」ヲ連用言ト認メガタシ。「らし」「べし」「らむ」ハ、元來、終止言ニ接スベキモノナレバ、終止言ニ、語尾ノ「る」無クシテ接ス、ト定ムル方、理アリゲ

ナラズヤ。

又、良變ニテハ、其第二活用ニ接スベキ語ヲ「る」ヲ省キテ接スルヿ、常ナリ「あ(ル)べきかぎり」「さ(ル)べき僧ども」「人もあ(ル)なり」「心地すべか(ル)めれど」「其他「あ(ル)らし」「た(ル)らし」「な(ル)らし」「け(ル)らし」ノ如シ。又「歸り來るまでに、いはひて待たね」(萬葉二)「あはび白玉取りて來るまでに」(同)又ハ、前ニ擧ゲタル「往くさ、來さ」ナドモ「來るまで」「往くさ來るさ」ナルベク思ハルヽニ「る」無クシテ接スルヿ、皆異例ナリ。

一八四節　(本、二六四)萬葉、九ノ歌ノ「くひ山」ハ、山名ナリト云、ソレニ「春草を馬食ふ」ト言ヒカケタルナリ、「雁の使」トハ、漢ノ蘇武ガ故事ニ因テ、言ヘルナリ「くひ山ヨリ越エ來ル雁ヲ、故郷ヨリノ使カ、ト見タルニ、宿リモセズ、行キ過ギタリ」ノ意ナルベシ。古今、十六ノ歌ハ、此ノ別記ノ第三〇三節ニ說ケリ。

一八五節　(本、二六五)古今、十九ノ歌ハ「凡ソ、老朽ノ譬ヘニイハルヽ、難波ノ長柄ノ橋モ、今度、新築スルワイ、今ハ、カヤウニ老朽シタル我身ヲ、何ニ譬ヘヤウカ、譬ヘルモノガナカリケリ。」ノ意ナリ。

一八六節　(本、二六六)何のごとし、何がごとく、ナドノ用例ニ據レバ、獨立ノ形容詞ナルガ如シ、然レドモ、一文ノ冒頭ニ用ヰラレザレバ、語首ノ音モ、濁音ナリ、何、助動詞ナルベシ。萬葉、三ノ歌ハ、僧ノ歌ニテ、世ノ無常ハ、譬フベキモノナシ、朝ニ、船發シテ漕ギ行キシ、其跡方モ無キガ如シ、トノ意ナリ。

一八七節　○凡ソ、此ノ篇ニ助動詞トシタルモノ、從來ノ語學書中ニハ、スベテ、豆爾乎波ノ中ニ混シテ說ケリ。然レドモ、是等ノ語、皆、語尾活用ヲ具シ、法ヲ具シテ、能ク文章ノ末ヲ結ベバ、豆爾乎波ニ混ズベキニアラズ。サレド、是等ノ語、獨立ニテハ用ヰラレズ、他語ノ意ヲ補助スル用ノモノナレバ、固ヨリ、動詞ニハアラズ、因テ、今ハ、助動詞トシテ、一門ニ立テタリ。

一八八節　○又云、助動詞ハ、洋文典ニテハ、多クハ、動詞ニ附說セリ、然レドモ、國語ノ助動詞ハ、活用ト法トヲ具シテ、其數モ多ク、其ノ規定モ繁雜ナルモノナレバ、一門ニ立ツベキ價値アリ、且、別門ニ立テヽ說ク方、學ブモノニモ便ナリ、因テ、今ハ、此ノ如シ。

一八九節　○前ノ動詞ノ條末ニ於テモ、國語ト洋語トノ間ニ、動詞ニ、天性ノ異同アルヿ

ヲ論ジタリ。サルニ、世ノ洋文法ニ據リテ、國文法ヲ作ルモノ、此ニ、助動詞トシテ說ケル「打たる」「遂げらる」「打ちつ」「敎へさ」「打たむ」「遂げむ」等ノ「る」「らる」「つ」「さ」「む」ナドヲ、動詞ノ語尾變化トシ、Voices, Moods, Tenses. 等トシテ、動詞ニ就キテ說ケルモ多ケレバ、今、反覆シテ、其說ノ理ナキヲ辨ぜム。

右ノ助動詞ドモヲ、動詞ノ語尾變化ト見ルキハ、第一ニ、其變化ノ稱呼ニ就キテ、辨別ニ苦ムコトアリ。ソハ、先ヅ、「打つ」トイフ動詞ノ變化ハ、「つ、て、た、ち」ナリトシテ、更ニ、又、其ノ Passive voice. 「打たる」ニ「る、るる、るれ、れ」ノ變化ヲ起シ、又、其ノ Potential mood. ノ「打たる」ニモ「る、るる、るれ、れ」ノ變化ヲ起シ、又其ノ Past tense. ノ「打ちさ」ニモ「さ、し、しか」ノ變化ヲ起シ、又、其ノ Future tense. ノ「打たむ」ニモ「む、め」ノ變化ヲ起スナド、其他、尙、幾多ナルコト、擧グルニ堪ヘズ。是等ヲ、スベテ、一動詞ノ語尾ノ變化ナリトスルキハ、一動詞ニ數十百樣ノ變化ヲ起スニ至ル。

而シテ、右ノ諸變化ハ、皆、各自ニ、直說法、分詞法、命令法、等ノ諸法ヲ成スガ故ニ、(打たれよ」トイヘバ、Passive voice. ニ Imperative mood. ヲ起シ「打ちし人」トイヘバ、Past tense. ニ Participial mood. ヲ起シ「打ちてよ」トイヘバ、Past tense. ニ Imperative mood. ヲ起ス等、其餘、皆、然リ。然ノミナラズ、各助動詞ハ、又、各自ノ變化ヲ以テ、他ノ助動詞ニモ、互ニ重疊連續スルガ故ニ、其連續スルモノヲモ連ネテ、一動詞ノ變化ト見ザルヲ得ズ、(一連續ハ、語尾ナリ、二連續以上ハ、語尾ナラズト區別スルハ、難カラム、)サレバ「打たれ玄めよ」「打たゑめられたりしかむ」ナド、層々、重用スルモノニ至リテハ、如何ニカ、コレニ命名スベキ。

右ノ如クナレバ、Mood ニ Voice ヲ生シ、Voice ニ Mood ヲ起シ、Tense ニ Mood アリ、Mood ニ Mood ヲ重スル至ル、豈ニ解スベカラザル極ナラズヤ。既ニ、動詞ノ條末ニモ論ジタルガ如ク、英文法ノ如キハ、羅甸文法ノ模擬ニ出デタルモアレバ、重複變化ノ不都合モアレド、羅甸文法ノ如キハ、一動詞ノ變化ニ、法モ、口氣モ、時モ、具備スルモノナレバ、然ル紊亂ノ不條理無ク、又、初ヨリ、其國語ノ天性ニ隨ヒテ立テタル文法ナルベケレバ、然ル不條理ノ起ル謂ハレモ、無カルベキナリ。畢竟ズルニ、國語ノ特性ヲ、善クモ推究セズシテ、唯、徒ニ、此ヲ彼ニ合ハセムトスレバコソ、サル牽强說モ起ルナレ、況ムヤ、其說ノ如クストモ、Mood, Voice, Tense. トイフ語原ノ意義ニ於テ、既ニ其大本ヲ失ヘバ、强ヒテコレヲ立ツト

モ、洋文法ノ忠臣トモ爲リ難カラムヲヤ。

此ノ故ニ、國語ニハ、國語特性ノ制ヲ立テ、動詞ト助動詞トヲ甄別シ、扱、國語ノ助動詞ハ、變化ト法トヲ具シ、且、助動詞ト助動詞ト、相重用スル定則モアリ、而シテ、受身トイヒ、打消トイヒ、過去トイヒ、未來トイフガ如キ意義ハ、助動詞ノ其語體ニ生得ス、ト說キ去ラバ、何ゾ、然ル紛絲ノ紊レヲ起サム、各國天然ノ言語ニ、差違アルベキハ、理ノ然ルベキ所ニシテ、其間ニ、惑ヒヲ入ルベキニアラズ、唯、其國語ノ天性ニ隨ヒテ、語法ヲ制定スベキナリ、彼ニアレバトテ、我ニ模擬揑造シ、彼ニ無ケレバトテ、我ニ制定セザルハ、其見、亦、陋ナラズヤ。

一九〇節　(本、二六八、二六九)副詞ノ名稱ノ說ハ、前ノ第一二一節ニアリ。「修飾ス」トイフハ、英語ニ、To modify. トイフ「更ニ、別樣ノ意味ヲ附加スル」義ナリ。

○本書第二六九節ノ事ニ就キテハ、此ノ別記ノ第一五四節ヲ見ヨ。

一九一節　(本、二七二、二七三)「行くな、な行きそ、な、そ」ハ、副詞ト見ルベシ。「行く」ノ動作ヲ修飾スル語ナレバナリ。

古今、八ノ歌ハ、送別ノ歌ニテ「遠國ニ離レテ居テモ、思ヒテ居ル友人ニ、隔心アルナ」ノ意ナリ。同、十三ノ歌ハ、「內心ニ思ヒテ居ルヿヲ、紫根ノ摺衣ノ色ノヤウニ、顏色ニ出スナ、キット」ノ意ナリ。宇治拾遺「吾嬬人、生贄を止むる事」ノ條ニ「いかにも〳〵人な寄せ給ひそ、又、これにみづから侍りと、な人にゆめ〳〵知らせ給ひそ、といふ。」

一九二節　(本、二七五)萬葉、三ノ歌ノ比良ハ、近江ノ地名ナリ、「さかる」ハ、「離ルヽ」意ナリ。万葉、十七ノ歌ハ、「我、去レリトテ、詫ブヿ勿レ、吾ガ兄子ヨ」ノ意ナリ。

一九三節　(本、二七六)世ノ文典ニ、副詞ヲ、地位、時刻、順序、分量、決定、ナド、數種ニ分類シテ說ケルガアリ、若シ、語義ノ分類ヲ、文典上ニ說カバ、アラユル名詞、動詞、形容詞、ノ意義分類モ、皆、說カザルヲ得ザラム、何ノ究極スル所ゾ。

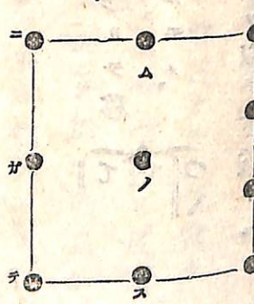
一九四節　○此ノ章ニ、副詞トイフモノ、從來、國學諸哲ノ論及セシモノ、ヲサヲサ見エズ、サレバ、此ノ一類ノ語ニハ、某言ト、名稱ヲモ付セズシテアリキ、(唯、富士谷成章氏ノ「かざし抄」ニ「かざし」ト名ヅケタル一類ノ語中ニ、此ノ副詞ヲ入レタレド、他ノ種々ノ語ト混淆セリ、)サレバ、此ノ條ハ、先哲ノ說ノ據ルベキナクシテ、創定ノ說ニ係レル多シ。

一九五節　(本、二七七)武田と上杉と戰ふ、織田も豐臣も滅びたり、ナド用ヰル「と、」も、ナドモ、接續詞ノ意ヲ成セドモ、文ノ解剖ニ當リテ、上ノ語句ニ付着シテ離レザルカ如キ狀アルヿ、眞ノ接續詞ト異ナル所アリ、是レ、豆爾波ノ豆爾波タル所以ナラムカ、尙、本書ノ第四九九節ヲ見ヨ。

一九六節　○此ニ、接續詞トイフモノ、從來、豆爾乎波ノ中ニ入レリ、然レドモ、接續詞ハ、唯、上下ヲ接續スルノミ、豆爾乎波ハ、上ヲ承ケ下ニ接シテ、其意義ヲ增減左右ス、サレバ、相混シ難シ、因テ、今ハ、別門ニ立テタリ。

○或人ノ曰ク、日本語中ニハ、接續詞トシテ取立テ、イフベキモノ無シ、コレヲ別ナテイフハ、洋語ニ倣ヒテ模造スルナリ、トイヘリ、然レドモ、コレ未ダ深ク究メズシテイフ論ナリ、本書ノ第四九九節、第五七七節ニ、接續詞ニ就キテイフヿアリ、往キテ見ルベシ。

一九七節　(本、二七九)古クハ、漢文ヲ譯讀スルニ、後世ノ如ク、「助ケ假名」、「送リ假名」ナド付クルヿハ無クテ、文字ノ四方、四隅、中央、ナドニ、點ヲ付シテ、一定ノ規則ヲ設ケテ、譯讀セシナリ。下ニ出セル圖ハ、其一例ニテ、方形ハ、字ニ象リ、點ニ旁記セル假名ハ、其訓語ナリ。例ヘバ、「人」ノ字ノ左肩ニ點ヲ付シタルハ、「人ニ」ト讀ミ、右肩ニ付シタルハ、「人ヲ」ト讀ムナリ。其右肩ノ二點ノ訓語ヲ採リテ、之ヲ「ヲコト點」ト概稱シタリ。今モ、「返リ點」、「訓點」、「道春點」ナド「點」トイフヿアルハ、其遺稱ナリ。(書籍モ、古クハ、卷物ナリシカバ、「卷」ト數ヘシヲ、後ニ、綴本トナリテモ、尙「卷」トイフニ同ジ、)又、或ハ、其四隅ノ訓語ヲ、左脚ヨリ、左肩ヘ、右肩ヨリ右脚ヘ、循リテ讀メバ、「テニヲハ」トナルヲ採リテ、其訓語ノ概稱トモセリ、是レ、豆爾乎波トイフ語ノ起因ナリ。



○「君が代は、」ノ歌ハ、古今集、七賀、ノ歌ナリ、但シ、「我が君は、千代に八千代に、」トアリ、「細カイ石ガ、大キナ岩トナリテ、苔ノ生エルマデ、千年モ萬年モ、御繁昌デオイデナサレ、」ノ意ナリ。「見渡せば、」ノ歌モ、同ジ、ノ一、春、ノ歌ナリ。

一九八節　(本、二八〇)豆爾乎波ノ用法意義ハ、紛絲ノ如シ、學ブ者、其緒ヲ索ムルニ苦シム、今、此ニ、用法ニ因リテ、三類ニ大別セシハ、此書ノ新案ナリ。而シテ、更ニ、意義ノ方ニ就キテ、概略ニ類別スレバ、左ノ如クナラムカ。

第一類。

文主ヲ指示スルモノ、が・の　二名詞ヲ繋グモノ、の・が　事物ヲ處分スルモノ　に・を・と　事物ノ方向ヲ示スモノ、へ・より・から・まで

第二類。

分合スルモノ、は・も　指定スルモノ、ぞ・なむ・こそ　引證スルモノ、だに・すら・さへ　限ルモノ、のみ・ぞかり・こそかり　疑フモノ、や・か

第三類。

豫想スルモノ、む　抑ヘテ意ヲ翻スルモノ、と・とも・ど・ども　意ノ裏返ルモノ、に・を・が　終リテ移ルモノ、て・で・つゝ

然レドモ、場合ニ因リテ、各語ニ、種々ノ異義ヲ生ズレバ、コレヲ以テ、定義トハシガタシ。

一九九節（本、二八二）萬葉、十二ニ、「たらちねの、母ガ養ふ蠶の、まよごもり、」トアリ、同、十三ニ、（たらちねの、母ガ養ふ蠶の、まよごもり、）トアリ、「が」モ「の」モ、意ハ同シ。

○此ニイフ「が」「の」ヲ羅甸ニ所謂Nominative case.（主格）ナリト確言スルハ、恰當ナラズ。若シ、彼ノ主格ニ相當スベキモノヲ求メバ、「鳥鳴く。」「花、落つ。」ナド、豆爾波ナクテ用ヰル「鳥」「花」ノ位置、是レナラム。コレニ、「が」、又ハ、「の」ヲ加ヘテ、「鳥が鳴く、」「花の落つ。」トイヘバ、「が」、「の」ヲ加ヘタル程ノ意味ハ、隨テ、別ニ起ルナリ、即チ、本書ニ說ケルガ如シ。

二〇〇節（本、二八四、二八五）此ニイフ「の」、「が」ハ、英、又ハ、羅甸ノPossesive.又ハ、Genitive.（持格）ニ當ルガ如クナレド、次下ナルハ、又、種々異樣ノ意義ヲナセバ、コレヲ、概シテ、持格ナリトハ、言ヒ難シ。

二〇一節（本、二九三）洋文法ニテ言ヘバ、前條ナル「が」、「の」ハ、略、名詞ノ主格ニ似タルモノニテ、此ノ條ナル「が」、「の」ハ、略、持格ニ似タルモノト、先ヅハ概別シテアルベシ。

二〇二節　○土佐日記ノ「今日なれど」ノ歌ハ、正月ノ子ノ日ニハ、若菜ヲ摘ムベキ日ナルニ、折節、船中ニアレバ、トテ、詠メルナリ、奈良ノ春日野ハ、若菜摘ミノ名所ナリ。

古今、二十、ノ歌ノ「小黒崎」みつの小島」ハ、奥州ニアリ、美景ノ地ナレバ、(非情ノモノヲ、有情ノモノト見テ)京都ヘ伴ヒテ歸ラムト欲スノ意ナリ。

二〇三節　○又「蘆原の、清見が崎の、見穂の浦の寛見乍、物思ひもなし。」(萬葉、三)斯ク讀メバ、前條ノ「の」ナレド、「寛見乍」ト讀メバ、此條ノ「の」トナル、意義ノ變化スルヲ思フベシ。

二〇四節　(本、二九六)此ニイフ「に」ハ、羅甸ノ Dative case.(與格)ニ當ルガ如シ、然レドモ、次ナルハ、又、種々ナリ。

二〇五節　(本、三〇五)コレハ、羅甸、又ハ、英ノ Accusative, Objective.(賓格)ニ當ルガ如シ。

二〇六節　(本、三一七)古今、六、ノ歌ハ、「山里は、冬ぞさびしさ、まさりける、人目も草も、かれぬと思へば。」ナリ、人ノ來ヌコトヲ、人目離ルトイフヲ、草ノ枯ルニカケタリ。古今、十七、ノ「思ひせく」ノ歌ハ、瀑布ノ繪ニ詠メルナリ、繪ニハ聲ナシ、心ニ思ヒ塞ク苦慮ヲ、瀧ノ水ニ譬ヘテ、人ニ言ヒ出ダサレヌヲ、聲ナキニカケタリ。

二〇七節　○本書、第三一二節ニモ擧ゲタル「暮ると明くと、目離れぬものを、起くとは歎き、寐とはこのむ、又、行くと來と、見れどもあかぬ、秋の野は、行きもやられず、とまるともなし。」(伊勢集)ナドハ、「と」ノ意ナレド、尚、終止法ヲ受ク、「寐とて、」(伊勢物語)東の方に行きて住む處求むとて、」(同)いつ見きとてか、戀しからむ。」(新古今、十二)ナド、皆、然リ。

二〇八節　(本、三一八)古今、一、ノ歌ハ、「春やとき、花やれそきと、聞きわかむ、鶯だにも、鳴かずもあるかな。」ニテ、春初ノ詠ナリ、「聞キワクベキ鶯ダニモ鳴カズ」トイフナリ。「わかむ」ハ、連體法ニテ、「鶯」ニ連ルナリ。

二〇九節　(本、三一九)源氏物語ニ「さま〳〵、ためしなき宿世ころ侍れ、とてよろこぶ。みすさびでとぞもこそ出でくれ、とてほゝゑみ給ふ。心心せの、れいらかに落ちぬたるこそ、いとかしこきわざなりけれ、となむ思ひ。」ナドアルハ、「と」ノ上ニテ「こそ」ヲ結ビタレバ、論ナシ。然ルニ、「みるめかる、潟ぞあふみに、なしと聞く、玉藻をさへや、あまはかづかぬ。」(後撰、十二)鐘の音に、今や明けぬと、なかむれど、なほ雲深し、峯の白雪。」(續千六百番)打ちつけに、思ひや出づと、古里の、忍草して、摺れるなりけり。」(新千載、七)ナドハ、詞玉緒、五ニ、「その結び辭の格をたがへて、「と」と受けたり、此格は、なべての事にはあらず、其歌のさま、詞のしらべにゑたがひ

て、よくもあしくも聞ゆべし。」トイハレタリ、後撰ナルハ、「潟ぞ、云々と聞く」、續千六百番ナルハ、「今や、云々とながむれむ」ニテ、挿入ノ句法ニモアラムカ、トモ思ヘド、然ルトキハ、語脈、更ニ通ゼズ、新千載ナルモ、「思ひや、云々なりけり」トハ見ルベクモアラズ、或ハ、「みるめかる潟ぞ、あふみになき。あはれなしと聞く」ナドノ意ナリ、ナド辯護スル説モアレド、トニカクニ避クベキ用法ナリ。又、躬恒集ニ、「明けぬれむ、つれなくなりぬ、女郎花、人知れずこそ、折らむと思ふに。」ナドモ同シ。新古今、九ニ、「唐土も、天の下にぞ有と聞く、照る日の本を、忘れざらなむ。」ナドアルハ、「有」ノ字ヲ書キテアレバ、「あり」カ、「ある」カ、計ラレズ。月清集、上ニ、「塵をこそ、すゑじとせしか、ひとり寐る、我が常夏は、露も拂はず。」(古今、夏)「塵をだに、すゑじとぞ思ふ、咲きしより、妹と我がぬる、とこなつの花。」トアルハ、確ト「と」ノ下ニテ結ビタリ、是レモ非ナルベシ、或ハ、「じ」ハ、「こそ」の結ビトハナラズ、ナドイフ人モアレド、新續古今、春、下ニ、「人はなど、訪はで過ぐらむ、風にこそ、知られじと思ふ、宿の櫻を。」ナド、其他ニモアリ。續拾遺戀、五ニ、「面影を、いかに忘れぬ、心こそ、つらしと思ふ、折もありしか。」ナドハ、詞玉緒ニモ不調ノ歌ト

セラレタリ。疑問ノ用法ハ、微バタヲ可ナリトス。

二一〇節　(本、三二五、三二七)新古今、十六ノ歌ハ、菅公ノ筑紫ニテノ詠ニテ、波トイフ題ナリ、「流れ木」ハ、海ニ流ルヽ木ニテ、流人ノ我身ニ譬ヘタリ、「からき」ハ、憂クツラキヲイフ、流木モ波モ鹽モ、皆、海ノモノナリ、「わたつみの底」ハ、海ノ底ニテ、イヅレカ、カラキト、海神ニ問ヒカケテ、我ガ憂キニハ若カジ、トイフナリ。

○又、「三尊は、彌陀と、夾侍の觀音ト勢至トの二菩薩と、の稱なり。」「人ト人トの交際と、これにつきて起る務めとを、正しく行ふべきなり。」ナドハ、片假名ノ「ト」ト、平假名ノ「と」ト、各自ニ相對ス。

二一一節　(本、三三一)此ノ條ノ「より」、「から」ハ、羅甸ノ、Ablative case.(奪格)ニ當ツベシ。

二一二節　(本、三三三)續體紀ニ、「初瀨の川ゆ、流れ來る竹の、萬葉ニ、「小筑波の、繁き木の間よ、起つ鳥の、」ナド、甚ダ多シ。

本書ノ萬葉、十七、ノ歌ノ、「我がせこを吾が」ハ、唯、「松」ヲ「待つ」ニカケタル序ナリ。

又、萬葉、九ニ、「雁がねの、聞ゆる空ゆ、月たちわたる。」ナドノ「ゆ」モ、「より」ナレド、ソノ「より」ハ、「を」ニ通フ「より」ナルベシ。又、同、三ニ、「田子の浦從、打出でゝ見れば、眞白

にぞ、富士の高嶺に、雪は降りける。」トアルヲ、新古今、冬、ニハ、「田子の浦に打出で丶、」ト改メタリ、是等ハ、「に」ニモ通フモノカ。

二一三節　(本、三三五)此ノ條ノ「より」ハ、英語ノ前置詞ノ Than. ノ意ナリ。古今、五ノ、「秋の菊」ノ歌ハ、後ノ第二四七節ニ註セリ。

二一四節　(本、三四一)此ノ「は」ヲ、Nominative case ノ如クノミ思フモノアルハ、非ナリ、ソノ屬ク所、名詞ノミナラズ、本書ノ用例ヲ見テ知ルベシ。

二一五節　(本、三四二)古今、八ノ歌ハ、「花ノ濡ルゝモ惜シケレド、友ノ濡レテ歸ルハ、尙更惜シト思フ、」ノ意ナリ。

二一六節　(本、三四三)古今、一ノ歌ハ、「若シ、今日、花見ニ來ナカツタラバ、明日ハ、キツト、花ガ雪ノ如ク落チテシマフデアラウ、縱ヒ、明日、雪トナツテ消エズニアツタトテ、誰ガ花ト見ヤウヅ、」ノ意ナリ。

二一七節　○「夢むしさまし給ふなよ、」(論曲、紅葉狩)御心にむし違ひて、「母とむし思ふな、」ナドモ、清音ナルヲ、音便ニ濁ルモノカ。(「し」ハ、指ス意ノ豆爾波ナリ。)

二一八節　(本、三四五)此ノ條ノ「そ」ハ、「そ」(其)ト指ス意ノ代名詞ヨリ轉シタルナルベシ、万葉集十一ニ、「戀其晩師之雨の降る日を、」ナドアリテ、「其」ノ字ヲ用ヰタリ、其他ニモ、紀、記、萬葉、等ニ、多ク清音ノ「曾」ノ字ヲ當テタリ。「憂き人の、月はなにろの、ゆかりぞと、思ひながらも、打ちながめつゝ。」(新古今、十四)ナドノ「なにそ」ノ「そ」ノ清ムモ、コレナラム、常ニ「誰ぞ」「な行きそ」ナド、清音ニイフモ、同ジカルベシ。

二一九節　(本、三四七、三四八)此ニイフ略語ノ「ハ、本書ノ第五六九節ヲ見ルベシ。又、「面影に、をだしは見ゆる、君なれど、戀しき事ぞ、時ぞともなき。」(拾遺、七)ナドモ、本書ニ引ケル堀川百首ノ歌ノ趣ナリ。

二二〇節　(本、三四九、三五〇)「な、も、」ハ、元來、感動詞ヲ重用シタルニテ、「なむ」ハ、「なも」ノ轉ナラム、其感ノ深キ、終ニ、「ぞ」ノ如ク、指ス意ヲ成セルナルベシ。

二二一節　(本、三五一)「し」ハ、「そ」ト通ジテ、是レモ、ヒトスヂニ指ス意アルナリ、古キ代名詞ニ「汝」ノ意ニ「な」トイフアリ、「其」ノ意ナリ。(本書ノ第一七二節、及ビ、此ノ別記ノ第一二六節ヲ見ヨ。)

二二二節　○此ノ條ノ「し」ヲ、從來「やすめことば」ト稱シテ、意味ナキモノトスルハ、イカヾヒトスヂニ指ス意アリテ、力アルヿ、用例ヲ味ヒテ知ルベシ。和歌ノ五文字

ノ句ニ「身にしあれど」ナド加フルヲ、常ナリ、是レ、不用ノ語ナラバ「字あまり」ニ加フルニ及バジ、必ズ、其意ヲ添ヘデハナラヌ場合ナレバ、加フルナラム。

二二三節「いつか行かむ」トイヘバ、常ノ疑問未來ナレド「いつしか行かむ」トイヘバ、ヒトスヂニ行カムコトヲ願フ意トナル。万葉、五ニ「世の中を、空しきものと、知る時し、いよ〳〵ます〳〵、悲しかりけり。」言問はぬ、木にはありとも、うるはしき、君が手馴の、琴にしあるべし。」ナド、イヅレモ十分ナル力アリ。

二二四節（本、三五二）古今、秋、上「天の川、もみぢを橋に、わたせばや、たなばたつめの、秋をしも待つ。」ヲ「遠鏡」ニ「天ノ川ノ橋ニ、紅葉ヲ渡スカシテ、時節モ多イニ、（云々）」ノ解）棚機様ガ秋ヲ御待ナサル。」ト解シタリ、詞玉緒、五ニ「これらは、同じやすめ辭なるうちにも、いさゝか意ありて、あるが中にて、ゐり出たる事にれけり、時もれぼき中に、秋をしも、と秋をゐり出でたり。」

又、詞玉緒、五ニ「時しもあれ、秋しも人の、別るれど、いとゞ袂ぞ、露けかりける。」（拾遺、六）これは、云々、二つあり、上なるは、こそに通ふ云々、下なるは、擇り出でたる云々なり、云々、すべて「をりしもあれ」「時しもあれ」などいふは「をりこそあれ」「時こそあれ」といふに同じ、さる故に、こそ、その格に、れと結べり。」トイハレタリ、サレド「こそ」ノ略ト見ル方、更ニ解シ易シ、「逢ひ見ては、なぐさむやとぞ、思ひしに、名殘しもこそ、戀しかりけれ。」（後撰、十一）忘れなむ、今はとはじと、思ひつゝ、寐る夜しもこそ、夢に見ゆれ。」（拾遺、十三）ナド思フベシ。

二二五節（本、三五六）「だに」ノ語原ハ「直に」ノ約マレルニモアラムカ。

○古今、二、ノ歌ノ意ハ「山地ニテハ、最モ消エ易キ松ノ枝ノ雪ダニ、未ダ消エズ寒サナルニ、都ニテハ、若菜、既ニ萌芽シテ、摘ムベキ程ニ、春暖トナリヌ」トナリ、消雪、輕ク、崩芽、重シ。「露にだに」ノ歌ハ、古今集、二十ニ「御侍、御笠とまうせ、（御伴衆、ソレ、御笠ヲ、ト申シ上ゲナサレ）宮城野の、木の下露は、雨にまされり。」トイフヲ、本歌トシタルニテ、露、輕ク、五月雨、重シ。

二二六節○「今日のみと、春を思はぬ、時だにも、起つことやすき、花の陰かは。」（古今、二）（マシテ、春盡落花ノ際ニハ、立去リ難ク思フ、トナリ「起つこと易き」ハ、立去ルヲ、平氣ニ思フナリ、春盡ノ歌ナリ、春盡ヲ重シトシ、春盡ト思ハヌ時ヲ輕シトス、）「女御とだにいはせずなりぬるが、あかず口惜しうれば、さるれど、今ひときざみの

位をだにとて、贈らせ給ふなりけり。」（桐壺）（女御トダニイハセズ、マシテ、中宮ヲヤ、ノ意、御息所、卒後ノ贈位ノコトナリ。）「母御息所は、影だにれば心給はぬを、」（同）（マシテ、顔色ヲヤ）「一文字をだに知らぬ者しが、足は、十文字に蹈みてぞ遊ぶ。」（土佐日記）（賤者ノ醉舞ニ、戯レテイヘルナリ、一ハ輕ク、十ハ重シ）「霜だにも、置かぬ方ぞと、いふなれど、波の中には、雪ぞ降りける。」（同）（土佐暖海ノ歌ニテ、碎波ヲ雪ト見タルナリ、霜、輕ク、雪重シ）「花だにも、同じ心に、咲くものを、植ゑけむ人の、心知らなむ。」（貫之集）（花、輕ク、人心、重シ）

二二七節　（本、三五七）孟子ナルハ、「聖人ノ位置ニハ、孔子ナラバ、無論ニ居ラルベキニ、ソノ孔子ダニモ、謙遜シテ居ラズ、」ナリ。前項ニ擧ゲタル證歌ノ中ニ、「だに、も」ノ例、三處マデモアリ、コレニテ、「だも」ハ、「だに、も、」ノ略訛ナルコトヲ知ルベシ。

二二八節　（本、三五八）「すら」ノ語原ハ、「それ」ノ轉ニテモアラムカ。

二二九節　○萬葉、六ノ、「言問はぬ」ノ歌ハ、「物言ハヌ樹スラ、兄妹アリトイフモノヲ、」ノ意ナリ、叢生ノ幹ヲイヘルニカ。「悲獨子」ノ歌ナリ。詩經ナルハ、「我ガ身スラ、容レラレズ、我ガ後ヲ憂フルニ暇アラムヤ。」ト訓ム。

二三〇節　○玉藻ニ、「すらハ、やはり猶、」といふ意にちかし。然るに、古今集よりこなたは、すらの意をも、ともに、だにといへり。されど、すらノ意を、だにといふは、ことなし、さへの意を、だにといふは、誤なり。」云々トアリ、本書ニ引ケル萬葉、六ノ歌、及ビ、同書、三、ニ、「輕の池の、うらわめぐれる、鴨尚爾、玉藻の上に、獨り寐なくに。」（輕池ハ、大和ナリ。）同、十二ニ、「鴨尚毛、己がつまゆゑ、あさりして、」ナドアリテ、「尚」ノ字ヲ當テタル程ナレバ、古クハ、「やはりなほ」ノ意ナリ、サレバ、鎌倉右大臣集ニハ、「物言はぬ、よものけだものだにすらも、あはれなるかな、親の子を思ふ。」ト、「だに」ト、「すら」トヲ重ネテイヘリ。此ノ公ハ、萬葉風ヲ好ミテ詠マレタレバ、意味ヲ用ヰワケラレタルナラム。「春日すら、我が待つ人のことだに、いはずぞあるなほ頼まましし。」（貫之集）

二三一節　（本、三五九）「さへ」ノ語原ハ、「そへ」（副）ノ轉ナラム、トモイヘド、或ハ、「ろのうへ」（裏上）ノ約ナラムカトモ思ハル。

二三二節　○古今、一、ノ歌ノ、「梓弓」ハ、「春」ノ枕詞ナリ、（弓ヲ張ルヲ、春ニ借リテイフ）「れしなべて、一面に、」ノ意ナリ。

二三三節　○「春雨に匂へる色も、わかなくに、香さへなつかし、山吹の花。」（古今二）「負けてはやまじの御心さへ添ひて、命婦をせめ給ふ。」（宋摘花）歌さへぞ、ひなびたりける。」（伊勢物語）（人物ハ、固ヨリ鄙ビタルニ）ナド、皆、重キヲ添フル意ナリ。（土佐日記ニハ、「祈り來る、風間と思ふを、わやなくも、鷗さへ、だに、波と見ゆらむ。」（波風立ツナ、ト念ヲ思フニ、生憎ニ、鷗ノ白キマデガ、波ト見エテ、心ヲ惱マス）ナド、「さへ」ト「だに」トヲ重用セリ。

二三四節　（本、三六三）伊勢物語ノ歌ハ、武藏ノ隅田川ニテ詠メルナリ、「都トイフ名ヲ負ヒテアラバ、京都ノ人ノ安否ヲ問ハム」ノ意ナリ。古今、五ノ歌ハ、「秋風ノ吹ク吹上ノ濱（紀伊）ニ立テル」ノ意ナリ。

○本書、第三六四節ノ反語ノ事、此ニテハ詳說スルニ及バズ、本書ノ第五四一節以下ノ反語ノ條々ニ讓ル。此ニ引ケル歌ノ解モ、皆、後ノ反語ノ條々ニアリ。

二三五節　（本、三六五、三六六）後拾遺、十ノ歌ハ、人家ノ喪ヲ吊フニ詠メルナリ。新古今、十七ナルハ、「世ニソムキテ住ム所ハ、イヅクニモアルベシ、然ルニ、大原山（山城）ニ住ミシハ、住ミヨカリシニヤ」トイヒテ、大原ハ、炭燒所ナレバ、炭ニカケテイ〜ルナリ。

○本書、第三六六節ノ神功紀ノ「釀（カ）みハ、「かもし」ナリ、仲哀紀「歌ひつゝ、かみけれかも、舞ひつゝ、かみけれかも」、萬葉、一、長歌ニ「いかさまに、れもほし計米（ケメカ）可」、同、三、長歌ニ「いかさまに、れもひ鷄目鴨（カモ）」ナドモアリ。

萬葉、十五ノ歌ハ、「妹が袖別れて久に、なりぬれど、一日も妹を、忘れて思へや。」ナリ、「思へ」ニ意ナシ、「忘れむやは」トイフニ同ジ、（旅中ニ、妻ヲ思フ歌トスベシ）

二三六節　（本、三六七）詞玉緒、四ニ「なぞ、や、」「なぞ、や、」ノ用例ニ、證歌七首ヲ擧ゲテ「大かた、何等の下は、みな、かと受くる例なるに、右のごとく、なぞとなぞとの二つのみ、やと受くる例あり、その中に、なぞは、かと受くるがおほくして、やと受けたるはいとすくなし、なぞハ、やと受くる例のみにて、かと受くることなし。」トイハレタリ、然レドモ、擧ゲラレタル七首ノ中ノ、後撰ナル「大かたは、なぞや我が名の、惜しからむ。」拾遺ナル「琴の音ハ、なぞやかひなき。」詞花ナル「かれにし人の、なぞや戀しき。」ノ「からむ」「なき」「しき」ハ「なぞ」ノ「かゝり」ヲ結ビタルナリ、「なぞ」ハ「何（ナニ）ぞ」

ノ約ニテ、ソノ「ど」ハ「ぞ、の、や」ノ「ど」ナリ、而シテ、三ツノ「や」ハ、貫、詠歎ノ「や」ナリ、サレバ「や」ヲ除キテモ、意味ニ、大害ナシ、又、續古今ナル「などやかく、忍べどくるし」ハ「などや」ニテ切レテ、下ヘハ續カズ、トアレバ「など」ハ、詰問ニ言ヒスエテ「や」ハ、全ク詠歎ナリ。六帖ノ「老いぬとて、などや我が身をせめざけむ。」ハ、古今、十七ニ「などか」トアルニ從フベシ。千五百番ナル「などやかく、さも暮れがたき、大空ぞ。」ノ「や」モ、詠歎ナリ。扨、風雅集ナル「梅が香は、しるべがはなる、春風の、誰がゆくへとも、などや吹きこぬ。」ノ一首ノミ、疑問ナリ「こぬ」ト結ビタレバ「や」ハ疑ヒノ「かゝり」ノ如シ、「など」ヲ「かゝり」トスル說ニ從ヘバ「や」ヲ詠歎ナリトモイハルレド、「など」ヲバ「や」ト受ケタルハ、誠ニ少シ、トハコレラヲヤイフベキ、然レドモ、或は誤寫ニモアラムカ。

但シ、和歌ニ「いかなれや」「なになれや」ナドイフ一種ノ用法アリ、此ノ用法ナルニハ、詠歎ナルアリ、疑問ナルアリ、本書ノ第四〇七節以下ニ說クベシ。（詞玉緒、四ノ「れや、五くさ」トアルヲモ見ヨ）

二三七節（本、三七〇）本書ノ諸例ヲ、口語ニ寫セバ「年歷るゝ、老いる、花見るゝ、積もれど樓まない、多いと勝つ」ノ意トナルト云。「水至清無魚、人至察無友。」東方朔ノ語ナリ。

二三八節（本、三七一）本書ノ諸例ヲ、口語ニ寫セバ「散らうなら、聞かうなら、又ハ「散つたら、聞いたら」ノ意トナルト云。

二三九節　○「既定」ノ方ニテ「住めど都」トイフ諺ハ「僻地ニテモ、住ミツキタル上ハ、都ノ心地モスルモノ」トノ意ナルニ、若シ「未定」ノ方トシテ「住まど都」トスルトハ「同シク住ムトナラバ、僻地ヨリハ、都ニセム」ノ意トナル「既定」ト「未定」トニテ、意ノ反スルコト、此ノ如シ。

二四〇節（本、三七三）万葉、十ノ「もみぢ」ハ、上二段活用ノ第四活用ニテ、打消ノ「ぬ」ニ接セルナリ、古今、十五ノ「いとふべらなり」ハ「厭フヤウニ思ハル」ノ意ナリ、貫之集ノ「唐衣ハ「裁ツ」ノ枕詞ニテ、年ノ立ツニカケタリ、躬恒集ノ「かれにし」ハ「ハナレニシ」ナリ。

○詞玉緒、七ニ「見まつりて、いまだ時だに、變らねど、年月のごと、れもはゆる君。」（萬葉、四）卯の花も、いまだ咲かねど、郭公、佐保の山邊を、來鳴きとよもす。（同、八）秋

たちて、△幾日もあらねど、このねぬる、朝けの風は、袂寒しも。」(同、八)此ノ類ノ歌ヲ、十餘首擧ゲテ「此ねどは、皆ぬに、といふ意なり、古今集などにも、まれに此格あり、さて、れはくは、上に「いまだ」といふ言あり、まれに「いまだ」といはぬも、△のゑるしを付たる所に、必ろの意をふくめり。」トアリ、然ルニ「言靈の ゑるべ」中篇(下)ニハ「ねどハ、ぬにノ意ニアラズ、ねどノ下ニ「然らぬ理なるを」トイフ心ヲ含メタルナリ、萬葉集八ニ「霜雪も、いまだ過ぎねど、思はぬに、春日の里に、梅の花見つ。」同、十ニ「まきもくの、檜原もいまだ、雲ゐねど、小松がうれゆ、沫雪流る。」トアル、此ノ二首、心モ調ベモ、大方同ジヤウナルヲ、一首ハ、思はぬにトイフ事ヲ、詞ニアラハシ、一首ハ、心ニ合ミタリ、コレニテサトルベシ。」云々、參考ニ資ス。

二四一節　(本、三七五)「あらしのみ、吹くめる宿に、花薄、穂に出でたりと、かひやなからむ。」(蜻蛉日記、上)又、萬葉、十一ニ「ひとり寢等、菱朽ちめやも、綾席、緒になるまでに、君をし待たむ。」ナドモアリ、万葉ナルハ「獨寢シテ居タリトモ、臥床ノ下敷ノ菰ハ、朽ナムヤハ、朽ツマシ、上敷ノ綾織ノ席ノ、切レテ緒バカリニナルマデ、君ヲ待タム。」ニテ、此ノ「等」モ「ども」ナリ。

二四二節　(本、三七六)本書ノ諸例ヲ、口語ニ寫セバ「あつても、過ぎても、難くても、惜しくても、居つても、更けても、折れても」ナドノ意トナル。

○古今、二ノ「よそにみて」ノ歌ハ、暫シ立寄リテ藤ノ花ヲ見テ去レル人ヲ、引留メタキ心ニテ、戯レニ詠ミテ贈レルナリ、同、十七ノ歌ハ、攝州ノ住吉ヘ參詣スル人ニ贈レルナリ、地名ヲ「住ムニ好シ」ト言ヒカケテ、「綾草」ノ生シテアル所ト聞ケバ、故郷ノ友ヲ忘レテ、長居ヲスルヿ勿レ、」トナリ。史記ナルハ、項羽、漢高祖ト戰ヒテ、敗走シタルヲ、故郷ナル楊子江東ノ衆ノ、迎ヘムト言ヒシニ、答ヘタル語ナリ。

二四三節　(本、三七七、三七八)萬葉、十八ノ「乎敷」ハ、越中射水郡ノ地名ナリ、「澁ぎたもとほり」ハ、「こぎめぐり」ナリ。同、十ノ「雖立雖座」ヲ「タチテモ、キテモ、」或ハ「タテレド、ヰレド、」ナド讀メルハワロシ、上ノ句ハ、「たまきはる、吾が山のへに、立つ霞」ナリ。

○本書、第三七八節ナル「いつ解くべし」ハ、心ノ解クベキヲイフ。

二四四節　(本、三七九)本書ノ諸例ヲ、口語ニ寫セバ「立つたけれども、忍んだけれども、問うたけれども、」ナドトナル。

○「忍ぶれど、色に出でにけり」ハ、「堪ヘタケレドモ、顔色ニアラハレタ」ナリ。謠曲ノ「猩々」ハ、唐土ノ楊子ノ里ニ、孝子アリ、酒ヲ賣ル、猩々、其孝行ヲ愛デテ來リテ、盡キセヌ酒泉ヲ與ヘテ、秋ノ月夜ニ、醉ヒ舞ヒ戯ルヽ事ヲ作レルナリ、猩々ハ、性、酒ヲ好ムト云、詞ニ「盃の數は重なれども、面色は更に變らず」、又「此壺に泉をたゝへ、唯今、かへし與ふるなり、よもつきじ」ナドヽアリ、猩々、固ヨリ想像ノ動物ナリ。古今、一ノ「百千鳥」ハ、鶯ヲ初トシテ、多クノ鳥ナリ、「舊りゆく」ハ「老イユク」ナリ。大學ノ「心不在焉」ハ、「心ノウハノソラナルキハ」ナリ。

二四五節（本、三八一）「既定」ノ方ニテ、形容詞ノ「無けれど」、「戀しけれど」ハ、「無くあれど」、「戀しくあれど」ノ約マレルニテ、「無けれども」、「戀しけれども」ハ、「無くあれども」、「戀しくあれども」ノ約マレルモノ、トノ說アリ、サラバ「未定」ノ方ノ「無くば」、「戀しくば」モ、「無くあらば」、「戀しくあらば」ノ約マレルニテ、「無くとも」、「戀しくとも」ハ、「無くありとも」、「戀しくありとも」ノ約マレルナラムカ、然ルキハ、「無く」、「戀しく」ハ、共ニ、副詞法ナリ。

二四六節　○詞玉緒、三ニ、「濁るとに、既に然る事をいふと、未然事をかねていふと、の二つあり、既に然る事をいふは、「花さけど」、「花ちれど」、「月出れど」、「月いれど」、などのごとし、未然事をかねていふは、「花さかば」、「花ちらば」、「月いでば」、「月いらば」、などの如し、さて、既に然る事をいふとハ、どもと相對ひ、未然事をかねていふとハ、上を轉じて、ともと對へり。同書、五ニ、「と」は下へ、もを添て、どもともいふ、雖の字の意なり、此の雖の字の意の言に、清と濁とのかはりあり、既に然る事をいふには、ど、ども、と濁り、いまだ然らざるを、あらましにいふには、と、とも、と清みていふ、此の清み、濁り、によりて、上の受る言の格も、異なり、「花はさくとも」といふと、「花はさけども」といふと、これなり、云々。」

佐藤誠實氏ノ語學指南ニハ、「終止言ヲ承クルトモハ、未定ノ詞、已然言ヲ承クルドモハ、既定ノ詞、云々。」

チヤンブレン氏ノ日本小文典ニハ、「關係法ハ、甲ノ事ノ起リハ、乙ノ事ニ因リタルヲイフ、タトヘバ「年は若く、からだも強けれど、用に適す」トイフハ「年の若きこと」ト「からだの強きこと」トニ因リタルヿ、明テケシ、云々。」那珂通世氏云、ども、ハ、順境ノ接續ニテ、原因ノ、當然ノ結果ヲ成スヲ

イヒ、ともどもハ、逆境ノ接續ニテ、原因ノ、反對ノ結果ヲ成スヲイフ、云々。

二四七節　(本、三八四)古今、十六ノ「つひにゆく」ノ歌ハ、臨終ニ詠メルナリ、歌ノ末ニ、餘情ノ語ヲ略セリ、同、五ナル「秋の菊」ノ歌ハ、「花ヨリ先ニ死ヌトモ知ラレヌ我ガ身ナルモノヲ、」ノ意ナリ、「ひともとゝ、思ひし菊(ナルモノ)を、大澤の、池の底にも、誰れか植ゑけむ。(古今、五)ナドモアリ。

二四八節　(本、三八八)「縣」ハ、國司在任ノ事ナリ、「例ノ事」ハ、交替定例ノ事務ナリ、「解由(ゲユ)」ハ、御用引繼ノ領收證ナリ、「わたる」ハ、「移る」ナリ。

二四九節　(本、三九五)古今、序、ノ歌ノ上ノ句ハ、「咲く花に、れもひつく身の、あぢきなさ、」ナリ、花ニ見惚レテ居ル者ノ、イラザルヿカナ、身ニ心勞ナルヿノ、デキテ來ルモ知ラズシテ、」ノ意ナリ。古今、十六ノ歌ナル「うつせみ」ハ、「世」ノ枕詞ナリ、「世事ハ、醒、睡、共ニ、夢ニ見ルガ如シ、」ノ意、友人ノ死ヲ傷メル歌ナリ。同、十七ノ歌ナル「更科、姥捨、」共ニ、信濃ナリ、サレド、唯、山月ノ詠トシ、「月見れば、ちゞに物こそ、悲しけれ、」ナドノ意ト解スベシ。實永年中ニ、盲人、板鼻檢校トイフ者、顯官ニ從テ、姨捨山ヲ過グル時、顯官、檢校ニ、月ノ景色ヲ問ヘルニ、檢校、乃チ古今、十七ノ

歌ノ末ノ、一字ヲ、濁音ニ變ジテ誦シタリト、擁書漫筆ニ見エ。

二五〇節　(本、三九六)「つゝ」ノ意ハ、萬葉、十一ニ、「なか〳〵に、君に戀ひずて、比良の浦の、あまならましを、玉藻(タマモ)刈(カリ)管。」ヲ、或本歌曰「なか〳〵に、君に戀ひずて、留鳥(アミ)の浦の、あまにあらましを、珠藻(タマモ)刈(カル)刈。」トアルニテ、證スベシ。

二五一節　○本文、豆爾波ノ外ニ、「ながら、」「がてら、」「ごとに」等、從來、豆爾波中ニアリシモノ、尙、アリ、是等、本條ノ類別ニ從ヘバ、(種々ノ語ニ屬クモノナレバ、)第二類中ニ入ルベキニ似タレド、今ハ、甄別シテ、接尾語中ニ收メタリ。サルハ、第二類ノ豆爾波ハ、其ノ語、全ク、上下ノ語ニ粘合セズシテ、試ミニ、コレヲ文中ヨリ加除セムニ、唯、其語ニ有テル意義ノ加除アルノミニテ、原文、サラニ移動スルヿ無ク、上、下、ソノマヽ連絡シ、依然トシテ文ヲ成スベシ、前ニ掲ゲタル例語、例句中ニ就キテ、加除シテ試ミバ、必ズ其然ルヲ知ラム。然ルニ、「ながら、」「がてら、」ノ類ハ、全ク、其上ナル語ニ粘合シテ、語勢ヲ變ゼシメ、(熟語トナリテ、副詞ニ變ゼシム、)之ヲ加除セムトスレバ、原文ニ移動ヲ起サズハアルベカラズ、是レ、其別ナリ、尙、後ノ接尾語ノ條ヲ見ルベシ。

二五二節

○第一類ナル名詞ニ屬ク亘爾波ハ、羅甸名詞ノ「格」トイフモノニ似タリ。今、試ニ、左ニ掲ゲテ、彼我ヲ對照セシメム。

主格。Nominative case. 我ガ「鳥、鳴く。」「花、落つ。」ノ如キ、亘爾波ナクテ文ノ主トナル「鳥」又「花」ノ位置、是レナリ、或ハ、「鳥が鳴く。」「花の落つる。」ナド用ヰル「が」「の」モ、コレニ充ツベシ。

生格。或ハ、持格。Genitive. 「人の物」「吾が物」ナドノ「の」「が」ナドナリ。

役格。或ハ、目的格。Accusative. 「書を讀む」「字を記す」ノ「を」ナドナリ。

與格。Dative. 「人に與ふ」「都まで送る」「前へ向ふ」ノ「に」「まで」「へ」等ナリ。

奪格。Ablative. 「人より受く」「人と行く」ノ「より」「と」等、其他、多シ。

呼格。Vocative. 「月よ」「花よ」ノ「よ」ナドナリ。

右ノ如ク、六樣ニシテ、名詞ノ語尾ニ變化アリテ、此ノ六樣ノ格ヲ形作ル、而シテ、其語尾ノ變化ノ姿ハ、名詞ニ因リテ、一樣ナラズ、猶、我ガ動詞ニ六樣ノ活用アリテ、又、正格、變格、九類ノ別アルガ如シ。

サレバ、我ガ名詞ニ屬ク亘爾波モ、名詞ノ語尾變化トシテ「格」ト立テムモ、可ナルベシ。サレド、我ガ亘爾波ニハ、同語ニ、種々ノ異義アルモアリテ、固ヨリ、羅甸ノ格ト合ハヌモ多ク、又、縱シ合ハズトモ、我ハ我ニテ、名詞ノ格ヲ、特ニ數樣ニ創制セムモ、然ルベケレド、扨、其影多ナル意義ノアル限リ、悉ク、格ト立テムモ、煩ナルヲ覺ユ。抑モ、羅甸ノ格ノ變化ハ、名詞ノ種類ニ因リテ、其態ヲ異ニスルコトモアリテ、固ヨリ離ルベカラザルモノナレバ、名詞ニ就キテ規定ヲ立ツルハ、其理ナリ。

殊ニ、歐州餘國ノ名詞ノ、格ヲ示スニ、(語尾變化ナクテ)無形ノ地位ニテ、則ヲ立ツルガ如キハ、(冠詞ニテ、格ヲ示ス國モアリ)名詞ニ就キテ格ヲ講ズベキ必用アレド、我ニアリテハ、「訪ヘかし、人の、花の盛りを、」「我が名は立てじ、萬世までに、」「見せをや、人に、夜のけしきを、」ナド、位置ヲ顚倒セシメタリトテ、亘爾波、コレガ標識トナリテ、嚴トシテ、其意義ヲ示セバ、一個ノ語ト見做スベキ價値アリ。

然レドモ我ガ亘爾波ニハ、特ニ、一定ノ成形アリテ、且、何レノ名詞ニモ、一樣ニ接スベク、コレヲ、名詞ノ語尾變化ト見テモ、何レノ名詞モ、其變化ハ「が」「の」「に」「を」

と、へ、「より」「まで」等ニテ、千篇一律、サラニ異狀アルコトナシ。サレバ、羅甸ノ格ハ、足ノ如ク、其名詞ニ生得シテ離ルベカラズ、我ガ豆爾波ハ、履ノ如ク、脱シテ衆ニ通用スルコトヲ得ベシ。且、コレヲ別語トスル方、其意義ヲ説クニ、錯雜ヲ避クルコトヲ得テ、敎フルニモ、學ブニモ、共ニ、簡便ナルガ如ク思ハル、因テ、今ハ、本文ノ如シ。

第二類豆爾波ハ、洋語ニテ言ヘバ、副詞ニ似タルモアリ、前置詞、接續詞ノ趣ナルモアリ、或ハ、名狀スベカラザルモアリ。然レドモ、其文中ニ立チテ、上ニ、種々ノ語ヲ承ケ、下ハ、動詞、形容詞等ニ係リテ、其意義ヲ達スルコトハ、何レモ、略、同趣ナルモノニテ、サラニ、相別チ難シ。此ノ一類ノ語、實ニ、國語ノ言類中ニテ、殊樣ノモノナリ。

第三類ノ豆爾波ハ、上、下、皆、動詞、形容詞、助動詞ニ係ルモノニテ、多クハ、其接續法、又、約束法(Subjunctive mood.)ト立テムモ、可ナルモノヽ如シ。然レドモ、尙、分離シテ、何レノ動詞、形容詞、助動詞ニモ、通用連續セシムベキコトハ、第一類ノ如シ。且、コレヲ接續法ト立ツルトハ、動詞、形容詞、助動詞等ノ語尾變化ト見做サズハアルベカラズ、然ルトハ、夥多ノ語尾變化ヲ成シテ、錯雜ノ甚シキヲ覺ユ、因テ、切リ放シテ、別ニ、豆爾波中ニ列シタリ。

扨、以上、三類ノ語ハ、皆、固ヨリ、獨立ニハ用ヰラレズ、而シテ、其他語ニ係ル規定ニ差異コソハアレ、其語態ノ成立ヲ概スルニ、三類、共ニ、究竟、同臭味ノモノナリ、因テ、今ハ、類ヲ以テ別チテ、豆爾波ノ一部門ニ總ベタリ。

二五三節　(本、三九九、宇治拾遺物語ナルハ、門部府生、海賊射かへす事ノ條ノ文ナリ、平題箭ハ、矢ノ根ノ製ノ名ナリ。頼將ハ紀伊大納言頼宣卿ノ初名ナリ、元和元年、大坂ノ夏陣ノ時、十四歳ニテ後陣ニアリシニ、戰、俄ニ終ハリヌ、卿、東照公ノ陣ニ馳セテ、戰ニ會ハザリシヲ憾ミテ泣ク、大河内正綱、座ニアリテ、公子ハ妙齡ナリ、此ノ後、屢、戰功ヲ立テ給ハム日アラムト慰メタリ、本書ニ引ケルハ、其答語ナリ。

二五四節　○「しかに」トイフ感動詞ニツキテ、因ニ言フベキコトアリ、平家物語ノ、那須與一ガ扇ノ的ノ條ヲ、栗山柴野先生ガ漢文ニ翻譯セラレタルハ、有名ナル文ナリ、然ルニ、其一節ニ、原文「判官、しかに、與一、あの扇のまんなか射て、敵に見物せさ

せよかし、とのたまへど、つかまつ、とも存じ候はず、云々」トアルヲ「判官曰、宗高、汝、射扇正中、令敵軍寓目、則如何、辭曰、臣、自料、不知其可能也、云々」トセラレタリ。「いかに」トイフ語、元來、疑問ノ副詞ナレドモ、其意ハ失セテ、唯、呼ヒ掛クル聲トナレルヲ曉ラズ、イカニ翻譯ニ苦心セラレタリケム、サレド、「せよ」ト、命令法ニイヒ、「かし」トマデ、確定シテイヘレバ、主從ノ相談ニハアラズニ、心付カレザリシハ、イカニ、(則如何ノ三字ハ、全ク不用ナリ)學者モ、漢學ノミニテハ、埒明カズ。

二五五節

(本、四〇二、四〇六、四〇七、四〇八、四一二、「葛城」、「高間」ハ、大和ナリ、源氏物語ノ夕霧ノ「かけをこそあらめ」ハ、「詞ニ掛ケバコソアラメ」ナリ。

○本書、四〇六節ノ「玉藻刈」ハ、枕詞ニテ、「辛」ト「刈」トヲカヨハセタルナリ、辛荷ノ嶋ハ、播州室津ノ沖ニアリ、古ヘ、韓船、難破シテ、荷物ノ漂着シタルヿアリトテ、韓荷ノ島ノ意ナリト云、又、下ノ句ハ、「鳥ハ無心ナレバ、家ヲ思ハジ」トノ意ナリ。

○本書、四〇七節ノ後撰、五ノ「なべに」ハ、「並ニ」トイフニ同シク、(なべて)ナドノ「なべ」ナリ、)鳴キツルニ連レテ、ナリ。

○本書、四〇八節ノ後拾遺、十二ノ歌ハ、初面會ノ翌日ニ贈レル歌ナリ、「夜前、逢ヒテ程モナキニ、思ヒ出スハ、如何ナル心ナルゾ、今マデ相知ラデゾニ年ヲ暦タリシニ」ノ意ナリ。新古今、十七ナルハ、「遁世セヌ人ハ、如何ナル心ニカ、人ニ惜シマレテサヘ、山ニ入ル月モアル世ニ、誰レ惜ムモノナク、入ラバ入ラルベキ人ノ、山ニ入ラヌハ、イカヾ、」ノ意ナリ。

○本書、四一二節ナル萬葉、九ノ「風莫」ノ「莫」ハ、「早」ノ誤ニテ、風早ハ、紀州ノ地名ナリト云フ、「波ノ寄スル面白キ景色モ、賞スル人ナケレバ、徒爲ナリ、」ノ意ナリ。

同、十五ノ「武庫」ハ、攝津ニテ、今ノ「兵庫」ナリ。

二五六節

(本、四一四、以下三節)古今、長歌ノ「わかゑ」ハ、「わかやぎ」ナリ、同、二十ノ歌ハ、「甲斐ノ山ヲ明亮ニ見タイモノヂヤ、然ルニ、心ナク其中間ニ横タハリテアル佐夜ノ中山ヨ、ソレガ爲ニ見エヌ、」トナリ、「こゝろ」ヲ「けゝれ」トイフハ、訛言ナリ、「佐夜ノ中山」ハ、遠江ニアリ。萬葉、一ノ歌ハ、婦人ノ歌ニテ、「イツマデモ若クテ居タイ、」ノ意ナリ。次ノ古今、二十ノ歌ハ、「峯ヲ越シ山ヲ越シテ甲斐ガ嶺ヲ吹キ越ユル風ヲ、人ニシタイモノヂヤ、ナア、人ナラバ、京都ヘ傳言ヲ賴マウニ。」ナリ。

○「が」、「がも」、「がな」ニ就キテハ、此ノ別記ノ第十二四六節以下ニ、委シキ論アリ、尙、本

二五七節

書ノ第五二八節ヲモ見ヨ。

（本、四二七、以下六節）汝ガ名告佐禰」ノ「告佐」ハ「宣る」ノ敬語ノ佐行四段ナル、ソノ第四活用ナリ、萬葉、一ニ「刈る」ヲ「茅をからさね」、同十五ニ「振る」ヲ「袖をふらさね」、同十九ニ「暮す」ヲ「今日はくらさね」、（尙、甚ダ多シ）ナドアル、皆、然リ。同、一ニ「幣取りむけて、はや歸り許年」トアルモ、加變ノ第四活用ノ「こ」（來）ニ「ね」ノ添ハリタルニテ、同シ、扨、後撰、十九ノ「君が代は、鶴の郡に、肖えてきね」、定めなき世の、うたがひもなく。」（甲斐ヘ行ク人ヘノ贈歌ナリ、都留郡ヲ鶴ニ、うたがひニ甲斐ヲカケタリ、無常ノ世ナレド、長命ニテ再會セム、ノ意）トアルハ、加變ノ第五活用ノ「き」（來）ニ、半過去ノ「ぬ」ノ命令法ナル「ね」ノ添ハレルナリ、混ズベカラズ。又、萬葉、七ニ「柴な刈りそね」、同、九ニ「雨な降りそね」、（尙、多シ）ナドアルハ、異例ノ用法ナレド、禁止ノ語ニ添ヘテアツラフルニテ、ヤハリ、此ノ條ノ希望ノ「ね」ナリ。此ノ「ね」ヲ「に」トモ轉用シタルアリ、萬葉、五（七）ニ「ひさかたの天道は遠し、おほゝに、家に歸りて、業を斯麻佐爾。」（此ノ別記ノ第二三九節、參見）

○希望ノ「な」ハ、本書ニ擧ゲタル外ニ、「行きて早見奈」（萬葉、四）「道を多豆禰奈」（同、二十）「出で走り、伊奈（往）奈と思へど」（同、二十）ナド、動詞ノ第四活用ニ接シタルモノ、皆、是レナリ。

詞玉緒、七、（二十五丁）ニ「此ノなハ、イヅレモ、んト同意ニテ「てな」ハ「てん」、「なな」ハ「なん」ナリ、但シ、んハ、ミヅカラノ事ニモ、他ノウヘニモワタリテイフヲ、此ノなハ、タダ、ミヅカラシカセントスル事ニノミイフ。云々」トイヒテ、萬葉、十七ノ「越中國、國津御神は、旅行きも、爲知らぬ君を、めぐみ多麻波奈」（大伴家持、越中守ニ任ゼラレ、赴任ノ時ニ、姑ノ贈レル歌ナリ。）ヲ引キテ「コレハ他ノ上ニィヒテ、たまはなむトコヒネガフ意ニ聞エテ、例ナキ事ナリ。」トイヘリ、然レドモ、佛足石ノ歌ノ、「衆生すくひ、わたしたまはな、すくひたまはな、」ナドモ、同シ、自他ノ上ノ別ノミニテモ定メガタシ。「な」ハ、元來、一音ニテ、希望ノ意ヲイフ語ニテ「む」トハ別物ナリ。

又、活語雜話、三篇（卅九丁）ニ、或人ノ說トテ「ゑなな」、「ゆかな」、ナドノ「な」ハ「ちぎりきな」、ナドノ「な」ニテ「ゑなむな」、「ゆかむな」、「我は戀ひむな」ナドノ類ナドイフベキ「む」ノ一音ノ省カリタルニアラズヤ。トイヘルモ受ケラレズ。同書ニ「萬葉ニ、

「れびはとかなな、我が手ふれなな、子等はあはなな、うち枯せなな、わすれはせなな、」ナドノ「なな」ハ、「なむ」ヲ「なな」トイヘルナリ。「トイヘルモ、前條ノ詞玉緒ノ說ト同シ事ニテ、受ケラレズ。或ハ「我が夫を、筑紫へ遣りて、愛しみ、帶は等可奈奈、奇にかも寐も。」(萬葉、二十)ナドハ、「帶は解かなく、」ナリトイフ說モアレド、「とかなく、」ヲ「とかなな、」トイフモイカヾ。考フルニ、コレハ、「解かな」ト希望シテ、更ニ「契りきな」ナドノ意ノ「な」ヲ添ヘタルニテ、「夢ニ共寐セム、」ノ意ナルベシ、其他、動詞ノ第四活用ニ「なな」ト接シタルハ、皆、推シテ知ルベシ、コレニテ、詠歎ノ「な」ト、希望ノ「な」トアルヿヲ解スベキナリ。又、萬葉、二ノ「秋の田の、穗向の縁れる、かたよりに、君に因奈名、こちたかりとも。」同、十四ノ「高き嶺に、雲のつく如、我れさへに、君に都吉奈那、高嶺と思ひて。」ナドノ上ノ「な」ハ、半過去ノ「ぬ」ノ第四活用ノ「な」ニテ、下ノ「な」ハ希望ノ「な」ナリ、「よひ〳〵ごとに、打ちも寐ななむ、たぎる〳〵も、歸り來ななむ、」ニ同シ。萬葉、二ニ「淺香の浦に玉藻苅手奈、」ナドイフ「て」モ、半過去ノ「つ」ノ第四活用「な」ハ希望ノニテ、專ラ同シ。

○「なむ」ノ希望ナルハ、論ズルマデモナシ、コレヲ「なも」ト用ヰタルモアリ、萬葉、十四ニ「上野ぬ、をどのたぎりが、川路にも、子等は安波奈毛、ひとりのみして。」トアルハ、「逢はなむ」ナリ。「な」ノ一音ニ、希望ノ意アリテ、ソレニ「む」、又ハ「も」ノ添ハリテ、「なむ」、「なも」トモナルハ、豆爾乎波ノ「ぞ」ニ似タル「なむ」ヲ「なも」トモイフト同シ。

○以上、說ケルガ如クナレバ、此書ニハ、「ね」、「な」、「なむ」ノ三ツヲ、一ツニ合セテ、希望ノ、感動詞トシタリ、共ニ、動詞、助動詞、ノ第四活用ニ接スレバナリ。(「ね」モ「な」モ、他ニ紛ラハシキモノ多シ、其ノ接シタル動詞、助動詞ノ活用ニテ、別ツベキナリ。)

○曩ニ、語法指南ニ、コヽノ「なむ」ヲ、助動詞トシタレド、今ハ感動詞ニ改メタリ。

二五八節

(本、四三四)古キ感動詞ニハ、書紀ノ歌ニ「よしゑやし、吾れはくるしゑ、」萬葉、(四)「我はさぶしゑ、君にしあらねど、」同、(十一)「心はよしゑ、君がまに〳〵、」同、(十四)「我は待たむゑ、」ナドアリ、「よ」ノ如シ。(口語ノ感動詞ニ「ゑ」トイフモ、コノ遺ナラムカ。)萬葉、(四)紀の關守い、とゞめてむかも、」同、(十二)「家なる妹い、いぶかしみせむ、」以上、名詞ノ下ニ)同、(三)「玉の緒の、絕ゑじい、妹と結びてし、」同、(七)「花待つい、間に、な

げきつるかも」續紀(三十)詔「捨伊波誘乎招都」(以上、動詞等ニ)ナドモ「よ」ノ如シ。

二五九節　(本、四三五)「行かむや」「見むや」ノ類ノ「む、や」ヲ、從來、別ニ一語トセリ、サレド、「行かむ」「見む」ノ下ニ「よからむ」ナドイフ意ヲ略シテ、希望ノ意ハ、其略セル語ニアルナルベシ、因テ、本書ニハ「や」ノ條ニ收メタリ。

二六〇節　又「れとらましやは」「來べき春かは」「ひとりかも寐む」ナドノ「やは」「かは」「かも」ヲモ、一語トシ、反語トシタルガ多ケレド、是等ノ「や」「か」ハ、疑ヒノ「や」「か」ニテ、其「や」「か」、即チ、反語トナリテ、下ニ「は」「も」ノアルトナキトニ關セズ、因テ、是等モ、皆、放チテ「は」「も」ノ條ニ入レタリ。(本書ノ第五四一節以下ヲ見ヨ)

二六一節　○此ノ篇ニ感動詞トイフモノ、從來ノ語學書ニハ「詠歎ノ詞」「歎息ノ詞」「ながめ」ナド稱シテ、スベテ、豆爾波ノ中ニアリ、サレド、別ニ、自ラ、一類ノ語ナレバ、此ニ集メテ、一門ニ立テタリ。

二六二節　○洋文典ノ譯語ニ、歎息詞(Exclamation.)或ハ、間投詞(Interjection.)ナドイフモノ、即チ、感動詞ナリ。其「間投」トイフハ、語句ノ間、那處ニモ投ゲ入レラルベキモノナレバイフナリ(間投ノ譯ハ、旨甚シ、投間ナルベシ)サルニ、我カ感動詞ハ、言語ノ上ニ居リ、中ニ入リ、下ニ添フナド、其用法ニ、各、規定アリテ、而シテ、他語ニ移動ヲ及ボスヿモ、少カラズ、宜シク慣用ノ法ニ從フベシ、妄ニスベキニアラズ。歎息詞ノ名、妥ナラズ、(なげく)ハ、長ク息突クニテ、七情ニ通ズレド、歎息ハ、喜、樂、愛、欲等ニ通ゼズ、)本書ニイフ感動詞モ、感詞トセバ可ナラム、ト思ヘド、冠詞ト紛ヒ易シ、感言、最モ佳ナレド、他ノ「詞」ノ字ト、不倫トナル、因テ、今ハ、姑ク、感動詞トシタリ。

二六三節　(本、四三七)八品詞ノ、互ニ相合ヒテ、熟語、疊語トナルトキハ、其個々ナルトキノ意義語性ヲ變ズルヿアリ、因テ、此ニ一括シテ、再說ス。

○助動詞ノ、動詞、又ハ、他ノ助動詞ト合フモノモ、畢竟ズレバ、熟語ナルベシ、サレド、前ニ、各條ニ說キ了ヘタレバ、別ニ、此ニ言ハズ。又、接頭語、接尾語ノ、他語ニ接シテ成レルモノモ、熟語ナレド、接頭語、接尾語ハ、他ニ接シテ熟語トナルガ本分ナレバ、別ニ言フマデモナシ。

二六四節　(本、四三八)熟語ハ、個々ニ解剖シテミテ、益アルベシ、例ヘバ「松山」「谷川」ハ、各、名詞ナリ「酒樽」「船歌」モ、各、名詞ナレド、上ナル語ハ、「さか」「ふな」ト語尾ヲ變ズ「淺瀨」「黑

雲」ハ、形容詞ノ語根ト名詞トナリ、「一年」「五月」ハ、數詞ノ語根ト名詞トナリ、「唐織」「京染」「敎草」「讀物」ハ、名詞ト、動詞ノ名詞法トヲ上下ニシタルナリ、「天津風」「沖津浪」ハ、二名詞ノ間ヲ、豆爾波ニテ繫ギタルモノナリ、其他モ、推シテ知ルベシ。

○上、從ニシテ、下、主ナルモノ、尙、多シ、「朝日」「月夜」「子ノ上」(兄)「竹ノ子」(筍)「皆殺」(鑾)「相對死」(情死)「誰彼時」(黃昏)「彼誰時」(昧爽)「稻負鳥」「背太鳥」「三日月」「弓張月」「蝙蝠傘」「鳶合羽」「大和錦」「武藏鐙」「鎌倉彫」「奈良晒」「嚴物作」「早物言」「金時計」「銀煙管」「猿腰掛」(草名)「鳥豌豆」(草名)「斑無鶉」「根無蔓」「蔓木苺」「黃小雁皮」(草名)「赤鼻小鯛」「細根大根」「申食國政大夫」「內兵庫正」「生キトシ生ケル物」「生ク日ノ足ル日」「天祝詞」「大祝詞言」「八坂瓊五百筒御統珠」「天津日高彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊」「龍宮乙姬」「元結切片」(海藻名)

二六五節　(本、四三九)上、下、共ニ主ナルモノ、「縱橫」「讀書」「雨風」「月日」「天地」「前後」「長短」「輕重」「浮沈」「有無」「實否」

二六六節　(本、四四一)本書ニ擧ゲタル「丈長」ハ、一種ノ製ノ紙ノ名ナリ、「車返」「親不知」ハ、地名ニアリ、「豆廻」ハ、鳥ノ名ナリ。「言名付」(詐欺)ナドモアリ。

二六七節　(本、四四二)熟語ノ動詞、「近寄る」「遠離る」「思計る」「(風)天降る」「高光る」「戶指す」「(食)名告る」「蟲食む」「(蝕)額突く」「(命)引以る」「(等)支切る」「(遙)振放見る」「彌頻降る」「新鋤返す」「讀み分け置く」「書い付け以て行く」　續紀、天平勝寶元年四月朔ノ詔ニ「此遠聞食驚伎悅備貴備念久波」「又「受賜里恐理　戴持」ナド續ケタルアリ、但シ、中止法ナルベキカ。

二六八節　(本、四四五)熟語ノ副詞「日はく」「宣はく」「爲可からく」「(須)願はくは」「疑ふらくは」「頻りに」「打ち付けに」「絕ねて」「總べて」「決して」「曆へて」「(假令)言はゞ」「何れか」「(孰)如何でか」「(爭)己づから」「(自)常し並に」「(長)然らぬだに」

二六九節　(本、四四六)熟語ノ接續詞「然らば」「されば」「乍去」「何となれば」

二七〇節　(本、四四八)事物ノ數多キヲ示シ、共ニ然ルヲ示スモノ、尙、アリ、「國々」「村々」「町々」「島々」「路々」「家々」「關々」「辻々」「門々」「宮々」「寺々」「下々」

二七一節　(本、四四九)副詞トナリテ、物每ニ事每ニ然ル意ヲ示スモノ、尙、アリ、「朝々」「夜々」「色々」「數々」「聲々に」「區々に」「樣々に」「程々に」　又「時々」「折々」「所々」ナドハ、點々散在ノ意ヲ成ス。

二七二節　(本、四五〇)動詞ノ疊語ハ、「見る〳〵、見す〳〵、知る〳〵、泣く〳〵、泣き〳〵、待ち〳〵、取り〳〵に、次ぎ〳〵に、離れ〳〵に、絶え〳〵に、助動詞ニ「行きつゝ見る、(懊惱する、痛快する、繁褥する)

二七三節　(本、四五一)形容詞ノ疊語ハ、「强々し、惡々し、苦々し、痛々し、冴え〳〵し、初々し、男々し、女々し、骨々し、黑々と、早々と、細々と、久々にて、」

二七四節　本、四五二)副詞ナルハ、「はら〳〵、つら〳〵、かねぐ〳〵、去ぐ〳〵、いよ〳〵、たま〳〵、こもぐ〳〵、れの〳〵、」

二七五節　本、四五三)感動詞ナルニ「君に因り、よゝ〳〵〳〵と、よゝ〳〵と、ねをのみぞ泣く、よゝ〳〵〳〵と。(紫華、去の歌)ナドアリ「よゝ」ハ、泣ク聲ナリ。

二七六節　本、四五四)接頭語ハ、洋文法ノPrefix.ナリ、接尾語ハ、Suffix.ナリ。然レドモ、我ガ接頭語ハ、甚ダ彼ノAdjective.ニ似タル所アリ、其說ハ、此ノ別記ノ第一三三節ニイヘリ。

二七七節　○「初花、初穗、初事、初冠、小舟、小笹、小家、小暗し、御位、御心、眞白、眞半分、素腹、素面、生絹、生地、僻事、僻覺、面舞、ゐせ車、幾年、幾若子、直路、直走、諸聲、彌遠し、ほの見ゆ、ほの聞ゆ、ほの暗し、屢だゝく、屢吹く、屢鳴く、」

二七八節　(本、四六一)土佐日記ノ歌ハ、松ト鶴ト、互ニ伴侶ナリト思ハルヽヤウナリ、ノ意。

二七九節　(本、四六三、四六四)形容詞ノ語根ナラズシテ「あはれさを、何にたとへむ、」ナド用ヰタルハ、違法ナルベキカ。

○動詞ニ付ク「さ」ハ、形容詞ノ語根ニ付ク「さ」ト異ナリ、本書ニ擧ゲタル萬葉集、九、ノ歌(入唐使ニ贈レル歌ナリ)ニ「往方、來方」ト「方」ノ字ヲ當テ、(往方、來方、ト訓メルハワロシ)古今集離別ニ「去たはれて、來にし心の、身にしあれば、歸るさまには、道も知られず。」蜻蛉日記ニ「まゐるさまに、ゐ知らで、」ナドアレバ「方」ノ略ナリ。

徒然草ノ「あふさきるさに」ハ、詩經、關雎篇ニ「左右」ノ字ヲ、斯ク讀ミテアリ、「左方ニ右方ニ、」又ハ「コナタカナタニ、」ナドノ意ナリ。「かへさ」ハ「歸るさ」ノ略ナリ。「暮れはてぬ、かへさは遠れ、山櫻、誰が爲に來て、惑ふとか知る。」(千載、一)かへるさを、いそがぬ程の道ならで、のどかに峯の花は見てまし。(同、一)春深く、尋ね入るさの、山の端に、ほの見し雲の、色ぞ殘れる。」(新古今、二)晴れ曇り、降りもつゞかぬ、

雪雲の、あふさきるさの、月ぞさゐたる。(夫木、十八)ナドモアリ。又「白菅の、眞野の榛原、ゆくさくさ、君こそ見らめ、眞野の榛原。(萬葉、三)ナドハ、名詞ヲ、直ニ副詞ニ用ヰタルナリ。

○因ニ云、奥州、水戸、肥前佐賀、等ノ方言ニ、豆爾乎波ノ「ヘ」ノ意ヲ「さ」トイフ。「右さ行く、」前さ出る、」上さあがる、」ノ如シ、コレモ「方」ノ約轉ナラムカ、更科日記ニ「この曉に、いみじくれはきなる人魂のたちて、京さまへなむ、來ぬる、と語れど、」

二八〇節　(本、四六五)拾遺、十三ノ丸小菅ハ、荆三稜トテ、水澤中ニ多ク生フル草ナリト云フ。

○貫之集ニ「秋の田の、穂にし出でぬれど、打ちむれて、里遠みより、雁ぞきにける。」斯ル用法モアリ。

二八一節　○左ノ數語ノ如キハ、一個ノ名詞ノ意義ヲナシテ、上ナル語ハ、却テ下ヲ形容スルモノナレド、尙、獨立ニハ用ヰヌ語ニテ、接尾語ノ如シ。

二八二節　か。(家)　處ヲイフ。「山が、住か、隱が、」

「こゝ、かしこ、」ナドノ「處」ノ轉ナリ。常ニ「家」ノ字ヲ當ツレド、家ノ字音ニハアラズ。

二八三節　か。(日)　日ヲ數フルニイフ。「ふつか、いつか、はつか、みそか、百か、幾か、」

へ。(邊)　重ヲイフ。「みへ、をへ、はたへ、千へ、幾へ、」

べ。(邊)　邊ヲイフ。「山べ、川べ、磯べ、」

べ。(部)　群ヲイフ。「下べ、物のべ、忌べ、」

二八四節　て。(人)　人ヲイフ。「射て、讀みて、爲て、」

り。たり。(人)　人ヲ數フルニイフ。「ひとり、ふたり、みたり、よたり、幾たり、」

二八五節　(本、四七〇)此ニ擧ゲタル「たし」ハ、接尾語トセズ、動詞、助動詞ノ第五活用ニ接スル助動詞ト立ツベキカ、徒然草ニ「ありたきものは、云々、」ナド用ヰテアリ。(字治拾遺ニ「御見參に入りたがり候ふ、といへど、」)

二八六節　○「めでたし、」「うれたし、」ナドノ「たし」ハ、「痛し」ニテ、「甚し」ノ意ナリ。「いたくなあびそ、」ナドノ「いたく、」是レナリ。(漢語ニ、痛快ナド用ヰル痛ノ意)

(本、四七一)「おがら」ノ語原ハ、「の」ト「から」(自)トノ轉ナリトモイフ、或ハ、「長ら」ニテ、延ブル意ナラムカ。

○「讀みながら考ふ」ナドモ「讀みて、そのまゝ考ふ」ノ意ナルベケレド「讀む」ト「考ふ」トノ兩爲ニ渉レバ「つゝ」ノ意ヲモ成シ、更ニ轉ジテ、「讀み」ヲスレドモ「考へ」ヲモスル意トナリテ「なれども」ト、反對スル意トナルナルベシ。

二八七節　(本、四七三)「玄かしながら」ナドヲ、反對ノ意トスルハ、後世ノ用語ニ就キテイフ、古クハ「そのまゝ」ノ意ナリ。

二八八節　(本、四七四)此ニイフ「ものから」ノ「から」ヲ、本書、第四七九節ナル「故に」ノ意ノ「から」ト、誤用スルモノ、往々アリ、彼ハ「なれど」ノ意トナリ、此ハ「なれども」ノ意トナリテ、正反對ナリ、注意スベシ。「ものから」ノ「ものながら」ノ意ナルハ「玄かするからに」ノ「玄かするながらに」ノ意ナルト同シ。又「みながら」(悉皆)モ「みなながら」ノ意ナレド、コレハ「ソノマゝ」「ソレゴメニ」ノ意ノ方ナリ。

○古今、十四、ノ歌ナル「空蟬」ハ、「世」ノ枕詞ナリ、「人言」ハ「うはさ」ナリ、下ノ句ハ「互ニ忘レハセヌナガラ、オノヅカラ、トホノクノデアラウ、ト思ハル」ノ意ナリ、戀歌ナレド、友人間ノ事トモ說カルベシ。

二八九節　(本、四七五)古今、四、ノ歌ハ「女郎花ハ、天ノ川ニハ生ヘヌモノニテアリナカラ、何故ニ、毎年、秋ナラデハ、開花ニ逢ヒカヌルモノカ。」ノ意ナリ、牽牛、織女ノ兩星、毎年、一回、七月七日ノ夕ニ、天河ニテ逢フ、トイフ「アル」ニ寄セテ、詠メル歌ナリ。萬代集ノ歌ハ、三月晦ノナルベシ。

二九〇節　(本、四七六)堀川後百首、王昭君「行くすがら、心もゆかず、別れ路は、なほ古里の、ことぞかなしき。」公任集「小忌衣、摺りすて着つる、露けさは、春の日すがら、またぞ忘れぬ。」

二九一節　(本、四七七)「がてら」ハ、樣テ雜フル意ナラム。雲林院ハ、京都ノ西北郊ニアリ。

二九二節　(本、四七八)「がてに」ハ「難氣に」ノ約カ「難ねに」ノ轉カ。萬葉集ニハ「知りがてぬかも」「入りがてぬかも」ナドトモ用ヰタリ、古今、二、ノ歌ナル「藤波」ハ、藤花ヲ波ニ見做シテイヘルナリ。

二九三節　(本、四七九)「から」ハ「かれ」(故)ノ轉カ、トモイヘド「かれ」ハ、他語ノ上ニ用ヰ「から」ハ、下ニ用ヰル差アリ、(サレバ「かれ」ハ「かゝれど」ノ約トモイフ)或ハ「から(自)して」ノ意ナリ、トイフ說モアリ。

二九四節　(本、四八〇)「雨雲の、よろにのみして、ふることは、我がゐる山の、風はやみ」なり。

（伊勢物語）此ノ如キ用法モアリ。又、助動詞ノ「べし」ノ語根ヲ「佐保山の、はゝその もみぢ散りぬべみ、よるさへ見よと、照す月影。」（古今、五）ナド用ヰタルモ、コレナリ。

二九五節（本、四八一）後拾遺、十三、ノ歌ハ、橋ノ緑ニ「蹈ミ」トイヒテ、文見（フミ）ニカケタリ。○天然ノ作用ノ「絶ゑみ絶ゑずみ」「降りみ降らずみ」ナド、イフ語ニ、他動詞ノ「試（ミ）ル」ヲ用ヰルモ、姑ク、非情ノモノヲ有情ニイフナリ「時雨（シグレ）せり、紅葉（モミヂ）せり、」ノ「せり」ノ、自動トナルガ如シ。

此ノ「み」ヲ「見」ト混ジ思フベカラズ「梓弓、引きみ、ゆるべみ、思ひみて、」「見ゑみ見ゑずみ」「とみ、からみ、見れど」「俗ニ「見てみる」「眠てみる」」ナド「見」ト「試」トヲ解剖シテみるべシ。

二九六節（本、四八二）「毎ニ」ノ語原ハ、「異（コト）ニ」ニテモアラムカ。此ノ語、「宵々（ヨヒヨヒ）ごとに、打ちも寐なむ、」（伊勢物語）「時々（ヨリヨリ）ごとに、ゑ念じ得ず」（篁木）ナド用ヰタルアリ。又「野邊ごとの、ちゝの草葉に、むすべども、いつれもれなし、秋の白露。」（續後撰、十）「宿もせに、朝（アサ）ごと稲を、乾すよりは、はてを結ひてぞ、掛くべかりける。」（畑川百首）「はて」ハ、稲ヲ懸ケテ乾ス木ナリ）ナド用ヰタルモアリ。

二九七節（本、四八四、四八五）此條ノ「ゑかり」モ、豆爾波ノ「ゑかり」ト、語原ハ、同ジク「計（カク）」ノ意ナラン、サレド、用法、意義ハ、異ナリ「山の井の、淺き心も、思はぬを、影ゑかりのみ、人の見ゆらむ。」（古今、十五）「我ガ思フ心ハ、山ノ井ノ如ク淺クハナキニ、君ハ、何故ニ、影ノ見ユルノミニテ、寄リ付カヌヅ、ノ意ナリ）ナドノ「ゑかり」ハ、「のみ」ト重用シテ、紛ラハシケレド、二ツナガラ、豆爾波ノ方ニテ、斯ル時ノ「のみ」ハ、「イツトテモ」ノ意トナルト云フ。

二九八節（本、四八七）「づゝ」ハ、「一（ヒトツ）箇、二（フタツ）箇、」ナドノ「つ」ヲ重用シタル語カ。

二九九節（本、四八八）「など」ハ、「何（ナニ）と」ヲ、音便ニ「なんど」トイヘルヲ約メタル語カ。

三〇〇節（本、四八九）「がに、がね、」トイフ語ハ、萬葉古義ノ附錄ノ雅言成法（下、四十九）ノ說、得タルヤウナリ、今、其大意ヲ摘ミテ、左ニ記サム。

「がに」ハ「之似（カニ）」ニテ「がね」ハ「之根（カテ）」ナリ、其語ノ起レル所、固ヨリ別ナリ、然ルヲ、詞玉緒ニ「がね」ハ「豫（カテ）」ノ意ニテ「がに」ハ「豫（カテ）に」ヲ約メテイヒタルナリ、トイヘルハ非ナリ、古今集ノ頃ヨリ「がに」ト「がね」トヲ、一ツニマギラハシ「がね」ノ辭ハ失セテ「が

ね」トイフベキトコロヲモ「がに」トノミイヘルハ、イミジキ變異ニテ、奈良ノ朝ヨリアナタナルニハ、當ラズ、萬葉、四、(三十五)「路に逢ひて、笑ましゝからに、降る雪の、消ぬを消ぬ香ニ、戀ひ思ふ吾妹。」同、八、(三十九)「秋田刈る、假庵もいまだ、こぼたねを、雁がね寒し、霜もれきぬ我爾。」ナドノ「消ぬがに」ハ「消ぬといふに似るをかりに」ノ意ナリ、「置きぬがに」ハ「れきぬといふに似るをかりに」ノ意ナリ、落ツル所ハ「消ぬなむをかりに」「れきなむをかりに」ノ意トナル、コレヲ「消ぬべき豫ての設けに戀ふ」「置きぬべき豫ての設けに寒し」トシテハ聞エズ。

萬葉、十、(十四)「梅の花、吾は散らさじ、わをにより、奈良なる人の、來つゝ見之根。」同、(三十)「橘の、林を植ゑむほとゝぎす、常に冬まで、住みわたる金。」同、十二、(四)「里人も、語りつぐ我禰、よしゑやし、戀ひても死なむ、誰が名ならめや。」ナドノ「がね」ハ、右ニ引ケル十ノ卷ノ歌ニ「之根」ト書キタル字義ニテ「云々セムソレガ根本」トイフ謂ヨリ起レル語ニテ「ソレガ爲」トイフ意ニ落ツルナリ、「奈良なる人の來つゝ見るが爲に、梅の花を散らさじ」「ほとゝぎす、冬まで住み渡るが爲に、橘の林を植ゑむ」ノ意ナリ、中昔ノ詞ニ「后がね」「尊がね」ナドイヘルモ「后になるべきをれが根ざしふるまひ」ノ意ナリ。古今ニ「拉く涙雨と降らなむ、わたり川水まさりなむ、歸り來るがに。」トアルハ、作者ハ「かへり來るをかりに」ノ意ニテ、詠ミシカハ知ラネド、古ヘノ定ニテ言ハヾ、必ズ「がね」トイヒテ「歸り來るが爲」トイフ意ニ見ベキナリ、又、拾遺集ニ「山里に、知る人もがな、ほとゝぎす、鳴きぬと聞かを、告げに來るがに。」トアルハ「告げに來るが爲」ノ意ト聞エタレバ、古ヘノ定ニテ言ハヾ、コレモ必ズ「がね」トイフベキナリ、斯ク「がね」トイフベキ所ヲモ「がに」トノミイヘルハ「がね」ノ詞ヲ失ヒテ、ソノ言ノ似タルニ因リテ、意ヲモ言ヲモ、一ツニマギラハシテ「がに」トノミイヒタルナリ、云々。

三〇一節　(本、四九〇)以上、他語ヲ副詞トスル接尾語ノ「ながら」「がてら」「からに」「だかり」「等ハ、豆爾波ノ「から」「だに」「さへ」「のみ」「だかり」「つゝ」「等ト、同趣ノモノナルガ如ク見ユレド、用法ノ異ナルコト、此ノ別記ノ第二五一節ニ辨シテオケリ。

三〇二節　(本、四九三、四九四、四九六)主語、又ハ、文主ハ、英文法ニイフ Subject ニテ、說明語ハ、Predicate ナリ、客語ハ Object ナリ、修飾語ハ Modifier ナリ。

○「園の」ハ「梅」ノ修飾語ナリ、「我が」ハ、又「園」ノ修飾語ナリ、「中に」ハ「咲き」ノ修飾語

ナリ、「雪の」ハ、又「中」ノ修飾語ナリ、次下ノ例ニモ、此ノ如キガ多シ、然レドモ、煩ハシケレバ、略シテ、一々別タズ、合稱スルコトアルベシ。

三〇三節

（本、四九七）禁止ノ語モ、説明語ナリトハ、禁止ノ副詞ニテ修飾セラレタル動詞モ、説明語ナリ、ノ意ナリ、尚、此ノ別記ノ第三四四節ヲ見ヨ。

○「皆人は」ノ歌ハ、古今集ノ十六ニアリ、良峯宗貞、仁明帝ノ寵ヲ受ケ、帝、崩御ノ後、僧トナリ、（僧正遍照、是レナリ）明年、衆、皆喪服ヲ脱シタル時ニ詠メルナリ、「花の衣」ハ、花ヤカナル衣ナリ、「苦の衣」ハ、僧衣ナリ、「我ハ、今ニ、涙ニテ袂ハ乾カズ、人人ハ、花ノ衣ニサヘ〜ナリタリ、我ガ袂ハ、セメテ乾キナリトセヨ。」ノ意ナリ。「花の」、「苦の」ハ、「衣」又ハ、「袂」ノ修飾語ナレド、姑ク合セテ客語トシタリ、（次ノ歌ノ「我ガ宿」ナドモ然リ、他モ推シテ知ルベシ）「乾き」ハ名詞ニシテ、「乾きをせよ」ノ義ナレド、「乾きする」ニテ、一ノ自動詞トシテ、「せめて乾くむかりも乾け」ノ意トモ見ル。「苦の袂」、「呼掛ノ主語ニテ、「せよ」、命令ノ説明語ナリ。

○「今更に」ノ歌モ、古今集ノ三ニアリ、此ノ歌ニテハ、「時鳥」、「呼掛ノ主語ニテ、「歸るな」ヲ禁止ノ説明語トシ、「鳴け」ヲ命令ノ説明語トス。而シテ、本書ノ第五〇九節ニイフ主語一ツ（時鳥）ニテ、説明語二ツ（歸るな、鳴け）ノ例ナリ、且、初ノ三句ハ、本書ノ第五一一節ニイフ倒置句ナリ。

○拾遺、十三ニ、「夏草の繁みに生ふる、まろ小萱、麻呂がまろ寐よ、幾夜歴ぬらむ。」ノ下ノ句ナドハ、呼掛ノ主語ニ、常ノ説明語ヲ用ヰタリ。又、「君、驚かせ給ふべきにあらず」ナドイフ句ノ「君」モ、呼掛ノ主語ニテ、下ハ、打消シテ、命令ノ意アリ。又、「音のさやけさ」、「うつろふがうさ」、「言ふ由もがな」、「ひとり行かなむ」ノ類モ、文ヲ結ビテ、説明語ノ力ヲ成ス、是等ノ事ハ、本書ノ第五二七、第五二八節ニ説クベシ。

三〇四節

（本、四九八）土佐日記ノ文ハ、土佐ノ國ノ海岸ノ字多トイフ地ノ海上ヲ、航行スル時ノ文ナリ、「その松の數」ハ、主語ニテ、「あらむ」、「歴たり」ノ二ツノ説明語アルナリ、（本書ノ第五〇九節ヲ見ヨ）又、「數」ニ「幾そをくあらむ」ハ、善ケレド、「數」ニ「幾千年歴」トハ、年數ヲ歴テ數ノ殖エタルヲイフニカ、或ハ、「その松の幹」ナドイフベキヲ、含マセタルモノカ。「その松の數」ノ内ニ、修飾語モアレド、今ハ、合シテ一主語ト見タリ。又、「その松の數」ヨリ「歴たり」マデハ、本書ノ第五一〇節ニイフ

挿入文ナリ、此ノ文ヲ「といふことを」ト承ケテ、次ノ文ノ説明語(知らず)ノ客語ト見ルナリ。

三〇五節　(本四九九)「あはれ今年の秋もいぬめり。」ハ、千載集、十六、ノ歌ナリ、「アヽ今年ノ秋モ、ハヤ過ギ去ルト見ユ、」ナリ。「あはや、法皇云々」ノ句ハ、源平盛衰記ノ、後白河法皇ノ、平清盛ノ爲ニ、御所ヲ移サレ給フ所ヲイヘルナリ。

○文ノ構成上ニ、最モ注意スベキハ、主語ト説明語トニテ、次ニ客語ト修飾語トナリ、第一ニコレニ着目セザレバ、文脈ヲ解シ得ズ、泰西ノ文法、皆、コレヲ講ズ。然ルニ、我ガ國ノ語學書、唯「かゝり」「むすび」ヲノミ旨ト説キテ、コレニ及バザルハ、心無シ。「かゝり」「むすび」固ヨリ閑却スベキモノニハアラネド、文上ノ添意ニ起ル旁則ニテ、全文ノ立意ヲ認ムル要ハ、全ク主語ト説明語トニアリ、如何ナル文ニテモ、先ヅ之ヲ提起シテ講ゼムヿヲ要ス。

「花落つ」トイヒ、「志堅し」トイヘバ、文ノ構成上、主語ノ作用性質ヲ説明シ盡シテ、能事、爰ニ了ル。此ノ間ニ「ぞ」「こそ」ヲ加ヘテ「花ぞ落つる」「志ころ堅けれ」ナドシタレバトテ、ソノ「ぞ」又ハ「こそ」トイフ語ニ有スル意ヲ添フルマデニテ、之ヲ加除セムニ「ぞ」「こそ」ノ意ノ加除アルノミ、「花落つ」「志堅し」ノ立意ハ依然タラム。サレバ、主語説明語ノ構成上ヨリ言ヘバ「かゝり」「むすび」ハ、全ク旁則ナリトイフベシ、猶「花、悉く落つ」「志、愈堅し」ナドイフ「悉く」「愈」ノ加除ノ如シ。

三〇六節　(本五〇一)枕詞ハ、多クハ、上古ノ用井ニ出デヽ、降リテモ、奈良ノ朝ノ頃ニ言ヒ出デタリト見ユルモ少シ、又其意義モ、解スベキト解スベカラヌトアリ、「高光る日」「天飛ぶや雁」「刈菰の亂る」「梓弓引く」「玉櫛笥開く」「菅の根の長き」ナドハ、其意義、知ラルベシト雖ドモ「ひさかたの天」「あしひきの山」「久方」「足引」ナド記スハ、當字ナリ、ナドハ、強ヒテ解キタルモアレド、諸説、區々ニシテ到底、辨ヘ難シ、サレバ、深ク意義ヲ求メズシテ、唯、某枕詞ハ、某語ニ用井ルモノ、トノミ知リテ、先ヅハ事足リヌベシ。

三〇七節　(本、五〇三)「輕」ハ、大和國ノ地名ナリ、「梓弓、春立ちしより、年月の、射るがごとくも、れもはゆるかな。」(古今、二)「かへらじと、かねて思へど、梓弓、なき數に入る、名をぞとゞむる。」(楢木正行)ナドモアリ。

三〇八節　(本、五〇四)語ヲ隔テテ修飾シタルニ、「たまくしげ、いつしか明けむ」(萬葉、十八)「あ

しひさの、この傍山、梓弓、れして春雨、今日降りぬ、「張る」ヲ「春」ニ移セルナリ）ナドモアリ。（前項ノ二首ナルモ然リ）

三〇九節（本、五〇五）後撰集、十七ニ「僧正遍照ノ剃髪ノ時ノ歌」「たらちめは、かゝれとてしも、むぢ玉の、我が黒髪を、撫でずやありけむ。」トアリ「我ガ幼少ノ頃、成長ノ後ニ僧トナリテ髪ヲ剃レ（かゝれ）トテ、母上ハ、我カ黒髪ヲ撫デハシ給ハザリシナラム、」ノ意ナリ。

三一〇節（本、五〇六）「葛野」ハ、山城ノ郡名ナリ。六音ナルニ「かぢのおとの（羅音）つゞら〳〵に、」ナドモアリ。「ことひうし」ハ「殊負牛」ノ約ニテ、牡牛ノ異名ナリ、今モ、九州ニテ「コッテイ」トモイフハ、更ニ約メタルナリ。人名ノ上ニモ枕詞ヲ用キル、「打麻を、麻績王」、「天ざかる、向津媛」ノ如シ。

三一一節（本、五〇七）絲ハ長ク續クヨリ「絶エズ」ノ序トシ、松ノ葉ハ常葉ナレバ「散リ失セヌ」序トシタルカ「鳥の跡」トハ、倉頡ノ、鳥跡ヲ見テ、文字ヲ創製シタルヲイフ。又、舟ノ葦ニ障ルヲ「障リ多み」（障リ多キニ因リテ」ナリ）ノ序トシ「ひさ木」ノ「ひさ」ノミ借リテ「久しく」ノ序トセリ。「あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を、ひとりかも寢む。」（拾遺、十三）みかの原、わきて流るゝ、いつみ川、いつ見きとてか、戀しかるらむ。（新古今、十一）ナドモ、垂尾ノ長キヲ「長々し」ノ序トシ、いつみ川（山城ノ川ノ名）ノ「いつみ」ヲ「何時見」ノ序トシタリ。万葉、十二ノ「吾妹子に、衣かすがの、よしき川、よしもあらぬか、妹が目を見む。」ナドハ「わぎもこに衣」ヲ「かすが」ノ序トシ「よしき川」ヲ「又「よしもあらぬ」ノ序トシタリ。

三一二節（本、五〇八）聯構文ノ目ヲ設クル上ハ、聯構ナラヌヲ、單構文ナド名ヅクベキニ似タレド、初ニ、主語ト説明語トアルハ、一文ナリ、ト説キ置キタレバ、必シモト思ヒテ、設ケズ。又、次ナル倒置句モ然リ、倒置句ナラヌヲ、正置句トモ言フベキニ似タレド、前ニ、主語、上ニ居リ、客語、其次ニ居リ、説明語、下ニ居ルヲ、正則トスル由ヲ説キ置キタレバ、言フニ及バズ。

○「櫻散る」ノ歌ハ、拾遺、一、ノナリ、「雪降ルト見ユルニ、春ナレバ、風寒カラズ、樹ノ枝ヨリ降ル花ノ雪ナレバ、天ニハ降ルト知ラレズ。」ノ意ナリ。

三一三節（本、五〇九）土佐日記ノ文ハ、前ノ第二四八節ニ註セリ。

三一四節（本、五一〇）徒然草ノ文ハ、最明寺時頼、或ル深夜ニ、大佛陸奥守宣時ヲ呼ビテ、酒

酌マムトスル時ノ時頼ノ詞ナリ、酒ノミニテ肴ナシ、「奴婢ハ寐ッラム」ニ挿入文」「然ルベキ肴アルカ」ト求メ給ヘノ意、宣時、乃チ、厨ヨリ味噌ヲ求メ來テ、酌ミシナリ。「さりぬべき物やある」ノ挿入文ヲモ、「と」ニテ受ケテ「索めたまへ」ノ修飾語ノ如クセリ。「さりぬべきもの」ノ内ニモ、修ト主トアレド、圖ノ、餘リニ繁雑トナルベケレバ、合シテ主トセリ。新葉ノ歌ノ「秋を措きて、時こそあれ」ハ、「秋ヲ過シテ、モイチド、時節ガ、サ、アル」ノ意ナリ、古今、五ニ「秋をれきて、時こそありけれ、菊の花、うつろふからに、色のまされば。」トアルニ據リシナラム。

三一五節

○大和物語ナルハ、津ノ國ノ芦刈男ノ條ノ文ナリ、舊妻、立身シテ後ニ、舊夫ヲ尋ネタルニ、舊夫、身ノ、愈、賤シクナレルヲ耻ヂテ匿レタルヲ、供ノ者ヲシテ呼出サシメ、物ヲ與ヘムトスル所ナリ、但シ、供人ハ、舊夫ナルヲ知ラズ、尋常ノ人ト見テ言フ所ナリ。「かく、仰事ありて」ヨリ「をさなき者なり」マデハ、スベテ、供人ノ詞ニテ、中ニ、四個ノ文アリ、(仰事ありて、召すなり」ハ、聯構文ナリ)「仰事」ハ、「物を賜はせむ」ナレバ「何の云々」をさなき云々」ノ二文ハ、挿入文ナリ。扨、四文ヲ一括シテ、末ニ「と」ト受ケテハ、供人ノ詞ハ、悉ク「いふ」トイフ説明語ノ等

語トナリ、冒頭ナル「供の人」ヲ、其主語トシ、「この男に」ヲ其客語トシ、「供の人(主)この男に(客)……と(客)いふ。(説)」トイフ文トナル、(此他「と」ト受ケタル所、準ヘテ知ルベシ、但シ、「いふ」ハ、複對他動ナリ、)「をさなき」ハ、不肖ノ義、智ノ足ラヌヲイフ。「をさなきもの」ノ内ニモ、修ト主トアレド、合シタリ。

三一六節

○拾遺、十六ナルハ、菅公ノ筑紫ニ謫セラルヽ、家ノ庭ノ梅ニ詠メル歌ナリ。「竹取、狹衣」ナルモ、挿入文ヲ「聞く、に」ありて」ニテ、聯構文トシタリ。

三一七節

○土佐日記ナルハ、土佐守紀貫之、任滿チテ、土佐ヲ去ラムトスル時ニ、送別人ノ人情ヲ言ヘル文ナリ、「守がらにやあらむ」ノ一句ハ、末ノ「來ける」ノ修飾語ナリ、「國人の心の常として、今は(コレカギリナリ)と」ハ、共ニ「見えずなる」ノ修飾語ナリ、「見えず」ノ上ニ「國人の」(主語)ヲ加ヘテ見ル「なるを」ニテ、挿入文ヲ、聯構文トシタリ、「恥ぢずになむ」ノ句、異本、區々ナレド、今ハ一本ニ從ヘリ、此ノ句ハ、「來ける」ノ修飾語ナリ。「人情ノ輕薄ナルヿ、去ルトナレバ、見送リニモ來ヌガ常ナルニ、國守ノ人ト爲リニ因レルニカ、心アル者ハ、不德義ニ恥ヂテ來タリ」ノ意ナリ。斯ク釋キテハ、謙遜ナラズ、自贊トナリテ、イカヾナレド、此ノ如ク見ザ

三一八節

レバ、文意解セラレズ。

○或ル文典ニハ、文章構成ノ條ニ、記事體議論體、說話體、疑問體ナド、文ノ作體ヲ說ケルアリ、斯ル事ハ、文典範圍外ノ事ナリ。(修辭學ニ屬セム)

因ニ云、漢文ノ上ニテハ、記事體議論體何體々々、ナドイフコ、嚴ニ筆法區分ヲ立ツレモ、(文體明辨ナドニ)漢土ニテモ、古文ニハ、然ル區別アルヲ見ズ、皆、後世ニ設ケタル事ナリ。國文ノ上ニテハ、古今ヲ論ゼズ、然ル事々シキ筆法文體アルコトナシ、近來、漢文ニ倣ヒテ、名目ヲ設クルモノモアレド、スベテ、其謂レナキコトナリ。思想ヲ筆ニスレバ、文ヲ成シ、其場合ニ因リテ、記事トモ議論トモ成リ行クモノニテ、初ヨリ某ノ文體トテ、布置結構ノ別アルベクモアラズ。某體トテ名目ヲ設ケタルモノヲ覽ルニ、記事體トイフニハ、某書ノ記事ニ係ル條ヲ拔キ、議論體トイフニハ、一書ノ議論ニ係ル部ヲ採レルノミ、斯クナサバ、述懷ノ條ヲ引キテ、述懷體トモ名ヅクベク、悲歎ノ條ヲ拔キテ、悲歎體ノ目ヲモ立ツベク、凡ソ名ヅケラレヌハナカルベシ、皆、揑造ノ名目ナリ。

三一九節

(本、五一一)洋兵敎練ノ號令ノ語ニ、初ハ「筒ヲ肩ヘ」、「筒ヲ捧ゲ」ナドイヒシナリ、然ルニ、號令ノ趣意ハ、筒次ニシテ「肩ヘ」、「捧ゲ」ノ擧動ヲ旨トス、因テ改メテ、「肩ヘー」、「捧ゲー」ト延ベテイヒテ、後ニ「筒」トイフコトナリシナリ、步兵モ、先ヅ擧動ノ語ヲ心得テ、「筒」ノ聲ニテ、一齊ニ動クヲ得テ、妙ナリ、是等ハ、倒置ノ用語ノ、最モ善ク應用セラレタルモノナリ。

○古今、九、ノ歌ノ上ノ句ハ、「海の原、八十島かけて、漕ぎ出でぬと、」ニテ、小野篁ノ、隱岐國ニ流サレ、海上ノ多嶋ヲ指シテ出船スル時、京ナル人ニ贈レル歌ナリ、漁人ノ歸舟ニ傳言スル意ナリ。土佐ナルハ、月夜ノ航海ノ景ノ文ナリ、昔ノ男ハ、唐ノ賈島ヲイフ、其詩ナル「棹穿波底月、舡壓水中天、」ノ二句ヲ譯セルナリ。

盛衰記ナルハ、源三位入道頼政、平家ヲ滅サムトシテ兵ヲ擧ゲ、三井寺ニ入レリ、其郎黨ナル渡邊競、僞リテ平宗盛ニ從ヒ、馬ヲ賜ハリテ、三井寺ニ脫シタル時ノ文ナリ、「宗盛、競ヲ云々ト思ヒ、」ノ倒置ナリ、「門蹈ム」ハ、「臣トナリテ事フル」ナリ、「アウナシ」ハ、「奧ナシ」ニテ、「遠キ慮リナシ、」ノ意ナリ。平家物語ノ文ハ、平清盛、丹波少將成經ヲ罪セムトスル時、成經ノ舅ナル平敎盛、兄ノ清盛ニ、寬典ヲ强請スル時ノ詞ナリ。「誠の道」ハ、「佛道」ナリ。大鏡ナルハ、「れはすべかりし

かど」ヨリ「宮内卿にて失せ給ひにき」ヘ返ル長キ倒置句ニテ、全文、又、挿入文ナリ。

三二〇節　(本、五一二)太平記ノ文ハ、日野俊基、密ニ敕ヲ奉シテ、北條高時ヲ滅サムト謀リテ、却テ捕ヘラレテ、鎌倉ヘ下サルヽ時ノ「俊基海道下り」ト、有名ナル文ナリ、八劔宮ハ、熱田驛ニアリ「ひゑ」(言)ヲ「ゆえ」(夕)ニ掛ケタルハ、假名違ヒニテ、誤ナリ。池田驛ハ、遠江ニアリ。

「立別れ」ノ歌ハ、因幡ヘ下ル人ノ留別ノ歌ナリ「往なむ」ヲ「因幡」ニ掛ケタリ「松」ノ名ノ如ク、君ガ「待ツ」ト聞カバ、直チニ歸ラム、ナリ。「大原の里」ハ、京都ノ東北ニアリ。新古今、十八ノ「陸奥の」ノ歌ハ、人ヨリ、「文」ニテハ、思フホドノ事、申シツクシガタシ、ト言ヒ來レルニ答ヘタル歌ナリ、岩手、信夫ハ、陸奥ノ郡ナルヲ「言ハズシテ忍ブ」ニカケ「ねぞ知らぬ」(知リ得ズ)ヲ、陸奥ノ蝦夷ニカケタリ、坪碑ハ陸中ノ坪村ニアリテ、昔シ、田村將軍、建テタリト云、石文(碑)ヲ書翰ニカケタリ。

○「君が行く」ノ歌ハ、越中ヘ下ル人ニ、送別ノ歌ナリ「北國ハ、不案内ナレド、雪國ト聞ケバ、君ノ行路ノ、雪ノ跡ヲ尋ネテ、我モ行カム」ノ意ナリ。「つのくにの」ノ歌ハ、攝津國ノ難波ト、山城國ノ鳥羽ト、ノ地名ヲ借リテ、國名ニ、意ナシ、何事モ他事ハ思ハズ、唯、逢見ムコトバカリ常ニ思フ、トナリ。

三二一節　(本、五一三)英文法ニイフConjugationハ、格、性、數、ニ關スルモノニテ、相異ナレド、動詞ノ結法ニ就キテハ、我ガ「かゝり」、「むすび」ト、稍、其趣ヲ同ジウスル所モアリ。

三二二節　(本、五一四)尋常ノ結法ニテ「は、も、徒、ノかゝり」トイフヿ、一切說カズ、其持論ハ、後ノ第三二六節ニアリ。

○「和泉の國まで、たひらかにと願ひたつ」ハ、土佐ヨリ泉州マデ、海上安全ニ渡シ給ヘト神ニ祈ル詞ナリ。伊勢物語ナルハ、妻、夫ニ別レテ後、舊情ヲ起シテ、「今はとて忘るゝ草の種をだに、人の心に、まかせずもがな。」ト詠ミシニ、舊夫、「忘れ草、植うとだに聞く、ものならむ、思ひけりとは、知りもえなまし。」ト返シタルナリ。

三二三節　(本、五一六)拾遺、一、ナル歌ハ「よりて」ニ「近寄りて」ト「纏りて」ト、ヲ掛クタリ。次ナル歌ハ「山吹ノ黄花ノ山梔色ナルニ、心ノ移リタルモノカ、物モ言ハズ、口無シニテ、長ク見詰メテ居ル」ノ意ナリ。

三二四節　（本、五一七）古今、十八ノ歌ハ、「餘生、幾許モアラザラム我身ナルモノヲ、何故ニ、此ノ如ク、海人ノ刈藻ノ亂レタルヤウニ、種々ニ焦慮スル」ノ意ナリ。次ナル歌ハ、「斯カルコトナラバ、結句「思ハズ」ト言切レバヨキニ、何故ニ、世ノ中トイフモノハ、玉襷（タマダスキ）（玉ハ褒ムル語）ノヤウニ、引キ懸リテ、ドナラッカズニアルモノカ、」ノ意ナリ。又、古今、四ニ「誰ガ秋（飽）ニ、あらぬものゆゑ（ナガラ）、女郎花、なぞ色に出でゝ、またきうつろふ。」拾遺、十三ニ「ことならむ、闇にぞあらまし、秋の夜の、なぞ月影の、人だのめなる。」ナドモアリ。

三二五節　（本、五二一）古格ニテハ、上ニ疑辭アルトキハ、下ノ助動詞ノ「む、けむ、らむ、」等ノ「め、」けめ、「らめ、」トナル異例アリ。萬葉、七「わがせこを、いづちゆかめと、さき竹の、」同、二ニ「誰が戀ひならめ、あは戀ひ思ふを、」同、四ニ「玄ゐやわがせこ、れくもいかにあらめ、」同、十四ニ「玄だの浦を、朝こぐ舟は、よしなしに、漕ぐらめかもよ、よしこざるらめ。」ノ如シ。（「らめかもよ」ノ如ク、「らめ」ヨリ「か」ニ接スルコトハ、本書ノ第三六六節ニイヘリ）又、詞花、一ニ「きのふかも、あられ降りしか、玄がらきの、外山の霞、春めきにけり。」ナドモ見エタリ。

三二六節　○「係り、結び、」ノ法則ハ、古來、歌學者流ナドノ、オボロゲニ授受シ居タリシモノナルニ、粲然タル分類用法ヲ規定シタルハ、本居大人ノ「紐鏡、詞玉緒」ヲ初ナリトス、文法上、創闢ノ業、欽仰スルニ餘リアリ。然レモ、固ヨリ創定ノ業ニシアレバ、缺點ノアラムモ、コトワリニテ、爾來、後進ノ、コレヲ修正シタルモ多カレド、尚、其說、落着セズ、未ダシキ思ヒアリ、今、左ニ後學ノ鄙見ヲ述ベム。

○先ヅ、「は（タ）も徒」ノ係リトイフモノ、他ノ「ぞ、こそ、」等ノ係リニ對シテ、取リ立テ、言ヒタキヤウナレド、「は、」も、」ヲ取リ立ツルトキハ、「だに、」すら、」さへ、」のみ、」ばかり、」ナドヲモ取リ立テズハアルベカラズ、「花は咲きぬ、」花も咲きぬ、」花だに咲きぬ、」花すら咲きぬ、」花さへ咲きぬ、」花のみ咲きぬ、」花ばかり咲きぬ、」ナド、意義コソハ異ナレ、主語（花）ト說明語（咲きぬ）トノ間ニ立チテ、上下ヲ承接スル語勢ニ至リテハ、更ニ異ナル所アラズ、（「に、」「を、」「と、」「へ、」より、」まで、」等ノ、客語ニ接スル互爾波ハ、與カラズ、）「花の咲きぬ、」花が咲きぬ、」花ぞ咲きぬる、」花なむ咲きぬる、」花こそ咲きぬれ、」花や咲きぬる、」花か咲きぬる、」ノ語勢モ同ジ。サレバ「は、」も、」ノミ取リ出デ、他ノ「だに、」さへ、」のみ、」等ヲバ措キ難シ。サレバトテ、「は、」も、」の、」が、」だに、」

さへ、「すら」「のみ」「ぞかり」ナド、悉ク取リ立テヽ「係」トセムコト、亦、甚ダ繁ナルヲ覺ユ。サレバ、是等ノ事ハ、トカクノ辨ヲ用ヰズシテ、唯、凡ソ、動詞、形容詞、助動詞ノ、一文ノ末ヲ結ブトキハ、尋常ニハ、終止言(第一活用)ヲ用ヰル、トノミ說キ拂ヒ去リテ、(此ノ場合ニ「係リ」トイフコトヲ一切言ハズ)サテ、但「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」ノアルトキハ、「係リ」、「結ビ」云々、ト說ク方、何ノ差支ヘモナク、學ブ者ノ、記憶セム勞ヲモ省キ得テ、殊ニ簡潔ナルヲ覺ユルナリ。サレバ、此ノ書ニハ、「はもたゞ」ノ係リトイフコトハ、一切說カヌコトトシタリ。

玉緒繰分、(爾卷)上略「截斷」にあらざる連體言も、己然言も、皆、本の辭、ぞ、の、や、なに、こそ、より引きかゝりの趣にて、皆、轉じて截斷言となるなり、(略)徒の結といふは、うぶに切るゝ詞といはむが如し、(略)實は、はの結び、もの結び、なぞいふべくもあらぬなれども、猶、ぞ、の、や、何、にかゝり、こそに引かれて、連體、己然の、截斷と轉ずるにたぐへて、これをも、は、も、の結といふなり、されど、結びといふことは、宗とは、ぞ、の、や、何、またころにかゝる詞どもにつきて、いふべきなり、それを、さらくはば、も、につきてもろの結びといふ事をいふは、ぞ、や、などの辭に准へて、いふことなり。」

三二七節　○又「ぞのや何」ノ係リノ事ヲ論ゼム。先ヅ「の」ノ係リトイフモノ、和歌ニ用ヰラレテ、連體言ニテ結ベルハ、皆、其末、省略セラレテ、所謂、餘韻餘情ヲ含メルモノナリ、トノ說、甚ダ得タルヤウナリ。此ノ餘情ヲ含メリトイフ歌ハ、「はも徒」ノ係リヲ連體言ニテ結ベルモノニモ、多クアリテ、兩々、相並ベテ、數回吟誦スルニ、如何ニモ、神韻滅沒ノ間ニ、言外餘情ヲ含メル意、相異ナルナキヲ覺ユレバ、動カスベカラザル說ナルガ如シ。蓋シ、和歌ハ、僅ニ五句ノ中ニ局セラレテ、無限ノ意旨ヲ述ブルモノナレバ、言外ニ餘情アルヤウニ作ルガ、妙訣ノ存スル所ナルベク、隨ヒテ、言ヒ切ラヌ作例ノ多キナルベシ。(世ニ、川柳點(センリウデン)トテ、三句卑調ノモノアルガ、句中ニ用ヰル用言ハ、大抵、終止言ヲ用ヰズ、連用言ヲ用ヰル、コレ、僅ニ三句ニテ、無限ノ事ヲ言フニ、言ヒ切ラズ、餘情ニテ言外ノ意ヲ聞カスルナリ、自ラ、妙訣ヲ得タリトイフベシ。)

三二八節　今、左ニ、「徒」ノ係リト、「の」ノ係リトノ餘情アルモノヲ比ベム。

「梅の花、香をのみ袖に、とゞめれきて、我が思ふ人は、れとづれもせぬ(カナ。)」(新

古今、十五）

「山彦の、こたへありとは、聞きながら、跡なき空を、たづねわびぬる（コトヨ。）」（鶴蛉日記）

「逢ふことや、涙の玉の、緒なるらむ、玄ぞし絶ゆれぞ、落ちて亂るゝ（ナリ。）」（詞花、八）

「谷の戸を、とぢやはてつる、鶯の、まつに音せで、春も過ぎぬる（ゝ。）」（拾遺、十六）

「いかならむ、今宵の雨に、常夏の、げさぞに露の、れもげなりつる（モノヲ。）」（後拾遺、三）

「吹く風の、さそふものとは、知りながら、散りぬる花の、強ひて戀しき（コトカナ。）」（後撰、三）

「あかざりし、袖の中にや、入りにけむ、我がたましひの、なきこゝちする（ゝ。）」（古今、十八）

「時鳥、深き峯より、出でにけり、外山のすそに、聲の落ち來る（ゝ。）」（新古今、三）

「あきしのや、外山の里や、玄ぐるらむ、いこまの岳に、雲のかゝれる（ゝ。）」（新古今、六）

サテ、餘情ナク、意ノ盡クルニハ、終止言ヲ用ヰタル多シ。

「結ぶ手に、影亂れゆく、山の井の、あかでも月の、傾きにけり。」（新古今、三）

「玉梓に、涙のかゝる、こゝちして、玄ぐるゝ空に、雁の鳴くなり。」（千載、六）

「春霞、立ちて雲居に、なりゆくは、かりの心の、かはるなるべし。」（後撰、二）

「人戀ふる、涙は春ぞ、ぬるみける、絶えぬ思ひの、わかすなるべし。」（後撰、九）

「人言の、玄げみはされど、水鳥の、鴨の浮寢の、やすけくもなし。」（六帖、三）

「老いぬれど、さらぬ別れの、ありといへど、いよ〳〵見まく、ほしき君かな。」（古今、十七）

「三吉野の、吉野の瀧に、浮びいづる、沫をか玉の、消ゆと見つらむ。」（古今、十）

「秋風の、吹きぬと聞けど、出でゝ來し、家路のみこそ、戀しかりけれ。」（躬恒集）

「くれなゐに、霞の袖の、なりてけり、春の別れの、暮方の空。」（拾玉、二）

「鳴神の、聲をさめたり、稻妻の、光をかりぞ、夕立の空。」（夫木集）

其他、「花には袖の、濡れぬなりけり。」（金葉、二）今は我が身の、沈むなりけり。」（新古今、

十五）かりにも鬼の、すだくなりけり。（伊勢物語）ナド、多シ、（芭蕉）枯枝に、烏のとまりけり、秋の暮）

又、散文ニテハ、大抵、終止言ニテ結ベリ、散文ハ、字數ニ限リナケレバ、自ラ、餘情ヲ殘ス必要少キガ故ナラムカ、コレラニテモ、歌ナルハ、餘情アルヲ證スベシ。

（引ケル歌文ノ誤寫ナラムモ、一ッ二ッハアルベキカ）

「ようせずも、此の御子の、坊にもなり給ふべきなんめり、と一のみこの女御は、ねばしうたがへり。（桐壺）

「直衣着たる人のねはする、宮のねはするなめり、と聞ゆれむ」（若紫）

「かくいふは、播摩守の子の、藏人よりかうぶり得たるなりけり。（同）

「これみつが父のあそんのめのとに侍りし者の、みつはぐみて侍るなり。」（夕顔）

「雨の、いみじう降りつるまぎれに、母君のわたりたまへり。（蜻蛉）

「男のすといふ日記といふものを、女もさてみむとてするなり。（土佐）

「よき人の、をとこにつきてくだりて住みけるなりけり。（同）

「昔し、土佐といひける所に住みける女の、この舟にまじれりけり。（同）

「貴なる女の、世の中を思ひ倦んじて、京にもあらず、遥なる山里に住みけり。」（伊勢物語）

「其澤に、かきつばたの、いとをもしろく咲きたり。（同）

「立寄り給ひてれり給ふに、此の女の見ゆ、あやしくめでたき人かな。（うつぼ）

「此の風は、龍の吹かするなり。（竹取）

「御かた〳〵の、御とのゐなども、絶えてしたまはず。（同）

「いまずかりつる志どもを、思ひも知らで、罷りなんずることの、口惜しう侍りけり。（同）

「御心をのみ惑はして、去りなむ事の、悲しくたへがたく侍るなり。（同）

「家の、燒けたり、とて、いとほしがりて賜ふめる。（枕草子、十二）

「かくて順の和歌、行政の少將のかきつく。（宇津保、藏開、上、二）

「たゞ一文字の御返事の、ゆかしきなり、やすき程の事を、人の願ひかなへ給へかし。いよ〳〵古への、戀し、などいひすさびて、（住吉物語）

三尺ばかりなる鯰の、ふた〳〵として、庭に這ひいでたり。（宇治拾、十三）

「鼻の、わざやかに高く赤し、唇薄くなむ見ゑて、色もなく、」（同、菅原の事）

「僧正の、あまたの僧を具して、れはしたり。」（著聞、十七）

「貞保親王の、木の下に岩の上に坐したまひて、常に笛を吹かせたまひけり。」（同、十九）

「霞の上に、富士の根の、いと高し。」「またも、火の、ひろくなりたり、風のつのりたり、なぜ立ちさわぐに、」

右ノ内ニ、連體言、連用言、ノ加ハレルハ、間ニ、他語ヲ含メルナリ、ナド爭フ人モアルベケレド、其ノ外ナルニ、爭ハレヌモアリ。

三三一節

又「の」ノ係リニ、二樣ノ結びアルハ、輕重ノ差ノアルナリ、ナドイフ說モアレド、肯ハレズ、（散文ニテハ、皆、輕格ノ用法ニ從フ、トモ言ハルマジ、）ソハ、若シ、人ノ善クモ知ラヌ古歌ノ結びヲ匿シテ、先ヅ、其係リナル「の」ヲ、輕キカ、重キカ、ト鑒定セシメテ、後ニ結びヲ顯ハシ、案ノ如ク鑒定相應スルヿヲ得ム妙訣モアラバ、服シモスベシ、サレド、初ニ下ノ結びヲ見テ、サテ、上ノ係リノ「の」ヲ、コレハ、輕シ、ソレハ重シ、ト定ムルナラバ、立論、確カナラズ、初學ヲシテ、隨意ニ、二樣ノ結法ヲ用ヰシメ、人ニ難ゼラルレバ、我ガ意匠ハ、輕ク詠ミシナリ、重ク言ヒシナリ、ナド言ハシムルヤウニテハ、文法ハ無キガ如シ、捉風ノ說ハ、人ヲシテ彷徨セムルノミ。（次ナル「か」「何」ノ輕重論モ、然リ。）

三三二節

○「が」ノ係リモ、「の」ニ同シク、結びノ連體言ナルハ、餘情アリト覺ユ。左ニ、和歌ト散文トヲ擧ゲム。

「あひだなく、戀ふれにかあらむ、草枕、旅なる君が、夢にし見ゆる。（〻。）」（萬葉、四）

「我が宿の、梅の立枝や、見ゑつらむ、思ひの外に、君が來ませる。（〻。）」（拾遺、一）

「我がせこを、大和へやると、小夜ふけて、曉露に、吾が立ちぬれし。（〻カシ。）」（萬葉、二）

「みくま野の、浦の濱ゆふ、幾かさぬ、我をば君が、思ひへだつる。（コトヨ。）」（六帖）

「あしひきの、山の去づくに、妹まつと、我が立ちぬれぬ、山の去づくに。」（萬葉、二）

「限りなく、心を盡し聞ゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるゝなりけり。」（若紫）

「かのあせち、かくれて後、世をそむきて侍るが、このわづらふ事侍るにより

て、かく京にもまかでねぞ、たのもし所に、このみて物し侍るなり。(同)

「御心ならひに、たゞならじとればすが、やすからぬなるべし。(箱木)

「老の病の、いつとも無きが苦しと思ふ給へしを。(手習)

「かくや姫てふ大盗人のやつが、人を殺さむとするなりけり。(竹取)

「程なく罷りぬべきなめりと思ふが、悲しく侍るなり。(同)

サテ「遙なるあなたに、山の高きが見ゆ。霞と見ゆるが花なり。書見るが樂し。」

經驗なきが多し。其理あるが如し。某といふがありけり。(すぐれて時めき給ふ(が)ありけり。文時維茂が舟の後れたりし(が)、ならし津より室津につきぬ。)

ナド、常ニ「が」ヲ終止言ニテ結ビテ、障ルフナキヤウナリ。

○又「何(ナニ)」ノ係リトイフモノニ就キテ言ハム。

詞玉緒ノ「何」ノ所ニ引ケル證歌ノ中ニ「か」アルハ、即チ「か」ノ方、係リトナリテ、連體言ニテ結ベルニテ「何」ニハ關係ナシ。

「あまりてなどか人の戀しき。いつかは雪の消ゆる時ある。誰かは春を、恨みはてたる。いづれをさきに戀ひむとか見し。ナド舉ゲ盡シ難シ。

扱、又「か」ナクシテ、連體言ニテ結ベルハ、中間、或ハ、末ニ「か」ヲ略セルナリ。「なに、」「たれ、」「いづれ、」「いつ、」「なぞ、」「いかに、」ナド、元來、疑フ語ナレバ「か」ヲ略セリトテ、善ク聞ユル理ナリ、用言ハ、連體言ヲ以テ「か」ト接スル規定ナレバ「か」ナクトモ、連體言ニテ終ハレルハ、マサシク「か」ヲ略セル痕ト見ルベシ。又「か」ヲ要セザル場合ニハ、終止言ニテ結ベルモ、多シ。是レ「何」ノ詞ハ、係リニアラズ證ナリ。(又「なぞ」「いかゞ」ハ「なに、ぞ」「いかに、か」ノ約ナルフ、本書ニモイヘルガ如クナレバ、下ニ「か」ヲ略スベキ理ナシ。)

「數ならで、あるにもあらぬ、憂き身しも、なぞ(カ)世の中に、置き處なき。」(玉葉、十八)

「夏草は、茂りにけれど、郭公、なぞ(カ)我が宿に、一聲もせぬ。」(新古今、三)

「なぞいらへはせぬ(カ)といへぬ。」(伊勢物語)

「かの花は、いづら往にける(カ)とれはせらる。」(同)

「さる所に、いかで(カ)物したまひつる、といへりけれど。」(大和物語)

「幾日もかり(カ)籠らせたまふべき、なぞ問ふ。」(枕草子)

「わが心とつみあるには、なさずなりにし、なぞ、いま思へば、いかにかぞあることなりけり。」（若菜、下）

「長濱の、眞砂の數も、何ならず、盡きせず見ゆる、君が御代かな。」（金葉、五）

「たらし姫、神のみことの、魚釣らすと、み立しせりし、石を誰れ見き。」（萬葉、五）

「住吉の、松の千歳と、君が代と、いづれ久しと、神に問はゞや。」（拾玉、一）

「いづくまで、れくりはしつと、人問はゞ、」（伊勢物語）

「奥山に、槇の葉ゑのぎ、降る雪の、いつ解くべしと、見ねぬ君かな。」（後拾遺、十一）

「古里の、ならしの岡に、郭鳥、言づてやりき、いかに告げきや。」（拾遺、十六）

「思ふてふ、言の葉いかに、なつかしな、後うきものと、思はずもがな。」（後撰、十三）

「いかになりたまひきとか、人にも言ひはべらむ。」（夕顔）

「れきてゆく、空も知られぬ、あけくれに、いづくの露の、かゝる袖なり。」（若菜、下）

「その松の數、いくそゞく、幾千年、歴たりと知らず。」（土佐日記）

「淡路島、かよふ千鳥の、鳴く聲に、幾夜寐覺ぬ、須磨の關守。」（金葉、四）

「世をそむく、方はいづこに、ありぬべし、大原山は、すみよかりきや。」（新古今、十七）

「夏の夜の、月待つほどの、手すさびに、岩漏る清水、幾掬びしつ。」（同、二）

「いづれに與みすべしともわかばねず。」

右等ノ例、數限リナシ、唯、證トシテ、若干、出セルノミ。又、以上、初ヨリ列擧セル諸例中ニ、四段活用、上一段活用、及ビ、助動詞ノ「む」「けむ」「らむ」「まし」「らし」等ノ終止言、連體言、形同ジキモノニテ、「の」「か」「何」ヲ結ビタルハ、一切擧ゲズ、水掛論トナルベケレバナリ。

又、「何」ノ詞ノ下ニ「も」アレバ「も」ノ結びニ從フ（いつもなし、誰にも言はず、ノ類）トイヘバ「も」アル歌モ、證ニハ引カズ。

三三四節

○右ノ如クナレバ、此ノ書ニハ、「の」「何」ヲ、終止言ノ尋常ノ結びノモノトシテ、別ニ係リトハ立テズ。サテ「ぞ」「なむ」「や」「か」ハ、和歌ニテモ、散文ニテモ、何レモ、連體言ニテ結ビタレバ、此ノ四ツノミ擧ゲタリ。「ぞ」「なむ」ハ、指シ定ムル語ナリ、「や」「か」ハ、疑フ意ヲ、顯ハニイフ語ナレバ、連體言ニテ結ブトモ、「の」「が」ノ如ク、餘情ヲ含マシムル場合ハナキナルベシ。

三三五節

○又云、「何」ノ詞ノ、文ノ係リナルマシキ「ハ」、前ニ已ニ論シタルガ如シ。扨、係

リナラズトスベキ論據ハ、他ニモアリ、ソハ、語ノ性ニツキテナリ。凡ソ、文ノ係リトナルベキハ、スベテ、豆爾波一族ノ語ノ特性ニ存スルモノヲ如シ、詞玉緒ニ「何」トテ一括セル語ヲ見ルニ「なに、たれ、た(だ)いづれ、いづら、いづく、いづこ、いづかた、いつ、等ハ、不定稱ノ代名詞ナリ、「なぞ、いかに、いかで」等ハ、副詞ナリ、「いく」ハ、接頭語ナリ、皆、豆爾波ト、語性ヲ異ニス。是等、異性ノ語ノ、豆爾波ニ雜糅シテ、係リトナルベキ理ナキヤウナリ。此ノ語性ニ、就キテノ斷案ハ、創見ナリト考フ、遼豕ナリヤ。

○又、案ズルニ、本書、第五四七節以下ニ記シタル如ク、副詞一族ノ語ニハ、他語ニ關シテ、一定特種ノ呼應法ヲ起スモノアリ、「豈に他あらむや」「をさ〳〵見ゆ」「ゆ行かじ」ナド「豈に他あり、」「をさ〳〵見ゆ、」「ゆ行く」ナドイフベクモアラズ、之ト同ジク「なぞ思はぬ」「いかで言ひし」ナドモ「なぞ思はず」「いかで言ひき」ナドイフベクモアラズ、語勢、相似タリ。「何」ノ係リトイフモノ、此呼應法中ニ入ルベキモノカ、トモ思ハレテ、博ク用例ヲ採收シテハアレド、未ダ完結セズ。コハ、未定說ナレド、聊、此ニ漏ラシ置クナリ、說、成ルヿアラバ、他日本書ノ說ヲ改ムルヿモアラム。

三三六節（本、五二二）詞玉緒ノ二ニ、「ぞ、や、何、こそは、互に重なる例なし、」註ニ、「此中に、や、と何とは、重ねいふ一つの格あり、」トアリ、此ノ事、此ノ別記ノ第二三六節、及ビ、第三五三節ニ論ズルヲ見ヨ。

○後撰、五、ノ歌ノ立田姫ハ、秋ヲ司ル神ナリ、松ノ音、風ノ調、共ニ、琴ノ事ニイフ、「立田姫ハ、秋風ノ琴ヲ、秋ハ彈クラシ。」ナリ。

三三七節（本、五二三）古今、十七ノ歌ノ男山ノ男ハ、壯男（ワカモノ）ノ意ナリ、ソレヲ、山城ノ八幡ノ男山ニ言ヒカケテ、又、坂ヲ行クト、ヲカケタリ。同、一、ノ歌ハ、開花ノ時ニ、不沙汰勝ナル友ノ來レルニ詠メルナリ、「あだ」トハ、櫻ノ早ク散ルニツキテイフ、散ラズニ客ヲ待チツケタレバ、不實ナル客ヨリハ、優リテアリ、トノ意ナリ。次ノ「春の夜の」ノ歌ハ、「春ノ夜ノ闇トイフモノハ、ワケガワカラヌ、ナゼトイフニ、暗クテ梅花ノ色ハ見エヌ、サレド、ソノ香ハカクルルカ、暗クテモ匂ヒテカクレハセヌ、色ハ隱レテモ、香ハカクレヌ、ドチラトモ、ワケノワカラヌ闇デアル、」ノ意ナリ、「あやなし」ハ、「無文」ニテ、條理（スヂ）ナシ、ノ意ナリ。次ノ「うゑしら

三三八節

ゐも」ノ歌ハ、菊ヲ植ユタル時ノナリ、初ノ句ハ、「植ユテオキタラバ」ナリ、「うゐ」ヲ重ネタルハ、意ヲ強クシタルナリ、「し」ハ、指ス豆爾波ナリ、二三ノ句ハ、「世ニ、秋ト イフ時ノ無キヿノアリタラバ、咲カタヿモアラム」ナリ。

○形容詞ノ語尾ノ「けれ」トイフ活用ハ、山城ノ京ノ頃ヨリ出デ來シモノニテ、奈良ノ京以前ニハ、「けれ」トイフ活用ナカリキ、古クハ形容詞ヲ以テ「てそ」ヲ結ブトキハ、スベテ、其第二活用ナル「き」「しき」ヲ用キタリ、「衣ころ、二重も好き、小夜床を、並べむ君は、恐きろかも。」(仁德紀)三吉野の、吉野の鮎、鮎こそは、島邊も善き。」(天智紀)難波人、蘆火燒く屋の、煤てあれど、己が妻許增常目頰次吉。」(萬葉、十二)海の底、沖を深めて、生ふる藻の、最も今社戀は爲便無寸。」(同、十一)玉くしろ、宿きぬる妹も、あらむ許增、夜の長けきも、歡有倍吉。」(同、十二)野を廣み、草許曾之旣吉。」(同、十七)ナドナリ。後ノ歌、文ニモ、「涙こぼれ、心亂れて、言はれぬに、恨みのみこそ、いとゞ苦しき。」(玉葉、十三)年麗れど、忘れやせむと、思ふこそ、逢見ぬよりも、我はわびし き。」(信明集)知られ奉らむこそくるしき、とのたまへど。」(落窪物語)行き、行き着かで、道にてこそ落ち申すべき。」(今昔物語)ナドアリ、古格ノ名殘ナルベシ。又、「萬代

を、よゐふ山邊の、ゐのこころ、君がつかふる、よはひなるべし。」(蜻蛉日記)ハ、希觀ナリ。

○又、過去ノ助動詞ノ「き」(し、しか)ニハ、其第一活用、或ハ、第二活用ヲ以テこそヲ結ビタル例アリ、「度かさなりけるぞあやしきなど、もろともにこそ笑ひてき、」(蜻蛉日記)宣旨かうぶらせ給ひて、あるき給ひしありさまこころ、落ち居てもねばゐ侍らざりき。」(大鏡)もみぢ葉は、惜しき錦と、見しかども、去ぐれとともに、降りてこそ來し。」(後撰、八)山門の滅亡、朝家の御大事とこころ見えし。」(平家物語)

○又、「別れにし、玉はかへすに、難けれど、涙のみこころ、袖にかゝれる。」(榮華、玉飾)來むといひて、來ざりし夜も、ありしかど、待たぬしもころ、待つにまされる。」(六帖)ナド用井タルアリ、後ナルハ、末ニ「ものなれ」ヲ含メタルモノカ、前ナルハ、誤寫ナラム、ト義門師ハ言ハレキ、或ハ、「れゝ」ト結ブハ、口調惡シキニ因リテ、此ノ用語ニ限リテ、「れる」トハ結ブナリ、ト云フ說モアレド、「雪の降れゝど」ナドハ、イカニ。

(本、五二四)本書ニイヘル希望ノ用法ノ「こそ」ハ、元來、強ク指ス意ノ豆爾波ニテ

強ク指ス意ヨリシテ希望ノ意ヲ成スハ、萬葉集中ニ、多ク「乞」「欲」等ノ字ヲ當テタルニテ知ルベシ、常ハ「かゝり」トナル豆爾波ナルヲ、一種ノ用法ニテ、他語ノ末ニ置キテ、單ニ希望スル意ヲ成シ、結法ヲ要セザルモノナルベシ。(「ど」「や」「か」ナドニモ、末ニ置ク用法アリ。)

○古事記(神代)ニ「庭つ鳥鷄は鳴く、憂くも、鳴くなる鳥かこの鳥も、擊ち病め許世泥」萬葉、九(九)ニ「紀の國に、止まず通はむ、妻の社、妻寄し來西尼、妻といひながら。」同、十四(十九)ニ「都麻余之許西禰」同、二(十五)ニ「芳野川、行く瀬の早み、須臾も、よどむことなく、あり巨勢濃かも。」同、四(二十四)ニ「百夜の長く、あり與宿かも」同、十(二十九)ニ「今し七夜を、續ぎ巨勢奴かも」同、十一(四)ニ「吾ゆ後、生れむ人は、我がごとく、戀ひする道に、逢ひ與勿ゆめ。」同、(卅四)ニ「絶ゆちふことを、あり超名ゆめ」同、四(四十二)ニ「人の中言、聞き越名ゆめ」「催馬樂ニ「いで、吾が駒、はやく行きこせ、まつち山、待つらむ人を、行きてはや見む。」伊勢物語ニ「飛ぶ螢、雲の上まで、往ぬべくも、秋風吹くと、雁に告げこせ。」ナドアリ。

右等ノ「こせ」「こす」ヲ、古事記傳ニハ、本書ニイヘル希望ノ「こそ」ノ轉ゼルニテ、「ね」モ、希望ノ辭ナリトイヒ、万葉古義モ、同說ニテ、常ニハ「ころ」トイフヲ「ね」ト「ね」ト續ゲテイフトキハ、「そ」ヲ「せ」ニ轉ズル例ナリ、「ね」モ希望ノ辭ニテ「ね」ノ轉ナリ、常ニハ「ね」トイフヲ「かも」ニ續クトキハ、「ぬ」トイフ例ナリ、「不」ノ意ト解クハ古意ナラズ、「こすな」ノ「な」ハ、「莫」ニテ「な」ト續クニ引カレテ「こそ」ヲ「こす」ニ轉ズルナリトイヘリ。(此ノ別記ノ第二五七節參見。)

然レドモ、希望ノ「ね」ハ、「宣さね、給はね」ナド、用言ノ將然言ニツク例ナリ、禁止ノ「な」ハ、「忘るな、爲な」ナド、用言ノ終止言ニツク例ナリ、是等ガ、豆爾波ノ「こそ」轉シタル「こせ」「こす」ニツクトイフモ、イカヾニ思ハル。「言靈のしるべ」(中篇、下)ノ說ニハ、「こせ」ハ、願フ意ノ辭ニテ、佐行下二段活用ノ「れこす」(致)トイフ語ノ「れ」ヲ省キテ、輕ク言ヒ馴レタルモノナルベシ、今ノ俗言ニ「くれ」「くる」トイフ語ヲ、輕ク言ヒ馴レテ、「かくしてくれ」「然してくれ」ナドイフモ、必シモ「吻くれ」トイフニアラズ、唯「かくせよ」「然せよ」ト願フ心ナルニ同ジ、希望ノ「こそ」ハ、コノ「こせ」ヨリ轉ジタルナリ。此ノ說ニ據ルトキハ、「雁に告げこせ」ハ「告けれこせ」ノ命令法ナリ、「こせね」ハ、「れこせ」ノ將然言ニ、希望ノ「ね」ノ添ハレルナリ、「こせぬかも」モ、將然

言ニ「不」ノ添ハリタルナリ、「ぬ」ヲ「不」ノ意ト見ヲモ「かも」ニテ反語トナレバ、元ノ意ニ反ルト見ラルベシ。「こすな」モ、終止言ニ、禁止ノ「な」ノ添ハレルニテ、スベテ、文法ニハ適フヤウナリ。扨「れこす」トイフ語モ、古事記(神武)ニ「今自天遣八咫烏」トアルヲ、記傳ニ「ひま、あめより、やたがらすをれこせむ」ト讀ミテ、今ノ世ノ俗文ニ「申越」ナドイフ「越」ハ、於許須ノ於ヲ省ケルモノナル由ヲイヘリ、万葉、十八(二十四)ニ「白玉の、いほつつどひを、手にむすび、於許世牟あまは、むかしくもあるか。」同、十九(十二)ニ「わぎもこが、かたみがてらと、紅の、やしほに染めて、於巳勢多流、衣のすろも」土佐日記ニ「講師、物、酒、れこせたり。」遊仙窟ニモ「遣」トアリ、「れこす」モ、固ヨリ古クヨリアリシ語ナリ。扨、希望ノ「ころ」ハ、豆爾波ノ一種ノ用法ノモノナルベク、「こせ」「こす」ハ、動詞ニテ、互ニ轉用シタル語ニハアラザルベクモ思ハル、サレド、催馬樂ニ「ひで吾が駒、はやく行きこせ」トアル語、萬葉、十二(卅五)ニモ出デ、「乞吾駒、早去欲」トアリテ、舊點ニハ「早去欲」ニ「はやくゆかむよ」トアレド「はやくゆきこそ」ト訓ムベシ、催馬樂ノ「こせ」ハ、(伊勢物語ノ「雁に告げこせ」モ)訛ナリトイフ說モアレバ、尙考フベキナリ。

○尋常ノ結法ハ、論ズルマデモナシ、唯「ぞ」「なむ」「や」「か」「ころ」ノアルトキニ限リテ、動詞、形容詞、助動詞ノ、其語尾ヲ變シテ、別ニ第二、第三ノ結法ヲ起スヿ、國語ノ天然ニ出デヽ、如何ナル理由ナルニカ、固ヨリ知ラルベキニアラズ。然レドモ、強ヒテ、其理ヲ求ムレバ、「ぞ」「なむ」「こそ」ハ、語意ニ、緩急コソハアレ、同シク指示スル意ヲ有シ、「や」「か」ハ、疑ヒ問フ意ヲ有ス、サレバ、他ニ對シテ、指示、疑問、ノ意ヲ發スルニ、緊ク他ノ注意ヲ引起サムトテ、其語勢、末ニ及ビテ、特ニ、此ノ結法ノ變化ヲ起スモノカ。

三四〇節

○又、今世ノ口語ニアリテハ、「かゝり」「むすび」ノ事、滅ビテ痕ナク、(第一活用モ滅ビテ、)スベテ、第二活用ヲ以テ、唯一ノ結法トス。「かゝり」ノ「の」「なむ」「や」ハ、全ク滅ビ、「ぞ」「か」ハ、語末ニ用ヰラルヽノミ、「こそ」ハ存スレドモ、結法ニ關セズ、「女でこそあれ、武士の妻」「かはひけりやころ、神田から通へ」ナドハ、古口調ヲ遺誦スルノミ。

三四一節

三四二節

(本、五二六)萬葉、十九ノ歌ハ、三月三日ノ宴ノ歌ナリ、此ノ日ハ、上巳トイヒテ、曲水ノ宴ナドイフアリ、元ト支那ヨリ移レル儀ナリ、支那ニテハ、此日ニ、流水

上ニ禊飲スナドイフヿモアリ、舟遊スルヿモアルナルベシ。「今日ゞ」ハ「今日なるゞ」ニテ、言ヒ切ル「ゞ」ナリ。「かゝり」トハナラズ。「せこ」ハ、集會ノ衆ヲイフ、花鬘ハ時ノ花ヲ絲ニ貫キテ、鬘ニカクルナリト云フ、桃花ナルベシ。拾遺、十六ノ歌ハ、前ノ第三一六節ニ註セリ。拾遺、十六ノ歌ト、古今三ノ歌トハ、「歸るな」鳴け」、「おこせよ」、「忘るな」ト、共ニ、命令ト禁止トヲ具シテ、呼掛ケノ「郭公」ト「梅の花」ト、共ニ、其主語ヲ兼ネタリ。

三四三節　(本、五二七)古今、四ノ「玄がらみふせて」ハ、「脚ニ繁ク絡ミ踏ミツケテ」ナリ、下ハ、「鹿ノ體ハ見エズシテ、聲ハサヤケキ哉」ナリ。

三四四節　○大凡ソ、一文ノ末ヲ結ブモノハ、動詞、形容詞、助動詞ノ外ニハアラジトゾ思フ、是レ、余ガ文法ヲ考究スルニツキテ立テタル原則ノ一ナリ、然アラヌモ多クアルハ、皆、省略シタルモノナルベキヿ、後ノ文章篇ノ略語略句ノ條々(本書第五六四節、以下)ニイフヲ見テ知ルベシ。

扨、命令法ニテ文ヲ結ブハ、論ナシ。禁止語ニテ「行くな」「な行きそ」ナド結ブモ、結ブモノハ、「行く」「行き」ニアルナリ。

三四五節　然ルニ、爰ニ「さやけさ」「うさ」「わびしさ」ナド、名詞ニテ止マルガ如キヲ、特ニ、呼掛クル語意ニテ結ブモノト立テタルハ、不條理ナルガ如クナレド、自ラ說アリ。「玉緒延約」(中)ニハ、斯ル用法ヲ、下ニ略語アルモノト解シテ、「音のさやけさ」ハ、「音のさやけざまなり」ノ意ナリ、「世の中の憂さ」「事のわびしさ」ハ、「世の中のうざまなり」、「事のわびしざまなり」ノ意ナリトアリ。「さ」ノ意ハ、解キ得タルヤウナレド、スベテ「さ」ト結ビタルハ、「なり」ト斷定スル意ハアラズシテ、詠歎ノ意アルヤウナリ。「係辭辨」ニモ、下略ノ用法ト解キテ、「聲のさやけさ」、「世の中のうさ」、マコトニクルシクセムスベナシ」ナドイフ語ヲ含ミタリト聞ユ、トアリ。サレバ、此結法モ、後ノ略語略句ノ中ニ入ルベキモノカトモ思ヘド、下略ノ語ノ解說、甚ダ迂遠ナルノミナラズ、係辭辨ノ說ニ據ルトキハ、此ノ用法ノ「の」ハ、所謂「かゝり」ノ「の」トハナラズシテ、上下ノ名詞ヲ繫グ「の」トナル。抑モ、此ノ用法ナル「の」ハ、確ニ「かゝり」ノ力アリト思ハル、因リテ、愚案ハ、詠歎ノ意ヲ含マシメテ、「音がさやけき哉」、「世の中が憂き哉」ト解說シタリ。而シテ、形容詞、乃チ、文ヲ結ブナリ、名詞ニテ結ビタルニハアラズ。因ニ云フ、斯ル用法

ノ「の」ニ就キテ、諸先輩ノ諸説ヲ見ルニ、所謂「かゝり」ノ「の」ト、二名詞ヲ繋グ「の」トヲ、常ニ混淆シテ、論辨紛々タルハ何ノ心ゾヤ、「こや小野山の、冬のさびしさ(ナラム、)」盡きせぬものや、まろが身のうさ(ナルベキ、)」ナドノ「の、が」ニ至リテハ、皆、二名詞ヲ繋グマデノモノニテ、「かゝり」ノ「の」ト混ズベキニアラズ。

三四六節

(本、五二八)次ニ、希望ノ結法トテ立テタルヲ論ゼム。(本書ノ第四二三節、參見)

動詞、形容詞、助動詞ノ、一旦、文ヲ結了セル後ニ、感動詞ノ添フハ、「いみじくぞある、や、」「ばしやるかたぞなき、や、」「山のまに〳〵、鶯鳴く、も、」「忘れかねつ、も、」「いかゝはせむ、は、」「移りにけり、な、」「物を思ふ、よ、」「樂しき、かな、」「思はるゝ、かな、」「あはれなり、かし、」「疾く行け、かし、」ナド、皆、是レニテ、論ナシ。

然ルニ、「老いず死なずの、藥もが、」「君が八千代に、逢ふ由もがな、」ナド、動詞モ、形容詞モ、助動詞モ無クシテ、感動詞、直ニ文ヲ結ブガ如キハ、甚ダ異ナリ。

三四七節

熟ラ考フルニ、「も、が、」「も、がな、」皆、中間ニ略語アルナラム、而シテ、希望ノ事ハ、皆、未來ニ屬スレバ、間ニ、未來ノ語ヲ略セルナラム。

「こゝろがへするものにも(セム)が、片戀は、苦しきものと、人に知らせむ。(古今、十二、我が宿の、尾花が上の、白露を、消たずて玉に、貫くものにも(セム)が。(萬葉、八)老いず死なずの、藥も(アラム)が。(古今、長歌)甲斐がねを、ねこしやまこし、吹く風を、人にも(セム)がもや、ことづてやらむ。(古今、二十)常にも(アラム)がもな、とこをとめにて、(萬葉、二)君が八千代に、逢ふ由も(アラム)がな。(古今、七)舊りにし果、結る時も(アラム)がな。(同、十)人に知られで、來る由も(アラム)がな。(後撰、十二)人の心を、枕とも(セム)がな。(同、十八)飛ぶがごとくに、都へも(ユカム)がな。(土佐日記)ナド、皆、此ノ如キ略語アルナルベシ。

三四八節

扨、「が、かも、」「がな、」ノ語原ハ、清音ナル「か、」「かも、」「かな、」(哉)ト同ジキモノニテ、詠歎ノ意ノ深キ、終ニ希望ノ意トナレルナラム。而シテ、上ニ、未來ノ「む」アルニ因リテ濁ルニテ、「行かむとす」ヲ、音便ニスレバ、「行かんずる」ト濁ルト、同一ナルモノナラム。

三四九節

扨、又、「しが、」「しがな、」「にしが、」「にしがな、」「てしが、」「てしがな、」ナドハ、上ニ、助動詞アレバ、助動詞、乃チ、文ヲ結ビテ、後ニ感動詞ノ添ヘルモノト見テモ、然ルベケレド、尙、希望ハ、未來ニ屬スルモノナルニ、過去ノ「し」ノミニテハ、斷定スル意トナリテ、イ

カヾト思ハル、コレモ、「甲斐がねを、さやにも見し(時モアラム)が」(古今、二十)秋ならで、妻呼ぶ鹿を、聞きし(時モアラム)がな」(金葉、三)心憂し、深き山にも、入りにし(時モアラム)が」(好忠集)早く憂き世を、はなれにし(時モアラム)がな」(夫木集)稲妻の、光の間にも、君を見てし(時モアラム)が」(後撰、十二)耳無しの、山のくちなし、得てし(時モアラム)がな」(古今、十九)ナド、加ヘテ見ムモ善ケム。

以上、新案ナリ、サレド、考ヘノ未ダシキ所モアリ、古書ニ、然用キタル例モ見エネバ姑ク、本文ニハ言ハズ。

「玉緒繰分」(波)ニ「しがは、元と、しとがとつらなれるなり、しは、かのきしか ト活さて、過去を示すしなり、それにつゞきて、願のががつけむ「旅寐してしが」など、未來をころいへるなれ、とやうにも、初學、或は訝からめど、そは、過去せんことを、かねて、未だ來らぬさきに云にてあるなり、うまく味ふべし。」トアリ、前ニイヘル如ク、中間ニ「時モアラム」ヲ加ヘバ、愈、過去セムヿヲ、豫テ來ヌサキニ云フ意トナルベシ。

○又、此ノ「がな」ヲ、枕草子ニ、「いさゝか主に物言はせぬころ、羨しけれ、さあら

む人をがな、使はむところおぼゆれ。」今昔物語ニ、「なにをがな、形見に姫にとらせむ、」宇載集(十六)ニ「内侍周防、寄り臥して、枕をがな、と云のびやかにいふ、」ナド ト用ヰタルモアリ、コレニ因レバ、源氏物語、橋姫ニ「かの君たちをがな」トアルヲ「もがな」ノ誤寫ナリト、強チニ定ムベクモアラヌカ、是等ノ用法ハ「何々を得てし、がな」ナドイフベキヲ略シタルモノカ、尙、推究スベキナリ。

○又「まうさね」給はな」咲かなむ」ナドハ、動詞、助動詞ノ下ニ付クガ故ニ、論ナキヤウナレド、不定法(第四活用)ニ付キテ、落着セヌヤウニモ思ハルレバ、類ヲ以テ、希望ノ結法ノ中ニ加ヘタリ。(本書ノ第四二七節、參見)

○拾遺、十九ニ「いつしかも、筑摩の祭、とくせなむ、つれなき人の、鍋の數見む。」後撰、一ニ「松も引き、若菜も摘まず、なりぬるを、いつしか櫻、はやも咲かなむ。」ナドハ「か」ノ結ビトモナルヤウナレド「いつしか」ハ「し」ニ、ソノヒトスヂヲ取リ立テ、重ク思ハスル意アリテ、待チ急ク意トナリテ「かゝり」トムナラズト云フ。サレド、ソレハ、中昔ヨリノ事ニテ、古クハ、語意モ同ジクテ「かゝり」トモセシナリ、萬葉、八ニ「吾が宿に、蒔きしなでしこ、何時毛(イツシカモ)、花爾咲奈武(ハナニサキナム)、なぞへつゝ見

む。(女ニナゾラヘツヽ見ムナリ)同、十八、ニ「たまくしげ、伊都之可安氣牟、布勢の海の、浦をゆきつヽ、玉藻拾はむ。」ナドアルガ如シ「花ニ咲キ畢ルヲ待テ急ギ」夜、早ク明ケヨカシ」ト待ツ意ナリ、但シ、斯ル場合ニ、希望ノ「なむ」ヲ用キタリシヨ、古格ニハナシト云フ。

又、貫之集、上ニ「ひがきにも、まだいらぬほどは、人知れず、我が思ふ事を、神や知らなむ。」トアルハ「知るらむ」ノ誤寫ナラムト云、又、續後拾遺、十七ニ「とにかくに、うき身はなれぬ、うき世とは、いとひて後ぞ、思ひ知らなむ。」モ「知りなむ」ノ誤ナルベシ、ト云フ。

○又、菅家萬葉ニ「白雪の、八重降りしきる、かへる山、かへる〳〵ぞ、老ひにけるかな。」ナドアルハ「かな」ニテ「ぞ」ヲ結ベルヤウナレド「ぞ」ハ「ける」ニテ結ビテ「かな」ニ關セザルベシ。

三五二節

○其他「かくあるは世の常(ナル)ぞ。」言ふはいかに(カアル)ぞ。」恨めしの身(ナリ)や。」行きぬとか(イフ)や。」思ひはつべき涙(ナル)かは。」彼れぞ聟の少將(ナル)な。」玉にもぬける、春の柳(ナル)か。」夜半の月(ナル)かな。」水の聲(ナル)かな。」行かむ(ヨカム)や。」ナド、文ヲ結ブヤウナレド、括弧内ノ語ヲ略セルナリ。後ノ略語略句ノ條ニイフベシ。

三五三節

(本、五二九、五三〇)詞玉緒ニ「ぞ」「や」「こそ」ハ、互ニ重ナル例ナシ、トアリ、堀川百首ニ「みなからに、心もとけず、岩代の、松(ナ)や。」誰れかは、結びたきけむ。」トアル「や」ハ、感動詞ナルカ。「かくしてや。」猶や退らむ。近からぬ道のあひだを煩みまゐ來て。(萬葉、四)たちねとや。いひややらまし、白雲の、とふこともなく、宿にゐるらむ。(貫之集)ナドノ「や」モ、一ツハ感動詞ナルカ。(繰分ニハ、一本ヲ引キテ「言ひにやらまし」トアリ)又「秋の夜を、あからわびぬと、いひけるぞ。」物思ふ人の、ためにざりける。(菅萬)ナドノ「ざり」ハ「ぞ、あり」ノ約マレルナレバ、コレハ「ぞ」ニ一ツアルヤウナリ。又「思ふ心を、や。」今よりこそは、こゝろみるべかりけれ。(源氏、蜻蛉、下)ナドハ「こそ」ニテ「や」ヲ打消シタルニカ、或ハ「や」ハ感動詞ナルカ「さこそや心細かりけめ。」ナドイヘルアルモ、感動詞ナルカ。又「夏はつる。加茂の河原の、みろぎこそ、神やうくらむ。」秋風の、聲。(千五百番)ナドハ「や」ニテ「こそ」ヲ消スベキ理ナケレバ、非ナリト云。又「秋風に、靡く尾花を、ゆふまぐれ、誰が袖ぞと、ぞ、あやまたれける。」(堀川百首)ナドノ上ノ「ぞ」ハ、言切ル「ぞ」ナルヿ、本書、第三四八節ニイヘ

ルガ如シ。

○本書ニ引ケル万葉、六、ノ歌ハ、山部赤人ノ、芳野離宮ニテ詠メル長歌ノ末句ニテ、「此ノ山河ノ絶エ盡クル時ニノミコソ、此宮ノ止ム時モアラメ」ト頌シタルナリ。

古事記ノ歌ハ、木梨輕太子、伊豫ニ流サレ給ヒ、輕大郎女、追ヒ到ヒル時ニ、太子ノ詠ミ給ヒシ長歌ノ末ノ數句ナリ、「眞玉如、あがもふ妹、鏡如、あがもふ妻、云々」

玉ト鏡トヲ以テ、大郎女ニ譬ヘ給ヘルナリ、「ありといはゞころ」ハ、「あらむこそ」トイハムガ如シ、「家、國」ハ、伊豫ヨリ大和ノ故郷ヲ指ス、「妻ガ故郷ニ居ラバコソ、還ルベケレ、思ブベケレ、今ハ、妻ガコヽニ來ツレバ、故郷モ思ハズ、還ルベキニモアラズ」ノ意ナリ。

二處ニテ結ベルニハ、續後紀、「ひのもとの、やまとの國は、言靈の、さきはふ國と、ぞ、古言に、ながし來たれる、神言に、傳へ來たれる」ナドモアリ。

三五四節

（本、五三一）「ぞ」の、ゝめに、あかで別れし、袂をぞ、露や別けし」と、人は答むる。（後撰、十二）ナドモアリ。又「つれ〳〵に、何か涙の、流るらむ、人なむ我を、思ふともな

く。」（六帖）ナドハ、聯構文ニテ、各自ニ結ビ、且、倒置句ニテ、下ノ二句ハ、「ともなく」ヲ以テ、上ノ修飾語トナル。

三五五節

（本、五三二）「をかゝなむ、籠りれはします、御消息をこそ、聞ゑさせめ。」（橋姫）よき人のれはします御ありさまなど、いとゆかしきぞ、けしからぬ、心にやあらむ。」（枕草子）ナドノ「ます」ハ、「なむ」ヲ結ベルガ如ク、「けしからぬ」ハ、「ぞ」ヲ結ベルガ如クシテ、結バズ、共ニ下ナル「消息」、又ハ「心」ノ連體法トナリ、且、以上ノ文句、スベテ、變シテ、「消息」、又ハ「心」ノ修飾語トナル、「さてもとも、問はれぬ今は、またつらし、夢なれとこそ、ひひしものから。」（風雅、十）倒置句ナリ、「あはれてふ、事（ヲ）こそ常のくちのはにかくる（事）や人を、思ふなる、らむ。」（後撰、十六）ナド、皆、同シ、趣ナリ。「何人か、來てぬぎかけし、藤袴、（古今）なほざりにこそ、過ぎし昔を、」（續千載、十八）又ハ、本書ニ引ケル榮花、月宴ナル「申しけるぞ、位に即かせたまひける（皇子）こそは」ナド、皆同シ。又、同シ文ノ續キナル「けるころは、醍醐の聖帝と申して」ハ、本書ニ引ケル土佐日記ノ文ノ、「人々なむ、別れがたく思ひて」ノ如ク、「て」ニテ結ビヲ轉シタルヤウナレド、末ニ、「引奉るなれ」アレバ、然ラズ、「醍醐の聖帝と申して」ハ、挿入文

ナリ、「瀧の音は、絶えて久しく、なりぬれど、名こそ流れて、なほ聞えけれ。」(千載、十六)ナドニ、同ジ。

三五六節　(本、五三三)鳴海潟ハ、尾張ニアリ、御津ハ、難波津ノ一名ト見テヨロシ、憚ノ關ハ奥州ニアリ、井手ハ山城ノ地名ナリ。

三五七節　(本、五三九)後撰、十六ナル歌ノ「家居せむ」ハ、其時ヨリ後來ヲイヘルナリ、「思ひき」ハ、今ヨリ往時ヲイヘルナリ、次ノ歌ナルモ、然リ。拾遺、十六ナルハ、戀歌ニテ、題ハ、「古く物言ひ侍りける人に、」トアリ、昔シ物言ヒシ人ヲ、草隱レニ乾キ淺ミシ水ニ比シテ、サテ、「他ニハ厭キラレタレド、我ハ變心セズ、」ノ意ナリ。古今、十七「ひにしへの、野中の清水、ぬるけれど、元の心を、知る人ぞ汲む。」此ノ歌ハ、「往時有名ナリシ野中ノ清水ハ、今ハナマヌルクナリタレド、往時ヲ知ル人ハ、今モ汲ミテ飲ム、」ニテ、「老テ失意ノ地ニ居レド、知己ハ、我ガ心事ヲ知ル、」ナドノ意ナリ、拾遺ナルハ、コレニ據レルカ。

三五八節　○往年、一廣告文ニ、「金四十萬圓、右、今般、大藏大臣ノ認可ヲ得テ、當社負債、前記ノ通、本年十二月中、悉皆償還致し候間、此段、廣告候也。明治廿一年、七月」ト云フヲ見タリキ、コノ文中ノ「致シ」ハ、現在ナレバ、「七月」ト「十二月」トニ呼應セズ、「可致」ナルベシ、殊ニ、婦人ノ書狀文ニハ、未來ナルニ、「御返濟、下され候、」ナド記スル、習慣ナリ、「下さるべく候、」ナルベシ。「米も、先月より、一圓方、低落す、」ナドモ、「せり」トカ、「したり」トカ、アルベシ。

三五九節　(本、五四一)「世の中は、何か常なる、飛鳥川、きのふの淵ぞ、けふは瀬となる。」(古今、十八)「急流ノ變遷ニテ、昨日ノ深淵モ、今日ハ、淺瀨トナル、川ダニ然リ、サレバ、世事ハ、何物モ、常住ナルハアラムヤ。」ノ意ナリ。「もろともに、なきてとゞめよ、きりぎす、秋の別れは、惜しくやはあらぬ。」(古今、八)ハ、九月晦(陰曆ノ秋末)ニ、送別ノ歌ナリ、「共々ニ泣キテ、我ハ旅立ツ人ヲ留メム、汝ハ立去ル秋ヲ留メヨ、我レ、人ニ別レ、汝、秋ニ別ルヽハ、名殘惜シクハアラヌカ、惜シクアラウゾ。」ノ意ナリ。

三六〇節　(本、五四二)「うゑしうゑを」ノ歌ノ解ハ、前ノ第三三七節ニアリ。新古今、三ノ歌ハ、「橘ノ花ノ香ニ、古人ヲ思ヒ出ダストイフナリ、舊クヨリ世ニイフナリ、我モ、死シタル後ニ、誰カ、又、思ヒ出シテクルヽ人モアラウカ、誰モ思出ダスマイ、」

ナリ。「踏みわけて、更にや訪はむ」訪ハレ、もみぢ葉の、降りかくしてし、路と見ながら。」(古今、五)モ、紅葉ヲ惜ム心ヨリ、反語ト見ル。

三六一節

(本、五四四)古今、十四ノ「そこひなき」ノ歌ハ、戀歌ナレド、誠メノ歌ト見ルベシ。「そこひなき淵」ハ、底ノ極ノナキヤウナル深キ淵ナリ、「眞實ノ心アルモノハ、多言セズ、輕薄ナルモノガ、饒舌ル」ノ意ナリ。古今、三ノ歌ハ、「郭公ガ鳴クカト待テドモ、聲モ聞エヌガ、餘所デ鳴ク聲ナリトモ、コヽヘ響キテ聞エレバヨイニ、山彦ハ、ナゼニ、コヽヘハ響カセヌゾ、」ノ意ナリ。萬葉、六ナルハ、病中ニ詠メルナリ、「やも」ヲ下ニ移シテ「男兒タルモノ、徒ニ世ヲ過スベシヤハ」ト解スベシ。古今、十五ニ「月やあらぬ、昔ノ月ニ春や昔の、春ならぬ、昔ノ春ナリ、吾身ひとつは元の身にして。」ナドハ、「身モ依然タリ」ニテ、反語ニハナラヌヤウナレド「は」ト「て」トノ互爾波ニテ聞カセテ、下ニ「身ニシテアリナガラ、境遇ハ、昔ノ如クナラズ、」ノ餘情アルナリ、此ノ歌ハ、在原業平ノ歌ナリ、古今集ノ序ニ「心あまりて、詞足らず」トイヒシハ、コレラヲヤイフベキ。

本書ノ古今、三、ノ「答へやはせぬ」又ハ、源氏物語、藤のうらはノ「我宿の藤の色と

三六二節

き、たそがれに、尋ねやはせぬ、春のなごりを。」ナド、斯ク「やはせぬ」ト用ヰタルハ、スベテ、反語ニテ、命令スル意トナル。

古今、十四ノ「いつはりと」ノ歌ハ、「相手ノ言ヒシハ、虛言ナリキ、ト思ヒナガラモ、今マデ、頼ミニ思ヒテ居タルフナレバ、今更ニ、變心シテ、餘人ノ誠ヲ、頼ミニハセズ、」ナリ。古今、十八ナルハ、越ノ國ヨリ、京ヘ來レル人ノ、友人ニ向ヒ、舊誼ノ思ヒハ、雪ノ積レルガ如シ、トテ詠ゼル歌ナリ、「越」ニ「來し」ヲカケタリ、白山ハ、越中ニアリ。拾遺、十九ノ歌ハ、題ニ「返事せぬ女に、いはみがたと言ひつかはしたれば、」トアリ、コレハ、此書ノ十五ニ「つらけれど、人には言はず、いはみがた、うらみぞ深き、心ひとつに。」(言ハズ、石見潟、浦見、ト重ネタリ)トアリ、コノ歌ノ意ニテ、言ヒツカハシタルナルベシ、サテ、「いはみがた、なにかはつらき」ノ歌ハ、其返歌ニテ、「何ニ、我ニツラキフアルベキゾ、サホドツラク思ハバ、ソノツラサヲ、恨ミガテラニ來テ見ヨ」トナリ。

(本、五四五)「ましや、思ひきや」トイフハ、スベテ、反語ナリト知ルベシ。「いはむや」ハ、「言はむや」ニテ、反語ナリ、常ニ「況ンヤ何々ヲヤ」ト用ヰルモ、倒置句ノ反語

ニテ、「何々ヲ言ハムヤ」ナリ、末ノ「や」ハ、「二」ッ重ナルコトナレドモ、共ニ感動詞ナリ。

拾遺、三、ノ歌ノ「かりにとて」ハ、「假初(カリソメ)」ト「刈(カリ)」トヲ言ヒカケタルナラム、古今、戀、五、「山城の、淀のわかごも、かりにだに、こぬ人たのむ、我ぞはかなき。」同、雜、上、「難波潟、生ふる玉藻を、かりそめの、あまぞ我は、なりぬべらなる。」新古今、戀、「かりにくと、恨みし人の、絶ねにしを、草葉につけて、玄のぶ頃哉」ナドアリ、「假初に來る」ト、「刈りに來る」トヲカケタリ。(草葉につけて」ハ、「忍草(シノブクサ)」ノ名ニツケテ「思(シノ)ブ」ノ意ナリ。)

「めや」ト用ヰタルモ、スベテ反語ナリ、又「れや」トイフモアリ、共ニ、本書、感動詞ノ「や」ノ條(第四〇五節以下、七節)ヲ參見セヨ。古今、十五ニ「來めや」とは、思ふものから(カラヲ)、ひぐらしの、鳴く夕暮は、立ち待たれつゝ。」ナドノ「こめや」モ「來むか、來ざらむ」トイフ反語ナリ、「人知るらめや(知ラザラムこ)」劣らざらめや(劣ラザラムこ)」ナド、皆、同ジ。萬葉、十五ニ「年にありて、一夜妹に逢ふ、彦星も、我にまさりて、思ふらめやも。」トアルヲ、六帖ニハ、「思ふらむやは」ト改メタリ、「らめやも」ハ「らむやは」ノ意ナルヲ知ルベシ。古今、二ノ「なくにしとまる」ハ「鳴く」ト「泣く」トヲカネタリ。

古今、十九ニ「思ひけむ人をぞともに、思はまし、まさしや報い、なかりけりやは。」

三六三節

後撰、四ニ「色といへば、濃きも薄きも、たのまれず、やまとなでしこ、散る世なし」やは。」此ノ如ク用ヰタル反語モアリ。又「あれをとふ、なければ忍ぶ、世の中に、我身ひとつは、住みわびぬやは。」(續後拾遺、十七)ナドハ、反語ニアラズ。

「老ぬとて、なぞか我身を、せめぎけむ、老いずぞけふに、あはましもの(ナル)か。」(古今、十七)鹿の音を、垣根にとめて、問くのみ(ナル)か、月もすみけり、秋の山里。」(玉葉、四)ナド、皆、反語ナリ、動詞、形容詞、助動詞ナラヌ語ヲ承ケタルハ、スベテ「なる」ヲ加ヘテ見ルベシ。「かも」ナルハ、「橘の、下吹く風の、かぐはしき、筑波の山を、戀ひずあらめかも。」(萬葉、二十)千代に忘れむ、我が大君かも、」(同、二十)ナド、尙、アリ、皆、反語ナリ。「みながらに、心もとけず、岩代の、松や誰れかは、結びれきけむ。」(堀川百首)「誰をかも、知る人にせむ、高砂の、松も昔の、友あらなくに。」(古今、十七)ナドハ、反語ナラズ。

三六四節

(本、五四、九)「かざし抄」ニ云、よにハ、よりも、より重く、よにもハ、又、よにより重き詞なり、よりは、俚言に「れそらくは何まい」よにハ「けつして何まい」よにもハ「どうひふ事があつても何まい」といふ詞なり、本意は、世は廣けれど、さま〳〵不思

議の事はあれども、是にかぎりて、さはあらじといふ心なり「かざし」にはあらねど、文に「よにうれしげに」「よにたぐひなき」「世に似ぬ」「世になく」などいふ詞、皆、この心なり、されど、後々、言ひならひたる事になりて、世といふ詞にもあらぬやうになりたれど、一首の中に、又世の字をよみいれたる歌もあり、あやしむに足らぬことなり。」トイヘリ。

○後拾遺、十六ノ歌ハ「夜をこめて、鶏の空音は、謀るとも、よに逢坂の、關はゆるさじ。」ニテ、支那ノ周代ニ、齊ノ孟嘗君、秦ニ囚ハレ、夜半ニ、逃レテ函谷關ニ至ル、鶏鳴ナラネバ開カズ、從者ニ、巧ニ鶏鳴ヲ爲ス者アリテ、關開キテ、逃レタリ、此ノ故事ヲイヒテ、人ノ相逢フニイヘルナリ。新古今ナルハ、送別ノ歌ナリ「よにも來じ」トイフヲ、越路ニカケタリ「かへる山」ハ、越ノ國ノ山名ナリ。

三六五節

（本、五五〇）「武夫の」ハ「八十氏」ノ枕詞ナリ「氏」ヲ「宇治川」ニ借リタリ「いさよふ」ハ、網代木ニ支ヘラレテ淀ムヲイフ、人世ノハカナキヲ、浪ノ行方知ラレズナルニ譬ヘタリ。万葉、十一「犬上の、とこの山なる、不知也河、不知とを聞せ、吾が名告らすな。」犬上ハ近江「を」ハ感動詞）ナドモアリ。

三六六節

（本、五五一）古事記ノ「吾獨何能得作此國」モ「吾レ、ヒトリ、イカデカモ、此ノ國ヲエツクラム」ト訓ミテ、反說ナレバ、打消シナリ、万葉、十一、ノ「面忘れ、だにも得爲也、と」、同、十二ノ「旅寐得爲也、長きこの夜を」モ、共ニ反語ニテ、同シ、大和物語、蘆刈男ノ條ニ「强ひて言ひにくゝて」トアル「にくし」ニモ、打消ノ意アリ。万葉、十、ノ「さを舟の、得行而泊てむ」ヲ「ゆきて」ト讀ミテハ、例ニ違ヘリ「ゆきゐて」ト、倒讀スベシト云フ、同書、四ニ「待月而、行吾がせこ」ナドモアリ。（同、十八ノ「こふとい、ふは、衣毛名豆氣多理、言ふすべの、たづきも無きは、吾身なりけり。」ノ衣ナドハ、「ならぬ」ノ「ゐ」ニ同シク「淺くも」ノ意ナリト云。

三六七節

此ノ語ハ、元來「得」トイフ動詞ノ連用法ニハアレド、一種ノ用法トナリテ、更ニ「得」ノ上ニ加ヘテ「五條わたりなりける女を、え得まじうなりて」ナド用ヰタルモアリ、且、尋常動詞の連用法ナラバ、下ヲ、打消ノ語、又ハ、反語ニ限ルナドイフヲモ、アルベカラズ、因テ、今ハ、副詞ト見タリ、又、或ハ「善」ノ義ニテ「能ク」トイフ副詞ニ同シキモノナルベキカ、ナドモ思ヘド今、畿内邊ノ口語ニ「ようする」「ようせぬ」トイフハ、此ノ語

ノ延ビタルニテ、其意ハ、「爲ルヲ得、」爲ルヲ得ズ、」ナレバ、尙「得」ノ方ナルベシ。(但シ、口語ノ用法ハ、下ヲ打消ニノミ限ラズ、)

三六八節　(本、五五二)「久米のさら山」ハ、美作ニアル山名ナルヲ、「さら〳〵」ニ言ヒカケテ、序トシタルナリ。次ノ二首ハ、別ニ「さら〳〵」トテ、物ノ音スルニイフ副詞アリ、ソレヲ、時雨、又ハ、雨風ノ音ニ言ヒテ、イヒカケタルナリ、「竹の葉に、霰降る夜は、さら〳〵に、ひとりは寐べき、こゝちこそせぬ。」(詞花、八)ナドモ、同ジ。

三六九節　(本、五五三)萬葉、七ノ歌ハ、「向峯に、立てる桃の樹、なりぬやと、人ぞさゝめきし、なが心ゆめ。」ナリ、桃ノ結果ト、男女ノ中ノ成レルトヲ言ヒカケタリ、又、萬葉、十九ニ、「郭公、夜鳴をしつゝ、我が兄子を安寢しなすな、ゆめ心あれ、」(なす)ハ、「寐」ノ敬語、佐行四段)ナドモ、「ゆめ」ハ、倒置ニテ、「な」ニカヽリ、「あれ」ノ命令ニハ關セザラム。

三七〇節　(本、五五四)平家物語、御產ノ卷ノ文ハ、次ノ第五五六節ノ文ト共ニ、建禮門院ノ安德天皇御產ノ惱ミハ、淸盛ニ殺サレタルモノノ怨靈、祟ヲナスナリトテ、後白河法皇ノ祈リ給フ文ナリ、寵恩、云々トハ、法皇ノ近臣モ、怨靈ノ中ニアリトテナリ。盛衰記ノ文ハ、平淸盛、三百人ヨシテ、髮ヲ禿ニシ、紅袴ヲ著シ、京中ヲ巡行シ、謗ル者ヲ探偵セシメタルヲイフ。

神代紀ニ、「素戔嗚尊曰、韓鄕之島、是有金銀、若使吾兒所御之國、不有浮寶者、未是佳也、」ナド、「あらずゑ、」よからじ、」ニテ、承ケタルモアリ。

三七一節　(本、五五六)仁德紀ニ、「阿瑀豫區望阿羅孺」(豈ハ、何ニ通ズ、なゞ、あゞ、なぜ、あぜ、通ズルガ如シ、ト云、)續紀、(廿五)宣命ニ、「豈障倍岐物ニハ方不在」ナド見エテ、下ヲ、打消ニテ承ケタルモアリ、萬葉、四ニ、「八百日行く、濱の眞砂も、我が戀に、豈不益歟、沖つ島守、」ナド、舊點ハ、反語ニ訓ミタレバ、論ナケレド、(不)ノ字ハ衍ナリト云、「あにまさらじか、」ト訓ムベシ、トノ說モアリ、(不)ノ字ニツキテナルベシ、然ルトキハ、紀、續紀、ノ文ノ如ク、打消ニテ承クル例トナル、サレド、尙、反語ニテ、「まさらめや」トハ、反對トナリテ、歌ノ意、解セラレズ。一說ニ、仁德紀、續紀ノ文ノ如キハ、「あに(ヨカラムヤ)よくもあらず、」あに(サハラムヤ)さはるべきものにはあらず、」ノ意ナリト云フ、然ルトキハ、「豈」ノ下ハ、反語ノミニテ承ケテ、打消ニテハ承ケヌカ、ナドモ思ヘド、萬葉四(十)ニ、「豈藻不在、れのが身のから、」ナドモアリ。反語ノ例ハ、萬葉、三ニ、「價なき、寶とゝふとも、一坏の、濁れる酒に、豈益目八。」夜光る、玉といふとも、酒飲

みて、心を遣るに、豈若目八目。」ナドモアリ。同、十四ノ「多胡の嶺に、寄綱延へて、寄すれども、阿爾久夜斯豆之、その顔好きに。」モ、古義ノ解ニ據レバ「豈來耶沈石」ノ義ナリトイヘバ、亦、同ジ。

三七二節（本、五五七）「けだし」ノ意ハ、次條ナル「もし」ニ似タリ「蓋シ是レナリ」ニナド、斷定ノ語ヲ用ヰタル文、往々見ユ、非ナラム。詩經ノ句ハ、小雅ノ正月篇ノナリ「局ハ曲也、蹐ハ累足也」トアリ「天ヲ蓋シ高シトイフトモ、敢ヘテ脊グヽマラズンバアラズ、地ヲ蓋シ厚シトイフトモ、敢ヘテ拔足セズンバアラズ」ト訓ム、此ノ詩ハ、民ノ、虐政ニ苦メル詠ナリ、天地ノ間ニ、身ヲ置クベキ處ナク、天地モ高厚ナラズ思ハル、ナドノ意ナラム。

萬葉、二ノ歌ハ「蓋シ吾ガ戀ふる如く鳴きしか」ト解スベシ。萬葉、三ノ山守ハ古ヘ、山ヲ守ル者ナリ、此ノ句ハ「雖」ノ字ニテ承ケタルニ引ケリ。萬葉、十五ノ歌ハ、良人ノ越前ヘ配流セラルヽ時ニ、妻ノ詠メルナリ「若シ、越前ヘ罷リ給フトナラバ、袖ヲ振リテ、吾ヲ招キ給ヘ、ソレヲダニ見ッヽ君ヲ慕バム」トナリ。萬葉、四ニ「蓋毛、人の中言、聞けるかも」同、七ニ「けだしくも、琴の下樋に、つまやこもれる」ナド用ヰタルモアリ。

三七三節（本、五五八）源氏物語、若菜（下）ニ「もし、思ふやうならむ世の中を、待ち出でたらむ」ナドモアリ、拾遺、十八ニ「あともなき、葛城山を、ふみみれど、我がわたしこし、かたはしか、もし。」ナド、倒置句ニシタルモアリ。

○特性ノ呼應アル副詞ハ、右ノ外ニモアルガ如ク考フレド、未定說ナレバ、本書ニハ擧ゲズ、其若干ヲ、左ニ、

三七四節　とみに。（疾みに）ノ意、頓ノ字ノ音轉ニハアラズ）玉霰ニ「とみにも來ず」とみにも出で來ず」ナドハイヘド「とみに來つ」とみに出來つ」トハ言ハズトアリ「とみに、物も宣はず」とみに、まどろまれ給はず」とみに、まゐるまじく」ナド、打消多キヤウナレド「とみに、物もとむるに、見出でたる」（枕草子、十）只今召せど、とみにて、上へまゐるにぞ」（同、十二）ナドモアリ、其他「とみの事」トイフハ、名詞ナレバ、異ナリ「とみの事として、文もてきたり」（古今）とみの事として、御文あり」（伊勢物語）かゝるとみの事には、誦經などをこそはすれ」（夕顏）右中辨、とみの事にて、出で、給ふ」（落窪、一）

三七五節　かならずしも。(必)和訓栞ニ「かならず、不必の時に「かならずしも」とよみ來れり、辭の緩なるをもてなり。源氏物語、若菜、上ニ「かならずしも、今はのとぢめを御覽せらるべきにも侍らねど」ナドアリ、下ハ打消ニ限ルカ。

三七六節　むしろ。(寧)論語、子罕篇ニ「予與其死於臣之手也無寧死二三子之手乎」(朱註、無寧、寧也、トアリ、旁訓ハ、道春點ニ據ル下同ジ)ナド、下ハ、未來ノ語ニテ承ケタリ、同書、八佾篇ニ「禮與其奢也、寧儉」ナドモアリ、命令ハ未來ニ屬ス、同書、季氏篇ニ、「孔子曰、求、無乃爾是過與」ナドモ、疑問ニテ承ケタリ、「乃チ、爾是レ過テルナカラムカ」ト訓ム說モアリ、疑ノ反語ナリ、サレバ、未來ノ語、疑問ノ語、反語ニテ承ク、ト定ムベキカ。

三七七節　(本、五六二)竹取物語ナルハ、車持ノ皇子ガ、蓬萊ニ至リテ取來レリトイフ玉ノ枝トイフモノヲ、竹取ノ翁ノ見テイフ文ナリ、次ナル文モ、續キニテ、蓬萊山ノ物語ナリ。古今、九ナルハ、在原業平ノ歌ノ題ニテ「これたかのみこの供に、狩にまかりける時に、あまの川(河內國)といふ所の川のほとりに下り居て、酒などの飲みけるついでに」下、本文ノ如シ)トアリ。大鏡ナル一ノ皇子ハ、敦康親王(御母ハ、道隆ノ女、定子)ナリ、二ノ宮ハ、敦成親王(御母ハ、道長ノ女、彰子)即チ、後一條天皇ニマシマス、關白道長ノ威迫ニ因リテ、然リ。

万葉、九ナルハ、水江浦島子(俗ニ、浦島太郎)ヲ詠ゼル長歌ナリ、吾妹兒ハ、海神ノ女ヲイフ「明日の如」ハ「早く」ノ意ナリ、常世邊ハ、常世國(海神ノ居)ノ邊ナリ「固めし」ハ、ユメ開クナ、ト言ヒカタメシ、ナリ。次ノ竹取ナルハ、右大臣、安倍御主人トイフ人、僞造ノ「火鼠ノ皮衣」トイフモノヲ持來レル所ノ文ナリ。

○「大穴持命、乃、申給久、云々、申天、(出雲國造、神賀詞)謀家良久、云々、等謀家利」(續紀、宣命)里人の、吾に告ぐらく、汝が戀ふる愛し妻は、云々、妻はあへりと、人ぞ告げつる。(萬葉、十三)ナドモアリ。古今集、墨消ニ「此歌、ある人、あめのみかどの、近江の采女に賜へると」ナドモアリ。

三七八節　(本、五六五、五六六)土佐日記ノ文ナル「文時維茂が舟のわくれたりし」ヲ「の」トカヽリテ「し」ト結ビタルモノトシ、次ノ句ヲ「貫之ノ舟、ならし津ヨリ室津ニ着キヌ」ト解釋スルヿ、諸書、皆、然リ、サレド、貫之ノ、ならし津ニ碇泊シタルヿ、本書中ニ見エズ。後撰、十三、ノ歌ハ、戀歌ナレド、誠メト見ルベシ、「夏蟲ノ、死ヌト知リ

ナガラ、火ニ惑ヒ寄ル思ひ(火ニカケタリ)ヲ、懲リヌガ悲シ、ト誰モ見ル、トナリ。伊勢物語ノ「あるじまうけ」ハ、饗應ノ一ナリ。

古今三ノ歌ハ「郭公ガ、夜ノ暗キガ爲カ、路ニ惑ヒタルガ爲カ、我ガ家ノ邊ヲ過ギカネテ鳴ク」ナリ。

三七九節

(本、五六七、五六八)後撰、二、ノ歌ハ、老後ニ、梅ヲ植エテ、翌年詠メルナリ「思はぬに」ハ、「思ハザリシニ」ト過去ノ意ニ解スベシ。萬葉、六ノ歌ハ、寧樂ノ京ノ荒墟ヲ傷惜セシ歌ナリ。

○嘗テ、藩翰譜ノ山内氏ノ條ヲ讀メルニ、一豐朝臣ノ室ノ、駿馬ヲ買ハムトス○嘗テ、藩翰譜ノ山内氏ノ條ヲ讀メルニ、一豐朝臣ノ室ノ、駿馬ヲ買ハムトスル所ノ詞ニ「此度、都にて、御馬揃へあるべしと聞ゆ、さしもあらんには、天下の見物なり、君、また、仕へのはじめなり、かゝる時ならでは、屋形にも、傍輩にも、見知られ給ふべきよしもなし、よき馬めして、見參にいれ給へ」(津山家本「善き馬召して見參に入玉へ)トイフ文アリ「よき馬(ヲ)買ひ給ひて、君の見參に供へ給へ」ノ意ナラムト解セラルレド、此ノ頃ノ用語ニ「めす」ヲ「買ひ給ふ」ノ意ニ用キタリヤ、否、又、「見參」トイフ語馬ニハイカヾアラム、或ハ、「見知られ」ノ語アレバ、

よき馬(ニ)乘り給ひて、御身、君の見參に入り給へ」カトモ思ハル、略筆モ、注意スベキフニコソ。

○本書、第五六八節ノ拾遺、十二、ノ歌ハ、戀歌ナレド、晝夜ノ長短ノ感ナドニ説クヤウアルベシ。

三八〇節

(本、五六九)新古今、十六、ノ歌ハ、幼時ノ友ニ、年ヲ歴テ逢ヒ、暫時ニシテ別レタルニ詠メルナリ、七月十日ノ作ニテ、人ヲ月ニ比シタリ。古今、二、ニ「聲絶ねず、鳴けやうぐひす、一年に、ふたゝびとだに、くべき春かは。」拾遺、神樂歌ニ「ゑろかねの、めぬきの太刀を、さげはきて、奈良の都を、歩るは誰か子ぞ。」古今、二、「春雨の、降るは涙か、櫻花、散るを惜まぬ、人し無けれど。」

三八一節

(本、五七一、五七二)金葉、二、ノ「ゑるし」ハ、山城ノ稻荷山ノ神ノ靈驗ニカケテイヘルナリ。古今、四、ノ歌、月中ニ桂樹アリ、トイフ説アリ、但シ、月ノ名トノミ見テ可ナリ、桂トイフニ因テ、常ノ樹ノ紅葉ニ準ヘテ詠ミ、秋月ノ光ノ好キヲイヘルナリ。桐壺ナルハ、人相ヲ見ル者ノ、人ノ相ヲ見テ、極メテ高貴ノ相アルニ驚キテ、考フル體ヲイヘルナリ。

三八二節　(本、五七三)拾遺、八、ノ「君をまた見でや」ノ「また」ハ、「再ビ」ナリ、田舍ニテ疾メル人ノ、京ノ友人ヨリ訪問ハレタルニ詠メルナリ。

三八三節　(本、五七四)後撰、十二、ノ歌ハ、或人、知人ノ近江ニ移リタルニ、「關越ゑて、粟津の森の、あはずとも、清水に見ゑし、影を忘るな。」(逢坂ノ關ノ清水ニ寄セテ、舊面識ニイヘルナリ。)ト贈レル返歌ナリ、逢坂ノ「逢」ヲ會合ニカケタリ。薄雲ノ「のぞかに」ハ、悠然ノ意ナリ。拾遺、九、ナルハ、勅命ニテ、人家ノ紅梅ヲ堀ラセ給ヒケルニ、樹ニ鶯ノ巣アリケレバ、家ノ女ノ詠メルナリ。萬葉、四ノ歌ハ同書ノ九ニ「入水、火爾毛將入跡、立向、競時爾」ナドトアル意ナリ。伊勢物語ノ「きつ」ヲ、水槽ナリナドイフ說モアレド、非ナリ。「きつね」ノ本名ハ「きつ」ニテ「ね」ハ美稱ナリ、水鏡ノ　欽明天皇ノ條ニ、野干、人ノ妻トナリシ所ニ「その產みたりし子をぞ、「きつ」とぞ申し、」ナドアリ、萬葉ノ歌ニモ、狐ヲ「きつ」ト詠メルアリ。

三八四節　○從來ノ語學書ニ、深ク、語句省略ノ法ヲ究メタルモノナシ、サレバ「かゝり」、「すび」、其他ノ場合ニ於テ、略筆違法ナル歌文ニ會スレバ、其說ニ窮シテ、別格トイヒ、變格トイヒ、輕格重格ナドイヒ種々ノ格ヲ設ケテ、其繁極リナシ。文章ヲ結ブハ、凡ソハ、動詞、形容詞、助動詞ナリ。コレナキハ、略筆ナルベキナリ、本文ニ擧ゲタル例ニテ知ルベク、此ノ例ニテ推セバ、彼ノ別格、變格、何格、トイフモノ大抵ハ、消滅スベシ。言語文章ヲ簡潔ナラシメムニハ、省略セムコト、勢ニテ、歌文中、殊ニ多シ、扨、其省略セシモノヲ、文法ヲ以テ說カムニハ、省略セシ語句ヲ加ヘテ、原形ニ復シテ說カムヨリ外アルベカラズ、然ラズバ、如何ニ文法ヲ說クトモ、頻々、違法ノ歌文ニ撞着シテ、文法ハ、スベテ立チ難カラム、語、句、省略ノ筆法、善ク講究セズハアルベカラズ。

三八五節　(本、五七五、五七六)語脈ノ解剖ハ、Parsingナリ、文脈ノ解剖ハ、Analysisニモアラムカ。

○「年の內に」ノ歌ハ、古今集ノ卷頭ニアリテ「ふる年に、春立ちける日よめる」トイフ題ノ歌ナリ、其意ハ、「立春ノ節ガ、年內ニ來タワイ、コレデハ、吾人ハ、同シ一年ノ內ヲ、去年ト云ハウカ、マダ、十二月ノ內デアル、サラバ、ヤッパリ今年ト云ハウカ、マウ春ニ成ッタ、ドウセウ、」ナリ。(スベテ、舊曆ノ上ノ事ト知ルベシ、)初二句ニ、倒置句アリ、「春は、年の內に來にけり」トイフヲ正シトス、然レドモ、年ノ內

三八六節

ニ來タルニ感深ケレバ、倒置セルナリ、本書、第五一一節ヲ見ヨ。

(本、五七七)神皇正統記ノ冒頭ノ一段ナリ。「神國」ハ、熟語ト見ルベキナリ、而シテ、「神」ハ、「國」ヲ形容ス、次ナル「天祖」「日神」モ、然リ。「天祖」ハ、此ノ文ノ續キニ、日本紀ニ據リテ、國常立尊ヲ指シテハアレド、古事記ニ據リテ、天御中主神ト說キテモ可ナリ、此ノ如ク二說モアリ、且、他ヨリ稱ヘ申ス號ナレバ、「天祖」ニ、二ツハナケレド、普通名詞ト見ル。「日神」ハ、大日靈貴神、即チ、天照太神ヲ申ス、是モ、外ヨリノ號ナレバ、普通名詞ト見ル。「傳ヘ」ハ、複對他動詞ニテ、別ニ「に」ヲ要ス、文外ニ、「天孫以下、皇裔に傳ヘ」ノ意、聞ユ。「開き、傳ヘ給ふ」ハ、過去ニイフベキヲ、歷史ニテハ、現在ニ記スコトモアリ、史文上ノ一法ナリ。「我が國」ハ、「異朝」ニ對シテ、一熟語ト見テモ、可ナリ。「國」ノ下ニ、下ノ「異朝には」ノ「に」ニ對シテ「に」ノ略語アリト見ル。「この」ノ意ハ、本書ノ第一一三節ヲ見ヨ、次ナル「その」モ、然リ。「あり、」此ノ處ニテハ、中止法ニテ、次ナル「無し」ニ應ズ、「ありて」ノ意アリ。「異朝」ハ、熟語ナリ。以上、倒置句ナリ、「この事、我が國にのみあり、そのたぐひ、異朝には無し、」ヲ正シトスレド、「我國」ト「異朝」トノ別ヲ言フニ、意深ケレバ倒置セリ、「のみ」ト「には」トノ語氣ニテ、知ルベシ。「この故に」ハ、熟語ノ接續詞ナリ、接續詞ハ、三部主、客、說)ノ外ナルコト、本書ノ第四九九節ニイヘリ。「ひゑ」トイフ他動詞ニハ、主語ヲ要シ、目的ノ「を」ヲ要ス、故ニ、「我等」、大日本、ノ略語アリト見ル、第一ノ文ニ、「大日本は、神國なり、」トアレバ、末ノ略語モ、「大日本」ナルヲ知ル。「我等」ハ、「世人」ニテモ、「吾人」ニテモ、可ナラム、今ハ、「等」トイフ接尾語ヲ、單語ノ解剖ニ示サムトテ、「我等」トシテ加ヘタリ。

三八七節

(本、五七八)平治物語ノ文ハ、藤原信賴、源義朝等ト兵ヲ起シテ、禁中ニ據リテ、主上、上皇等ヲ押籠メ奉リタル時、藤原光賴、參內シテ、信賴ヲ威壓シテ、弟ノ惟方(信賴ニ黨セリ)ヲ訓誡シ反正セシムル所ノ文中ノ一段ナリ、「黑戶」御書所、別當」ナドハ、言海ヲ引キテ知ルベシ。

三八八節

(本、五七九)宇津保物語ノ文ハ、感動詞ヲ、單語ノ解剖ニ示サムトテ、引ケルナリ。此ノ文ハ、二文ニテ成レリ。

あはれ、(彼は、)旅人に(テ)こそあ(ル)なれ。(我)(彼に、)玄ぢし宿を假さむ。かし。

主　修　說　主　客　修　說　客　說　明　部　說　明　部

「あはれ」ノ意ハ、初ノ文ノ總體ニ係リ「かし」ノ意ハ、次ノ文ノ總體ニ係ル、本書ノ第四九九節ヲ見ヨ。

三八九節　（本、五八〇）榮華物語ノ歌ハ、遊學ノ學生ノ、故鄕ノ感ナドニ、說クヤウアルベシ、月ヲ見レバ物ヲ思フハ、人ノ常情ナリ。

「古里」ハ、名詞ナリ。「を」ハ、第一類互爾波「古里」ト「出で」トヲ承接ス、但シ、他動詞ノ目的トナル「を」ニハアラズ、「より」ノ意ノモノナリ。（本書ノ第三〇七節ヲ見ヨ。）「出で」、有對自動詞、多行下二段活用、第五活用。（「に」ニ接スルニ因リテ）「し」、過去ノ助動詞「き」半過去ノ助動詞「ぬ」ノ第五活用。（「し」ニ接スルニ因リテ）「き」ノ第二活用、連體法。以上、二語、相接シテ、大過去ヲ成ス。「後」、名詞。「は」、第二類互爾波「出でにし後」ト「思ひやらるゝ」トヲ承接ス。「月影」、熟語ノ名詞。「ぞ」、第二類互爾波「月影」ト「思ひやらるゝ」トヲ承接シテ「思ひやらるゝ」ノ係リトナル。「昔」、名詞。「も」、第二類互爾波、（今モ見ル、昔モ見キ、ト幷列スル意）「昔」ト「見き」トヲ承接ス。「見」、單對他動詞、末行上一段活用、第五活用。（「き」ニ接スルニ因テ）「き」過去ノ助動詞、第一活用、第一終止法、尋常ノ結法「出でにし」ト「見き」ト、過去ノ語、

相呼應ス。「と」、第一類互爾波「昔も見き」ト「思ひやらるゝ」トヲ承接ス。「思ひ」複對他動詞、波行四段活用、第五活用、連用法。「やら」、複對他動詞、良行四段活用、第四活用、不定法。（思ひやる」トイフ熟語、言海ヲ引キテ見ヨ）「るゝ」、勢相ノ助動詞「る」ノ第二活用、第二終止法「ぞ」ノ結法、但シ、勢相ノ意義ニ轉シタルモノ。（本書、第一八七節ヲ見ヨ）

三九〇節　（本、五八一）新古今、三、ノ歌ハ、非常ニ長キ修飾語ノ例トシテ引ケルナリ。「我」、人代名詞ニテ、自稱。「が」、第一類互爾波「我」ト「宿」トヲ承接ス。「宿」、名詞。「そとも」ハ、「背之面」ノ約轉ニテ、屋後ノ事、熟語ノ名詞ナリ。「に」、第一類互爾波「そとも」ト「立てる」トヲ承接ス。「立てる」ハ、「立ち、て、ある」ノ約。「立ち」ハ、無對自動詞、多行四段活用、第五活用。「て」ニ接スルニ因テ）「て」、半過去ノ助動詞「つ」ノ第五活用。（「あり」ニ接スルニテ）「ある」、無對自動詞、良變、第二活用、連體法。以上、三語「立てる」ト約マリテ、半過去ノ意ヲ成ス。（本書、第二三七節、參見）「楢」、名詞。「の」、第一類互爾波「楢」ト「葉」トヲ承接ス。「の」、同上、「葉」ト「をげみ」トヲ承接ス。「をげ」、形容詞、志幾活用ノ語根。「み」、接尾語、形容詞ノ語根ニツキテ、名詞トスルモノ。

（本書、第四六五節、參見）以上、二語、合シテ熟語ノ名詞ナリ。「に」第一類互爾波、「玄げみ」ト「涼む」ト承接ス。「涼む」無對自動詞、末行四段活用、第二活用、連體法。「夏」名詞。「夏は來にけり」ノ解剖ハ、本書、第五七六節ノ「春は來にけり」ニ同シ。

初ノ四句ヲ、一文ト見テ「涼む」ヲ結法トスレバ、頭ニ「我」トイフ主語ヲ加ヘテ、

我（主）我（修）が宿のそともに立てる（修）楢の葉の玄げみに涼む。（説）

「玄げみ」以上ノ語ハ、層々疊々シテ、語毎ニ、下ノ語ヲ修飾シテ「我が」ニ至ル。然ルニ、末ノ「涼む」ヲ、連體法トシテ「夏」ニ連ネタレバ「涼む」以上ハ、更ニ、悉ク「夏」ノ修飾語トナレリ。歌ノ意ハ、「今年モ、モハヤ、例年ノ如ク、若葉茂リテ、其下ニ涼ムベキ夏ガ來タワイ、」ナリ。

三九一節　○次ナル文ヲ、主、客、説、等ニ解剖セムニハ、左ノ方法ニ據ルベシ。

先ヅ「思ふ」トイフ他動詞ニハ、主語ト客語トヲ要スト認ム、而シテ文中ニ「父と、師と、」トイフ二ツノ客語アレバ、説明語（思ふ）ハ、一個ニシテ、主語、客語、各、二個アルベシト認ム。次ニ、「養はれ」、「教へられ」、トイフ二個ノ所相ノ他動詞アレバ、是レモ、無論ニ、各、一個ノ主語アルベシト認メ、又、所相ニハ、「所相ノ標準語」ノ「何に」ヲ要スレバ、（本書ノ第一八一節ヲ見ヨ）是レモ、各、一個ヲ要スト認ム。因テ、略語ヲ加フレバ、左ノ四文トナル。

我れ（主）、某を（客）父とも（客）思ふ（説）。　我れ（主）、某を（客）師とも（客）思ふ（説）。

我れ（主）某に（客）養はれたり（説）。

右ノ如クニシテ、四文交錯セル聯構文ナルヿヲ知ル。

扨、末尾ノ「因る」ハ、有對自動詞ナレバ是レモ、主語ト標準ノ客語トヲ要ス、文中ニ、「は」トイヒ、「に」トイフ互爾波アレバ、コレニ因リテ、主語ト客語トヲ作リテ略語ヲ加フレバ、左ノ一文ヲ得ベシ。

我れ（修）、某を、父と思ふ（主）師と思ふ（主）ことは（部）、我れ（修）、某に（客）、養はれたる（客）教へられたる（客）ことに（部）因る（説）。

「父」ハ、名詞ナリ。「と」ハ、第一類互爾波、「父」ト「思ふ」トヲ承接ス。「も」ハ、第二類互爾波、「父と」ト「思ふ」トヲ承接シ、「父と思ふ」師と思ふ」ヲ并列ス。「師」「と」「も」ハ、上ニ同ジ。

「思ふ」ハ、複對他動詞、波行四段活用、第二活用、連體法ニテ、名詞ト見ルモノ。「は」第二類互爾波、「思ふ」ト「因る」トヲ承接ス。「養は」單對他動詞、波行四段活用、不定法。「れ」所相ノ助動詞、「る」ノ第五活用、中止法。(下ノ「られたる」ニ應ジ、コレモ、「たる」ニ接ス。)「且」接續詞、「養はれ」ト「敎へられ」トヲ接續ス。「敎へ」複對他動詞、波行下二段活用、第四活用、不定法。「養ふ」ト「敎ふ」トハ、他動詞ナレバ、目的ノ「己れを」ヲ要スレド、コヽニテハ、略セラル。「られ」所相ノ助動詞「らる」ノ第五活用。(たる」ニ接スルニ因テ)「たる」半過去ノ助動詞「たり」ノ第二活用、連體法ニテ、名詞ト見ルモノ。「に」第一類互爾波、「敎へられたる」ト「因る」トヲ承接ス。「因る」有對自動詞、良行四段活用、第一活用、第一終止法、尋常ノ結法。

○右ノ外、數詞、又ハ、動詞ノ命令法、或ハ、奈變活用、形容詞ノ志々幾活用、助動詞ノ使役相、敬相、互爾波ノ「へ」より、「まで」だに」さへ」とも」ども」壘語、接頭語、等、擧ゲルニ堪ヘズ、本書ニ擧ゲタル諸處ノ例語、例句ヲ出シテ、解剖ヲ試ミルベシ。

三九二節　言掛、秀句、枕詞モ、然リ。

(本、五八四)苦集滅道ハ、山城ノ地名ナリ。連體法ハ、名詞ニ連續スベキモノナルニ、往々、「治まれる、世の中に」ナド、讀點ヲ加フルヿアルハ、適ハズ。

三九三節　(本、五九三)闕字ノ外ニ、其稱號ヲ、次ノ行ヘ上ゲ出シテ、他ノ行ノ首ト、平等ニ記スヲ、平出トス、更ニ敬フナリ。又、次ノ行ヘ送リ、欄ヨリ上ヘ、頭ヲ出シテ記スヲ、擡頭トス、極メテ敬フナリ、コレニ、一擡頭、二擡頭、ノ別モアリ。

○送假名ノ法モ、文典ニ說クベキモノナルガ如シト雖ドモ、到底、一定ノ法ヲ立テ難シ、動詞ノ如キ「驚ク」ハ、語尾ノミ送リテ可ナレドモ、「驚カス」ハ、語根マデ及ボサヾレバ、解セラレズ、副詞ノ如キ「尙」、「尙ホ」、「寧」、「寧ロ」、「殆ド」、「殆ンド」、ナドト、人々ノ記ス所、區々ナリ、其他ニモ、尙、多シ、縱ヒ、一定シタリトテ、人々、守ラザルベシ、畢竟ハ、漢字ノ、音讀スベキカ、訓讀スベキカ、惑ハムモノ、又ハ、一字、數樣ニ讀マルベキモノニ、掛酌シテ送ラバ可ナラム、唯、大凡ソノ習慣ニ因襲スベキノミ、因テ、本書ニ說カズ。

廣日本文典別記 終

自跋

余が家學は、漢學なれど、少年の頃、國語の教育とては、受けしことあらず。十六歳(文久二年)にして、開成學校に入りて、始めて英語を學び、弱冠の頃、更に横濱なる洋人に就きて學びぬ。やう〳〵英文法に熟するに及びて、れもひけらく、我が國語にも、自ら、斯る規律のあるべきなり、など思ひて、寓樓、一夜、眠覺めし時、獨り、口に動詞の語尾の變化を唱へて、終に、五十音順、即ち變化をも法をもなすなり、さても、不思議なること哉など、考へつきて、天明をもまたず、燈下に就きて、語尾の變化表を、數樣に製せしことありき。(後に見れば、縣居翁の語意考の活用表はどのものなり。) 今思へば、實に、ばつかなく恥かはしき限りのものなれど、當時、れのれ一分にては、一大發明をなしゝ思ひありき。失笑すべき事にはあれど、井蛙の見には、我にも、人にも、かゝる事、珍らしからぬなるべし。後に、國語諸先哲の語學書あるを知りて、通讀するに及びて、啞然瞠若たり、是に於て、始めて、國語學に志をば起しき。

余が初志は、專ら、今言の格を定めむにありしなり、されど、今言の格を定めむには、古言を究めて、其由るを知らずはあるべからねど、さて、古言の研究は始めつるなり、即ち、其研究は、今言の格を定めむの準備にてありしなり。然るに、尋で、戊辰の變に遭ひて、軍事に馳驅し、父が幽囚を釋かむに奔走せしなど、世事に身を役せられて、志業を遂ぐること能はず。明治五年の末、始めて文部省に入りて英和對譯辭書編輯の命を蒙るに及びて、註釋の譯語に、又、國語格制定の必用を感じて、更に考究の業を起し、八年、言海の編輯を命せられしに及びて、愈迫りて、終に、世にあらゆる語學書を集めて、推究することはなりぬ。

先哲の考へ、盡せるが如くにはあれど、未だ落着せぬ事もあり、文法の範圍内に於て、說き及ぼぬ所も多かれど、自ら、文法制定の業を起して、稿を易ふる事、數回に及びぬ。動詞の法、時、能相、所相、等を定むるが如き、獨り苦心を極めぬ、彼のチャンブレン氏の日本小文典に、活用に活用を生じて、章魚の八脚ある、脚毎に、又、八脚を生ずる如き圖は、余も起案してみたりしなり、そは、余が第三回むかりの草案なりき。其他、過去の半過去、大過去、の區別の如き、豆爾波、感動詞、の雜糅せるを別つが如き等、案を易ふること、幾回なりしを知らず。

終に、動詞と助動詞とを切り放して、助動詞を獨立せしめ、所相、勢相、使役相、過去、未來、等の事に就きては、すべて、助動詞に讓りて說くべき事とし、過去の三別も、大凡に次序し、豆爾波と接尾語とをふるひわけ、豆爾波を獨立せしめて、名詞の格をそれに讓り、指示代名詞を創制し、動詞の連用法より中止法を別ち、なぞして、部署、略、定まりぬ。されど、尙、微細に入れば、落着せぬ所もあり、又、自ら法律を定めて、自ら衝突するが如き事も、毎々起りて、實に困苦を極めたり。

獨力、語格の定め難きに困じて、同志を會して討論せむの心を起して、學友を語らひたるに、横山由清、中根淑、内田嘉一、南部義籌、片山淳吉、の五君を得たり、爰に文法會といふを立て、其第一會を、不忍池心の長酡亭に開きたるは、實に、明治十一年十月九日なりき。余、自ら、立案者の任に當りて、毎會、次第を立て、原案を作り、五六部づゝ寫させて、數日前に會員に配賦して、會日に持ち

集りて、討論することゝしたり。此年の會合は、五回なりしかど、翌十二年、十三年には、毎月、二回、(暑中は休みて)二年間に、合せて四十二回に及びぬ。十二年に、横山君歿せられぬ、碩學を失ひて力なし、此年十二月より、那珂通世君入會せられ、十三年十二月より、井上哲次郎君も加入せられぬ。然るに、十四年に入りては、一月に二會、二月に一會、十月に二會せしのみ、十五年は、僅に一月に一會、三月に二會、四月に一會にて、即ち、この四月三十一日の會合にて、此の文法會は、中絶することゝはなりたり、遺憾なりし事どもなり。さて、以上、合計、五十六回の會合にわいて、席上、議論もあり、贊否もあり、修正もありしかど、決定せずして、原案のまゝなりしもの、過半なりき、但し、感動詞に止まりて、文章篇は、終に立案をもせざりき。

文章篇(Syntax)の立案は、更に至難にして、先哲の語學書中に、文章篇の條件につきては、「かゝり」、「むすび」の法則の外は、論及せしものなく、洋文法に說ける所は、國語と語性を異にして、倣ひ難きことありて、獨り、困頓したりき。既にして、略語を種々に補ふことを考へて、端緒を得て、先哲の變格、異例、といひしものを、多く常格に入るゝこととし、句體、文體、さては、二文の聯構、聯構によりて結びを轉ずるなど、枕詞を修飾語に入れ、呼應の規を立つるなど、漸く、體裁を成して、これを、前稿に繼ぎて、辛うじて、一部の文典を、成就したり。凡そ、通篇、前後、黑川眞賴、榊原芳野、佐藤誠實、三君の說によりて、發明し決定せし所も多かり。やがて、此文典の規定を言海に用ゐて、言海の淨書を始めつるは、實に十五年九月なりき。

此頃の事なり、小倉舊藩士里見義君、文部省に入れり、語學に志篤き人とて、放衙の後は、相語りて、余が文典稿本を示して、議論を上下せしことも、幾〳〵なりき、同君、一部の日本文典を發刊せり、其書中に、余が談を採りし所多し。又、同じ頃、近藤眞琴君にも、「かなのくわい」の會員として、親善となりて、亦、稿本を貸せり、同君が辭書「ことゝのその」にも、多く余が論を用ゐたり。(二君、共に、今は、世に亡き人なり、悲しき哉)

二十二年、言海を發刊するに當りて、又、書中を校正せし所あり。爾來、稿を易へし事、復た數回、二十八年、九月、學職を辭して閑に就き、今年一月より、更に大

に校訂の業を起して、全篇成功せしは八月なり、乃ち、活字に付して世に發行す、これ、此書稿の始末なり。然れども、此書の如き、完備の境には、尚、甚だ遠し、校書は、落葉を拂ふが如し、とかやいふ、十有九年の間、拂ひに拂ひて、盡し得ぬなり。

維新後、一部の文典として世に出でしは、田中義廉氏の作を第一とす、されど、ひたふるに洋文法に據りて、杜撰なり。其後は、唯、中根氏、物集氏、其他二三の作の出でしのみにて、いと寥々たりき。(語學書などいふべきは、他にもあれど、)當時、教科書の出版、世に盛なるに、文典のみ、誰しもねつくりいでぬは、如何なる故にか、など思はれて、日本文法の定めがたき事も、思ひ半に過ぎてなむ。

さて、余が言海を發刊し、其卷首に、語法指南を掲げて世に出しゝは、實に、明治二十二年五月なりき。此頃よりして、文典といふ書、俄に世に出で來て、今は、ほと〳〵二三十種にも及びぬべし、その十に六七までは、靡然として語法指南の立案に從ひて、書中の文句は、諸書に、剝ぎ去られ、切り取られて、全篇、完膚なきまでにいたりぬ。こは、余が榮譽にて、心嬉しく思ふ所にはあれど、書中の誤謬をも、誤謬のまゝに取られしが多きには、心、瞿然たらずはあらず、俗に、將棋倒しといふことのやうにて、後進をあやましりは、氣の毒なる至りにて、慎みても慎むべきは、著作にこそ、とも思ひなりぬ。此篇とても、固より誤謬なきにはあらじ、但、かれ、これより、よけむ、とも思へど、斯道の一助にもとて發行するなり。さるに、他日、復た、余が顰に倣ひて、かの將棋倒しを再演せむ人もあらむか、とも思へど、今より、獨り、顰蹙するのみなりかし。

中古の語法は、ひとわたり研究しつ、今よりは、口語の法を考へ、今言文法制定の業を起して、當初の志を遂げむとす。

明治二十九年十二月

文彦識

明治三十年一月五日印刷
明治三十年一月九日發行
明治三十二年五月第四版

廣日本文典別記奥附
定價金四拾五錢

著者兼發行者　大槻文彦
東京市下谷區上根岸町百十番地

印刷人　野村宗十郎
東京市京橋區築地三丁目十五番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地

發賣所　吉川半七
東京市京橋區南傳馬町壹丁目

發賣所　三木佐助
大坂市心齋橋筋北久寶寺町角

版權所有

No 7897
東京女子大学 短大 第7897 受入 昭37.6.5
日本女子大学校 高等学部 図書 第 受入 13年9月

大槻文彦先生著書目錄

一 日本文典初步 全 定價金貳拾五錢

右ハ尋常中學校第一第二年級ノ教科用

一 日本文典 全 定價金貳拾五錢

中等教育 右ハ尋常師範學校ト尋常中學校ノ上級トノ教科用○兩校用共ニ文部省檢定濟

一 廣日本文典 全 定價金四拾錢

言海ノ卷首ニ法語指南ノ一大新案出デシヨリ日本ノ文法組織ハ風靡一變シテ前世界新世界ノ觀ヲナセリ本書ハ即チ語法指南ノ原稿(語法指南ハ此書ノ摘錄ナリ)ニシテ文字論、單語論、文章論完備シテ語格文法漏セル所ナシ世ノ語學家必ズ一讀スベク高等ナル學校ノ教科書ニモ適當ナリ

一 廣日本文典別記 全 定價金四拾五錢

右ハ前項ノ書ノ註釋敷衍參考考證辨解持論駁論等ヲ輯錄シタルモノニテ著者先生ノ見ハ此書ニ於テ見ルベシ

一 日本辭書 言海 全 定價金參圓

右ハ日本普通語辭書ノ元祖ナリ近來出版セル他ノ辭書共ハ大抵此書ヲ調査シ燒キ直シタル者ナレハ此書ノ價値アルヲ知ルベシ

一 刪修近古史談 全 洋裝 定價金貳拾五錢

右ハ尋常師範學校及ビ尋常中學校ノ漢文讀本用明治廿六年文部省檢定濟

此書ハ故大槻磐溪先生ノ作ニシテ織田豐臣德川ノ三代間ノ名君賢相勇將傑士偉人ノ政績戰功嘉言善行奇節等ヲ記サレタルモノニテ簡明ニシテ趣味アリ漢文讀本トシテ第一ナルヿ世評ノ許ス所ナリ

注意 本書ハ維新前ノ出版ニシテ當時幕府ニ出版許可ヲ請ハレタル時幕府其忌諱ニ屬スル文若干篇ヲ刪テ許可シ乃チ刊行シタルモノ是レ舊版ナリ然ルニ舊版ニハ妖怪復讎及ビ婦人ニ關セル談等アリテ學校ノ教科書ニハ不都合ナレバ文彦先生原文ヲ或ハ刪リ或ハ修メテ更ニ前年幕府ニテ刪リシモノヲ補ヒテ刪修ノ二字ヲ冠ラセテ版權ヲ得テ且文部省ノ檢定濟教科書トナレリ然ルニ此刪修本ノ盛ニ諸學校ニ採用セラルヽヲ見テ舊版ヲ其儘ニ改刻シテ刪修本ニ紛ラカシテ賣ル猾賈アリ然レモ舊版ニハ妖怪復讎戀墓等ノ事アリテ檢定モナシサレバ本書ヲ教科書ニ採用セラレントスル向ハ善ク刪修ノ二字アル本、版權アル本、檢定濟ノ文字アル本ニ注目セラレンヿヲ冀フ

發賣所 吉川半七 東京市京橋區南傳馬町壹丁目
發賣所 三木佐助 大阪市心齋橋筋北久寶寺町